

支那怪奇小説集

岡本綺堂



目次

凡例	……	5
開会の辞	……	8
搜神記（六朝）	……	14
搜神後記（六朝）	……	50
酉陽雜俎（唐）	……	83
宣室志（唐）	……	120
白猿伝・其他	……	144
録異記	……	171
稽神録	……	185

夷堅志	209
異聞總錄·其他	242
續夷堅志·其他	272
輟耕錄	291
剪燈新話	307
池北偶談	326
子不語	351
閱微草堂筆記(清)	380

凡例

一、この一卷は六朝・唐・五代・宋・金・元・明・清の小説筆記の類から二百二十種の怪奇談を抄出した。敢て多しというではないが、これに因つて支那のいわゆる「志怪の書」の大略は察知し得られると思う。

一、この一卷を成したのは、単に編者の獵奇趣味ばかりでない。編者の微意は本文中の「開会の辞」に悉されてゐるから、ここに重ねて言わない。

一、訳筆は努めて意訳を避けて、原文に忠ならんことを期した。しかも原文に拠ればとかくに堅苦しい漢文調に陥るの弊あり、平明通俗を望めば原文に遠ざかるの憾みあり、その調和がなかなかむずかしい。殊に浅学の編者、案外の誤訳がないとは限らない。謹んで識者の叱正を俟つ。

一、同一の説話が諸書に掲出されている例は少なくない。甲に拠るか、乙を探るか、時代の先後によるか、その採択に迷う場合もしばしばあったが、それは編者が随意に按排することにした。

一、支那には狐、鬼、神仙の談が多い。しかも神仙談は我が国民性に適しないと見えて、比較的によく輸入されていない。したがって、この集にも神仙談は多く採らなかつた。

昭和十年九月、古中秋無月の夕

開会の辞

青蛙堂は小石川の切支丹坂、昼でも木立ちの薄暗いところにある。広東製の大きい竹細工の蝦蟆を床の間に飾つてあるので、主人みずから青蛙堂と称している。蝦蟆は三本足で、支那の一部に崇拜される青蛙神を模造したものである。

この青蛙堂の広間で、俳句や書画の会が催されることもある。怪談や探偵談などの猟奇趣味の会合が催されることもある。ことしの七月と八月は暑中休会であつたが、秋の彼岸も過ぎ去つた九月の末、きようは午後一時から例会を開くという通知を受取つたので、あいにくに朝から降りしきる雨のなかを小石川へ出てゆくと、参会者はなかなかの多数で、いつもの顔触れ以外に、男おんなをまぜて新しい顔の人数が十人あまりも殖えていた。

主人からそれぞれに紹介されて、例のごとくに茶菓が出る。来会者もこれで揃つたという時に、青蛙堂主人は一礼して今日の挨拶に取りかかった。

「例会は大抵午後五時から六時からお集まりを願うことになつて居りますが、こんにちはお話し下さる方々が多いので、いつもよりも繰り上げて午後一時からおいでを願つた次第でございます。そこで、こんにちの怪談会はこれまでと少しく方針をかえまして、すべて支那の怪奇談を主題に致したいと存じます。しかし、支那のことはわたくしも何分不案内でございますので、その方面に詳しい方々に御出席をねがひまして、順々におもしろいお話を聞かせていただく筈でございますから、左様御

承知を願います」

きょうの席上に新しい顔の多い子細しさいもそれで判わかつた。主人はつづいて言った。

「支那の怪奇談と申しましても、ただ漫然と怪談を語るのも無意義であるというお説もございませぬので、皆様がたにお願ねがい申しまして、遠くは六朝時代りくちちやうより近くは前清ぜんしんに至るまでの有名な小説や筆記の類に拠よつて、時代を趁おつて順々に話していただくことに致いたしました。ともかくもこれに因よつて、支那歴代の怪奇小説、いわゆるへ志怪しがいの書しよがどんなものであるかということをお會ごえ得とくくだされば、こんにちの會合かいごうもまったく無意義でもなからうかと存ぞんじます。

さらに一言申し添そえて置おきたいと存ぞんじますのは、それらのへ志怪しがいの書しよが遠い昔から我が国に輸入いんぷうされまして、わが文学や伝説にいかなる影響えいぎやうをあたえたかということをございます。かの『今昔物語いませきものがたり』を始めとして、室町時代、徳川時代の小説類、ほとんどみな支那小説の影響えいぎやうを蒙かぶつていない物はないと言いつてもよろしいくらいで、わたくしが一々説明いちいちせつめいいたしませんでも、これはなんの翻案ほんあんであるか、これはなんの剽窃ひようせつであるかということ、少しく支那小説を研究けんきゆうなされた方々には一目瞭然いちもくりやうぜんであるかと考えられます。甚おだしきは、歴史上実在じつざいの人物じんぶつの逸事いっじとして伝えられていることが、実は支那小説の翻案ほんあんであつたというような事も、往々おうおうに発見はっけんされるのでございます。

そんなわけにありますから、明治以前の文学や伝説を研究するには、どうしても先ず隣邦の支那小説の研究から始めなければなりません。彼を知らずして是を論ずるのは、水源を知らずして末流を探るようなものであります。と言いましても、支那の著作物は文字通りの汗牛充棟で、単に〈志怪の書〉だけでも実におびただしいのでありますから、容易に読破されるものではありません。わたくしが今日の会合を思い立ちましたのも、一つはそこにありますので、現代のお忙がしい方々に対して、支那小説の輪郭と、それが我が文学や伝説に及ぼした影響とを、いささかなりともお伝え申すことが出来れば、本懐の至りに存じます。

ひと口に小説筆記と申しましても、その範囲があまりに広汎になりますので、こゝんには専ら〈志怪の書〉すなわち奇談怪談を語っていただくことに致しました。勿論、支那の小説なるものは大抵は幾分の志怪気分を含んで居ようであります。ここでは明らかに〈志怪〉に限りました。実際、これらの〈志怪の書〉が早く我が国に輸入されまして、最もひろく我が国の人びとに読まれているのでございますから、その紹介が単なる猟奇趣味ばかりでないことは、先刻からの口上で御諒解を得たかと存じます。では、これから御順々にお問い合わせ申します。」

主人の挨拶はまだ長かったが、大体の趣意はこんなことであつたと記憶している。

それが終つて、きよらの講演者が代るがわるに講話を始めた。火ともし頃に晚餐が出て、一時間ほど休憩。それから再び講話に移つて、最後の『閱微草堂筆記』を終つたのは、夜の十一時を過ぐる頃であつた。さらに茶菓の御馳走になつて、十二時を合図に散会。秋雨瀟々しやうしやう、更ふけても降り止まなかつた。

この日の講話が速記者幾人によつて速記されていたことを知っているので、わたしはその後に青蛙堂を訪問して、その速記の原稿を借り出して来て、最初から繰り返して読んだ。速記のやや曖昧あまいなところは原本と対照して訂正した。そうして出来あがつたのが此の一卷である。仮りに題して『支那怪奇小説集』という。さらに主人や講演諸氏の許可を得て、これを世間に発表することにした。諸氏に対して彼氏、彼女氏の敬称を用いず、単に男とか女とか記載したのは、わたしの無礼、御勘弁を願ひたい。

言うまでもないことであるが、これらの書はみなその分量の多いものであるから、勿論その全部が紹介されているわけではない。取捨しゆしやは講演者の自由に任せただのである。が、その話はなるべく原文に拠ることにして、みだりに増補や省略を施さず、ただ日本の読者に判りにくいかと思われる件くだりだけに、あるいは多少の註解を加え、あるいは省略するの程度にとどめて置いたのであるから、その長短は原文のままであると想つてもらひたい。

原本には小標題こみだしを付けてあるものと、付けていないものがある。それは統一の便宜上すべて小標題を付けることにした。たとい原本に小標題があっても、それが判りかねるものや、面白くないと思われるものは、わたしが随意に変更したのもある。これも私の無礼、地下の原作者にお詫びを申さなければならぬ。

搜神記
(六朝)

主人の「開会の辞」が終った後、第一の男は語る。

「唯今御主人から御説明がありました通り、今晚のお話は六朝時代から始める筈で、わたくしがその前講を受持つことになりました。なんといいっても、この時代の作で最も有名なものは『搜神記』で、ほとんど後世の小説の祖をなしたと言つてもよろしいのです。

この原本の世に伝わるものは二十巻で、晋の干宝の撰ということになって居ります。干宝は東晋の元帝に仕えて著作郎となり、博覧強記をもつて聞えた人で、ほかに『晋紀』という歴史も書いて居ります。但し今日になりますと、干宝が『搜神記』をかいたのは事実であるが、その原本は世に伝わらず、普通に流布するものは偽作である。たとい全部が偽作でなくても、他人の筆がまじつているといふ説が唱えられて居ります。これは清朝初期の学者たちが言い出したものらしく、また一方には、たといそれが干宝の原本でないとしても、六朝時代に作られたものに相違ないのであるから、後世の人間がいい加減にこしらえた偽作とは、その価値が大いに違ふといふ説もあります。

こういうむずかしい穿索になりますと、浅学のわれわれにはとても判りませんから、ともかくも昔から言い伝えの通りに、晋の干宝の撰ということに致して置いて、すぐに本文の紹介に取りかかりましょう」

首の飛ぶ女

秦の時代に、南方に落頭民らくとうじんという人種があつた。その頭かしらがよく飛ぶのである。その人種の集落に祭りがあつて、それを虫落ちゅうらくという。その虫落にちなんで、落頭民と呼ばれるようになったのである。

呉の将、朱桓しゆかんという將軍がひとりの下婢かひを置いたが、その女は夜中に睡ねむると首がぬけ出して、あるいは狗竇いぬくぐりから、あるいは窓から出てゆく。その飛ぶときは耳をもつて翼つばさとするらしい。そばに寝ている者が怪しんで、夜中にその寢床を照らして視みると、ただその胴体があるばかりで首が無い。からだも常よりは少しく冷たい。そこで、その胴体に衾よきをきせて置くと、夜あけに首が舞い戻つて来ても、衾にささえられて胴に戻る事が出来ない。首は幾たびか地に墮おちて、その息づかいも苦しせむく忙せわしく、今にも死んでしまひそうに見えるので、あわてて衾を取りのけてやると、首はとどこおりなく元に戻つた。

こういうことがほとんど毎夜くり返されるのであるが、昼のあいだは普通の人とちつとも変ることはなかつた。それでも甚だ気味が悪いので、主人の將軍も捨て置かれず、ついに暇ひまを出すことになつたが、だんだん聞いてみると、それは一種の天

性で別に怪しい者ではないのであった。

このほかにも、南方へ出征の大將たちは、往々こういう不思議の女に出逢った経験があるそうで、ある人は試みに銅盤をその胴体にかぶせて置いたところ、首はいつまでも戻ることが出来ないで、その女は遂に死んだという。

㊦猿

蜀の西南の山中には一種の妖物が棲んでいて、その形は猿に似ている。身のだけは七尺ぐらいで、人の如くに歩み、且つ善く走る。土地の者はそれを猥国かこくといい、又は馬化ばかといい、あるいは㊦猿かえんとも呼んでいる。

かれらは山林の茂みに潜んでいて、往來の婦女を奪うのである。美女は殊に目指される。それを防ぐために、こころの人たちが山中に行く時には、長い一条の繩をたずさえて、互いにその繩をつかんで行くのであるが、それでもいつの間にか、その一人または二人を攫さらって行かれることがしばしばある。

かれらは男と女の臭においをよく知っていて、決して男を取らない。女を取れば連れ帰って自分の妻とするのであるが、子を生まない者はいつまでも帰ることを許されないで、十年の後には形も心も自然にかれらと同化して、ふたたび里へ帰ろうと

はしない。

もし子を生んだ者は、母に子を抱かせて帰すのである。しかもその子を育てないと、その母もかならず死ぬので、みな恐れて養育することにしてはいるが、成長の後には別に普通の人と変らない。それらの人間はみな楊ようという姓を名乗っている。今日、蜀の西南地方で楊姓を呼ばれている者は、大抵その妖物の子孫であると伝えられている。

琵琶鬼

呉ごの赤鳥せきう三年、句章こうしやうの農夫楊度ようたたくという者が余姚よちようというところまで出てゆくと、途中で日が暮れた。

ひとりの少年が琵琶びわをかかえて来て、楊の車と一緒に載せてくれといふので、承知して同乗させると、少年は車中で琵琶數十曲をひいて聞かせた。楊はいい心持で聴いていると、曲終るや、かの少年は忽たちまち鬼のような顔色に変じて、眼を瞋いからせ、舌を吐いて、楊をおどして立ち去った。

それから更に二十里（六丁一里ちよう）。日本は三十六丁で一里）ほど行くと、今度はひとりの老人があらわれて、楊の車に載せてくれと言った。前に少しく懲こりてはいる

が、その老いたるを憫あわれんで、楊は再び載せてやると、老人は王戒おうかいという者であるとみずから名乗った。楊は途中で話した。

「さつき飛んだ目に逢いました」

「どうしました」

「鬼がわたしの車に乗り込んで琵琶を弾きました。鬼の琵琶というものを初めて聴きました。が、ひどく哀かなしいものですよ」

「わたしも琵琶をよく弾きます」

言うかと思うと、かの老人は前の少年とおなじような顔をして見せたので、楊はあつと叫んで気をうしなつた。

兔怪とかい

これも前の琵琶鬼とやや同じような話である。

魏ぎの黄初年こうしよ中に或る人が馬に乗って頓邱とんきゆうのさかいを通ると、暗夜の路ばたに一つの怪しい物が転ころがっていた。形は兔うさぎのごとく、両眼は鏡の如く、馬のゆくさきに跳おどり狂っている。進むことが出来ない。その人はおどろき懼おそれて遂に馬から転おどりおちると、怪物は跳りかかって彼を掴つかもうとしたので、いよいよ懼おそれて一旦は気絶

した。

やがて正氣に戻ると、怪物の姿はもう見えないので、まずほっとして再び馬に乗ってゆくと、五、六里の後に一人の男に出逢った。その男も馬に乗っていた。いい道連れが出来たと喜んで話しながら行くうちに、彼は先刻の怪物のことを話した。

「それは怖ろしい事でした」と、男は言った。「実はわたしも独りあるきはなんだか氣味が悪いと思つているところへ、あなたのような道連れが出来たのは仕合わせでした。しかしあなたの馬は疾はやく、わたしの馬は遅い方ですから、あとさきになつて行きましょう」

彼の馬をさきに立たせ、男の馬があとに続いて、又しばらく話しながら乗つてゆくと、男は重ねてかの怪物の話をはじめた。

「その怪物というのは、どんな形でした」

「兎のような形で、二つの眼が鏡のようにひかにひかつていました」

「では、ちよいと振り返つてごらんさい」

言われて何心なく振り返ると、かの男はいつの間にか以前の怪物とおなじ形に變じて、前の馬の上へ飛びかかつて来たので、彼は馬から転げおちて再び氣絶した。

かれの家では、騎手のりてがいつまでも帰らず、馬ばかりが独り戻つて来たのを怪しんで、探しに来てみると右の始末で、彼はようように息をふき返して、再度の怪にお

びやかされたことを物語った。

宿命

陳仲拳ちんちゆうきよがまだ立身りっしんしない時に、黄申こうしんという人の家に止宿ししゆくしていた。そのうちに、黄家の妻が出産した。

出産の当時、この家の門を叩く者があつたが、家内の者は混雑たまたにまぎれて知らなかつた。暫くしばらして家の奥から答える者があつた。

「客座敷には人がいるから、はいることは出来ないぞ」

門外の者は答えた。

「それでは裏門へまわつて行こう」

それぎりで問答の声はやんだ。それからまた暫くして、内の者も裏門へまわつて歸つて来たらしく、他の一人が訊きいた。

「生まれる子はなんとという名で、幾歳いくつの寿命をあたえることになつた」

「名は奴どといつて、十五歳までの寿命をあたえることになつた」と、前の者が答えた。

「どんな病気で死ぬのだ」

「兵器で死ぬのだ」

その声が終ると共に、あたりは又ひっそりとなった。陳はその問答をぬすみ聴いて奇異の感に打たれた。殊にその夜生まれたのは男の児で、その名を奴と付けられたというのを知るに及んで、いよいよ不思議に感じた。彼はそれとなく黄家の人びとに注意した。

「わたしは人相じんざうを看みることを学んだが、この子は行くゆく兵器で死ぬ相がある。刀剣は勿論もちろん、すべての刃物を持たせることを慎まなければなりませんぞ」

黄家の父母もおどろいて、その後は用心に用心を加え、その子にはいつさいの刃物を持たせないことにした。そうして、無事に十五歳まで生長させたが、ある日のこと、棚の上に置いた鑿のみがその子の頭に落ちて来て、脳をつらぬいて死んだ。

陳は後に予章よしょうの太守たいしゆに榮進して、久しぶりで黄家をたずねた時、まずかの子供のことを訊くと、かれは鑿のみに打たれたというのである。それを聞いて、陳は嘆息した。「これがまったく宿命というのであろう」

亀の眼

むかし巢そうの江水がある日にわかみんきに漲みなったが、ただ一日で又もとの通りになった。

そのときに、重量一万斤きんともおぼしき大魚が港口に打ち揚げられて、三日の後に死んだので、土地の者は皆それを割いて食った。

そのなかで、唯ひとりの老女はその魚を食わなかった。その老女の家へ見識みしらない老人がたずねて来た。

「あの魚はわたしの子であるが、不幸にしてこんな禍わざわいに逢うことになった。この土地の者は皆それを食ったなかで、お前ひとり食わなかったから、私はおまえに礼をしたい。城の東門前にある石の亀に注意して、もしその眼が赤くなつたときは、この城の陥没かんぼつする時だと思いなさい」

老人の姿はどこへか失うせてしまった。その以来、老女は毎日かかさずに東門へ行つて、石の亀の眼に異状があるか無いかを検あめることにしていたので、ある少年が怪しんでその子細を訊くと、老女は正直にそれを打ち明けた。少年はいたずら者で、そんなら一番あの婆さんをおどかしてやろうと思つて、そつとかの亀の眼に朱を塗つて置いた。

老女は亀の眼の赤くなつているのに驚いて、早々にこの城内を逃げ出すと、青衣せいの童子が途中に待つていて、われは龍の子であるといつて、老女を山の高い所へ連れて行つた。

それと同時に、城は突然に陥没して一面の湖みづうみとなつた。

もう一つ、それと同じ話がある。秦しんの始皇しこうの時、長水県ちやうすいに一種の童謡がはやった。

「御門ごもんに血を見りやお城が沈む——」

誰たが謡うたい出したともなしに、この唄うたがそれからそれへと拡がった。ある老女らうにょがそれを氣きに病まんで毎日その城門うかがを窺のぞいに行くので、門を守っている將校しやうがうが彼女をおどしてやろうと思つて、ひそかに犬の血を城門うかがに塗ぬつて置くと、老女はそれを見て、おどろいて遠く逃げ去さつた。

そのあとへ忽たちちに大水おほみづが溢あれ出て、城は水の底に沈しんでしまった。

眉間尺

楚その干將かんしやう莫邪まげは楚王そおうの命いのちをうけて劍けんを作つくつたが、三年かかつて漸ようやく出来たので、王はその遅延おそを怒いかつて彼を殺ころそうとした。

莫邪まげの作つくつた劍けんは雌雄しゆうじゆう一対いつたいであつた。その出来たときに莫邪まげの妻つまは懐妊わいじんして臨月りんげつに近ちかかつたので、彼は妻つまに言いい聞きかせた。

「わたしの劍けんの出来あがるのが遅おそかつたので、これを持参もつすれば王おうはきつとわたしを殺ころすに相違ちがない。おまえがもし男おとこの子こを生うんだらば、その成長せいじやうの後に南なんの山やまを見ろといえ。石いしの上に一本いっぴんの松まつが生うえていて、その石いしのうしろに一口ひとくちの劍けんが秘ひめてある」

かれは雌劍一口だけを持って、楚王の宮へ出てゆくと、王は果たして怒った。かつ有名の相者にその劍を見せると、この劍は雌雄一対あるもので、莫邪は雄劍をかくして雌劍だけを献じたことが判つたので、王はいよいよ怒って直ぐに莫邪を殺した。莫邪の妻は男の子を生んで、その名を赤せきといったが、その眉間まへけんが広いので、俗に眉間尺まへけんじやくと呼ばれていた。かれが壮年になつた時に、母は父の遺言を話して聞かせたので、眉間尺は家を出て見まわしたが、南の方角に山はなかつた。しかし家の前には松の大樹があつて、その下に大きい石が横たわつていたので、試みに斧おのをもつてその石の背を打ち割ると、果たして一口の劍を発見した。父がこの劍をわが子に残したのは、これをもって楚王に復讐せよというのであらうと、眉間尺はその以来、ひそかにその機会を待つていた。

それが楚王にも感じたのか、王はある夜、眉間の一尺ほども広い若者が自分を付け狙ねらつてゐるといふ夢をみたので、千金の賞をかけてその若者を搜索させることになつた。それを聞いて、眉間尺は身をかくしたが、行くさきもない。彼は山中をさまよつて、悲しく歌いながら身の隠れ場所を求めていると、凶はからずも一人の旅客たびびとに出逢つた。

「おまえさんは若いくせに、何を悲しそうに歌つてゐるのだ」と、かの男は訊いた。眉間尺は正直に自分の身の上を打ち明けると、男は言つた。

「王はおまえの首に千金の賞をかけているそうだから、おまえの首とその剣とをわたしに譲れば、きつと仇を報いてあげるが、どうだ」

「よろしい。お頼み申す」

眉間尺はすぐに我が手でわが首をかき落して、両手に首と剣とを捧げて突っ立っていた。

「たしかに受取った」と、男は言った。「わたしは必ず約束を果たしてみせる」それを聞いて、眉間尺の死骸は初めて仆れた。

旅の男はそれから楚王にまみえて、かの首と剣とを献じると、王は大いに喜んだ。「これは勇士の首であるから、この儘ままにして置いては崇たりをなすかも知れません。湯ゆが鑊まに入れて煮るがよろしゅうござる」と、男は言った。

王はその言うがままに、眉間尺の首を煮ることにしたが、三日を過ぎても少しも爛たれず、生けるが如くに眼を瞋いからしているので、男はまた言った。

「首はまだ煮え爛たれません。あなたが自身のに覗のぞいて卸は覧らんになれば、きつと爛たれましよう」

そこで、王はみずから其の湯を覗のぞきに行くと、男は隙すきをみてかの剣をぬき放し、まづ王の首を熱湯にえゆのなかへ切り落した。つづいて我が首を刎はねて、これも湯のなかへ落した。眉間尺の首と、楚王の首と、かの男の首と、それが一緒に煮え爛たれて、ど

れが誰だか見分けることが出来なくなつたので、三つの首を一つに集めて葬ることにした。

墓は俗に三王の墓と呼ばれて、今も汝南じよなんの北、宜春ぎしゆん県にある。

宋家の母

魏ぎの黄初こうしよ年中のことである。

清河せいかの宋士宗そうしそという人の母が、夏の日に浴室へはいって、家内の者を遠ざけたまま久しく出て来ないので、人びとも怪しんでそつと覗のぞいてみると、浴室に母の影は見えないで、水風呂のなかに一頭の大きいすつぽんが浮かんでいるだけであつた。たちまち大騒ぎとなつて、大勢が駆け集まると、見おぼえのある母のかんざしがそのすつぽんの頭の上に乗っているのである。

「お母さんがすつぽんに化けた」

みな泣いて騒いだが、どうすることも出来ない。ただ、そのまわりを取りまいて泣き叫んでいると、すつぽんはしきりに外へ出たがるらしい様子である。さりとて滅多めったに出してもやられないので、代るがわるに警固けいこしているあいだに、あるとき番人の隙すきをみて、すつぽんは表へ這い出した。又もや大騒ぎになつて追いかけたが、

すつぽんは非常に足が疾はやいので遂に捉えることが出来ず、近所の川へ逃げ込ませてしまった。

それから幾日の後、かのすつぽんは再び姿をあらわして、宋の家のまわりを這い歩いていたが、又もや去つて水に隠れた。

近所の人は宋にむかつて母の喪服を着けると勧めたが、たとい形を変じて母はまだ生きているのであると言つて、彼は喪服を着けなかつた。

青牛

秦しんの時、武都ぶとの故道こどに怒特どとくの祠やしろというのがあつて、その祠のほとりに大きい梓あすきの樹きが立つていた。

秦の文公ぶんこうの、二十七年、人をつかわしてその樹を伐らせると、たちまちに大風雨が襲おそい来たつて、その切り口を癒ゆ合ごうさせてしまうので、幾日を経ても伐り倒すことが出来ない。文公は更に人数を増して、四十人の卒おのに斧おのを執とらせたが、なおその目的を達することが出来ないので、卒もみな疲れ果てた。

その一人は足を傷つけて宿舎へも帰られず、かの樹の下に転がったままで一夜を明かすと、夜半に及んで何者か尋ねて来たらしく、樹にむかつて話しかけた。

「戦いはなかなか骨が折れるだろう」

「なに、骨が折れるというほどのことでもない」と、樹のなかで答えた。

一人がまた言った。

「しかし文公がいつまでも強情（しやうじやう）にやっていたら、仕舞いにはどうする」

「どうするものか。根（こん）くらべだ」

「そう言つても、もし相手の方で三百人の人間を散らし髪にして、赭（あか）い着物をきせて、朱（あか）い糸でこの樹を巻かせて、斧を入れた切り口へ灰をかけさせたら、お前はど
うする」

樹の中では黙ってしまった。

樹の下に寝ていた男はその問答を聞きすまして、明るる日それを申し立てたので、文公は試みにその通りにやってみることにした。三百人の士卒が赭（あか）い着物をきて、散らし髪になって、朱い糸を樹の幹にまき付けて、斧を入れることに其の切り口に灰をそそぐと、果たして大樹は半分ほども撃ち切られた。そのとき一頭の青い牛が樹の中から走り出て、近所の澧水（ほんすい）という河へ跳り込んだ。

これで目的の通りに、梓の大樹を伐り倒すことが出来たが、青牛はその後も澧水から姿をあらわすので、騎士をつかわして撃たせると、牛はなかなか勢（たけ）い猛（たけ）くして勝つことが出来ない。その闘いのあいだに、一人の騎士は馬から落ちて散らし髪に

なった。彼はそのままで再び鞍にまたがると、牛はその散らし髪におそれて水中に隠れた。

その以来、秦では旄頭騎というものを置くことになった。

青い女

呉郡の無錫という地には大きい湖があつて、それをめぐる長い坡がある。

坡を監督する役人は丁初といつて、大雨のあるごとに破損の個所の有無を調べるために、坡のまわりを一巡するのを例としていた。時は春の盛りで、雨のふる夕暮れに、彼はいつものように坡を見まわっていると、ひとりの女が上下ともに青い物を着けて、青い織をいただいて、あとから追つて来た。

「もし、もし、待つてください」

呼ばれて、丁初はいったん立ちどまったが、また考えると、今頃このさびしい所を女ひとりでうろ付いている筈がない。おそらく妖怪であろうと思つたので、そのまま足早にあるき出すと、女もいよいよ足早に追つて来た。丁はますます気味が悪くなつて、一生懸命に駆け出すと、女もつづいて駆け出したが、丁の逃げ足が早いので、しよせん追い付かないと諦めたらしく、女は俄かに身をひるがえして水のな

かへ飛び込んだ。

かれは大きな蒼い河獺かわうそで、その着物や織と見えたのは青い荷はすの葉であった。

祭蛇記

東越とうえつの閩中みんちゆうに庸嶺ようれいという山があつて、高さ数十里といわれている。その西北の峽かに長さ七、八丈、太さ十围とわかえもあるという大蛇だいじやが棲すんでいて、土地の者を恐れさせていた。

住民ばかりか、役人たちもその蛇たの祟たりによつて死ぬ者が多いので、牛や羊をそなえて祭ることにしたが、やはりその祟たりはやまない。大蛇は人の夢にあらわれ、または巫女みこなどの口を仮かりて、十二、三歳の少女を生贄いけにえにささげると言つた。これには役人たちも困つたが、なにぶんにもその祟たりを鎮める法がないので、よんどころなく罪人の娘を養ひ、あるいは金を賭かけて志願者を買うことにして、毎年八月の朝、ひとりの少女を蛇の穴へ供えると、蛇は生きながらにかれらを呑んでしまった。こうして、九年のあいだに九人の生贄しやうらくをささげて来たが、十年目には適當の少女を見つけ出すのに苦しんでいると、将楽しやうらくの李誕りたんという者の家には男の子が一人もなくて、女の子ばかりが六人ともにつつがなく成長し、末子ぼっしの名を寄きといつた。寄

は募りに応じて、ことしの生贄に立とうと言ひ出したが、父母は承知しなかつた。「しかしこの家には男の子が一人もありません。厄介者の女ばかりです」と、寄は言つた。「わたし達は親の厄介になつてゐるばかりで何の役にも立ちませんから、いっそ自分のからだを生贄にして、そのお金であなた方を少しでも樂にさせて上げるのが、せめてもの孝行というものです」

それでも親たちはまだ承知しなかつたが、しいて止めればひそかにぬけ出して行きそうな気色であるので、親たちも遂に泣く泣くそれを許すことになつた。そこで、寄は一口のよい劍と一匹の蛇喰い犬とを用意して、いよいよ生贄にささげられた。

大蛇の穴の前には古い廟があるので、寄は劍をふところにして廟のなかに坐つていた。蛇を喰う犬はそのそばに控えていた。彼女はあらかじめ数石の米を炊いで、それに蜜をかけて穴の口に供えて置くと、蛇はその匂いをかぎ付けて大きい頭を出した。その眼は二尺の鏡の如くであつた。蛇はまずその米を喰いはじめたのを見すまして、寄はかの犬を嗾かけると、犬はまつききに飛びかかつて蛇を噛んだ。彼女もそのあとから劍をふるつて蛇を斬つた。

さすがの大蛇も犬に噛まれ、劍に傷つけられて、数力所の痛手に堪まり得ず、穴から這い出して蛇打ちまわつて死んだ。穴へはいつてあらためると、奥には九人の少女の髑髏が転がっていた。

「お前さん達は弱いから、おめおめと蛇の生贄になつてしまつたのだ。可哀そうに……」と、彼女は言つた。

越の王はそれを聞いて、寄を聘して夫人とした。その父は将楽県の県令に挙げられ、母や姉たちにも褒美を賜つた。その以来、この地方に妖蛇の患いは絶えて、少女が蛇退治の顛末を伝えた歌謡だけが今も残つてゐる。

鹿の足

陳郡の謝鯤は病いによつて官を罷めて、予章に引き籠つていたが、あるとき旅行して空き家に一泊した。この家には妖怪があつて、しばしば人を殺すと伝えられていたが、彼は平気で眠つてゐると、夜の四更（午前一時—三時）とおぼしき頃に、黄衣の人が現われて外から呼んだ。

「幼輿、戸をあけろ」

幼輿というのは彼の字である。こいつ化け物だと思つたが、彼は恐れずに答えた。「戸をあけるのは面倒だ。用があるなら窓から手を出せ」

言うかと思うと、外の人は窓から長い腕を突つ込んだので、彼は直ぐにその腕を引つ掴んで、力任せにぐいぐい引き摺り込もうとした。外では引き込まれまいとす

る。引きつ引かれつするうちに、その腕は脱けて彼の手に残った。外の人はそのまま立ち去つたらしい。夜が明けてみると、その腕は大きい鹿の前足であった。

窓の外には血が流れている。その血の痕をたどつてゆくと、果たして一頭の大きい鹿が傷ついて仆れていた。それを殺して以来、この家にふたたび妖怪の噂を聞かなくなつた。

羽衣

予章新諭県のある男が田畑へ出ると、田のなかに六、七人の女を見た。どの女もみな鳥のような羽衣を着ているのである。不思議に思つてそつと這いよると、あたかもその一人が羽衣を解いたので、彼は急にそれを奪い取つた。つづいて他の女どもの衣をも奪い取ろうとすると、かれらはみな鳥に化して飛び去つた。

羽衣を奪われた一人だけは逃げ去ることが出来なかつたので、男は連れ帰つて自分の妻にした。そうして、夫婦のあいだに三人の娘を儲けた。

娘たちがだんだん生長の後、母はかれらにそつと訊いた。

「わたしの羽衣はどこに隠してあるか、おまえ達は知らないかえ」

「知りません」

「それではお父さんに訊いておくれよ」

母に頼まれて、娘たちは何げなく父にたずねると、母の入れ知恵とは知らないで、父は正直に打ちあけた。

「実は積み稲の下に隠してある」

それが娘の口から洩らされたので、母は羽衣のありかを知った。

彼女はそれを身につけて飛び去ったが、再び娘たちを迎いに来て、三人の娘も共に飛び去ってしまった。

狸老翁
たぬきおやじ

晋の時、呉興の農夫が二人の息子を持つていた。その息子兄弟が田を耕している
と、突然に父があらわれて来て、子細も無しに兄弟を叱り散らすばかりか、果ては
追い撃とうとするので、兄弟は逃げ帰って母に訴えると、母は怪訝な顔をした。

「お父さんは家にいるが……。まあ、ともかくも訊いてみよう」

訊かれて父はおどろいた。自分はさつきから家にいたのであるから、田や畑へ出
て行って息子たちを叱ったり殴ったりする筈がない。それは何かの妖怪がおれの姿
に化けて行ったに相違ないから、今度来たらば斬り殺せと言いつけたので、兄弟も

そのつもりで刃物を用意して行った。

こうして息子らを出してやったものの、父もなんだか不安であるので、やがて後から様子を見とどけに出てゆくと、兄弟はその姿を見て刃物を把り直した。

「化け物め、また来たか」

父は言い訳をする間もなしに斬り殺されてしまった。兄弟はその正体を見極めもせずに、そこらの土のなかに埋めて帰ると、家には父がかれらの帰るのを待っていた。

「化け物めを退治して、まずまずめでたい」と、父も息子らもみな喜んだ。化け物が父に変じていることを兄弟は覺らなかつた。

幾年か過ぎた後、ひとりの法師がその家に来て兄弟に注意した。

「おまえ達のお父さんには怖ろしい邪氣が見えますぞ」

それを聞いて、父は大いに怒って、そんな奴は早速逐い出してしまえと息子らに言い付けた。それを聞いて、法師も怒った。かれは声を厲しゅうして家内へ跳り込むと、父は忽ち大きい古狸に変じて床下へ逃げ隠れたので、兄弟はおどろきながらも追いつめて、遂に生け捕って撲ち殺した。

不幸な兄弟はこの古狸にたぶらかされて、真の父を殺したのである。一人は憤恨のあまりに自殺した。一人も懊悩のために病いを発して死んだ。

虎の難産

廬陵ろりようの蘇易そえきという婦人は産婦とりあけの収生とりあけをもつて世に知られていたが、ある夜外出すると、忽ち虎くわに啣くわえて行かれた。

彼女はすでに死を覚悟していると、行くこと六、七里にして大きい塚つか穴あなのような所へ行き着いた。虎はここで彼女を下ろしたので、どうするのかと思つてよく視ると、そこには一頭の牝めすの虎が難産に苦しんでいるのである。

さてはと覺つて手当てをしてやると、虎はつつがなく三頭の子を生み落した。それが済むと、虎は再び彼女を啣くわえて元の所まで送り還した。

その後、幾たびか蘇易の門内へ野獸の肉を送り込む者があつた。

寿光侯

寿光侯じゆくわうは漢しんの章帝しやうていの時の人である。彼はあらゆる鬼を祈り伏せて、よくその正体を見あらわした。その郷里のある女よしみが妖魅ようみに取りつかれた時に、寿は何かの法をおこなうと、長さ幾丈の大蛇だいじやが門前に死んで横たわつて、女の病いはすぐに平癒した。

また、大樹があつて、人がその下に止まると忽ちに死ぬ、鳥が飛び過ぎると忽ちに墜ちるといふので、その樹には精があると伝えられていたが、寿がそれにも法を施すと、盛夏にその葉はことごとく枯れ落ちて、やはり幾丈の大蛇が樹のあいだに懸つて死んでいた。

章帝がそれを聞き伝えて、彼を召し寄せて事実の有無をたずねると、寿はいかにも覚えがあると答えた。

「実は宮中に妖怪があらわれる」と、帝は言った。「五、六人の者が紅い着物をきて、長い髪を振りかぶつて、火を持つて徘徊する。お前はそれを鎮めることが出来るか」「それは易いことでございます」

寿は受けあつた。そこで、帝は侍臣三人に言いつけて、その通りの扮装をさせて、夜ふけに宮殿の下を往来させると、寿は式の如くに法をおこなつて、たちまちに三人を地に仆した。かれらは氣を失つたのである。

「まあ、待つてくれ」と、帝も驚いて言った。「かれらはまことの妖怪ではない。実はおまえを試してみたのだ。殺してくれるな」
寿が法を解くと、三人は再び正氣に復つた。

糜竺は東海の胸くというところの人で、先祖以来、貨殖かしよくの道に長たけているので、家には巨万の財をたくわえていた。

あるとき彼が洛陽らくやうから帰る途中、わが家に至らざる数十里のところ、ひとりの美しい花嫁ふうの女に出逢った。女はその車へ一緒に載せてくれと頼むので、彼は承知して載せてゆくと、二十里ばかりの後に女は礼をいって別れた。そのときに彼女は又こんなことをささやいた。

「実はわたしは天の使いで、これから東海の糜竺の家を焼きに行くのです。ここまで載せて来て下さったお礼に、それだけのことを洩らして置きます」

糜はおどろいて、なんとか勘弁してくれるわけには行くまいかとしきりに嘆願すると、女は考えながら言った。

「何分にもわたしの役目ですから、焼かないというわけには行きません。しかし折角のお頼みですから、わたしは徐しゆかに行くことにします。あなたは早くお帰りなさい。日中には必ず火が起ります」

彼はあわてて家へ帰つて、急に家財を運び出させると、果たして日中に大火が起つて、一家たちまち全焼した。

蛇蠱じやこ

滎陽郡けいように廖りようという一家があつて、代々一種の蠱術こじゆつをおこなつて財産を作りあげた。ある時その家に嫁を貰つたが、蠱術のことをいえば怖れ嫌うであらうと思つて、その秘密を洩らさなかつた。

そのうちに、家内の者はみな外出して、嫁ひとりが留守番をしている日があつた。家の隅に一つの大きい瓶かめが据えてあるのを、嫁はふと見つけて、こころみにその蓋ふたをあけて覗くと、内には大蛇がわだかまっていたので、なんにも知らない嫁はおどろいて、あわてて熱湯をそそぎ込んで殺してしまつた。家内の者が歸つてから、嫁はそれを報告すると、いずれも顔の色を変えて驚き憂うれひた。

それから暫くのうちに、この一家は疫病にかかつて殆んど死に絶えた。

螻蛄

廬陵ろりようの太守龐企ろうきの家では螻蛄けらを祭ることになつてゐる。

何ゆえにそんな虫を祭るかというに、幾代か前の先祖が何かの連坐まきぞりで獄屋につながれた。身におぼえの無い罪ではあるが、拷問の責め苦に堪えかねて、遂に服罪する

ことになったのである。彼は無罪の死を嘆いている時、一匹の虻が自分の前を這い歩いているのを見た。彼は憂苦のあまりに、この小さい虫にむかつて愚痴を言った。

「おまえに霊があるならば、なんとかして私を救ってくれないかなあ」

食いかけの飯を投げてやると、虻は残らず食って行ったが、その後ふたたび這い出して来たのを見ると、その形が前よりも余ほど大きくなったようである。不思議に思つて、毎日かならず飯を投げてやると、虻も必ず食って行った。そうして、数十日を経るあいだに虫はだんだんに生長して犬よりも大きくなった。

刑の執行がいよいよ明日に迫つた前夜である。

大きい虫は獄屋の壁のすそを掘つて、人間が這い出るほどの穴をこしらえてくれた。彼はそこから抜け出して、一旦の命を生きのびて、しばらく潜伏しているうちに、測らずも大赦に逢つて青天白日の身となった。

その以来、その家では代々その虫の祭祀を続けているのである。

父母の霊

劉根は字を君安といい、長安の人である。漢の成帝のときに嵩山に入つて異人に

仙術を伝えられ、遂にその秘訣を得て、心のままに鬼を使うことが出来るようになった。

颯川さいせんの太守、史祈しきという人がそれを聞いて、彼は妖法をおこなう者であると認め、役所へよび寄せて成敗しようと思った。召されて劉が出頭すると、太守はおごそかに言い渡した。

「貴公はよく人に鬼を見せるというが、今わたしの眼の前へその姿をはつきりと見せてくれ。それが出来なければ刑戮けいりくを加えるから覚悟しなさい」

「それは訳もないことです」

劉は太守の前にある筆すずりや硯すずりを借りて、なにかの御符おふだをかけた。そうして、机を一つ叩くと、忽ちそこへ五、六人の鬼があらわれた。鬼は二人の囚人を縛って来たので、太守は眼を据えてよく視ると、その囚人は自分の父と母であった。父母はまず劉にむかつて謝まった。

「小悴こせがれめが飛んだ無礼を働きました、なんとも申し訳がございません」

かれらは更に我が子を叱った。

「貴様はなんとという奴だ。先祖に光栄をあたえる事が出来ないばかりか、かえって神仙に対して無礼の罪をかさね、生みの親にまでこんな難儀をかけるのか」

太守は実におどろいた。彼は俄にわかに劉の前に頭かしらをすり付けて、無礼の罪を泣いて

詫びると、劉は黙って何処へか立ち去った。

無鬼論

阮瞻は字を千里といい、平素から無鬼論を主張して、鬼などという物があるべき筈がないと言っていたが、誰も正面から議論をこころみて、彼に勝ち得る者はなかった。阮もみずからそれを誇つて、この理をもつて推すときは、世に幽と明と二つの界があるように伝えるのは誤りであると唱えていた。

ある日、ひとりの見識らぬ客が阮をたずねて来て、式のごとく時候の挨拶が終つた後に、話は鬼の問題に移ると、その客も大いに才弁のある人物で、この世に鬼ありと言う。阮は例の無鬼論を主張し、たがいに激論を闘わしたが、客の方が遂に言い負かされてしまった。と思うと、彼は怒りの色をあらわした。

「鬼神のことは古今の聖人賢者もみな言い伝えているのに、貴公ひとりが無いと言ひ張ることが出来るものか。論より証拠、わたしが即ち鬼である」

彼はたちまち異形の者に変じて消え失せたので、阮はなんとも言うことが出来なくなつた。彼はそれから心持が悪くなつて、一年あまりの後に病死した。

盤瓠

高辛こうしん氏の時代に、王宮にいる老婦人が久しく耳やまいの疾にかかつて医師の治療を受けると、医師はその耳から大きな繭まゆのごとき虫を取り出した。老婦人が去った後、瓠ひきの籬かきでかこつて盤ふたをかぶせて置くと、虫は俄かに変じて犬となった。犬の毛皮には五色ごしきの文あやがあるので、これを宮中に養うこととし、瓠と盤とにちなんで盤瓠ばんこと名づけていた。

その当時、戎呉じゆうこという胡えびすの勢力が盛んで、しばしば国境を犯すので、諸將をつかわして征討を試みても、容易に打ち勝つことが出来ない。そこで、天下に触れを廻して、もし戎呉の將軍の首を取って来る者があれば、千斤きんの金をあたえ、万戸ばんこの邑むらをあたえ、さらに王の少女を賜わるということになった。

やがて盤瓠は一人の首をくわえて王宮に来た。それはかの戎呉の首であったので、王はその処分に迷っていると、家来たちはみな言った。

「たとい敵の首を取って来たにしても、盤瓠は畜類であるから、これに官禄を与えることも出来ず、姫君を賜わることも出来ず、どうにも致し方はありますまい」

それを聞いて少女は王に申し上げた。

「戎呉の首を取った者にはわたくしを与えるということをすでに天下に公約された

のです。盤瓠がその首を取つて来て、国のために害を除いたのは、天の命ずるところで、犬の知恵ばかりではありませんまい。王者は言を重んじ、伯者は信を重んずと申します。女ひとりの身を惜しんで、天下に対する公約を破るのは、国家の禍いでありましょう。」

王も懼れて、その言葉に従うことになった。約束の通りに少女をあたえると、犬は彼女を伴つて南山にのぼつた。山は草木おい茂つて、人の行くべき所ではなかつた。少女は今までの衣裳を解き捨てて、賤しい奴僕ぬぼくの服を着け、犬の導くままに山を登り、谷に下つて石室いしむろのなかにとどまつた。王は悲しんで、ときどきその様子を見せにやると、いつでも俄かに雨風が起つて、山は震い、雲は晦くろく、無事にその石室まで行き着くものはなかつた。

それから三年ほどのあいだに、少女は六人の男と六人の女を生んだ。かれらは木の皮をもつて衣服を織り、草の実をもつて五色に染めたが、その衣服の裁ち方には尾の形が残つていた。盤瓠が死んだ後、少女は王城へ帰つてそれを語つたので、王は使いをやつてその子ども達を迎い取らせたが、その時には雨風の祟りたたりもなかつた。しかし子供たちの服装は異様であり、言葉は通ぜず、行儀は悪く、山に棲むことを好んで都を嫌うので、王はその意にまかせて、かれらに好い山や広い沢地をあたえて自由に棲ませた。かれら呼んで蛮夷まんいといつた。

金龍池

晋しんの懷帝かいていの永嘉年中えいかにちゅうに、韓媼かんおんという老女が野なかで巨おおきい卵をみつけた。拾おほつて帰かへつて育てると、やがて男の児こが生まれて、その字あざなを擻兒けつじといった。

擻兒が四歳しよさいのとき、劉淵りゅうえんが平陽へいようの城を築たいたが、どうしても出来こない。そこで、賞をかけて築城術ちきじゆつの達者たつしやを募まると、擻兒はその募集まうしふに応こたじた。彼は變かじて蛇へびとなつて、韓媼かんおんに灰はいを用意よういしろと教おしえた。

「わたしの這はつて行くあとに灰はいをまいて来これば、自然じぜんに城の繩張じゆぢやうりが出来る」

韓媼はそのいう通りにした。劉淵は怪あやしんで擻兒ととを捉とらえようとするとと、蛇は山の穴あなに隠かくれた。しかもその尾の端はなが五、六寸ばかりあらわれていたたので、追おつ手は劍けんをぬいて尾を斬きると、そこから忽たちちに泉いづみが涌わき出して池いけとなつた。金龍池きんりゆうちの名はこれから起おつたのである。

発塚異事はつちやういじ

三さん国の呉ごの孫休そんきゆうのときに、一人の戎將じゆしやうが広陵こうりやうを守まもつていたが、城の修繕しゆせんをするた

めに付近の古い塚を掘りかえして石の板をあつめた。見あたり次第にたくさん塚をぶち壊しているうちに、一つの大きい塚を発くことになった。

塚のうちには幾重の閣があつて、その扉はみな回転して開閉自在に作られていた。四方には車道が通じていて、その高さは騎馬の人も往来が出来るほどである。ほかに高さ五尺ほどの銅人が数十も立っていて、いずれも朱衣、大冠、剣を執つて整列し、そのうしろの石壁には殿中將軍とか、侍郎常侍とか彫刻してある。それらの護衛から想像すると、定めて由緒ある公侯の塚であるらしく思われた。

さらに正面の棺を破つてみると、棺中の人は髪がすでに斑白で、衣冠鮮明、その相貌は生けるが如くである。棺のうちには厚さ一尺ほどに雲母を敷き、白い玉三十個を死骸の下に置き列べてあつた。兵卒らがその死人を昇き出して、うしろの壁に倚せかけると、冬瓜のような大きい玉がその懐中から転げ出したので、驚いて更に検査すると、死人の耳にも鼻にも棗の実ほどの黄金が詰め込んであつた。

次も墓あらしの話。

漢の広川王も墓あらしを好んだ。あるとき欒書の塚をあばくと、棺も祭具もみな朽ち破れて、何物も余されていなかったが、ただ一匹の白い狐が棲んでいて、人を見ておどろき走つたので、王の左右にある者が追いかけたが、わずかに戟をもつてその左足を傷つけただけで、遂にその姿を見失つた。

その夜、王の枕もとに、鬚も眉もことごとく白い一個の丈夫があらわれて、お前はなぜおれの左の足を傷つけたかと責めた上に、持った杖をあげて王の左足を撃つたかと思うと、夢は醒めた。

王は撃たれた足に痛みをおぼえて一種の悪瘡を生じ、いかに治療しても一生を終るまで平癒しなかった。

徐光の瓜

三国の呉のとき、徐光という者があつて、市中へ出て種々の術をおこなっていた。ある日、ある家へ行って瓜をくれという、その主人が与えなかった。それでは瓜の花を貰いたいと言って、地面に杖を立てて花を植えると、忽ちに蔓が伸び、花が開いて実を結んだので、徐は自分も取つて食ひ、見物人にも分けてやった。瓜あきんどがそのあとに残つた瓜を取つて売りに出ると、中身はみな空になつていた。

徐は天候をうらない、出水や旱のことを予言すると、みな適中した。かつて大將軍孫縝の門前を通ると、彼は着物の裾をかかかけて、左右に唾しながら走りぬけた。ある人がその子細をたずねると、彼は答えた。

「一面に血が流れていて、その臭いがたまらない」

將軍はそれを聞いて大いに憎んで、遂に彼を殺すことになった。徐は首を斬られても、血が出なかった。

將軍は後に幼帝を廃して、さらに景帝けいていを擁立し、それを先帝みさききの陵に奉告しようとして、門を出て車に乗ると、俄かに大風が吹いて来て、その車をゆり動かしたので、車はあやうく傾きかかった。

この時、かの徐光が松の樹の上に立って、笑いながら指図しているのを見たが、それは將軍の眼に映っただけで、そばにいる者にはなんにも見えなかった。

將軍は景帝を立てたのであるが、その景帝のためにたちまち誅ちゆうせられた。

搜神後記（六朝）

第二の男は語る。

「次へ出まして、わたくしは『搜神後記』のお話をいたします。これは標題の示す通り、かの『搜神記』の後編ともいふべきもので、昔から東晋とうしんの陶淵明とうえんめい先生の撰といふことになって居りますが、その作者については種々の議論がありました。『搜神記』の干宝よりも、この陶淵明は更に一層疑わしいといわれて居ります。しかしそれが偽作であるにもせよ、無いにもせよ、その内容は『搜神記』に劣らないものでありまして、『後記』と銘を打つだけの価値はあるように思われます。これも『搜神記』に伴って、早く我が国に輸入されまして、わが文学上に直接間接の影響をあたうること多大であったのは、次の話をお聴きくだされば、大抵お判りになるだろうかと思ひます」

貞女峽

中宿県ちゆうしゆくへんに貞女峽ていじよせうというのがある。峽の西岸の水ぎわに石があつて、その形が女のように見えるので、その石を貞女と呼び慣わしている。伝説によれば、秦の時代に数人の女がここへ法螺貝ほらがいを採りに来ると、風雨に逢つて昼暗く、晴れてから見ると其の一人は石に化していたというのである。

怪比丘尼

東晋とうしんの大司馬かんおん桓温かんおんは威勢いかせき赫々たるものであつたが、その晩年に一人の比丘尼びくが遠方からたずねて来た。彼女は才あり徳ある婦人として、桓温からも大いに尊敬され、しばらく其の邸内にとどまつていた。

唯ただひとつ怪しいのは、この尼僧の入浴時間の甚だ久しいことで、いったん浴室へはいると、時の移るまで出て来ないのである。桓温は少しくそれを疑つて、ある時ひそかにその浴室を窺うと、彼は異常なる光景におびやかされた。

尼僧あかはだかは赤裸になつて、手には鋭利らしい刀を持つていた。彼女はその刀をふるつて、まず自分の腹を截ち割つて臟腑をつかみ出し、さらに自分の首を切り、手足を切つた。桓温は驚き怖れて逃げ帰ると、暫くして尼僧は浴室を出て来たが、その身体は常のごとくであるので、彼は又おどろかさされた。しかも彼も一個の豪傑であるので、尼僧に対して自分の見た通りを正直に打ちあけて、さてその子細を聞きただすと、尼僧はおごそかに答えた。

「もし上かみを凌かみごうとする者があれば、皆あんな有様になるのです」
桓温は顔の色を変じた。実をいえば、彼は多年の威力を恃たのんで、ひそかに謀叛むほんを

企てていたのであった。その以来、彼は懼れ戒めて、一生無事に臣節を守った。尼僧はやがてここを立ち去って行くえが知れなかった。

尼僧の教えを奉じた桓温は幸いに身を全うしたが、その子の桓玄は謀叛を企てて、彼女の予言通りに亡ぼされた。

夫の影

東晋の董寿が誅せられた時、それが夜中であつたので、家内の者はまだ知らなかつた。

董の妻はその夜唯ひとりで坐っていると、たちまち自分のそばに夫の立っているのを見た。彼は無言で溜め息をついているのであつた。

「あなた、今頃どうしてお退がりになつたのです」

妻は怪しんでいろいろにたずねたが、董はすべて答えなかつた。そうして、無言のままに再びそこを出て、家に飼つてある雞籠のまわりを繞つてゆくかと思つと、籠のうちの雞が俄かに物におどろいたように消魂しく叫んだ。妻はいよいよ怪しんで、火を照らして窺うと、籠のそばにはおびただしい血が流れていた。

「さては凶事があつたに相違ない」

母も妻も一家こぞって泣き悲しんでいると、果たして夜が明けてから主人の死が伝えられた。

蛮人の奇術

魏ぎのとき、尋陽しんよう県の北の山中に怪しい蛮人が棲んでいた。かれは一種の奇術を知っていて、人を変じて虎とするのである。毛の色から爪や牙きばに至るまで、まことの虎にちつとも変らず、いかなる人をも完全なる虎に作りかえてしまうのであった。

土地の周しゅうという家に一人の奴僕しもべがあった。ある日、薪たきぎを伐るために、妻と妹をつれて山の中へ分け入ると、奴僕はだしぬけに二人に言った。

「おまえ達はそこの高い樹に登って、おれのする事を見物している」

二人はその言うがままにすると、彼はかたわらの藪やぶへはいつて行ったが、やがて一匹の黄いろい斑ふのある大虎が藪のなかから跳り出て、すさまじい唸うなり声をあげてたけり狂うので、樹の上にいる女たちはおどろいて身をすくめていると、虎は再び元の藪へ帰った。これで先ずほつとしていっていると、やがて又、彼は人間のすがたで現われた。

「このことを決して他言するなよ」

しかしあまりの不思議におどろかされて、女たちはそれを同輩に洩らしたので、遂に主人の耳にもきこえた。そこで、彼に好い酒を飲ませて、その熟酔するのを窺つて、主人はその衣服を解き、身のまわりをも検査したが、別にこれぞという物をも発見しなかつた。更にその髪を解くと、頭髻のなかから一枚の紙があらわれた。紙には一つの虎を描いて、そのまわりに何か呪文のようなことが記してあつたので、主人はその文句を写し取つた。そうして、酔いの醒めるのを待つて詮議すると、彼も今更つつみ切れないと覚悟して、つぶさにその事情を説明した。

彼の言うところに拠ると、先年かの蛮地の奥へ米を売りに行つたときに、三尺の布と、幾升の糧米と、一羽の赤い雄雞と、一升の酒とを或る蛮人に贈つて、生きながら虎に變ずるの秘法を伝えられたのであつた。

雷車

東晋の永和年中に、義興の周という姓の人が都を出た。主人は馬に乗り、従者二人が付き添つてゆくと、今夜の宿りを求むべき村里へ行き着かないうちに、日が暮れかかつた。

路ばたに一軒の新らしい草葺きの家があつて、ひとりの女が門に立っていた。女は

十六、七で、ここらには珍しい上品な顔容で、着物も鮮麗である。彼女は周に声をかけた。

「もうやがて日が暮れます。次の村へ行き着くのさえ覚束ないのに、どうして臨賀まで行かれましよう」

周は臨賀という所まで行くのではなかったが、次の村へも覚束ないと聞いて、今夜はこの家へ泊めて貰うことにすると、女はかいがいしく立ち働いて、火をおこして、湯を沸かして、晩飯を食わせてくれた。

やがて夜の初更（午後七時—九時）とおぼしき頃に、家の外から小児の呼ぶ声がきこえた。

「阿香」

それは女の名であるらしく、振り返って返事をする、外ではまた言った。

「おまえに御用がある。雷車を推せという仰せだ」

「はい、はい」

外の声はそれぎりで止むと、女は周にむかって言った。

「折角お泊まり下すつても、おかまい申すことも出来ません。わたくしは急用が起りましたので、すぐに行つてまいります」

女は早々に出て行つた。雷車を推せとはどういう事であろうと、周は従者らと噂

をしていると、やがて夜半から大雷雨になったので、三人は顔をみあわせた。

雷雨は明け方にやむと、つづいて女は帰つて来たので、彼女がいよいよ唯者たゞものでないことを三人は覺さとつた。鄭重ていぢゆうに礼をのべて、彼女にわかれて、門を出てから見かえると、女のすがたも草の家も忽ち跡なく消えうせて、そこには新しい塚があるばかりであつたので、三人は又もや顔を見あわせた。

それにつけても、彼女が「臨賀までは遠い」と言つたのはどういふ意味であるか、かれらにも判らなかつた。しかも幾年の後に、その謎の解ける時節が来た。周は立身して臨賀の太守となつたのである。

武陵桃林

東晋とうしんの太元年中たげんに武陵ぶりようの黄道真こうどうしんという漁人ぎよせしんが魚を捕りに出て、溪川たにがわに沿うて漕いで行くうちに、どのくらい深入りをしたか知らないが、たちまち桃の林を見いだした。

桃の花は岸を挟んで一面に紅く咲きみだれていて、ほとんど他の雑木はなかつた。黄は不思議に思つて、なおも奥ふかく進んでゆくと、桃の林の尽くるところに、川みなもとの水源がある。そこには一つの山があつて、山には小さい洞ほらがある。洞の奥からは

光りが洩れる。彼は舟から上がって、その洞穴の門をくぐってゆくと、初めのうちは甚だ狭く、わずかに一人を通ずるくらいであったが、また行くこと数十歩にして俄かに眼さきは広くなつた。

そこには立派な家屋もあれば、よい田畑もあり、桑もあれば竹もある。路も縦横に開けて、雞や犬の声もきこえる。そこらを往来している男も女も、衣服はみな他国人のような姿であるが、老人も小兒も見るからに楽しそうな顔色であつた。かれらは黄を見て、ひどく驚いた様子で、おまえは何処の人でどうして来たかと集まつて訊くので、黄は正直に答えると、かれらは黄を一軒の大きい家へ案内して、雞を調理し、酒をすすめて饗応した。それを聞き伝えて、一村の者がみな打ち寄つて来た。

かれら自身の説明によると、その祖先が秦の暴政を避くるがために、妻子眷族をたずさえ、村人を伴つて、この人跡絶えたるところへ隠れ住むことになつたのである。その以来再び世間に出ようとせざ、子々孫々ここに平和の歲月を送つていたので、世間のことはなんにも知らない。秦のほろびた事も知らない。漢の興つたことも知らない。その漢がまた衰えて、魏となり、晋となつたことも知らない。黄が一々それを説明して聞かせると、いずれもその変遷に驚いてゐるらしかつた。

黄はそれからそれへと他の家にも案内されて、五、六日のあいだは種々の饗応を受けていたが、あまりに帰りがおくれでは家内の者が心配するであろうと思つたの

で、別れを告げて帰つて来た。その帰り路のところどころに目標めじろしをつけて置いて、黄は郡城にその次第を届けて出ると、時の太守劉韻りゅういんは彼に人を添えて再び探査にかわしたが、目標はなんの役にも立たず、結局その桃林を尋ね当てる事が出来なかつた。

離魂病

宋そうのとき、なにがしという男がその妻と共に眠つた。夜があけて、妻が起きて出た後に、夫もまた起きて出た。

やがて妻が戻つて来ると、夫は衾きんのうちに眠つていたのであつた。自分の出たあとに夫の出たことを知らないで、妻は別に怪しみもせずにいると、やがて奴僕しもべが来て、且かつ那様が鏡をくれと仰おほしやりますと言つた。

「ふざけてはいけない。且かつ那はここに寝ているではないか」と、妻は笑つた。

「いえ、且かつ那様はあちらにおいでになります」

奴僕も不思議そうに覗いてみると、主人はたしかに衾きんを被きて寝ているので、彼は顔色をかえて駈け出した。その報告に、夫も怪しんで来てみると、果たして寢床の上には自分と寸分違わない男が安らかに眠つていたのであつた。

「騒いではならない。静かにしろ」

夫は近寄つて手をさしのべ、衾の上からしずかにかの男を撫でてみると、その形は次第に薄く且つ消えてしまった。

夫婦も奴僕も言い知れない恐怖に囚われてみると、それから間もなく、その夫は一種の病いにかかつて、物の理屈も判らないようなぼんやりした人間になった。

狐の手帳

呉郡の顧旃が獵に出て、一つの高い岡にのぼると、どこかで突然に人の声がきこえた。

「ああ、ことしは駄目だ」

こんなところに誰か忍んでいるのかと怪しんで、彼は連れのものどもと共にそこらを探してあるくと、岡の上の一つの窠があつて、それは古塚の頽れたものであるらしかつた。

その窠の中には一匹の古狐が坐つて、何かの一卷を読んでいたので、すぐに獵犬を放してそれを咬み殺させた。それから狐の讀んでいたものを検めると、それには大勢の女の名を書きならべて、ある者には朱で鈎を引いてあつた。察するに、妖狐

が種々に形を変じて、容貌きりようのいい女子おなごを犯していたもので、朱の鉤を引いてあるのは、すでにその目的を達したものであろう。

女の名は百余人の多きにのぼって、顧旃こせんのむすめの名もそのうちに記しるされていたが、幸いにまだ朱を引いていなかった。

雷を罵る

呉興ごこうの章苟しやうこうという男が五月の頃に田を耕しに出た。かれは真菰まごもに餅をつつんで来て、毎夕の食い物にしていたが、それがしばしば紛失するので、あるときそつと窺のぞつていると、一匹の大きい蛇が忍び寄ぬすつて偷み食らうのであった。彼は大いに怒って、長柄の鎌をもって切り付けると、蛇は傷ついて走った。

彼はなおも追つてゆくと、ある坂の下に穴があつて、蛇はそこへ逃げ込んだ。おのれどうしてくれようかと思案していると、穴のなかでは泣き声がきこえた。

「あいつがおれを切りやあがつた」

「あいつどうしてやろう」

「かみなりに頼んで撃ち殺させようか」

そんな相談をしているかと思うと、たちまちに空が暗くなって、彼のあたまの上に

雷らいの音が近づいて来た。しかも彼は頑強がんきやうの男であるので、跳おどりあがって大おのいに罵ののつた。

「天がおれを貧乏な人間にこしらえたから、よんどころなしに毎日あくせくと働いているのだ。その命の綱の食い物をぬすむような奴を、切ったのがどうしたのだ。おれが悪いか、蛇が悪いか、考えてみても知れたことだ。そのくらいの理屈が分からねえで、おれに天罰をくだそうというなら、かみなりでも何でも来て見る。おのれ唯ただは置かねえから覚悟しろ」

彼は得物えものを取り直して、天を睨にらんで突つ立っていると、その勢いに辟易へきえきしたのか、あるいは道理に服したのか、雷は次第に遠退いて、かえって蛇の穴の上に落ちた。天が晴れてから見ると、そこには大小数十匹の蛇が重なり合つて死んでいた。

白帯の人

呉ごの末に、臨海の人が入つて獵かりをしていた。彼は木間このまに粗末の小屋を作つて、そこに寝泊まりしていると、ある夜ひとりの男がたずねて来た。男は身のたけ一丈もあるらしく、黄衣をきて白い帯を垂れていた。

「折り入つてお願いがあつて参りました」と、かれは言った。「実はわたくしに敵が

あつて、明日ここで戦わなければなりません。どうぞ加勢をねがいます」

「よろしい。その敵は何者です」

「それは自然にわかります。ともかくも明日の午頃ひるにその溪たにへ来てください。敵は北から来て、わたくしは南からむかいます。敵は黄の帯を締めています、わたくしは白の帯をしめています」

獵師は承知すると、かの男はよろこんで歸つた。そこで、あくる日、約束の時刻に行つてみると、果たして溪たにの北方あらしから風雨のような声がひびいて来て、草も木も皆ざわざわとなびいた。南の方も同様である。やがて北からは黄いろい蛇、南からは白い蛇、いずれも長さ十余丈じゅう、溪の中ほどで行き合つて、たがいに絡み合い咬み合つて戦つたが、白い方の勢いがやや弱いようにみえた。約束はここだと思つて、獵師は黄いろい蛇を目がけて矢を放つと、蛇は見ごとに急所たぶらを射られて斃れた。

夜になると、昨夜の男が又たずねて来て、彼に厚く礼をのべた。

「ここに一年とどまつて猫をなされば、きつとたくさんたの獲物があります。ただし来年になったらばお帰りなさい。そうして、再びここへ来てはなりません」と、男は堅く念を押して歸つた。

なるほど其の後は大いなる獲物があつて、一年のあいだに彼は莫大の金儲けをすることが出来た。それでいったんは山を降つて、無事に五、六年を送つたが、昔の

獲物のことを忘れかねて、あるとき再びかの山中へ獵にゆくと、白い帯の男が又あらわれた。

「あなたは困ったものです」と、彼は愁^{うれ}うるが如くに言った。「再びここへ来てはならないと、わたくしがあれほど戒^{いまし}めて置いたのに、それを用いないで又来るとは……。仇の子がもう成長していますから、きつとあなたに復讐^{ふしう}するでしょう。それはあなたのみずから求めた禍^{わざ}いで、わたくしの知ったことではありません」

言うかと思うと、彼は消えるように立ち去ったので、獵師は俄かに怖ろしくなつて、早々にここを逃げ去ろうとすると、たちまちに黒い衣^{きぬ}をきた者三人、いづれも身のたけ八尺ぐらいで、大きい口をあいて向かつて来たので、獵師はその場に仆^{たお}れてしまった。

白亀

東晋^{とうしん}の咸康^{かんこう}年中に、予州^{よしゅう}の刺史^{しし}毛宝^{もうほう}が邾^{しゆ}の城を守っていると、その部下の或る軍士^{ぶし}が武昌^{ぶしょう}の市^{いち}へ行つて、一頭の白い亀^{かめ}を売っているのを見た。亀は長さ四、五寸^{すん}、雪のように真^まつ白^{しろ}で頗^{すこぶ}る可愛らしいので、彼はそれを買つて帰^{かへ}つて甕^{かめ}のなかに養つて置くと、日を経るにしたがつて大きくなって、やがて一尺ほどにもなったので、軍

士はそれを憐れんで江の中へ放してやった。

それから幾年の後である。邾の城は石季龍の軍に囲まれて破られ、毛宝は予州を捨てて走った。その落城の際に、城中の者の多数は江に飛び込んで死んだ。かの軍士も鎧よろいを着て、刀を持ったままで江に飛び込むと、なにか大きい石の上に墮おちたように感じられて、水はその腰のあたりまでしか達とどかなかつた。

やがて中流まで運び出されてよく視ると、それはさきに放してやった白い亀で、その甲が六、七尺に生長していた。亀はむかしの恩人を載せて、むこうの岸まで送りどけ、その無事に上陸するのを見て泳ぎ去つたが、中流まで来たときに再び振り返つてその人を見て、しずかに水の底に沈んだ。

髑髏軍

西晋せいしんの永嘉五年、張榮ちやうえいが高平こうへいの巡邏主じゆんざしゆとなつていた時に、曹嶷そうぎという賊が乱を起して、近所の地方をあらし廻るので、張は各村の住民に命じて、一種の自警団を組織し、各所に堡壘ほうらいを築いてみずから守らせた。

ある夜のことである。山の上に火が起つて、烟けむりや火焰ほのおが高く舞い上がり、人馬の物音かちちゆうや甲冑かちゆうのひびきが物騒ものさわがしくきこえたので、さては賊軍が押し寄せて来たに

相違ないと、いずれも俄かに用心した。張はかれらを迎え撃つために、軍士を率いて駆けむかうと、山のあたりに人影はみえず、ただ無数の火の粉が飛んで来て、人の鎧や馬のたてがみに燃えつくので、皆おどろいて逃げ戻った。

あくる朝、再び山へ登ってみると、どこにも火を焚いたらしい跡はなく、ただ百人あまりの枯れた髑髏がそこらに散乱しているのみであった。

山操

宋（南朝）の元嘉年間のはじめである。富陽の人、王という男が蟹を捕るために、河のなかへ罾を作つて置いて、あくる朝それを見にゆくと、長さ二尺ほどの材木が罾のなかに横たわっていた。それがために竹は破れて、蟹は一匹もかかつていなかった。

そこで、その材木を岸の上にとり捨て、竹の破れを修繕して帰つて来たが、翌日再び行ってみると、かの材木は又もや同じところに横たわっていて、罾を破るのと前日の如くである。

「これは不思議だ。この林木は何か怪しい物かも知れないぞ、いつそ焚いてしまえ」蟹を入れる籠のなかへかの材木を押し込んで、肩に引っかけた帰つて来ると、そ

の途中で籠のなかから何かさがさという音がきこえるので、王は振り返ってみると、材木はいつの間にか奇怪な物に変わっていた。顔は人のごとく、体は猴さるの如くで、一本足である。その怪物は王に訴えた。

「わたしは蟹が大好きであるので、実はあなたの竹を破つて、その蟹をみんな食つてしまいました。どうぞ勘弁してください。もしわたしを赦ゆるして下されば、きつとあなたに助力して大きい蟹の捕れるようにして上げます。わたしは山の神です」

「どうして勘弁がなるものか」と、王は罵つた。「貴様は一度ならず二度までも、おれの漁場をあらした奴だ。山の神でもなんでも容赦はない。罪の報いと諦めて往生しろ」

怪物はどうぞ赦してくれとしきりに搔くき口説くどいたが、王は頑として応じないので、怪物は最後に言った。

「それでは、あなたの姓名はなんというのですか」

「おれの名をきいてどうするのだ」

「ぜひ教えてください」

「忌いやだ、いやだ」

なにを言っても取り合わない。そのうちに彼の家はだんだん近くなったので、怪物は悲しげに言った。

「わたしを赦してもくれず、また自分の姓名を教えてもくれない以上は、もうどうにも仕様がなない。わたしもむなしく殺されるばかりだ」

王は自分のうちへ帰つて、すぐにその怪物を籠と共に焚いてしまったが、寂し^{せき}てなんの声もなかつた。土地の人はこのたぐいの怪物を山獠^{さんぞう}と呼んでいるのである。かれらは人の姓名を知ると、不思議にその人を傷つけることが出来ると伝えられている。怪物がしきりに王の姓名を聞こうとしたのも、彼を害して逃がれようとしたものらしい。

熊の母

東晋^{とうしん}の升平年間^{しょうへい}に、ある人が山奥へ虎を射に行くと、あやまつて一つの穴に墮^おちた。穴の底は非常に深く、内には数頭の仔熊が遊んでいた。

さては熊の穴へはいったかと思つたが、穴が深いので出ることが出来ない。そのうちに一頭の大きい熊が外から戻つて来たので、しよせん助からないと覺悟していると、熊はしまつてある果物^{くだもの}を取り出してまず仔熊にあたえた。それから又、一人分の果物を出して彼の前に置いた。彼はひどく腹が空いているので、怖ろしいのも忘れてそれを食つた。

熊は別に害を加えようとする様子もないので、彼もだんだんに安心して来た。熊は仔熊の母であることも判った。親熊は毎日外へ出ると、かならず果物を拾つて帰つて、仔熊にもあたえ、彼にも分けてくれた。それで彼は幸いに餓死をまぬかれていたが、日数を経るうちに仔熊もおいおい生長したので、親熊は一々にそれを背負つて穴の外へ運び出した。

自分ひとりが取り残されたら、いよいよ餓死することと観念していると、仔熊を残らず運び終つた後に、親熊はまた引つ返して来て、人の前に坐つた。彼はその意を覺つて、その足に抱きつくつと、熊は彼をかかえたままで穴の外へ跳り出した。こうして、彼は無事に生き還つたのである。

烏龍

会稽かいけいの句章こうしようの民、張然ちやうぜんという男は都の夫役ぶやくに徴めされて、年を経るまで帰ることが出来なかつた。留守は若い妻と一人の僕しもべばかりで、かれらはいつか密通した。

張は都にあるあいだに一匹の狗いぬを飼つた。それは甚だすこやかな狗であるので、張は烏龍うりゅうと名づけて愛育しているうちに、いったん帰郷することとなつたので、彼は烏龍を伴つて歸つた。

夫が突然に帰つて来たので、妻と僕は相談の末に彼を亡き者にしようと思つた。妻は飯の支度をして、夫と共に箸をとろうとする時、俄かに形をあらためて言った。

「これが一生のお別れです。あなたも機嫌よく箸をおとりなさい」

おかしなことを言うと思つと、部屋の入口には僕が刀を帯びて、弓に矢をつがえて立つていた。彼は主人の食事の終るのを待つていたのである。さてはと覺つたが、もうどうすることも出来ないで、張はただ泣くばかりであつた。烏龍はその時も主人のそばに付いていたので、張は皿のなかの肉をとつて狗にあたえた。

「わたしはここで殺されるのだ。お前は救つてくれるか」

烏龍はその肉を啖くわないで、眼を据え、くちびるを舐ねぶりながら、仇の僕を睨みつめていたのである。張もその意を覺つて、やや安心していると、僕は待ちかねて早く食え食えと主人に迫るので、張は奮然決心して、わが膝を叩きながら大いに叫んだ。

「烏龍、やつつけろ」

狗は声に応じて飛びかかつて僕に咬みついた。それが飛鳥のような疾はやさであるので、彼は思わず得物を取り落して地に倒れた。張はその刀を奪つて、直ちに不義の僕を斬り殺した。妻は梟の役所へ引き渡されて、法のごとくに行なわれた。

錢塘せんとうの杜とという人が船に乗って行つた。時は雪の降りしきる夕暮れである。白い

着物をきた一人の若い女が岸の上を来かかったので、杜は船中から声をかけた。

「姐ねえさん。雪のふるのにお困りだろう。こつちの船へおいでなさい」

女も立ち停まつてそれに答えた。たがいに何か冗談を言い合つた末に、杜は女をわが船へ乗せてゆくと、やがて女は一羽の白鷺しらさぎとなつて雪のなかを飛び去つたので、杜は俄かにぞつとした。それから間もなく、彼は病んで死んだ。

蜜蜂

宋の元嘉げんか元年に、建安郡けんあんの山賊百余人が郡内へ襲つて来て、民家の財産や女たちを掠奪した。

その挙げ句に、かれらは或る寺へも乱入して財宝を掠め取ろうとした。この寺ではかねて供養に用いる諸道具を別室おきに蔵めてあつたので、賊はその室へやの戸を打ち毀こわして踏み込むと、忽ちに法衣ころもを入れてある革籠かわごのなかから幾万匹の蜜蜂が飛び出した。その幾万匹が一度に群がって賊を螫さしたので、かれらも狼狽した。ある者は体じゅうを螫され、ある者は眼を突きつぶされ、初めに掠奪した獲物をもみな打ち捨

て、転げまわつて逃げ去つた。

犬妖

林慮山りんりよざんの下に一つの亭がある。ここを通つて、そこに宿る者はみな病死するといふことになつてゐる。あるとき十余人の男おんなが入りまじつて博奕ばくちをしているのを見た者があつて、かれらは白や黄の着物をきていたと伝えられた。

郵伯夷しゅうはくいという男がそこに宿つて、燭しよくを照らして経きやうを讀んでゐると、夜なかに十余人があつまつて来て、彼と列ならんで坐を占めたが、やがて博奕の勝負をはじめたので、郵はひそかに燭をさし付けて窺うと、かれらの顔はみな犬であつた。そこで、燭を執つて起たちあがる時、かれは粗相そそうの振りをして、燭の火をかれらの着物にこすり付けると、着物の焦げるのがあたかも毛を燃やしたように匂つたので、もう疑うまでもないと思つた。

かれは懐ろ刀をぬき出して、やにわにその一人を突き刺すと、初めは人のような叫びを揚げたが、やがて倒れて犬の姿になつた。それを見て、他の者どもはみな逃げ去つた。

干宝の父

東晋の干宝かんぼうは字を令升あぎなれいしようといい、その祖先は新蔡しんさいの人である。かれの父の瑩けいという人に一人の愛妾あいせつがあつたが、母は非常に嫉妬しどぶかい婦人で、父が死んで埋葬する時に、ひそかにその妾をも墓のなかへ押し落して、生きながらに埋めてしまった。当時、干宝もその兄もみな幼年であつたので、そんな秘密をいつさい知らなかつたのである。

それから十年の後に、母も死んだ。その死体を合葬するために父の墓をひらくと、かの妾が父の棺の上に俯伏しているのを発見した。衣服も生きている時の姿と変わらず、身内もすこしく温かで、息も微かにかよっているらしい。驚き怪しんで輿こしにかき乗せ、自宅へ連れ戻つて介抱すると、五、六日の後にまったく蘇生した。

妾の話によると、その十年のあいだ、死んだ父が常に飲み食いの物を運んでくれた。そうして、生きている時と同じように、彼女と一緒に寝起きをしていたのみか、自宅に吉凶のことある毎ごとに、一々彼女に話して聞かせたというのである。あまりに不思議なことであるので、干宝兄弟は試みに彼女に聞いただしてみると、果たして彼女は父が死後の出来事をみなよく知っていて、その言うところがすべて事実と符合するのであつた。彼女はその後幾年を無事に送つて、今度はほんとうに死んだ。

干宝は『搜神記』の著者である。彼が天地のあいだに幽怪神秘のことあるを信じて、その述作に志すようになったのは、少年時代におけるこの実験に因つたのであると伝えられている。

大蛟

安城平都あんじょうへいと県の尹氏いんしの宅は郡の東十里の日黄村じつじやうにあつて、そこに小作人こさくじんも住んでいた。

元嘉げんか二十三年六月のことである。ことし十三になる尹氏の子供が、小作の小屋の番をしていると、一人の男が来た。男は年ごろ二十はたちぐらいで、白い馬に騎のつて繖かさをささせていた。ほかに従者四人、みな黄衣を着て東の方から来たが、このの門前に立つて尹氏の子供を呼び出し、暫く休息させてくれと言つた。承知して通すと、男は庭へはいつて床几しょうぎに腰をおろした。従者の一人が繖かさをさしかけていた。見ると、この人たちの着物には縫い目がなく、鱗うろこのような五色の斑ふがあつて、毛がなかつた。やがて雨を催して来ると、男は馬に騎のつた。

「あしたまた来ます」と、彼は子供を見かえつて言つた。その去るところを見ると、この一行は西へむかい、空を踏んで次第に高く昇つて行つた。暫くすると、雲が四

方から集まつて白昼も闇のようになった。

その翌日、俄かに大水が出て、山も丘も谷もみなひたされ、尹の小作小屋もまさに漂い去ろうとした。このとき長さ三丈とも見える大きい蚊みずちがあらわれて、身をめぐらして此の家を護つた。

白水素女

晋あんでいの安帝あんていのとき、候官こうかんの謝端しゃたんは幼い頃に父母をうしない、別に親類もないので、となりの人に養育されて成長した。

謝端はやがて十七、八歳になったが、努つとめて恭謹の徳を守つて、決して非法の事をしなかつた。初めて家を持つた時には、いまだ定まる妻がないので、となりの人も気の毒に思つて、然るべき妻を探してやろうと心がけていたが、相当の者も見付からなかつた。

彼は早く起き、遅く寝て、耕作に怠りなく働いていると、あるとき村内で大きい法螺貝ほらがいを見つけた。三升入りの壺ほどの大きい物である。めずらしいと思つて持ち帰つて、それを甕かめのなかに入れて置いた。その後、彼はいつもの如くに早く出て、夕過ぎに帰つてみると、留守のあいだに飯や湯の支度がすっかり出来ているのであ

る。おそらく隣りの人の親切であろうと、数日の後に礼を言いに行くと、となりの人は答えた。

「わたしは何もしてあげた覚えはない。おまえはなんで礼をいうのだ」

謝端にも判らなくなつた。しかも一度や二度のことではないので、彼はさらに聞きただすと、隣りの人はまた笑つた。

「おまえはもう女房をもらつて、家のなかに隠してあるではないか。自分の女房に煮焚きをさせて置きながら、わたしにかれこれ言うことがあるものか」

彼は黙つて考えたが、何分にも理屈が呑み込めなかつた。次の日は早朝から家を出て、また引返して籬の外から窺つてみると、一人の少女が甕の中から出て、竈の下に火を焚きはじめた。彼は直ぐに家へはいつて甕のなかをあらためると、かの法螺貝は見えなくて、竈の下の女を見るばかりであつた。

「おまえさんはどこから来て、焚き物をしていなさるのだ」と、彼は訊いた。

女は大いに慌てたが、今さら甕のなかへ帰ろうにも帰られないので、正直に答えた。

「わたしは天漢の白水素女です。天帝はあなたが早く孤児になつて、しかも恭謹の徳を守っているのをあわれんで、仮りにわたしに命じて、家を守り、煮焚きのわざを勤めさせていたのです。十年のうちにはあなたを富ませ、相当の妻を得るよう

して、わたしは帰るつもりであつたのですが、あなたはひそかに窺つてわたしの形を見付けてしまいました。もうこうなつては此処にとどまることは出来ません。あなたはこの後も耕し、漁りの業をして、世を渡るようになさるがよろしい。この法螺貝を残して行きますから、これに米穀をたくわえて置けば、いつでも乏しくなるような事はありません」

それと知つて、彼はしきりにとどまることを願つたが、女は肯かなかつた。俄かに風雨が起つて、彼女は姿をかくした。その後、彼は神座をしつらえて、祭祀を怠らなかつたが、その生活はすこぶる豊かで、ただ大いに富むというほどでないだけであつた。土地の人の世話で妻を迎え、後に仕えて令長となつた。

今の素女祠がその遺跡である。

千年の鶴

丁令威は遼東の人で、仙術を靈虚山に学んだが、後に鶴に化して遼東へ歸つて来て、城門の柱に止まつた。ある若者が弓をひいて射ようとすると、鶴は飛びあがつて空中を舞いながら言つた。

「鳥あり、鳥あり、丁令威。家を去る千年、今始めて帰る。城廓故の如くにして、人

民非なり。なんぞ仙を学ばざるか、塚纍々たり」

遂に大空高く飛び去った。今でも遼東の若者らは、自分たちの先代に仙人となつた者があると言い伝えているが、それが丁令威という人であることを知らない。

箏笛浦

廬江の箏笛浦には大きい船がくつがえつて水底に沈んでいる。これは魏王曹操の船であると伝えられている。

ある時、漁師が夜中に船を繋いでいると、そのあたりに笛や歌の音がきこえて、香の匂いが漂っていた。漁師が眠りに就くと、なにびとか来て注意した。

「官船に近づいてはならぬぞ」

おどろいて眼をさまして、漁師はわが船を他の場所へ移した。沈んでいる船は幾人の歌妓を載せて来て、ここの浦で顛覆したのであるという。

凶宅

宋の襄城の李頤、字は景真、後に湘東の太守になった人であるが、その父は妖邪

を信じない性質であつた。近所に一軒の凶宅があつて、住む者はかならず死ぬと言
い伝えられているのを、父は買い取つて住んでいたが、多年無事で子孫繁昌した。

そのうちに、父は県知事に昇つて移転することになつたので、内外の親戚らを招
いて留別りゆうべつの宴を開いた。その宴席で父は言つた。

「およそ天下に吉だとか凶だとかいう事があるだろうか。この家もむかしから凶宅
だといわれていたが、わたしが多年住んでいるうちに何事もなく、家はますます繁
昌して今度も榮転することになつた。鬼などというものが一体どこに居るのだ。こ
の家も凶宅どころか、今後は吉宅となるだろう。誰でも勝手にお住みなさい」

そう言い終つて、彼は起つて廁かわやへゆくと、その壁に席むしろを巻いたような物が見えた。
高さ五尺ばかりで、白い。彼は引つ返して刀を取つて来て、その白い物を真つ二つ
に切ると、それが分かれて二つの人になつた。さらに横なぐりに切り払うと、今度
は四人になつた。その四人が父の刀を奪い取つて、その場で彼を斬り殺したばかり
か、座敷へ乱入してその子弟を片端から斬り殺した。

李姓の者はみな殺されて、他姓の者は無事にまぬかれた。

そのとき李頤だけはまだ幼少で、その席に居合わせなかつたので、変事の起つた
のを知ると共に、乳母が抱えて裏門から逃げ出して、他家に隠れて幸いに命を全う
した。

蛟を生む

長沙ちやうつさの人とばかりで、その姓名を忘れたが、家は江辺に住んでいた。その娘が岸へ出て衣きものを濯すすいでいると、なんだか身内に異状があるように感じたが、後には馴れて気にもかけなかった。

娘はいつか懐妊して、三つの生き物を生み落したが、それは小鱈こいわしのような物であった。それでも自分の生んだ物であるので、娘は憐れみいつくしんで、かれらを行水ぎやうすいの盥たらいのなかに養つて置くと、三月ほどの後にだんだん大きくなって、それが蛟みすぢの子であることが判つた。蛟は龍りゆうのたぐいである。かれらにはそれぞれの字あざなをあたえて、大を当洪とうかうといい、次を破阻はそといい、次を撲岸ぼくがんと呼んだ。

そのうちに暴雨出水と共に、三つの蛟はみな行くえを晦くろましたが、その後も雨が降りそうな日には、かれらが何処からか姿を見せた。娘も子供らの来きそうなことを知つて、岸辺へ出て眺めてみると、蛟もまた頭かしらをあげて母をながめて去つた。

年を経て、その娘は死んだ。三つの蛟は又あらわれて母の墓所に赴こき、幾日も号哭ごうこくして去つた。その哭なく声は狗いぬのようであつた。

秘術

錢塘せんどうの杜子恭としきようは秘術を知っていた。かつて或る人から瓜きを割く刀を借りたので、その持ち主が返してくれと催促すると、彼は答えた。

「すぐにお返し申します」

やがて其の人が嘉興かこうまで行くと、一尾の魚が船中に飛び込んだ。その腹を割くと、かの刀があらわれた。

木像の弓矢

孫恩そんおんが乱を起したときに、呉興ごこうの地方は大いに乱れた。なんのためか、ひとりの男が蒋侯しょうこうの廟びように突入した。蒋子文しょうしぶんは広陵こうりようの人で、三国の呉ごの始めから、神としてここに祀まつられているのである。

蒋侯の木像は弓矢をたずさえていたが、その弓を絞ひつて飄ひようと射ると、男は矢にあたって死んだ。往來の者も、廟を守る者も、皆それを目撃したという。

酉陽雜俎（唐）

第三の男は語る。

「唐代は詩文ともに最も隆昌をきわめ、支那においては空前絶後ともいうべき時代でありますから、小説伝奇その他の文学に関する有名著作も甚だ多く、なにを紹介してよろしいか頗る選択に苦しむのであります。その中でわたくしは先ず『西陽雜俎』のお話をするに致します。これも『搜神記』と同様に、早くわが国に渡来して居りますので、その翻案がわが文学の上にもしばしばあらわれて居ります。

この作者は唐の段成式であります。彼は臨淄の人で、字を柯古といい、父の文昌が校書郎を勤めていた関係で、若いときから奇編秘籍を多く読破して、博覧のきこえの高い人物でありました。官は太常外卿に至りまして、その著作は『西陽雜俎』（正編二十卷、続集十卷）をもって知られて居ります」

古塚の怪異

唐の判官を勤めていた李邕という人は、高陵に庄園を持っていたが、その庄に寄留する一人の客がこういうことを懺悔した。

「わたくしはこの庄に足を留めてから二、三年になりますが、実はひそかに盗賊を働いていたのでございます」

李邕もおどろいた。

「いや、飛んでもない男だ。今も相変らずそんな悪事を働いているのか」

「もう唯今は決して致しません。それだから正直に申し上げたのでございます。御承知の通り、大抵の盜賊は墓あらしをやります。わたくしもその墓荒しを思い立つて、大勢の徒党を連れて、さきごろこの近所の古塚をあばきに出かけました。塚はこの庄から十里（六丁一里）ほどの西に在つて、非常に高く、大きく築かれているのを見ると、よほど由緒のあるものに相違ありません。松林をはいって二百歩ほども進んでゆくと、その塚の前に出ました。生い茂った草のなかに大きい碑が倒れていましたが、その碑はもう磨滅まめつしていて、なんと彫つてあるのか判りませんでした。ともかくも五、六十丈ほど深く掘つて行くと、一つの石門がありまして、その周囲まわりは鉄汁をもつて嚴重に鑄固めてありました」

「それをどうして開いた」

「人間の糞汁ふんじゆうを熱く沸かして、幾日も根よく沃そそぎかけていると、自然に鉄が溶けるのです。そうして、ようようのことで、その石門をあけると驚きました。内からは雨のように箭やを射出して来て、たちまち五、六人を射倒されたので、みな恐れて引つ返そうとしましたが、わたくしは肯ききませんでした。ほかに機関かたくりがあるわけではな

いから、あらん限りの箭を射尽くさせてしまえば大丈夫だというので、こちらから

も負けずに石を投げ込みました。内と外とで箭と石との戦いが暫く続いているうちに果たして敵の矢種は尽きてしまいました。

それから松明をつけて進み入ると、行く手に又もや第二の門があつて、それは訳なく明きました。が、門の内には木で作った人が何十人も控えていて、それが一度に剣をふるつたから堪まりません。さきに立つていた五、六人はここで又斬り倒されました。こちらでも棒をもつてむやみに叩き立てて、その剣をみな撃ち落した上で、あたりを見まわすと、四方の壁にも衛兵の像が描いてあつて、南の壁の前に大きい漆塗りの棺が鉄の鎖にかかつていました。棺の下には金銀や宝玉のたぐいが山のように積んである。さあ見付けたぞとは言つたが、前に懲りているので、迂闊に近寄る者もなく、たがいに顔をみあわせていると、俄かに棺の両角から颯々という風が吹き出して、沙を激しく吹きつけて来ました。あつと言うち、風も沙もますます激しくなつて、眼口を明けていられないどころか、地に積む沙が膝を埋めるほどに深くなつて来たので、みな恐れて我れ勝ちに逃げ出しましたが、逃げおくれた一人は又もや沙のなかへ生け埋めにされました。

外へ逃げ出して見かえると、門は自然に閉じて、再びはいることは出来なくなつています。たといはいることが出来ても、とても二度と行く気にはなれないので、誰も彼も早々に引き揚げて来ました。その以来、わたくしどもは誓つて墓荒しをし

ないことに決めました。あの時のことを考えると、今でも怖ろしくなりません」この話はこれで終りであるが、そのほかにも墓を発あほいて種々の不思議に出逢った話はたくさんに言い伝えられている。

近い頃、幾人の盜賊が蜀しよくの玄徳げんとくの墓をあばきにはいると、内には二人の男が燈火あかりの下で碁を打っていて、ほかに侍衛の軍人が十余人も武器を持って控えていたので、盜賊どももおどろいて謝まり閉口すると、碁にむかっていた一人が見かえつて、おまえ達は酒をのむかと言ひ、めいめいに一杯の酒を飲ませた上に、玉の腰帶ひとすじずつを呉れたので、盜賊どもは喜んで出て来ると、かれらの口は漆を含んだように閉じられてしまった。帶と思つたのは巨おおきい蛇であつた。

王申の禍

唐の貞元ていげん年間のことである。望苑ぼうえん駅の西に王申おうしんという百姓が住んでいた。

彼は奇特きせきの男で、路ちばたにたくさんにれの榆いの木を栽うえて、日蔭になるような林を作り、そこに幾棟の茅屋かやを設けて、夏の日に往来する人びとを休ませて水をのませた。役人が通行すれば、別に茶をすすめた。こうしているうちに、ある日ひとりの若い女が来て水を求めた。女は碧あおい肌着に白い着物をきていた。

「わたくしはここから十余里の南に住んでいた者ですが、夫に死に別れて子供はなし、これから馬嵬ばかい駅にいる親類を頼って行こうと思つていたのでございます」と、女は話した。その物言いもはきはきしていて、その举止とりなも愛らしかった。

王申も氣の毒に思つて、水を与えるばかりでなく、内へ呼び入れて、飯をも食わせてやつて、きようはもう晩まいから泊まつてゆけと勧めると、女はよろこんで泊めて貰うことになった。その明るる日、ゆうべのお礼に何かの御用を致しましょうというので、王の妻が試しに着物を縫わせると、針の運びの早いのは勿論、その手ぎわが実に人間わざとは思われぬほどに精巧きわを極めていたので、王申も驚かされた。殊に王の妻は一層その女を愛するようになって、しまいには冗談のようにこんな事を言い出した。

「聞けばお前さんは近しい親類もないということだが、いつそ私の家のお嫁さんになつておくれでないかね」

王の家には、ことし十三になる息子がある。——十三の悴に嫁を迎えるのは珍しくない。——両親も内々相当の娘をこころがけていたのであつた。それを聞いて、女は笑つて答えた。

「仰しやる通り、わたくしは頼りの少ない身の上でございますから、もしお嫁さんにして下されば、この上もない仕合わせでございます」

相談はすぐに決まって、王の夫婦も喜んだ。善は急げというので、その日のうちに新しい嫁入り衣裳を買い調べて、その女を息子の嫁にしまったのである。その日は暮れても暑かったが、この頃ここらには盗賊が徘徊するので、戸締りを厳重にして寝ると、夜なかになつて王の妻は不思議の夢をみた。息子が散らし髪で母の枕元にあらわれて、泣いて訴えるのである。

「わたしはもう食い殺されてしまいます」

妻はおどろいて眼をさまして、夫の王をよび起した。

「今こんな忌な夢をみたから、息子の部屋へ行つて様子をみて来ましようか」

「よせ、よせ」と、王は寝ぼけ声で叱った。「新夫婦の寢床をのぞきに行く奴があるものか。おまえはいい嫁を貰ったので、嬉しまぎれにそんな途方もない夢をみたのだ」

叱られて、妻もそのままに眠つたが、やがて又も同じ夢をみたので、もう我慢が出来なくなつた。再び夫をよび起して、無理に息子の寢間へ連れて行つて、外から試みに声をかけたが、内にはなんの返事もない。戸を叩いてもやはり黙っているの、王も不安を感じて来て、戸を明けようとすると堅くとぎされている。思い切つて、戸をこじ明けてはいつてみると、部屋のうちには怖ろしい物の影が見えた。

それはおそらく鬼とか夜叉とかいふのであろう。からだは藍あゐのような色をして、

その眼は円く晃ひらつていた。その齒は鑿のみのように見えた。その異形いぎようの怪物はおどろく夫婦を衝つき退けて、風のように表のかたへ立ち去つてしまったので、かれらはいよいよおびやかされた。して、息子はと見ると、唯わずかに頭の骨と髪の毛とを残しているのみで、その形はなかつた。

画中の人

これも貞元の末年のことである。開州かいしゅうの軍將せんじゆうに冉從長らんじゆうちやうという人があつて、財を輕かろんじて士を好むというふうがあるので、儒生じゆせいや道士のたぐいは多くその門に集まつて来たが、そのなかに采さいという画家もまじつていた。

その采さいがあるとき竹林ちくりんの七賢人しちけんじんの図をかいて、それが甚だ巧みに出来たので、観る者いずれも感嘆してゐると、一坐の客のうちかくけんに郭萱かくけんといい柳城りゆうじやうという二人の秀才があつて、たがいに平生けいせいから軋きり合つていたが、柳城はその図をひとめ見て、あざ笑いながら主人の冉從長に言った。

「この画は人間の体勢に巧みであるが、人間の意趣いしゆというものが本当に現われていない。わたしはこの画に対してなんらの筆を着けずに、一層の精彩を加えてお見せ申そうと思うが、いかがでしょう」

再はすこし驚いた。

「あなたにどんな芸があるか知らないが、なんらの筆を加えずに、この画の精彩を添えるというようなことが出来ますか」

「それは出来ます」と、柳は平気で答えた。「わたしはこの画のなかへはいつて直すのです」

それを聞いて、郭萱も笑い出した。

「子供だましのような事を言つてはいけない。なんにも筆を入れないで、あの画を直すことが出来る筈がないではないか」

「いや、それが出来るのだ」

「出来るものか」

「そんなら賭けをするか」と、柳は言った。

「むむ、五千の^{ぜい}銭を賭ける」

郭は銭を賭けることになった。主人の再も賭けた。すると、柳は壁にかけてある画の前に立ったかと思うと、忽ちに身を跳おとらせて消えてしまったので、一坐の者はみな驚いて、ここかそこかと探し廻つたが、どこにもその姿はみえなかつた。やがて、画の中から柳の声が聞えた。

「おい、郭君。まだおれの言うことを信じないのか」

一坐は又おどろいて眺めていると、柳は再び姿をあらわして、画の上から降りて来た。そうして、七賢人のうちの阮籍げんせきを指さした。

「みんなが待ち遠しいだろうと思いましたが、唯あれだけを繕つくろって置きました」人びとは眼を定めてよく視ると、なるほど阮籍だけは以前の図と違って、その口は仰いでうそぶくがごとくに見えたので、いずれもいよいよ驚嘆した。冉も郭も彼が道士の道に精通していることを初めて覚さとつた。

こんな噂が世間に拡まつては、身の禍いになると思つたらしい。それから五、六日の後に、柳はそこを立ち去つて行くえを晦くろました。

北斗七星の秘密

唐の玄宗皇帝げんぞうの代に、一行いっせうという高僧があつて、深く皇帝の信任を得ていた。

一行は幼いとき甚だ貧窮であつて、隣家の王おうという老婆から常に救われていた。彼は立身の後もその恩を忘れず、なにか王婆に酬むかいたいと思つていて、あるとき王婆の息子が人殺しの罪に問われることになつたので、母は一行のところへ駆け付けて、泣いて我が子の救いを求めたが、彼は一応ことわつた。

「わたしは決して昔の恩を忘れはしない。もし金や帛きぬが欲しいというのならば、ど

んなことでも肯きいてあげる。しかし明君が世を治めている今の時代に、人殺しの罪を赦ゆるすなどということは出来るものでない。たとい私から哀訴したところで、上かみでお取りあげにならないに決まっているから、こればかりは私の力にも及ばないと諦めてもらいたい」

それを聞いて、王婆は手を戟ほこにして罵った。

「なにかの役にも立とうかと思えばこそ、久しくお前の世話をしてやったのだ。まさかの時にそんな挨拶を聞くくらいなら、お前なんぞに用はないのだ」

彼女は怒って立ち去ろうとするのを、一行は追いかけて、頻しきりによんどころない事情を説明して聞かせたが、王婆は見返りもせずに出て行ってしまった。

「どうも困ったな」

一行は思案の末に何事かを考え付いた。都の渾天寺こんてんじは今や工事中で、役夫えきふが数百人もあつまっている。その一室を空明くわうめいきにさせて、まん中に大瓶かめを据えた。それから又、多年召仕しよしっている僕しもえ二人を呼んで、大きい布囊ぬのぶくろを授けてささやいた。

「町の角に、住む人もない荒園あわれどわがある。おまえ達はそのへ忍び込んで、午うまの刻こく（午前十一時―午後一時）から夕方まで待つていろ。そうすると七つの物がいって来る。それを残らずこの囊に入れて来い。数は七つだぞ。一つ不足しても勘弁しないからそう思え」

僕どもは指図通りにして待つていると、果たして酉の刻（午後五時―七時）を過ぎる頃に、荒園の草をふみわけて豕の群れがはいつてきたので、一々に囊をかぶせて捕えると、その数はあたかも七頭であった。持つて帰ると、一行は大いに喜んで、その豕をか瓶のなかに封じ込めて、木の蓋をして、上に大きい梵字を書いた。それが何のまじないであるかは、誰にもわからなかった。

あくる朝になると、宮中から急使が来て、一行は皇帝の前に召出された。

「不思議のことがある」と、玄宗は言った。「太史（史官）の奏上によると、昨夜は北斗七星が光りを隠したということである。それは何の祥であろう。師にその禍いを攘う術があるか」

「北斗が見えぬとは容易ならぬことでござります」と、一行は言った。「御用心なさらねばなりません。匹夫匹婦もその所を得ざれば、夏に霜を降らすこともあり、大いに早することもござります。釈門の教えとしては、いつさいの善慈心をもって、いつさいの魔を降すのほかは、ござりませぬ」

彼は天下に大赦の令をくだすことを勧め、皇帝もそれにしたがった。その晩に、太史がまた奏上した。

「北斗星が今夜は一つ現われました」

それから毎晩一つずつの星が殖えて、七日の後には七星が今までの通りに光り輝

いた。大赦の令によって王婆の息子が救われたのは言うまでもない。

駅舎の一夜

孟不疑もうふぎという挙人きよじん（進士しんしの試験に應ずる資格のある者）があつた。昭義しやうぎの地方に旅寝して、ある夜ある駅に泊まつて、まさに足をすすごうとしてるところへ、淄青しせいの張ちやうという役人が数十人の供を連れて、おなじ旅舎へ乗り込んで来た。相手が高官とみて、孟は挨拶に出たが、張は酒を飲んでいて顧りみないので、孟はその倨傲きよじやうを憤りながら、自分は西の部屋へ退いた。

張は酔つた勢いで、しきりに威張り散らしていた。大きい声で駅の役人を呼び付けて、焼餅しやうべいを持って来いと呶鳴つた。どうも横暴な奴だと、孟はいよいよ不快を感じながら、ひそかにその様子をうかがっていると、暫くして注文の焼餅を運んで来たので、孟はまた覗いてみると、その焼餅を盛つた盤ばんにしたがつて、一つの黒い物が入り込んで来た。それは猪ししのようなものであるらしく、燈火あかりの下へ来てその影は消えた。張は勿論、ほかの者もそれに気が注つかなかつたらしいが、孟は俄かに恐怖をおぼえた。

「あれは何だろう」

狐駅のゆうべにこの怪を見て、孟はどうしても眠ることが出来なかつたが、張は酔つて高軒で寝てしまった。供の者は遠い部屋に退いて、張の寝間は彼ひとりであつた。その夜も三更さんこう（午後十一時―午前一時）に及ぶころおいに、孟もさすがに疲れてうとうとと眠つたかと思つと、唯ならぬ物音にたちまち驚き醒めた。一人の黒い衣きものを着た男が張と取つ組み合つてゐるのである。やがて組んだままで東の部屋へ転げ込んで、たがいに撲り合う拳こぶしの音が杵きねのようにきこえた。孟は息を殺してその成り行きをうかがつてゐると、暫くして張は散らし髪かみの両肌ぬぎで出て来て、そのまま自分の寢床にあがつて、さも疲れたように再び高軒で寝てしまった。

五更ごこう（午前三時―五時）に至つて、張はまた起きた。僕しもべを呼んで燈火をつけさせ、髪かみをくしけずり、衣服をととのえて、改めて同宿の孟に挨拶した。

「昨夜は酔つていたので、あなたのことをちつとも知らず、甚だ失礼をいたしました」

それから食事を言い付けて、孟と一緒に仲よく箸をとつた。そのあいだに、彼は小声で言った。

「いや、まだほかにもお詫びを致すことがある。昨夜は甚だお恥かしいところを御覧ごらんに入れました。どうぞ幾重にも御内分にねがいます」

相手があやまるように頼むので、孟はその上に押しして聞くのを遠慮して、ただ、

はいはいとうなずいていると、張は自分も早く出発する筈であるが、あなたもお構いなくお先へお発ち下さいと言った。別れるときに、張は靴の中から金一錠ていを探り出して孟に贈って、ゆうべのことは必ず他言して下さるなと念を押した。

何がなんだか判らないが、孟は張に別れて早々にここを出発した。まだ明け切らない路を急いで、およそ五、六里も行ったかと思うと、人殺しの賊を捕えるといって、役人どもが立ち騒いでいるのを見た。その子細しさいを聞きただすと、淄青の評事の役を勤める張という人が殺されたというのである。孟はおどろいて更に詳しく聞き合わせる、賊に殺されたと言っているけれども、張が実際の死にざまは頗る奇怪なものであった。

孟がひと足さきに出たあとで、張の供の者どもは、出発の用意を整えて、主人と共に駅舎を出た。あかつきはまだ暗い。途中で気がついてみると、馬上の主人はいつか行くえ不明になって、馬ばかり残っているのである。さあ大騒ぎになって、再び駅舎へ引返して詮議すると、西の部屋に白骨が見いだされた。肉もない、血も流れていない。ただそのそばに残っていた靴の一足によって、それが張の遺骨であることを知り得たに過ぎなかった。

こうしてみると、それが普通の賊の仕業しわざでないことは判り切っていた。駅の役人も役目の表として賊を捕えるなどと騒ぎ立てているものの、孟にむかつて窃ひそかにこ

んなことを洩らした。

「この駅の宿舎には昔から凶いことがしばしばあるのですが、その妖怪の正体は今にわかりません」

小人

唐の太和の末年である。松滋県の南にひとりの士があつて、親戚の別荘を借りて住んでいた。初めてそこへ着いた晩に、彼は士人の常として、夜の二更（午後九時—十一時）に及ぶ頃まで燈火のもとに書を読んでいると、たちまち一人の小さい人間が門から進み入つて来た。

人間といつても、かれは極めて小さく、身の丈わずかに半寸に過ぎないのである。それでも葛の衣を着て、杖を持って、悠然とはいり込んで来て、大きい蠅の鳴くような声で言った。

「きよう来たばかりで、ここには主人もなく、あなた一人でお寂しいであろうな」
 こんな不思議な人間が眼の前にあらわれて来て、その士は頗る胆力があるので、素知らぬ顔をして書物を読みつづけていると、かの人間は機嫌を損じた。

「お前はなんだ。主人と客の礼儀をわきまえないのか」

士はやはり相手にならないので、かれは机の上に登つて来て、士の読んでいる書を覗いたりして、しきりに何か悪口を言った。それでも士は冷然と構えているので、かれも燥^じれてきたとみえて、だんだんに乱暴をはじめて、そこにある硯^{すずり}を書物の上に引っくり返した。士もさすがにうるさくなつたので、太い筆をとつてなぐり付けると、彼は地に墜^おちてふた声三声叫んだかと思うと、たちまちにその姿は消えた。暫くして、さらに四、五人の女があらわれた。老いたのもあれば、若いのもあり、皆そのたけは一寸ぐらゐであつたが、柄にも似合わない大きい声をふり立てて、士に迫つて来た。

「あなたが独りで勉強しているのを見て、殿さまが若殿をよこして、学問の奥義^{おうぎ}を講釈^{こうしゃく}させて上げようと思つたのです。それが判らないで、あなたは乱暴なことをして、若殿にお怪我をさせるとは何のことです。今にそのお咎^{とが}めを蒙^{こうむ}るから、覚えておいでなさい」

言うかと思う間もなく、大勢^{おおぜい}の小さい人間が蟻^{あり}のように群集してきて、机に登り、床にのぼつて、滅茶苦茶に彼をなぐつた。士もなんだか夢のような心持になつて、かれらを追い攘^{はら}うすべもなく、手足をなぐられるやら、噛まれるやら、さんざんの目に逢わされた。

「さあ、早く行け。さもないと貴様の眼をつぶすぞ」と、四、五人は彼の面^{かお}にのぼつ

て来たので、士はいよいよ閉口した。

もうこうなれば、かれらの命令に従うのほかはないので、士はかれらに導かれて門を出ると、堂の東に節使衙門せつしがもんのような小さい門がみえた。

「この化け物め。なんで人間にむかつて無礼を働くのだ」と、士は勇気を回復して叫んだが、やはり多勢たぜいにはかなわない。又もやかれらに噛まれて撲られて、士は再びぼんやりしているうちに、いつか其の小さい門の内へ追いまれてしまった。

見れば、正面に壮大な宮殿のようなものがあつて、殿上には衣冠の人が坐つている。階下には侍衛らしい者が、数千人も控えている。いずれも一寸あまりの小さい人間ばかりである。衣冠の人は士を叱つた。

「おれは貴様が独りでいるのを憐れんで、話し相手に子供を出してやると、飛んでもない怪我をさせた。重々じゅうじゅうふらち不埒ふらちな奴だ。その罪を糺ただして胴斬りにするから覚悟しろ」指図にしたがつて、数十人が刃やいばをぬき連れてむかつて来たので、士は大いに懼おそれた。彼は低頭して自分の罪を謝すと、相手の顔色も少しくやわらいだ。

「ほんとうに後悔したのならば、今度だけは特別をもつて赦ゆるしてやる。以後つづしめ」

士もほつとして送りだされると、いつか元の門外に立っていた。時はすでに五更で、部屋に戻ると、机の上には読書のともしびがまだ消え残っていた。

あくる日、かの怪しい奴らの来たらしい跡をさがしてみると、東の古い階段の下に、粟粒あわつぶほどの小さい穴があつて、その穴から守宮やもりが出這入りしているのを発見した。士はすぐに幾人の人夫を雇つて、その穴をほり返すと、深さ数丈のところにくさんの守宮が棲んでいて、その大きいものは色赤くして長さ一尺に達していた。それが恐らくかれらの王であるらしい。あたりの土は盛り上がつて、さながら宮殿のように見えた。

「こいつらの仕業だな」

士はことごとくかれらを焚やき殺した。その以来、別になんの怪しみもなかった。

怪物の口

臨湍寺りんたんじの僧智通ちつうは常に法華經ほけきょうをたずさえていた。彼は人跡稀じんせきまれる寒林に小院をかまえて、一心に經文誦誦とくじゆを怠らなかつた。

ある年、夜半にその院をめぐつて、彼の名を呼ぶ者があつた。

「智通、智通」

内ではなんの返事もしないと、外では夜のあけるまで呼びつづけていた。こういうことが三晩もやまないばかりか、その声が院内までひびき渡るので、智通も堪え

られなくなつて答えた。

「どうも騒々しいな。用があるなら遠慮なしにはいつてくれ」

やがてはいつて来た物がある。身のたけ六尺ばかりで、黒い衣きものをきて、青い面かおをしていた。かれは大きい目をみはつて、大きい息をついている。要するに、一種の怪物である。しかもかれは僧にむかつてまず尋常に合掌した。

「おまえは寒いか」と、智通は訊いた。「寒ければ、この火にあたれ」

怪物は無言で火にあたつていた。智通はそのままにして、法華經を読みつづけていると、夜も五更に至る頃、怪物は火に酔つたとみえて、大きい目を閉じ、大きい口をあいて、炉ろに倚よりかかつて高いびきで寝入つてしまった。智通はそれを観て、香をすくう匙さじをとつて、炉の火と灰を怪物の口へ浚よい込こむと、かれは驚き叫んで飛び起きて、門の外へ駆け出したが、物につまずき倒れるような音がきこえて、それぎり鎮しずまった。

夜があけてから、智通が表へ出てみると、かれがゆうべ倒れたらしい所に一片の木の皮が落ちていた。寺のうしろは山であるので、彼はその山へ登つてゆくと、数里(六丁一里)の奥に大きな青桐の木があつた。梢こずえはすでに枯れかかつて、その根のくぼみに新しく欠けたらしい所があるので、試みにかの木の皮をあててみると、あたかも貼り付けたように合つた。又その根の半分枯れたところに洞うづらがあつて、深さ六、

七寸、それが怪物の口であろう。ゆうべの灰と火がまだ消えもせずに残っていた。智通はその木を焚やいてしまった。

一つの杏

長白山ちやうはくざんの西に夫人の墓というのがある。なんびとの墓であるか判わからない。

魏ぎの孝昭帝こうしょうていのときに、令して汎ひろく天下の才俊を徴めすということになった。清河の崔羅什さいわじゆうという青年はまだ弱冠じやくかんながらもかねて才名があつたので、これも徴めされてゆく途中、日が暮れてこの墓のほつりを過ぎると、たちまちに朱門粉壁しゆもんふんぺきの楼台が眼のまえに現われた。一人の侍女らしい女が出て来て、お嬢さまがあなたにお目にかかりたいと言う。崔は馬を下りて付いてゆくと、二重の門を通りぬけたところに、また一人の女が控えていて、彼を案内した。

「何分にも旅姿をしているので、この上に奥深く通るのは余りに失礼でございませ」と、崔は一応辞退した。

「お嬢さまは侍中じちゆうの呉質ごしつというかたの娘御むすめで、平陵へいりやうの劉府君りゆうふくんの奥様ですが、府君はさきにおなくなりになったので、唯今さびしく暮らしておいでになります。決して御遠慮のないように」と、女はしいて崔を誘い入れた。

誘われて通ると、あるじの女は部屋の戸口に立つて迎えた。更にふたりの侍女が燭をとつていた。崔はもちろん歓待されて、かの女と膝をまじえて語ると、女はすこぶる才藻に富んでいて、風雅の談の尽くるを知らずという有様である。こんな所にこんな人が住んでいる筈はない、おそらく唯の人間ではあるまいと、崔は内心疑いながらも、その話がおもしろいのに心を惹かされて、さらに漢魏時代の歴史談に移ると、女の言うことは一々史実に符合しているので、崔はいよいよ驚かされた。

「あなたの御主人が劉氏と仰しやることは先刻うかがいましたが、失礼ながらお名前はなんと申されました」と、崔は訊いた。

「わたくしの夫は、劉孔才の次男で、名は瑤、字は仲璋と申しました」と、女は答えた。「さきごろ罪があつて遠方へ流されまして、それぎり戻つて参りません」

それから又しばらく話した後、崔は暇を告げて出ると、あるじの女は慇懃に送つて来た。

「これから十年の後にまたお目にかかります」

崔は形見として、玳瑁のかんざしを女に贈つた。女は玉の指輪を男に贈つた。門を出て、ふたたび馬にのつてゆくこと数十歩、見かえればかの楼台は跡なく消えて、そこには大きい塚が横たわつていたのであつた。こんなことになるかも知れないと、うすうす予期していたのではあるが、崔は今さら心持がよくないので、後に僧をた

のんで供養をして貰つて、かの指輪を布施物にささげた。

その後に変つたこともなく、崔は郡の役人として評判がよかつた。天統の末年に、彼は官命によつて、河の堤を築くことになつたが、その工事中、幕下ぼっかのものに昔話をして、彼は涙をながした。

「ことしは約束の十年目に相当する。どうしたらよからうか」

聴く者も答うるところを知らなかつた。工事がとどこおりなく終つて、ある日、崔は自分の園中おんぢゆうで杏の実を食っている時、俄かに思い出したように言つた。

「奥さん。もし私を嘘つきだと思わないならば、この杏を食わせないで下さい」
彼は一つの杏を食い尽くさないうちに、たちまち倒れて死んだ。

劍術

韋行規いこうきという人の話である。

韋が若いとき京西きやうせいに遊んで、日の暮れる頃にある宿場に着いた。それから更にゆく手を急きごうとすると、馭舎の前にはひとりせの老人が桶を作つていた。

「お客人、夜道の旅はおやめなさい。ここらには賊がどうございます」と、彼は韋にむかつて注意した。

「賊などは恐れな」と、韋は言った。「わたしも弓矢を取つては覚えがある」

老人に別れを告げて、彼は馬上で夜道を急いでゆくと、もう夜が更けたと思う頃に、草むらの奥から一人があらわれて、馬のあとを尾けて来るらしいので、韋は誰だと言つても返事をしない。さてこそ曲者と、彼は馬上から矢をつがえて切つて放すと、確かに手堪えはありながら、相手は平気で迫つて来るので、更に二の矢を射かけた。続いて三発、四発、いずれも手堪えはありながら、相手はちつとも怯まな。そのうちに、矢種は残らず射尽くしてしまつたので、彼も今更おそろしくなつて、馬を早めて逃げ出すと、やがて又、激しい風が吹き起り、雷もすさまじく鳴りはためいて来たので、韋は馬を飛び降りて大樹の下に逃げ込んだ。

見れば、空中には電光が飛び違つて、さながら鞠を撃つ杖のようである。それが次第に舞い下がつて、大樹の上にひらめきかかると、何物かが木の葉のようにならばらと降つて来た。木の葉ではなく板の札である。それが忽ちに地に積もつて、韋の膝を埋めるほどに高くなつたので、彼はいよいよ驚き恐れた。

「どうぞ助けてください」

彼は弓矢をなげ捨てて、空にむかつて拝すること数十回に及ぶと、電光はようやく遠ざかつて、風も雷もまたやんだ。まずほつとして見まわすと、大樹の枝も幹も折れているばかりか、自分の馬も荷物もどこへか消え失せてしまつたのである。

こうなると、もう進んでゆく勇氣はないので、早々にもと来た道を引返したが、今度は徒^{から}あるきであるから拂^{はか}どらず、元の宿まで帰り着いた頃には夜が明けて、かの老人は店さきで桶の箍^{たが}をはめていた。まさに尋常の人ではないと見て、韋は丁寧^{ていねい}に拝して昨夜の無礼を詫^{わづ}びると、老人は笑いながら言った。

「弓矢を恃^{たも}むのはお止しなさい。弓矢は劍術にかないませんよ」

彼は韋を案内して、宿舎のうしろへ連れてゆくと、そこには荷物を乗せた馬が繫いであつた。

「これはあなたの馬ですから、遠慮なしに牽^ひいておいでなさい。唯^{ただ}ちつとばかりあなたを試して見たのです。いや、もう一つお目にかける物がある」

老人はさらに桶の板一枚を出してみせると、ゆうべの矢はことごとくその板の上に立っていた。

刺青

都の市中に住む悪少年どもは、かれらの習いとして大抵は髪を切っている。そうして、膚^{はだ}には種々の刺青^{はりもの}をしている。諸軍隊の兵卒らもそれに加わつて乱暴をはたらき、蛇^{へび}をたずさえて酒家にあつまる者もあれば、羊脾^{ようひ}をとつて人を撃つ者もある

ので、京兆けいちゆう（京師の地方長官）をつとめる薛公せつこうが上に申し立ててかれらを処分することとなり、里長きせいちゆうに命じて三千人の部下を忍ばせ、見あたり次第に片端から引つ捕えて、ことごとく市いちに於おいて杖殺じゆうさつさせた。

そのなかに大寧坊たいねいぼうに住む張幹ちやうかんなる者は、左の腕に『生不怕京兆尹いきてけいちゆうのいんをおそれず』右の腕に『死不怕閻羅王してえんらおうをおそれず』と彫ほっていた。また、王力おうりきど奴なるものは、五千錢をついやして胸から腹へかけて一面に山水、邸宅、草木、鳥獸のたぐいを精細に彫らせていた。

かれらも無論に撃ち殺されたのである。その以来、市中で刺青をしている者どもは、みな争つてそれを焼き消してしまった。

また、元和の末年に李夷簡りいかんという人しやくが蜀の役人を勤めていたとき、蜀の町に住む趙高ちやうこうという男は喧嘩を商売のようにしている暴れ者あばで、それがために幾たびか獄屋に入れられたが、彼は背中一面に毘沙門天びしゃもんてんの像を彫ほっているので、獄吏もその尊像はばかを憚おそつて杖をあてることが出来ない。それを幸いにして、彼はますますあばれ歩くのである。

「不埒至極の奴だ。毘沙門でもなんでも容赦するな」

李は彼を引つくくらせて役所の前にひき据え、新たに作った筋金入りの杖で、その背中を三十回余も続けうちに撃ち据えさせた。それでも彼は死なないで無事に赦し還された。

これですすがに懲りるかと思いのほか、それから十日ほどの後、趙は肌ぬぎになつて役所へ呶鳴り込んで来た。

「ごらんなさい。あなた方のおかげで毘沙門天の御尊像が傷だらけになつてしまいました。その修繕をしますから、相当の御寄進をねがいます」

李が素直にその寄進に応じたかどうかは、伝わっていない。

朱髮児

嚴綬げんじゆが治めていた太原市たいげん中の出来事である。

町の小児しょうにらが河に泳いでいると、或る物が中流をながれ下つて来たので、かれらは争つてそれを拾い取ると、それは一つの瓦かめの瓶で、厚い帛きぬをもつて幾重いくえにも包んであつた。岸へ持つて来て打ち毀すと、瓶のなかからは身のたけ一尺ばかりの赤児あかごが跳り出したので、小児らはおどろき怪しんで追いまわすと、たちまち足もとに一陣の旋風が吹き起つて、かの赤児は地を距る数尺の空を踏みながら、再び水中へ飛び去ろうとした。

岸に居あわせた船頭がそれを怪物とみて、棹さおをとつて撃ち落とすと、赤児はそのまま死んでしまつたが、その髪は朱のように赤く、その眼は頭の上に付いていた。

じんめんそう
人面瘡

数十年前のことである。江東こうとうの或る商人あきんどの左の二の腕に不思議の腫物しゅもつが出来た。その腫物は人の面かおの通りであるが、別になんの苦痛もなかった。ある時たわむれに、その腫物の口中へ酒をそそぎ入れると、残らずそれを吸い込んで、腫物の面かおは、酔つたように赤くなつた。食い物をあたえようと、大抵の物はみな食つた。あまりに食ひ過ぎたときには、二の腕の肉が腹のようにふくれた。なんにも食わせない時には、その臂ひじがしびれて働かなかつた。

「試みにあらゆる薬や金石草木のたぐいを食わせてみる」と、ある名医が彼に教えた。

商人はその教えの通りに、あらゆる物を与えると、唯ひとつ貝母ばいぼという草に出逢つたときに、かの腫物は眉をよせ、口を閉じて、それを食おうとしなかつた。

「占めた。これが適薬だ」

彼は小さい葦よしの管くだで、腫物の口をこじ明けて、その管から貝母しほの搾しぼり汁をそそぎ込むと、数日の後に腫物は癒かせて癒つた。

油売

都の宣平坊せんへいぼうにながしという官人が住んでいた。彼が夜帰つて来て横町へはいると、油を売る者に出逢つた。

その油売りは大きい帽をかぶつて、驢馬ろまに油桶をのせていたが、官人のゆく先に立つたままで路を避けようとしないので、さき立ちの従者がその頭を一つ引っぱたくと、頭はたちまちころりと落ちた。そうして、路ばたにある大邸宅の門内にはいつてしまった。

官人は不思議に思つて、すぐにその跡を付けてゆくと、かれのすがたは門内の大きい槐えんじゆの下に消えた。いよいよ怪しんで、その邸の人びとも知らせた上で、試みにかの槐の下を五、六尺ほど掘つてみると、その根はもう枯れていて、その下に畳一枚ほどの大きい蝦蟆がまがうずくまっているのを発見した。蝦蟆は銅で作られた太い筆筒ふでづつ二本をかかえ、その筒のなかには樹の汁がいっぱい流れ込んでいた。又そのそばには大きい白い菌きのこが泡を噴いていて、菌の笠は落ちていたのであつた。

これで奇怪なる油売りの正体は判つた。

菌は人である。蝦蟆は驢馬である。筆筒は油桶である。この油売りはひと月ほども前から城下の里へ売りに来ていたもので、それを買う人びとも品がよくて価あたの廉やす

いのを内々不思議に思っていたのであるが、さてその正体があらわれると、その油を食用に供した者はみな煩い付いて、俄かに吐いたり瀉したりした。

九尾狐

むかしの説に、野狐の名は紫狐といい、夜陰に尾を撃つと、火を発する。怪しい事をしようとする前には、かならず髑髏をかしらに戴いて北斗星を拝し、その髑髏が墜ちなければ、化けて人となると言い伝えられている。

劉元鼎が蔡州を治めているとき、新破の倉場に狐があばれて困るので、劉は捕吏をつかわして狐を生け捕らせ、毎日それを毬場へ放して、犬に逐わせるのを楽しみとしていた。こうして年を経るうちに、百数頭を捕殺した。

後に一頭の疥のある狐を捕えて、例のごとく五、六頭の犬を放したが、犬はあえて追い追らない。狐も平気で逃げようとしめない。不思議に思つて大将の家の獬廌を連れて来た。監軍もまた自慢の巨犬を牽いて来たが、どの犬も耳を垂れて唯その狐を取り巻いているばかりである。暫くすると、狐は跳つて役所の建物に入り、さらに脱け出して城の牆に登つて、その姿は見えなくなった。

劉はその以来、狐を捕らせない事にした。道士の術のうちに天狐の法というのが

ある。天狐は九尾で金色で、日月宮に使役しえきされているのであるという。

妬婦津

伝えて言う、晋の大始年中、劉伯玉りゅうはくぎょくの妻段氏だんしは字を光明こうめいといい、すこぶる嫉妬しどぶかい婦人であつた。

伯玉は常に洛神らくしんの賦ふを愛誦して、妻に語つた。

「妻を娶めとるならば、洛神のような女が欲しいものだ」

「あなたは水神を好んで、わたしをお嫌いなさるが、わたしとても神になれないことはありません」

妻は河に投身して死んだ。それから七日目の夜に、彼女は夫の夢にあらわれた。

「あなたは神が好きだから、わたしも神になりました」

伯玉は眼が醒めて覺さとつた。妻は自分を河へ連れ込もうとするのである。彼は注意して、その一生を終るまで水を渡らなかつた。

以来その河を妬婦津とふしんといい、ここを渡る女はみな衣裳をつくろわず、化粧を剥はがして渡るのである。美服美粧して渡るときは、たちまちに風波が起つた。ただし醜みにくい女は粧飾して渡つても、神が妬ねたまないと見えて無事であつた。そこで、この河を

渡るとき、風波の難に逢わない者は醜婦であるということになるので、いかなる醜婦もわざと衣服や化粧を壊して渡るのもおかしい。

齊しよわざの人の諺ことわざに、こんなことがある。

「よい嫁を貰おうと思つたら、妬婦津の渡し場に立っている。渡る女のよいか醜いかは自然にわかる」

悪少年

元和げんなの初年である。都の東市りわしに李和子りわしという悪少年があつて、その父を努眼どがんといつた。和子は残忍の性質で、常に狗いぬや猫を搔かつさらつて食ひ、市中の害をなす事が多かつた。

彼が鷹たかを臂ひじに据えて往来に立っていると、紫の服を着た男二人が声をかけた。

「あなたは李努眼の息子さんで、和子という人ではありませんか」

和子がそうだと答えて会釈えしゃくすると、二人はまた言った。

「少し子細しさいがありますから、人通りのない所で話しましょう」

五、六歩さきの物蔭へ連れ込んで、われわれは冥府の使いであるから一緒に来てくれと言つたが、和子はそれを信じなかつた。

「おまえ達は人間ではないか。なんでおれを欺すのだ」

「いや、われわれは鬼である」

ひとりかふところを探って一枚の諜状を取り出した。印の痕もまだあざやかで、李和子の姓名も分明にしるしてあつた。彼に殺された犬猫四百六十頭の訴えに因つて、その罪を論ずるといふのである。

和子も俄かにおどろき懼れて、臂の鷹をすてて拝礼し、その上にこう言つた。

「わたくしも死を覚悟しました。しかしちつとのあいだ猶予して、わたくしに一杯飲ませてください」

あなた方にも飲ませるからと言つて、無理に勧めてそこらの店屋へ案内したが、二人は鼻を掩うてはいらぬ。さらに杜という相当の料理屋へ連れ込んだが、二人のすがたは他人に見えず、和子が独りで何か話しているので、気でも違つたのではないかと怪しまれた。彼は九碗の酒を注文して、自分が三碗を飲み、余の六碗を西の座に据えて、なんとか助けてもらう方便はあるまいかと頼んだ。

二人は顔を見あわせた。

「われわれも一酔の恩を受けたのであるから、なんとか取り計らうことにしましょう。では、ちよつと行つて来るから待つていて下さい」

出て行つたかと思うと、二人は又すぐに歸つて来た。

「君が四十万の錢をわきまえるならば、三年の命を仮すことにしましょう」

和子は承諾して、あしたの午の刻までにその錢を調えることに約束した。二人は酒の代を払った上に、その酒を和子に返した。で、彼は試みに飲んでみると、その味は水のごとくで、齒に沁みるほどに冷たくなっていた。和子は急いで我が家へ帰って、衣類諸道具を売り払って四十万の紙錢を買った。

約束の時刻に酒を供えて、かの紙錢を焚くと、きのうの二人があらわれてその錢を持って行くのを見た。それから三日の後に、和子は死んだ。

鬼界の三年は、人間の三日であつた。

唐櫃の熊

唐の寧王が鄂県の界へ獵に出て、林のなかで獲物をさがしていると、草の奥に一つの櫃を発見した。蓋の錠が嚴重に卸してあるのを、家来に命じてこじ明けさせると、櫃の内から一人の少女が出た。その子細をたずねると、彼女は答えた。

「わたくしは姓を莫と申しまして、父はむかし仕官の身でござりました。昨夜劫盜に逢いましたが、そのうちの二人は僧で、わたくしを拐引してここへ運んで参ったのでござります」

愁いを含んで訴える姿は、又なく美しく見えたので、王は悦んで自分の馬へ一緒に乗せて帰った。そのときあたかも一頭の熊を獲たので、少女の身代りにその熊を櫃に入れて、もとの如くに錠をおろして置いた。

その頃、帝は美女を求めていたので、王はかの少女を献上し、且つその子細を申し立てると、帝はそれを宮中に納れて才人の列に加えた。それから三日の後に、京兆の役人が奏上した。

鄂県の食店へ二人の僧が来て、一昼夜万錢で部屋を借り切りにした。何か法事をおこなうのだといっていたが、ただ一つの櫃を舁き込んだだけであつた。その夜ふけに、ばたばたという音がきこえて、翌あさの日の出る頃まで戸を明けないので、店の主人が怪しんで、戸をあけて窺うと、内から一頭の熊が飛び出して、人を突き倒して走り去った。二人の僧は熊に啖われたと見えて、骸骨をあらわして死んでいた。帝はその奏聞を得て大いに笑つた。すぐに寧王のもとへその事を知らせてやって、君はかの悪僧らをうまく処置してくれたと褒めた。少女は新しい唄を歌うのが上手で、莫才人囀と言いはやされた。

徐敬業

唐じよんの徐敬業は十余歳にして彈射を好んだ。小弓をもつて彈丸を射るのである。父の英公えいこうは常に言った。

「この児の人相は善くない。後には我が一族を亡ぼすものである」

敬業は射術ばかりでなく、馬を走らせても消え行くように早く、旧い騎手のりても及ばない程であつた。英公は猫ねこを好んだので、あるとき敬業を同道して、森のなかへはいつて獸けものを逐い出させた。彼のすがたが森の奥に隠れた時に、英公は風上かざかみから火をかけた。父は我が子の将来をあやぶんで焼き殺そうとしたのである。

敬業は火につつまれて、逃るるところのないのを覚るや、乗馬の腹を割いてその中に伏していた。火が過ぎて、定めて焼け死んだと思いのほか、彼は馬の血を浴びて立ち上がったので、父の英公もおどろいた。

敬業は後に兵を挙げて、則天武后そくてんぶこうを討とうとして敗れた。

死婦の舞

鄭賓于ていひんうの話である。彼が曾て河北かきに客となつてゐるとき、村名主むらなぬしの妻が死んでまだ葬らないのがあつた。日が暮れると、その家の娘子供は、どこかで音楽の音がきこえるように思ったが、その声は次第に近づいて庭さきへ来た。妻の死骸は動き出

した。

音楽の声は室内へはいって、梁はりか棟むなぎのあいだに在るかと思うと、死骸は起たつて舞いはじめた。声はさらに表の方へ出ると、それに導かれたように死骸もあるき出して、ついに門外へ立ち去った。家内一同はおどろき懼おそれたが、月の暗い夜であるので、追うことも出来なかった。

夜ふけに名主は外から帰つて来て、その話を聞くと、彼はふとい桑の枝を折り取つた。それから酒をしたたかに飲んで、大きい声で罵りわめきながら、墓場の森の方角へたずねてゆくと、およそ五、六里（六丁一里ちよう）の後、柏の樹の森の上で又もやかの音楽の声がきこえた。

近寄つてみると、樹の下に明るい火が燃えて、そこに妻の死骸が舞っているのである。彼は桑の杖を振りあげて死骸を撃つた。

死骸が倒れると、怪がしい楽がの声もやんだ。彼は死骸を背負つて帰つた。

宣室志（唐）

第四の男は語る。

「わたくしは『宣室志』のお話をいたします。この作者は唐の張読であります。張は字を聖朋せいほうといい、年十九にして進士しんしに登第とうだいしたという俊才で、官は尚書左丞しょうしよさじようにまで登りました。祖父の張薦ちやうせんも有名の人物で、張薦はかの『遊仙窟』や『朝野僉載』を書いた張文成ぶんせいの孫にあたるように聞いて居ります。

この書も早く渡来しましたので、わが国の小説や伝説に少なからざる影響をあたえているようでございます」

七聖画

唐の長安ちやうあんの雲花寺うんげじに聖画殿があつて、世にそれを七聖画と呼んでいる。

この殿堂が初めて落成したときに、寺の僧が画工をまねいて、それに彩色画さいしきがを描かせようとしたが、画料が高いので相談がまとまらなかった。それから五、六日の後、ふたりの少年がたずねて来た。

「われわれは画を善く描く者です。このお寺で画工を求めているということを知りて参りました。画料は頂戴するに及びませんから、われわれに描かせて下さいませんか」

「それではお前さん達の描いた物を見せてください」と、僧は言った。

「われわれの兄弟は七人ありますが、まだ長安では一度も描いたことがありませんから、どこの画を見てくれというわけには行きません」

そうになると、やや不安心にもなるので、僧は少しく躊躇ちゆうちゆうしていると、少年はまた言った。

「しかし、われわれは画料を一文も頂戴しないのですから、もしお気に入らなかつたならば、壁を塗り換えるだけのことで、さしたる御損もありますまい」

なにしろ無料ただというのに心を惹ひかされて、僧は結局かれらに描かせることにすると、それから一日の後、兄弟と称する七人の少年が画の道具をたずさえて来た。

「これから七日のあいだ、決してこの殿堂の戸をあけて下さるな。食い物などの御心配に及びません。画えの具の乾かないうちに風や日にさらすことは禁物ですから、誰も覗のぞきに来てはいけません」

こう言つて、かれらは殿堂のなかに閉じ籠こもつたが、それから六日のあいだ、堂内はひっそりしてなんの物音もきこえないので、寺の僧等も不審をいだいた。

「あの七人はほんとうに画を描いているのかしら」

「なんだかおかしいな。なにかの化け物がおれ達をだまして、とうに消えてしまつたのではないかな」

評議まちまちの結果、ついにその殿堂の戸をあけて見ることになった。幾人の僧が忍び寄つて、そつと戸をあけると、果たして堂内に人の影はみえなかつた。七羽の鴿はとが窓から飛び去つて、空中へ高く舞いあがつた。

さてこそと堂内へはいつて調べると、壁画は色彩うるわしく描かれてあつたが、約束の期日より一日早かつたために、西北の窓ぎわだけがまだ描き上げられずに残つていた。その後、幾人の画工がそれを見せられて、みな驚嘆した。

「これは実に靈妙の筆である」

誰も進んで描き足そうという者がないので、堂の西北の隅だけは、いつまでも白いままで残されている。

法喜寺の龍

政陽郡せいようの東南に法喜寺ほうきじという寺があつて、まさに渭水いすいの西に當つていた。唐の元和げんなの末年に、その寺の僧がしばしば同じ夢をみた。一つの白い龍りゅうが渭水から出て来て、仏殿の軒にとどまつて、それから更に東をさして行くのである。不思議な事には、その夢をみた翌日にはかならず雨が降るので、僧も怪しんでそれを諸人に語ると、清浄の仏寺に龍が宿るといふのは、さもなりそうなことである。そのしるしとして、

仏殿の軒に土細工の龍を置いたらどうだという者があつた。

僧も同意して、職人に命じて土の龍を作らせることになつた。惜しむらくはその職人の名が伝わっていないが、彼は決して凡手ではなかつたと見えて、その細工は甚だ巧妙に出来あがつて、寺の西の軒に高く置かれたのを遠方から瞰あげると、さながらまことの龍のわだかまつているようにも眺められた。

長慶の初年に、その寺中に住む人で毎夜門外の宿舎に眠るものがあつた。彼はあつちの夜、寺の西の軒から一つの物が雲に乗るように飄々と飛び去つて、渭水の方角へむかつたかと思うと、その夜半に再び歸つて来たのを見たので、翌日それを寺僧に語ると、僧もすこぶる不思議に思つていた。

それからまた五、六日の後、村民の齋に呼ばれて、寺中の僧は朝からみな出てゆくと、その留守の間にかの土龍の姿が見えなくなつたので、人びとはまた驚かされた。「たとい土で作つた物でも、龍の形をなす以上、それが靈ある物に變じたのである」と

こう言つていると、その晩に渭水の上から黒雲が湧き起つて、次第にこの寺をつつむように迫つて来たかと思ふうちに、その雲のあいだから一つの物が躍り出て、西の軒端へ流れるように入り込んだので、寺の僧らはまた驚き怖れた。やがて雲も収まり、空も明るくなつたので、かの軒の下にあつまつて瞰あげると、土龍は元の

通りに帰っていたが、その鱗も角もみな一面に湿れているのを発見した。

その以来、龍の再び抜け出さないように、鉄の鎖をもつて繋いで置くことにした。早魃のときに雨を祈れば、かならず奇特があると伝えられている。

阿弥陀仏

宣城郡、当塗の民に劉成、李暉の二人があつた。かれらは大きい船に魚や蟹のたぐいを積んで、呉や越の地方へ売りに出ていた。

唐の天宝十三年、春三月、かれらは新安から江を渡つて丹陽郡にむかい、下查浦というところに着いた。故郷の宣城を去る四十里（六丁一里）の浦である。日もすでに暮れたので、二人は船を岸につないで上陸した。

そこで、李は岸の人家へたずねて行き、劉は岸のほとりにとどまっていると、夜は静かで水の音もひびかない。その時、たちまち船のなかで怪しい声がきこえた。

「阿弥陀仏、阿弥陀仏」

おどろいて透かして視ると、一尾の大きい魚が船のなかから鬚をふり、首をうごかして、あたかも人の声をなして阿弥陀仏を叫ぶのであつた。劉はぞつとして、蘆のあいだに身をひそめ、なおも様子をうかがっていると、やがて船いっぱい魚が

一度に跳ねまわって、みな口々に阿弥陀仏を唱え始めたので、劉はもう堪まらなくなつて、あわてて船へ飛び込んで、船底にあるだけの魚を手あたり次第に水のなかへ投げ込んだ。

全部の魚を放してしまつたところへ、李が戻つて来た。彼は劉の話をきいて大いに怒つた。

「ばかばかしい。おれたちは今夜初めてこの商売をするのじゃあねえ。魚なんぞが化けて堪まるものか」

劉がいかに説明して聞かせても、李は決して信じなかつた。商売物の魚をみんな捨ててしまつてどうするのだと、彼は激しく劉に食つてかかるので、劉もその言い訳に困つて、とうとう李の損失だけを自分がつぐなうことにした。そうになると、剩すところは僅かに百錢に過ぎないので、劉はその村で荻十余束を買い込み、あしたの朝になつたらば船に積むつもりで、その晩は岸のほとりに横たえて置いた。

さて翌朝になつて、いよいよそれを積み込もうとすると、荻の束がひどく重い。怪しんでその束を解いてみると、縉すしになつている錢ぜに一万五千を発見した。それには「汝に魚の錢を歸す」と書いてあつた。劉はますます奇異の感を深うして、瓜洲かじゆうに僧侶をあつめて読経をしてもらつた上に、かの錢はみな施して歸つた。

柳將軍の怪

東洛とうらくに古屋敷があつて、その建物はすこぶる宏壯であるが、そこに居る者は多く暴死ぼうしするので、久しく鎖とぎされたままで住む者もなかつた。

唐の貞元ていげん年中に盧虔ろけんという人が御史に任ぜられて、宿所を求めた末にかの古屋敷を見つけた。そこには怪異があるといつて注意した者もあつたが、盧は肯きかなかつた。

「妖怪があらわれたらば、おれが鎮めてやる」

平気でそこに移り住んで、奴僕しもべどもはみな門外に眠らせ、自分は一人の下役人と共に座敷のまん中に陣取つていた。下役人は勇悍ゆうかんにして弓を善よくする者であつた。

やがて夜が更けて来たので、下役人は弓矢をたずさえて軒下に出ていると、やがて門を叩く者があつた。下役人は何者だとたずねると、外では答えた。

「柳將軍りゅうげんから盧君に書面をお届け申す」

言うかと思うと、一幅いっぷくの書がどこからとも知れずに軒下へ舞い落ちた。それは筆をもつて書いたもので、字画じかくも整然と読まれた。その文書の大意は——我はここに年久とししく住んでいて、家屋門戸もんこみな我が物である。そこへ君が突然に入り込んで済むと思うか。もし君の住宅へ我々が突然に踏み込んだら、君もおそらく捨てては置

くまい。左様な不法を働いて、君はたとい我を懼れずと誇るとも、省みて君のころに恥じないであろうか。君はみずから悔い改めて早々に立ち去るべきである。小勇を恃んで大敗の辱を蒙るなかれ。――

このいかめしい抗議文をうけ取つて、盧はまだ何とも答えないうちに、その紙は灰のごとくにひらひらと散つてしまつた。つづいて又、物々しく呼ぶ声がかきこえた。

「柳將軍、御意を得申す」

忽然として現われ出でたのは、身のたけ数十尋（一尋は六尺）もあるうかと思われる怪物で、手に一つの瓢をたずさえて庭先に突つ立つた。下役人は弓を張つて射かけると、矢は彼の手にある瓢にあつたので、怪物はいったん退いてその瓢を捨てたが、更にまた進んで来て、首を俯してこちらの様子を窺つてゐるらしいので、下役人は更に二の矢を射かけると、今度はその胸に命中したので、さすがの怪物も驚いたらしく、遂にうしろを見せておめおめと立ち去つた。

夜が明けてから彼の来たらしい方角をたずねると、東の空き地に高さ百余尺の柳の大樹があつて、ひと筋の矢がその幹に立つていたので、いわゆる柳將軍の正体はこれであることが判つた。それから一年あまりの後に家屋の手入れをすると、家根瓦の下から長さ一丈ほどの瓢を発見した。その瓢にもひと筋の矢が透つていた。

黄衣婦人

唐の柳宗元先生が永州の司馬に左遷される途中、荊門を通過して驛舎に宿ると、その夜の夢に黄衣の一婦人があらわれた。彼女は再拝して泣いて訴えた。

「わたくしは楚水の者でございますが、思わぬ禍いに逢いまして、命も朝夕に迫つて居ります。あなたでなければお救い下さることは叶いません。もしお救い下されば、長く御恩を感謝するばかりでなく、あなたの御運をひるがえして、大臣にでも大将にでも御出世の出来るように致します」

先生も無論に承知したが、夢が醒めてから、さてその心あたりがないので、ついそのままにしてまた眠ると、かの婦人は再びその枕元にあらわれて、おなじことを繰り返して頼んで去つた。

夜が明けかかると、土地の役人が来て、荊州の帥があなたを御招待して朝飯をさしあげたいと言つた。先生はそれにも承知の旨を答えたが、まだ東の空が白みかけただけであるので、又もやうとうとと眠っていると、かの婦人が三たび現われた。その顔色は慘として、いかにも危難がその身に迫っているらしく見えた。

「わたくしの命はいよいよ危うくなりました。もう半とぎの猶予もありません。どうぞ早くお救いください。お願いでございます」

一夜のうちに三度もおなじ夢を見たので、先生も考えさせられた。あるいは何か役人らのうちに不幸の者でもあるのかと思つた。あるいは今朝の饗応について、何かの鳥か魚が殺されるのではないかとも思つた。いずれにしても、行つてみたら判るかも知れないと思つたので、すぐに支度をして饗宴の席に臨んだ。そうして、主人にむかつてかの夢の話をする、彼も不思議そうに首をかたむけながら、ともかくも下役人を呼んで取調べると、役人は答えた。

「実は一日前に、大きい黄魚（石首魚）が漁師の網にかかりましたので、それを料理してお客さまに差し上げようと存じましたが……」

「その魚はまだ活かしてあるか」と、先生は訊いた。

「いえ、たつた今その首を斬りました」

先生は思わずあつと言つた。今更どうにもならないが、せめてもの心ゆかしに、その魚の死骸を河へ投げ捨てさせて出発した。

その夜の夢に、かの黄衣の婦人が又もや先生の前にあらわれたが、彼女には首がなかった。それがためか、先生は大臣にも大将にもなれず、ついに柳州の刺史（しし）をもつて終つた。

太原たいげんの商人せきけんに石憲せきけんという者があつた。唐ちやうけいの長慶二年の夏、北方へあきないに行つて、雁門関がんもんかんを出た。時は夏の日盛りで、旅行はすこぶる難儀であるので、彼は路ばたの大樹の下に寝ころんでいるうちに、いつかうとうとと眠つてしまった。

たちまちにそこへ一人の僧があらわれた。かれは褐色かつしよくの法衣ころもを着て、その顔も風体ふうていもなんだか異様にみえたが、石せきにむかつて親しげに話しかけた。

「われわれは五台山いおりの南に廬いおりを構えていた者でござるが、そのあたりは森も深く、水も深く、塵俗じんぞくを遠く離れたところでござれば、あなたも一緒にお出でなさらぬか。さもないと、あなたは暑さにあたって死にましようぞ」

實際暑さに苦しんでいるので、石はその言うがままに誘われてゆくと、西のかた五、六里のところ果たして密林があつて、大勢の僧が水のなかを泳ぎまわつていた。

「これは玄陰池げんいんちといい、わが徒はここに水浴して暑氣を凌ぐのでござる」

僧はこう説明して、彼を案内した。石はそのあとに付いて池のまわりをめぐるつて、ふと氣の付いたのは大勢の僧の顔がみな一様で、どの人の眼鼻も少しも異ことなつていないことであつた。やがて日が暮れかかると、僧はまた言った。

「お聴きなされ、衆僧がこれから梵音ぼんおんを唱え始めます」

石は池のほとりに立って耳をかたむけていると、たちまちに水中の僧らが一斉に声をそろえて、なにか判らない梵音わかを唱え出した。その声が甚だ騒々しいと思つていと、一人の僧が水中から手を出して彼を引いた。

「あなたも試しにはいつて御覧なされ。決して怖いことはござらぬ」

引かるるままに彼は池にはいつていると、その水の冷たいこと氷のごとく、思わずぞつと身ぶるいすると共に、半日の夢は醒めた。彼はやはり元の大樹の下に眠つていたのである。しかしその衣服はびしょ濡れぬになつていて、からだには悪寒さむけがするので、彼は早々にそこを立ち去つて、近所の村びとの家に一夜を明かした。

翌日は気分も快よくなつたので、きのうの通りにあるき出すと、路ばたに蛙かわずの鳴く声こゑがそうぞうしくきこえた。それがかの僧らのいわゆる梵音に甚だ似ているので、彼は俄かに思い当ることがあつた。夢のうちの記憶をたどりながら、五、六里ほども西の方角へたずねて行くと、そこには深い森もあり、大きい池もあつた。池のなかにはたくさんおほくの蛙が浮かんでいた。

「坊主の正体はこれであつたか」

彼はその蛙を片端から殺し尽くした。

洛陽らくように李氏りしの家があつた。代々の家訓で、生き物を殺さないことになつてゐるので、大きい家に一匹の猫をも飼わなかつた。鼠を殺すのを忌むが故である。

唐の宝応年中、李の家で親友を大勢よびあつめて、広間で飯を食うことになつた。一同が着席したときに、門外に不思議のことが起つたと、奉公人らが知らせて来た。「何百匹という鼠の群れが門の外にあつまって、なにか嬉しそうに前足をあげて叩いて居ります」

「それは不思議だ。見て来よう」

主人も客も珍しがつてどやどやと座敷を出て行つた。その人びとが残らず出尽くしたときに、古い家が突然に頽くずれ落ちた。かれらは鼠に救われたのである。家が頽れると共に、鼠はみな散りぢりに立ち去つた。

陳巖の妻

舞陽ぶようの人、陳巖ちんがんという者が東吳とうごに寓居ぐきよしていた。唐の景龍けいりゆうの末年に、かれは孝廉こうれんにあげられて都へゆく途中、渭南いなんの道で一人の女に逢つた。かれは白衣はくいをつけた美女で、袂たもとをもつて口を被おおいながら泣き叫んでいたのである。

見すごしかねてその子細をきくと、女は泣きながら答えた。

「わたくしは楚その人で、侯こうという姓の者でございます。父はこころざしの高い人物として、湘楚しやうそのあいだに知られて居りましたが、山林に隠れて富貴榮達ふつきえいたつを望みませんでした。しかし沛国はいの劉りゅうという人とは親しい友達でありまして、その関係からわたくしはその劉家あやまちへ縁付えんづくことになりました。それから丁度十年になりまして、自分としてはなんの過失あやまちもありません。夫は昨年から更に盧氏ろの娘を娶めとりましたので、家内に風波かぜなみが絶えません。又その女が気の強い乱暴な生まれ付きで、わたくしのような者にはしよせん同棲はできません。そんなわけで、逃げ出したような、逐おい出されたような形で、劉家を立ち退いたのでございますが、どこへ行くという目的めあてもないので、こうして路頭ろとうに迷っているのでございます」

陳は律義りちぎ一方の人物であるので、初対面の女の訴えることをすべて信用してしまつた。なにしろ行く先がなくては困るであろうと、一緒に連れ立って行くうちに、いつか夫婦のような関係が結ばれて、都へのぼつて後も永崇里えいそうりというところに同棲していた。然るにこの女、最初のあいだは大層つましやかであつたが、だんだんに乱暴ほんしょうの本性をあらわして、時には気ちがいのようになつて我が夫に食つてかかることもあるので、飛んだ者と夫婦になつたと、陳も今さら悔んでいた。

ある日、陳が外出すると、その留守のあいだに妻は夫の衣類をことごとく庭先へ

持ち出して、みなずたずたに引き裂いたばかりか、夕方になって陳が戻つて来ると、彼女は門を閉じて入れないのである。陳も怒つて、門を叩き破つて踏み込むと、前に言ったような始末であるので、彼はいよいよ怒つた。

「なんで夫の着物を破つてしまったのだ」

その返事の代りに、妻は夫にむしり付いた。そうして、今度はその着ている物をむやみに引き裂くばかりか、顔を引つ搔く、手に食いつくという大乱暴に、陳もほとほと持て余していると、その騒動を聞きつけて、近所の人や往来の者がみな門口にあつまつて来た。そのなかに郝居士かくこじという人があつた。かれは邪を攘はらい、魔を降くだすの術をよく知つていた。

居士は表から女の泣き声を聞いて、あたりの人にささやいた。

「あれは人間ではない。山に棲む獣けものに相違ない」

それを陳に教えた者があつたので、陳は早速に居士を招じ入れると、妻はその姿をみて俄かに懼れた。居士は一紙の墨符ぼくふを書いて、空くうにむかつてなげうつと、妻はひと声高く叫んで、屋根瓦がわらの上に飛びあがった。居士はつづいて一紙の丹符たんぶをかいて投げつけると、妻は屋根から転げ落ちて死んだ。それは一匹の猿であつた。

その後、別に何の祟りもなかったが、陳はあまりの不思議に渭南をたずねて、果たしてそこに劉という家があるかと聞き合わせると、その家は郊外にあつた。主人

の劉は陳に向つてこんな話をした。

「わたしはかつて弋陽よくやうの尉じやうを勤めていたことがあります。その土地には猿が多いので、わたしの家にも一匹を飼っていました。それから十年ほど経つて、友達が一匹の黒い犬を持つて来てくれたので、これも一緒に飼つておくと、なにぶんにも犬と猿とは仲が悪く、猿は犬に咬かまれて何処へか逃げて行つてしまいました」

李生の罪

唐の貞元年中に、李生りせいという者が河朔かきやくのあいだに住んでいた。少しく力量がある上に、侠客肌の男であるので、常に輕薄少年らの仲間にはいつて、人もなげにそこらを横行していた。しかも二十歳はたちを越える頃から、俄かにこころを改めて読書をはじめ、歌詩をも巧みに作るようになった。

それから追いおいに立身して、深州しんしゅうの録事参軍ろくじさんぐんとなつたが、風采も立派であり、談話も巧みであり、酒も飲み、鞠まりも蹴る。それで職務にかけては廉直れんちよくというのであるから申し分がない。州の太守も彼を認めて、将来は大いに登庸とうようしようとも思つていた。その頃、成徳軍せいとくぐんの帥そつに王武俊おうぶしゆんという大将があつた。功を恃たのんで威勢を振うので、付近の郡守はみな彼を恐れていると、ある時その子の士真ししんをつかわして、付近の各

州を巡檢させることになって、この深州へも廻つて来た。深州の太守も王を恐れている一人であるので、その子の士真に対しても出来るだけの敬意を表して歓待した。しかし迂闊うかつな者を酒宴の席に侍らせて、酒の上から彼の感情を害すような事があつてはならないという遠慮から、すべての者を遠ざけて、酒席の取持ちは太守一人が受持つことにした。それが士真の気になつて、さすがに用意至れり尽くせりと喜んで来たが、昼から夜まで飲み続けているうちに、太守ひとりでは持ち切れなくなつて来た。士真の方でも誰か變つた相手が欲しくなつた。

「今夜は格別のおもてなしに預かつて、わたしも満足した。しかしあなたと二人ぎりでは余りに寂しい。誰か相客あいきやくを呼んで下さらんか」

「何分にもこの通りの偏土へんどでござりまして……」と、太守は答えた。「お相手になるような者が居りません。しいて探しますれば、録事參軍の李と申すものが、何か少しはお話が出来るかとも存じますが……」

それを呼んでくれというので、李はすぐに召出された。そうして、酒の席へ出て来ると、士真の顔色は俄かに變つた。李は行儀正しく坐に着くと、士真の機嫌はいよいよ悪くなつた。太守も不思議に思つて、ひそかに李の方をみかえると、彼も色蒼あざざめて、杯を執とることも出来ないほどに顛ふぶえているのである。やがて士真は声を厲としゆうして、自分の家来に指図した。

「あいつを縛つて獄屋につなげ」

李は素直に引つ立てられて去ると、士真の顔色はまたやわらいで、今まで通りに機嫌よく笑いながら酒宴を終つた。太守はそれで先ずほつとしたが、一体どういふわけであるのか、それがちつとも判らないので、獄中に人をつかわしてひそかに李にたずねさせた。

「お前の礼儀正しいのは、わたしもふだんから知っている。殊に今夜はなんの落度もなかつたように思われる。それがどうして王君の怒りに触れたのか判らない。お前に何か思い当ることがあるか」

李はしばらく噉り泣きをしていたが、やがて涙を呑んで答えた。

「因果応報という仏氏の教えを今と今、あきらかに覚りました。わたくしの若いときは放蕩無頼の上に貧乏でもありましたので、近所の人びとの財物を奪い取つた事もしばしばあります。馬に乗り、弓矢をたずさえ、大道を往来して旅びとをおびやかしたこともあります。そのうちに或る日のこと、一人の少年が二つの大きい囊を馬に載せて来るのに逢いました。あたかも日が暮れかかつて、左右は断崖絶壁のところであるので、わたくしはかの少年を崖から突き落して、馬も囊も奪い取りました。家へ帰つて調べると、囊のなかには綾絹が百余反もはいつていましたので、わたくしは思わぬ金儲けをいたしました。それを機会に悪行をやめ、門を閉じて読

書に努めたお蔭で、まず今日の身の上になりましたが、数えてみるとそれはもう二十七年の昔になります。昨夜お召しに因つて王君の前に出ますと、その顔容が二十七年前に殺したかの少年をその儘であるので、わたくしも実におどろきました。王君がむかしの罪を覚えていられるかどうかは知りませんが、わたくしとしては王君に殺されるのが当然のことで、自分も覚悟しています」

太守はその報告を聞いて驚嘆していると、土真は酒の酔いが醒めて、すぐに李の首を斬つて来いと命令した。太守は命乞いをするすべもなく、その言うがままに李の首を渡すと、彼はその首をみてころよげに笑っていた。

「自分の部下にかような罪人をいできましたのは、わたくしが重々の不行き届きでございますが、一体かれはどういうことで御機嫌を損じたのでございましょうか」と、太守はさぐるように訊いてみた。

「いや、別に罪はない」と、土真は言った。「ただその顔をみるとなんだか無暗に憎くなつて、とうとう殺す気になつたのだ。それがなぜであるかは自分にもよく判らない。もう済んでしまったことだから、その話は止そうではないか」

彼自身にもはつきりした説明が出来ないらしかつた。太守はさらに土真の年を訊くと、彼はあたかも三十七歳であることが判つたので、李の懺悔の嘘ではないのがいよいよ確かめられた。

黒犬

唐の貞元年中、大理評事を勤めている韓かんという人があつて、西河郡せいがかの南に寓居していたが、家に一頭の馬を飼っていた。馬は甚だ強い駿足しゅんそくであつた。

ある朝早く起きてみると、その馬は汗をながして、息を切つて、よほどの遠路を駆け歩いて来たらしく思われるので、厩うまやの者は怪しんで主人に訴えると、韓は怒つた。「そんないい加減のことを言つて、実は貴様がどこかを乗り廻したに相違あるまい。主人の大切な馬を疲らせてどうするのだ」

韓はその罰として厩うまやの者を打つた。いずれにしても、厩を守る者の責任であるので、彼はおとなしくその折檻せつかんを受けたが、明くる朝もその馬は同じように汗をながして喘あえいでいるので、彼はますます不思議に思つて、その夜は隠れてうかがつていて、夜がふけてから一匹の犬が忍んで来た。それは韓の家に飼つている黒犬であつた。犬は厩にはいつて、ひと声叫んで跳おとりあがるかと思つと、忽ちに一人の男に変わった。衣服も冠もみな黒いのである。かれは馬にまたがつて傲然ごうぜんと出て行つたが、門は閉じてある、垣は甚だ高い。かれは馬にひと鞭むちくられると、駿馬しゅんめは跳おとつて垣を飛び越えた。

こうしてどこへか出て行つて、かれは曉け方になつて戻つて来た。厩にはいつて、かれはふたたび叫んで跳りあがると、男の姿はまた元の犬にかへつた。厩の者はよいよ驚いたが、すぐには人には洩らさないで猶も様子なまをうかがつてしていると、その後のある夜にも黒犬は馬に乗つて出て、やはり曉け方になつて戻つて来たので、厩の者はひそかに馬の足跡をたずねて行くと、あたかも雨あがりの泥がやわらかいので、その足跡ははつきりと判つた。韓の家から十里ほどの南に古い墓があつて、馬の跡はそこに止まつているので、彼はそこに茅の小家を急造して、そのなかに忍んでいることにした。

夜なかになると、黒衣の人が果たして馬に乗つて来た。かれは馬をそこらの立ち木につないで、墓のなかにはいつて行つたが、内には五、六人の相手が待ち受けているらしく、なにか面白そうに笑つている話し声が洩れた。そのうちに夜も明けかかると、黒い人は五、六人に送られて出て来た。褐色の衣服を着ている男がかれに訊いた。

「韓の家の名簿はどこにあるのだ」

「家のうぢら きぬたいしの下のしまつてあるから、大丈夫だ」と、黒い人は答へた。

「いいか。気をつけてくれ。それを見付けられたら大変だぞ。韓の家の子供にはまだ名がないのか」

「まだ名を付けないのだ。名が決まれば、すぐに名簿に記入して置く」

「あしたの晩もまた来いよ」

「むむ」

こんな問答の末に、黒い人は再び馬に乗って立ち去った。それを見とどけて、厩の者は主人に密告したので、韓は肉をあたえるふうをよそおって、すぐにかの黒犬を縛りあげた。それから砧石の下をほり返すと、果たして一軸いちじくの書が発見されて、それには韓の家族は勿論、奉公人どもの姓名までが残らず記入されていた。ただ、韓の子は生まれてからひと月に足らないので、まだその字あざなを決めていないために、そのなかにも書き漏らされていた。

一体それがなんの目的であるかは判らなかつたが、ともかくもこんな妖物をそのままにして置くわけにはゆかないので、韓はその犬を庭さきへ牽ひき出させて撲殺ぼくさつした。奉公人どもはその肉を煮て食ったが、別に異状もなかつた。

韓はさらに近隣の者を大勢駆り集めて、弓矢その他の得物えものをたずさえてかの墓を発あはかせると、墓の奥から五、六匹の犬があらわれた。かれらは片端からみな撲殺されたが、その毛色も形も普通の犬とは異っていた。

俗に伝う。人が死んで数日の後、柩ひつぎのうちから鳥が出る、それを煞さつという。

太和中、鄭生ていせいというのが一羽の巨おおきい鳥を網で捕った。色は蒼あおく、高さ五尺余、押えようとすると忽ちに見えなくなつた。

里びとをたずねて聞き合わせると、答える者があつた。

「ここらに死んで五、六日を過ぎた者があります。うらない者の言うには、きようは煞さつがその家を去るであろうと。そこで、忍んで伺つていますと、色の蒼あおい巨おおきい鳥が棺の中から出て行きました。あなたの網に入つたのは恐らくそれでありましょう」

白猿伝・其他

第五の男は語る。

「唯今は『酉陽雜俎』と『宣室志』のお話がありました。そこで、わたくしには其の拾遺しゅういといったような意味で、唐代の怪談総まくりのようなものを話せという御注文ですが、これはなかなか大変でございます。とても短い時間に来ることはありません。勿論、著名の物を少々ばかり紹介いたすに過ぎないと御承知ください。就きましては、まず『白猿伝』を申し上げます。この作者の名は伝わって居りません。唐おとうに歐陽詢おいうじゆんという大学者がありまして、後に渤海男ほつかいだんに封ほうぜられました。この人の顔が猿に似ているというので、或る人がいたずらにこんな伝奇を創作したのであつて、本当に有つた事ではないという説があります。しかし〈志怪の書〉について、その事実の有無を論議するのは、無用の弁に近いかとも思われます。ともかくも古來有名な物になつて居りまして、かの頼光らいこうの大江山おおえやま入りなども恐らくこれが粉本ふんぼんであろうと思われまますから、事実の有無うむを問わず、ここに紹介することに致します。そのほかには、原化記げんかき、朝野僉載ちやうやせんざい、博異記はくいぎ、伝奇でんき、広異記こういぎ、幻異志げんいしなどから、面白そうな話を選んで申し上げたいと存じます。これらもみな有名の著作であります。一つ一つ独立して紹介するの価値があるのでございますが、あとがつかえて居りますから、そのなかで特色のあるお話を幾つか拾い出すにとどめて置きます。右あらかじめお含み置きください」

白猿伝

梁（六朝）の大同の末年、平南將軍蘭欽をつかわして南方を征討せしめた。その軍は桂林に至つて、李師古と陳徹を撃破した。別將の歐陽紇は各地を攻略して長樂に至り、ことごとく諸洞の敵をたいらげて、深く險阻の地に入り込んだ。

歐陽紇の妻は白面細腰、世に優れたる美人であつたので、部下の者は彼に注意した。

「將軍はなぜ麗人を同道して、こんな蕃地へ踏み込んでお出でになつたのです。こちらの山の神は若い女をぬすむといひます。殊に美しい人はあぶのうございませうから、よく気をお付けにならなければいけません」

紇はそれを聞いて甚だ不安になつた。夜は兵をあつめて宿舎の周圍を守らせ、妻を室内に深く閉じ籠めて、下婢十余人を付き添わせて置くと、その夜は暗い風が吹いた。五更（午前三時―五時）に至るまで寂然として物音もきこえないので、守る者も油断して仮寝をしていると、たちまち何物かはいつて来たらしいので驚いて眼をさますと、將軍の妻はすでに行くえ不明であつた。扉はすべて閉じたままで、どこから出入りしたか判らない。門の外は嶮しい峰つづきで、眼さきも見えない闇夜

にはどこへ追つてゆくすべもない。夜が明けても、そこらになんの手がかりも見いだされなかった。

紇の痛憤はいうまでもない。彼はこのままむなしく還かえらないと決心して、病いと称してここに軍を駐とどめ、毎日四方を駈けめぐつて險阻の奥まで探り明かした。こうしてひと月あまりを経たるのち、百里（六丁一里）ほどを隔てた竹藪で妻の繡履の片足を見付け出した。雨に濡れ朽ちてはいたが、確かにそれと認められたので、紇はいよいよ悲しみ怒つて、そのゆくえ搜索の決心をますます固めた。

彼は三十人の壯士をすぐつて、武器をたずさえ、糧食を背負い、巖窟がんくつに寝ね、野原で食事をして、十日あまりも進むうちに、宿舎を去ること二百里、南のかたに一つの山を認めた。山は青く秀ひでて、その下には深い溪たにをめぐらしていた。一行は木を編んで、峻しい巖いわや翠あおい竹のあいだを渡り越えると、時に紅きものい衣が見えたり、笑い声がきこえたりした。

薦つたかずらを攀よじて登り着くと、そこには良い樹を植えならべて、そのあいだには名花も咲いている。緑の草がやわらかに伸びて、さながら毛氈もうせんを敷いたようにも見える。あたりは清く静けく、一種の別天地である。

路を東にとつて石門にむかうと、婦女數十人、いずれも鮮麗の衣服を着て歌いたわむれていたが、紇の一行を見てみな躊躇するようにならずでいた。やがて近づ

くと、かれらは一行にむかつて、なにしに來たかと訊いた。紘は事情をつまびらかに打ち明けると、女たちは顔をみあわせて嘆息した。

「あなたの奥さんはひと月ほど前からここに來ておいですが、今は病気で寝ておられます。來てごらんなさい」

門をはいると、木の扉がある。内は寛くて、座敷のようなものが三、四室ある。壁に沿うて床を設け、その床は綿に包まれている。紘の妻は石の榻の上に寝ていたが、畳をかさね、茵をかさねて、結構な食物がたくさんに列べてあった。たがいに眼を見合わせるると、妻は急に手を振って、夫に早く立ち去れという意を示した。

女たちは言った。

「奥さんはこの頃お出ですが、わたし達の中にはもう十年もここにゐる者があります。ここは神靈ある物の棲む所で、自由に人を殺す力を持っています。百人の精兵でも、かれを取り押えることは出来ません。幸いに今は留守ですから、還らない間に早く立ち去るが好うございます。しかし美しい酒二石と、食用の犬十四匹と、麻數十斤とを持ってお出でになれば、みんなが一致して彼を殺すことが出来ます。來るならば必ず正午ごろに來てください。それも直ぐに來てはなりません。十日を過ぎでお出でなさい」

それでは十日の後に再び來ると約束して、紘の一行は立ち歸った。それから美酒

と犬と麻とを用意して、約束の時刻にたずねて行くと、女たちは待つていた。

「かれは酒が大好きで、酔うと力が満ちて来ると見えて、私たちに言いつけて綵糸いろいとで自分のからだを牀ゆかに縛り付けさせます。そうして、一つ跳ねあがると、糸は切れちゃうのです。しかし三本の糸をまき付けると、力が不足で切ることが出来ません。それですから、帛きぬのなかに麻を隠して置いて縛ったらば、おそらく切ること出来まいと思われます。彼のからだはすべて鉄のようで刃物などは透りませんが、ただ臍へそのした五、六寸のところを大事そうに隠してありますから、そこがきつと急所で、刃物を防ぐことが出来ないものであらうと察せられます」

女たちは更にかたわらの巖室いわむろを指さして教えた。

「そこは食物庫ぐらですから暫く忍んでおいでなさい。酒を花の下に置き、犬を林のなかに放して置いて、わたし達の計略じょうりやくが成就した時に、あなた方に合図あひづをします」

その通りにして、一行は息を忍ばせて待つていると、日も早や申まをの刻とき（午後三時―五時）とおぼしき頃に、練絹ねいぬのような物があなたの山から飛ぶが如くに走つて来て、たちまちに洞ほらのなかにはいった。見れば、身のたけ六尺余の男で、美しい髯ひげをたくわえ、白衣を着て杖を曳ひいていた。かれは女たち大勢に取り巻かれて庭に出たが、たちまちに犬を見つけて驚き喜び、身を跳らせて引つ捕えたかと思うと、引き裂いて片端から啖くちい尽くした。女たちは玉の杯で酒をすすめると、機嫌よく笑い興

じながらかれは数斗との酒を飲んだ。

女たちはかれを扶たすけて奥にはいったが、それでも又笑たすい楽しむ声こゑがきこえた。やや暫くして、女が出て来て紇この一行を招いたので、すぐに武器をたずさえて踏み込むと、一頭ひとの大きい白猿しらざるが四足しそくを牀ゆかにくくられていて、一行を見るや慌あわて騒さわいで、しきりに身をもがいても動くことが出来ず、いたずらに電光のような眼を輝かすばかりであった。一行は先を争あつて刃やいばを突き立てたが、あたかも鉄石の如くである。しかも臍へその下を刺すと、刃やいばは深く突き透とつて、そそぐが如くに血が流れた。

「ああ、天がおれを殺すのだ」と、かれは大きい溜ためめ息をついた。「貴様たちの働はたらきではない。しかし貴様の女房にようばはもう孕はらんでいる。必ずその子を殺すな。明天子に逢あつて家を興おこすに相違ちがないぞ」

言い終つて彼は死んだ。その庫くらをさがすと、宝物珍品たからものが山のように積たまれていて、およそ人世の珍とする物は備そなわらざるなしという有様であった。名香めいこう数斛こく、宝剣たから一雙そう、婦女にようめ三十人、その婦女はみな絶世の美女で、久しいものは十年もとどまつている。容色おとろえた者はどこへか連れて行かれて、どうなつてしまふか判わらない。女を取り、物を取るのはすべて自分ひとりで、他に党類たうるいはない。朝はたらいで顔を洗あい、帽ぼうをかぶり、白衣びやくいを着るが、寒さ暑さに頓とん着ちやくせず、全身は長さ幾寸の白い毛けに蔽おほわれている。

かれが家にある時は、常に木彫りの書物を読んでゐるが、その文字は符篆ふてんの如くで、誰にも読むことは出来ない。晴れた日には両手に劍を舞わすが、その光りは身をめぐつて飛び、あたかも円月の如くである。飲み食いは時を定めず、好んで木実このみや栗を食うが、もつとも犬をたしなみ、啖くい殺して血を吸うのである。午ひるを過ぎると飄然として去り、半日に数千里を往復して夕刻には必ず帰つて来る。夜は婦女にたわむれて暁に至り、かつて眠つたことがない。要するに猥かかくのたぐいである。

ことしの秋、木の葉が落ち始める頃に、かれはさびしそうに言った。

「おれは山の神に訴えられて、死罪になりそうだ。しかし救いをもろもろの霊ある物に求めたから、どうにか免まぬかれるだろう」

前月、書物を収めてある石橋が火を発して、その木簡もつかんを焼いてしまった。かれは書物を石の下に置いたのである。かれは悵然ちやうぜんとしてまた言った。

「おれは千歳せんざいにして子がなかつたが、今や初めて子を儲けた。おれの死期もいよいよ至つた」

かれはまた、女たちを見まわして、涙を催しながら言った。

「この山は險阻で、かつて人の踏み込んだことのない所だ。上は高くして樵夫きせりなども見えず、下は深くして虎狼怪獸ころうが多い。ここへもし来る者があれば、それは天の導きというものだ」

怪物の話はこれで終った。紇はその宝玉や珍品や婦女らを連れて帰ったが、婦女のうちには我が家を知っていて、無事に戻る者もあつた。紇の妻は一年の後に男の子を生んだが、その容貌は父に肖にていた。

紇は後に陳ちんの武帝ぶていのために誅せられたが、彼は平素から江総こうそうと仲がよかつた。江総は紇の子の聡明なるを愛して、常に自分の家に留めて置いたので、紇のほろびる時にもその子は難をまぬかれた。生長の後、その子は果たして文学に達し、書を善くし、名声を一代に知られた。

(白猿伝)

女侠

唐の貞元年中、博陵はくりようの崔慎思さいしんしが進士しんしに挙げられて上京したが、京に然るべき第宅ていたくがないので、他人の別室を借りていた。家主は別の母屋おもやに住んでいたが、男らしい者は一人も見えず、三十ぐらいの容貌きりようのよい女と唯ふたりの女中がいるばかりであつた。崔は自分の意を通じて、その女を妻にしたいと申し入れると、彼女は答えた。「わたくしは人に仕えることの出来る者ではありません。あなたとは不釣合いです。

なまじいに結婚して後日の恨みを残すような事があつてはなりません」

それでは妾めかけになつてくれと言つと、女は承知した。しかも彼女は自分の姓を名乗らなかつた。そうして二年あまりも一緒に暮らすうちに、ひとりの子を儲けた。それから数月の後、ある夜のことである。崔は戸を閉じ、帷とほりを垂れて寝しんに就くと、夜なかに女の姿が見えなくなつた。

崔はおどろいて、さては他に姦夫かんぶがあるのかと、憤怒いかりおりに堪えぬままに起き出でて室外をさまよつている時、おぼろの月のひかりに照らされて、彼女は屋上から飛び降りて来た。白の練絹を身にまとい、右の手には、匕首あいくち、左の手には一人の首をたずさえているのである。

「わたくしの父は罪なくして郡守に殺されました。その仇を報ずるために、城中に入り込んで数年を送りましたが、今や本意を遂げました。ここに長居は出来ません。もうお暇いとまをいただきます」

彼女は身支度して、かの首をふくろに収め、それを小脇にかかえて言った。

「わたくしは二年間あなたのお世話になりました。幸いに一人の子を儲けました。この住居も二人の奉公人もすべてあなたに差し上げますから、どうぞ子供の養育を願います」

男に別れて牆かきを越え、家を越えて立ち去つたので、崔も暫くはただ驚嘆するのみ

であつた。やがて女はまた引つ返して来た。

「子供に乳をやつて行くのを忘れましたから、ちよつと飲ませて来ます」

彼女は室内にはいつたが、やや暫くして出て来た。

「乳をたんと飲ませました」

言い捨てて出たままで、彼女はかさねて帰らなかつた。それから時を移しても、赤児あかこの啼く声がちつとも聞えないので、崔は怪しんでうかがうと、赤児もまた殺されていた。

その子を殺したのは、のちの思いの種を断つためであろう。昔の侠客もこれには及ばない。

(原化記)

靈鏡

唐の貞元年中、漁師十余人が数艘そうの船に小網を載せて漁に出た。蘇州そしゅうの太湖たいこうが松江に入るところである。

網をおろしたがちつとも獲物えものはなかつた。やがて網にかかつたのは一つの鏡で、

しかもさのみに大きい物でもないので、漁師はいまいましたがって水に投げ込んだ。それから場所をかえて再び網をおろすと、又もやかの鏡がかかったので、漁師らもさすがに不思議に思つて、それを取り上げてよく視ると、鏡はわずかに七、八寸であるが、それに照らすと人の筋骨から臟腑まではつきりと映つたので、最初に見た者はおどろいて気絶した。

ほかの者も怪しんで鏡にむかうと、皆その通りであるので、驚いて倒れる者もあり、嘔吐はきけを催す者もあつた。最後の一人は恐れて我が姿を照らさず、その鏡を取つて再び水中に投げ込んでしまった。彼は倒れている人びとを介抱して我が家へ歸つたが、あれは確かに妖怪であろうと言ひ合つた。

あくる日もつづいて漁に出ると、きようは網に入る魚が平日の幾倍であつた。漁師のうちで平生から持病のある者もみな全快した。故老の話によると、その鏡は河や湖水のうちに在つて、数百年に一度あらわれるもので、これまでも見た者があつた。しかもそれが何の精であるかを知らないという。

(同上)

白鉄余は延州の胡人（西域の人）である。彼は邪道をもつて諸人を惑わしていたが、深山の柏の樹の下に銅の仏像を埋め、その後数年、そこに草が生えたのを見ずまして、土地の人びとを欺いた。

「昨夜わたしが山の下を通ると、仏のひかりを見た。日をさだめて精進潔齋をして、尊い御仏を迎えることにしたい」

定めの日には数百人をあつめて、ここらという所を掘りかえしたが、仏は見付からなかつた。彼はまた言った。

「諸人が誠心をささげて布施物を供えなければ、仏の姿を拝むことは出来ない」

集まっている男女はあらそつて百余万錢を供えると、彼はさきに埋めたところを掘り起して、一体の仏像を示した。その噂が四方に伝わつて、それを拝ませてくれという者が多くなると、彼はまた宣言した。

「尊い御仏を拝むと、万病が本復する」

その計略成就して、数百里のあいだの老若男女がみな集まつた。そこで、紫や緋や黄の綾絹をもつて幾重にも仏像をつつみ、拝む者があれば先ずその一重を剥いて見せる。一回の布施が十萬錢、その正体を拝むまでには幾十萬錢に及ぶのであつた。こんな詭計を用いているうちに、一、二年の後には土地の者がみな彼に帰伏した。

彼は遂に乱をおこして、みずから光王こうおうと称し、もろもろの官職を設け、長吏ちやうりを置き、諸国の禍いをなすこと数年に及んだので、朝廷は將軍程務挺ていむていに命じてこれを討たしめ、かれらをほろぼして光王を斬った。

(朝野僉載)

孝子

東海かくじゆんに郭純かくじゆんという孝子があつた。母を喪うしなつて彼は大いに哭こくした。その哭なすること、鳥の群れがたくさん集まつて来るのである。官から使者を派して取調べさせる、と、果たしてその通りであつたので、彼は孝子として村の入口に表彰された。

後に聞くと、この孝子は哭なするごとに、地上に餅もちを撒まき散らして鳥にあたえた。それが幾たびも続いたので、その泣き声を聞きつけると、鳥の群れは餅もちを拾うために集まつて来たのであつた。

(同上)

壁龍

柴紹さいしやうの弟なにかしは身も軽く、足も捷はやく、どんな所へでも身を躍らせてのぼるばかりか、十余歩ぐらひは飛んで行つた。

唐の太宗皇帝たいそうが彼に命じて長孫無忌ちやうそんむき（太宗の重臣）の鞍を取つて来いと言つた。同時に無忌にも内報して、取られないように警戒しろと注意した。その夜、鳥のよなものが無忌の邸内に飛び込んで、二つの鞍を二つに切つて持ち去つた。それ逃がすなど追いかけたが、遂に捉え得なかつた。

帝はまたかれに命じて丹陽公主たんやうこうしゆ（公主Ⅱ皇女）の枕を取つて来いと言つた。それは金をちりばめた函はこ付きの物である。かれは夜半にその寢室へ忍び入つて、手をもつて睡眠中の公主の顔を撫でた。思わず頭をあげるあいだに、かれは他の枕と掬すりかえて来た。公主は夜の明けるまでそれを覚らなかつた。

又ある時、彼は吉莫靴かわくつをはいて、石瓦の城に駈けあがつた。城上の墻かきには手がかりがないので、かれは足をもつて仏殿の柱を踏んで、檐のきさきに達し、さらに椽たるきを攀よじて百尺の楼閣に至つた。実になんの苦もないのである。太宗帝は不思議に思つた。「こういう男は都の近所に置かない方がよい」

彼は地方官として遠いところへ遷うつされた。時の人びとは彼を称して壁龍へきりゆうといった。

太宗は又かつて長孫無忌に七宝帯を賜わつた。そのあたい千金である。この当時、段師子だんししと呼ばれる大泥坊があつて、屋上の椽のあいだから潜り込んで無忌の枕もとに降り立つた。

「動くと、命がありませんぞ」

彼は白刃を突き付けて、その枕の函の中から七宝帯を取り出した。更にその白刃を床に突き立てて、それを力に飛びあがつて、ふたたび元の椽のあいだから逃げ去つた。

(同上)

登仙奇談

唐の天宝年中、河南てんぽう緱子かなんこうし県の仙鶴せんかく観には常に七十余人の道士が住んでいた。いづれも専ら修道を怠らない人びとで、未熟の者はここに入ることが出来なかつた。

ここに修業の道士は、毎年九月三日の夜をもつて、一人は登仙とうせんすることを得るといふ旧例があつた。

夜が明ければ、その姓名をしるして届け出るのである。勿論、誰が登仙し得るか

判らないので、毎年その夜になると、すべての道士らはみな戸を閉じず、思い思いに独り歩きをして、天の迎いを待つのであった。

ちようけつちゆう
張竭忠がここの県令となつた時、その事あるを信じなかつた。そこで、九月三日の夜二人の勇者に命じて、武器をたずさえて窺わせると、宵のあいだは何事もなかつたが、夜も三更さんこうに至る頃、一匹の黒い虎が寺内へ入り来たつて、一人の道士をくわえて出た。それと見て二人は矢を射かけたが中あたらなかつた。しかも虎は道士を捨てて走り去つた。

夜が明けて調べると、昨夜は誰も仙人になつた者はなかつた。二人はそれを張に報告すると、張は更に府に申し立てて、弓矢の人数をあつめ、仙鶴観に近い太子陵の東にある石穴のなかを獵あさると、ここに幾匹の虎を獲た。穴の奥には道士の衣冠や金簡のたぐい、人の毛髪や骨のたぐいがたくさんに残つていた。これがすなわち毎年仙人になつたという道士の身の果てであつた。

その以来、仙鶴観に住む道士も次第に絶えて、今は陵を守る役人らの住居となつてゐる。

蔣武

唐の宝曆年中、循州河源に蔣武という男があつた。骨格たくましく、豪胆剛勇の生まれで、山中の巖窟に独居して、狩猟に日を送つていた。彼は蹶張を得意とし、熊や虎や豹が、その弦音に応じて斃れた。蹶張というのは片足で弓を踏ん張つて射るのである。その鏃をあらためると、皆その獣の心をつらぬいていた。

ある時、甚だ忙がしそうに門を叩く者があるので、蔣は扉を隔ててうかがうと、一匹の猩々が白い象にまたがつていた。蔣は猩々がよく人の言葉を語ることを知つていたので、内から訊いた。

「象と一緒に来たのはどういふわけだ」

「象に危難が逼つて居ります。わたくしに人間の話が出来るといふので、わたくしを乗せてお願いに出たのでございます」と、猩々は答えた。

「その危難のわけを言え」と、蔣はまた訊いた。

「この山の南二百余里のところに、天にそびゆる大きい巖穴がございませ」と、猩々は言った。「そのなかに長さ数百尺の巴蛇が棲んで居ります。その眼はいなずまのごとく、その牙はつるぎの如くで、そこを通る象の一群はみな呑まれたり噬まれます。その難に遭うもの幾百、もはや逃げ隠れるすべもありません。あなたが弓

矢を善くするのを存じて居りますので、どうぞ毒矢をもってかれを射殺して、われわれの患うれいを除いて下されば、かならず御恩報おんほうじをいたします」

象もまた地にひざまずいて、涙を雨のごとくに流した。

「御承知ならば、矢をたずさえてお乗り下さい」と、猩猩はうながした。

蔣は矢に毒を塗って、象の背にまたがった。行けば果たして巖の下に二つの眼が輝いて、その光りは数百歩を射るのであった。

「あれが蛇の眼です」と、猩猩は教えた。

それを見て、蔣も怒った。彼は得意の蹶張をこころみて、ひと矢で蛇の眼を射ると、象は彼を乗せたままで奔はしり避けた。やがて巖穴のなかでは雷の吼えるような声がして、大蛇だいじやは躍り出たのたち廻ると、数里のあいだの木も草も皆その毒気に焼けるばかりであった。蛇は狂い疲れて、日の暮れる頃に仆たふれた。

それから穴のあたりを窺うと、そこには象の骨と牙とが、山のように積まれている。十頭の象があらわれて来て、その長い鼻あかで紅い牙一枚ずつを捲いて蔣に献じた。それを見とどけて、猩猩も別れて去った。蔣は初めの象に牙を積んで帰ったが、後にその牙を売って大いに資産を作った。

笛師

唐の天寶の末に、安祿山あんろくざんが乱をおこして、潼関とうかんの守りも敗れた。都の人びとも四方へ散乱した。梨園りえんの弟子ていしのうちに笛師ふえしがあつて、これも都を落ちて終南山しゅうなんざんの奥に隠れていた。

そこに古寺があつたので、彼はそこに身を忍ばせていると、ある夜、風清く月明らかであるので、彼はやるかたもなき思いを笛に寄せて一曲吹きすさむと、嚙唳りゅうりょうの声は山や谷にひびき渡つた。たちまちにそこへ怪しい物がはいつて来た。かしらは虎で、かたちは人、身には白い着物を被きていた。

笛師はおどろき懼おそれて、階をくだつて立ちすくんでいると、その人は言った。

「いい笛の音ねだ。もつと吹いてくれ」

よんどころなしに五、六曲を吹きつづけると、その人はいい心持そうに聴きほれていたが、やがておおいびきで寝てしまった。笛師はそつと抜け出して、そこらの高い樹きの上に攀よじ登ると、枝や葉が繁さかつていたので、自分の影をかくすに都合がよかつた。やがてその人は眼をさまして、笛師の見えないのに落胆らくたんしたらしく、大きい溜め息をついた。

「早く喰わなかつたので、逃がしてしまつた」

彼は立つて、長くうそぶくと、暫くして十数頭の虎が集まつて来て、その前にひざまずいた。

「笛吹きの小僧め、おれの寝ている間に逃げて行つた。路を分けて探して来い」と、かれは命令した。

虎の群れはこころ得て立ち去つたが、夜の五更ごこうの頃に歸つて来て、人のように言つた。

「四、五里のところを探し歩きましたが、見付かりませんでした」

その時、月は落ちかかつて、斜めに照らす光りが樹の上の人物を映し出した。それを見てかれは笑つた。

「貴様は雲かすみと消え失せたかと思つたが、はは、此処ここにいたのか」

かれは虎の群れに指図して、笛師を取らせようとしたが、樹が高いので飛び付くことが出来ない。かれも幾たびか身を跳らせたが、やはり目的を達しなかつた。かれらもとうとう思い切つて立ち去ると、やがて夜もあけて往来の人も通りかかつたので、笛師は無事に樹から離れた。

担生

昔、ある書生が路で小さい蛇に出逢った。持ち帰って養っていると、数月の後はだんだんに大きくなった。書生はいつもそれを担にないあるいて、かれを担生たんせいと呼んでいたが、蛇はいよいよ長大になって、もう担い切れなくなったので、これを范梈はんぽんの東の大きい沼のなかへ放してやった。

それから四十余年の月日は過ぎた。かの蛇は舟をくつがえすような大蛇だいじやとなつて、土地の人びとに沼の主ぬしと呼ばれるようになった。迂闊に沼に入る者は、かならず彼に吞まれてしまった。一方の書生は年すでに老いて他国にあり、何かの旅であたかもこの沼のほとりを通りかかると、土地の者が彼に注意した。

「この沼には大蛇が棲んでいて人を食いますから、その近所を通らないがよろしゅうございます」

時は冬の最中さなかで、氣候も甚だ寒かったので、今ごろ蛇の出る筈はないと、書生は肯きかずにその沼へさしかかった。行くこと二十里余、たちまち大蛇があらわれて書生のあとを追つて来た。書生はその蛇の形や色を見おぼえていた。

「おまえは担生ではないか」

それを聞くと、蛇はかしらを垂れて、やがてしずかに立ち去った。書生は無事に范県にゆき着くと、県令は蛇を見たかと訊いた。見たと答えると、その蛇に逢いながら無事であつたのは怪しいというので、書生はひとまず獄屋につながれた。結局、彼も妖妄よゆうまうの徒であると認められて、死刑におこなわれることになった。書生は心中大いに憤った。

「担生の奴め。おれは貴様を養つてやったのに、かえつておれを死地におとしいれるとは何たることだ」

蛇はその夜、県城を攻め落して一面の湖みづうみとした。唯その獄屋がくごだけには水が浸ひたさなかつたので、書生は幸いに死をまぬかれた。

天宝の末年に独孤暹どっこせんとという者があつて、その舅しゅうとは范県の県令となつていた。三月三日、家内の者どもと湖水に舟を浮かべていると、子細もなしに舟は俄かに顛覆して、家内大勢がほとんど溺死しそうになつた。

(同上)

汴州べんの西に板橋店ばんきょうてんというのがあった。店の姐さんさんは三娘子さんじょうしといい、どこから来たのか知らないが、三十歳あまりの独り者で、ほかには身内もなく、奉公人もなかった。家は幾間いくまかに作られていて、食い物を売るのが商売であった。

そんな店に似合わず、家は甚だ富裕であるらしく、驢馬ろばのたぐいを多く飼っていて、往来の役人や旅びとの車に故障を生じた場合には、それを牽ひく馬匹ばひつを廉やすく売ってやるので、世間でも感心な女だと褒めていた。そんなわけで、旅をする者は多くここに休んだり、泊まったりして、店はすこぶる繁昌した。

唐の元和年中げんなん、許州きよの趙季和ちゆうきわという旅客が都へ行く途中、ここに一宿いっしゆくした。趙よりも先に着いた客が六、七人、いずれも榻とらに腰をかけていたので、あとから来た彼は一番奥の方の榻に就いた。その隣りは主婦あめじの居間であつた。

三娘子は諸客に対する待遇すこぶる厚く、夜ふけになつて酒をすすめたので、人びとも喜んで飲んだ。しかし趙は元来酒を飲まないもので、余り多くは語らず笑わず、行儀よく控えていると、夜の二更(午後九時—十一時)ごろに人びとはみな酔い疲れて眠りに就いた。三娘子も居間へかえつて、扉を閉じて灯を消した。

諸客はみな熟睡しているが、趙ひとりには眠られないので、幾たびか寝返りをしていくうちに、ふと耳に付いたのは主婦の居間で何かごそごそいう音であつた。それは生きている物が動くように聞えたので、趙は起きかえつて隙間から窺うと、ある

じの三娘子は或るうつわを取り出して、それを蠟燭の火に照らし視た。さらに手箱のうちから一具の鋤鋤と、一頭の木牛と、一個の木人とを取り出した。牛も人も六、七寸ぐらいの木彫り細工である。それらを籠の前に置いて水をふくんで吹きかけると、木人は木馬を牽き、鋤鋤をもって牀の前の狭い地面を耕し始めた。

三娘子はさらにまた、ひと袋の蕎麦の種子を取り出して木人にあたえると、彼はそれを播いた。すると、それがまた、見るみるうちに生長して花を着け、実を結んだ。木人はそれを刈つて踐んで、たちまちに七、八升の蕎麦粉を製した。彼女はさらに小さい臼を持ち出すと、木人はそれを搗いて麵を作った。それが済むと、彼女は木人らを元の箱に収め、麵をもって焼餅数枚を作った。

暫くして雞の聲がきこえると、諸客は起きた。三娘子はさきに起きて灯をともし、かの焼餅を客にすすめて朝の点心とした。しかし趙はなんだか不安心であるので、何も食わずに早々出発した。彼はいったん表へ出て、また引返して戸の隙から窺うと、他の客は焼餅を食い終らないうちに、一度に地を蹴つていなないた。かれらはみな変じて驢馬となったのである。三娘子はその驢馬を駆つて家のうしろへ追ひ込み、かれらの路銀や荷物をことごとく巻き上げてしまった。

趙はそれを見ておどろいたが、誰にも秘して洩らさなかつた。それからひと月あまりの後、彼は都からかえる途中、再びこの板橋店へさしかかったが、彼はここへ

着く前に、あらかじめ蕎麦粉の焼餅を作らせた。その大きさは前に見たと同様である。そこで、なにげなく店に着くと、三娘子は相変らず彼を歓待した。

その晩は他に相客がなかったので、主婦はいよいよ彼を丁寧に取り扱った。夜がふけてから何か御用はないかとたずねたので、趙は言った。

「あしたの朝出発のときに、点心てんしんを頼みます……」

「はい、はい。間違いなく……。どうぞごゆるりとおやすみください」

こう言つて、彼女は去つた。

夜なかに趙はそつと窺うと、彼女は先夜と同じことを繰り返していた。夜があけると、彼女は果物と、焼餅数枚を皿に盛つて持ち出した。それから何かを取りに行つた隙をみて、趙は自分の用意して来た焼餅一枚を取り出して、皿にある焼餅一枚と掬すり換えて置いた。そうして、三娘子を油断させるために、自分の焼餅を食つて見せたのである。

いざ出発というときに、彼は三娘子に言った。

「実はわたしも焼餅を持っています。一つたべて見ませんか」

取り出したのはさきに掬りかえて置いた三娘子の餅である。

彼女は礼をいって口に入れると、忽ちにいなないて驢馬に変じた。それはなかなか壮健な馬であるので、趙はそれに乗つて出た。ついでにかの木人と木牛も取つて

来たが、その術を知らないの、それを用いることが出来なかつた。

趙はその驢馬に乗つて四方を遍歴したが、かつて一度もあやまちなく、馬は一日に百里を歩んだ。それから四年の後、彼は関に入つて、華岳廟の東五、六里のところへ来ると、路ばたに一人の老人が立っていて、それを見ると手を拍つて笑つた。

「板橋の三娘子、こんな姿になつたか」

老人はさらに趙にむかつて言つた。

「かれにも罪はありますが、あなたに逢つては堪まらない。あまり可哀そうですから、もう赦してやつてください」

彼は両手で驢馬の口と鼻のあたりを開くと、三娘子はたちまち元のすがたで跳り出た。彼女は老人を押し終つて、ゆくえも知れずに走り去つた。

録異記

第六の男は語る。

「わたくしの役割は五代という事になっていきます。昔から五代乱離といいまして、なにしろ僅か五十四年のあいだに、梁、唐、晋、漢、周と、国朝が五たびも変ったような混乱時代でありますので、文芸方面は頗る振わなかつたようです。しかしまた一方には、五代乱離といえどもみな国史ありといわれていまして、皆それぞれの国史を残している位ですから、文章まつたく地に墜おちたというのではありません。したがって、国史以外にも相当の著述があります。

さてそのなかで、今夜の御注文に応じるには何がよかろうかと思案しました末に、まずこの『録異記』をえらむことにしました。作者は蜀しよくの杜光庭とこうていであります。杜光庭は方士ほうしで、学者で、唐の末から五代に流れ込み、蜀王の昶しやうに親任された人物です。申すまでもなく、この時代の蜀は正統ではありません、乱世に乗じて自立したものですから、三国時代の蜀と区別するために、歴史家は偽蜀などと呼んでいます。その偽蜀に仕えていたので、杜光庭の評判はあまり好くないようですが、単に作物さくぶつとして見る時は、この『録異記』などは五代ちゆうでも屈指の作として知られています。彼はこのほかに『神仙感遇伝』『集仙録』などの著作があります。これから紹介いたしますのは、『録異記』八巻の一部と御承知ください」

劍利門けんりもんに蛇がいる。長さは三尺で、その大きいのは甕かめのごとく、小さいのも柱の如く、かしらは兎、からだは蛇で、うなじの下が白い。かれが人を害せんとする時は、山の上からくるくと廻転しながら落ちて来て、往来の人を噛むのである。そうして、人の腋の下を啖くいて破つてその穴から生血を吸う。この蛇の名を板鼻はんびといい、常に穴のなかにひそんで、その鼻を微かにあらわしている。鳴く声は牛の吼えるようにで数里の遠きにきこえ、大地も為に震動する。住民が冬期に田を焼く時、あるいは誤まつて彼を焼き殺すことがあるが、他の蛇に比して脂が多いのみである。

乾符年中けんぷのことである。神仙しんせん駅に巨きい蛇が出た。黒色で、身のだけは三十余丈、それにしたかう小蛇の太さは椽たるきのごとく、柱のごとく、あるいは十石こく入り又は五石入りの甕かめのごときもの、およそ幾百匹、東から西へむかつて隊を組んで行く。朝の辰たうどき（午前七時―九時）に初めてその前列を見て、夕の酉とりどき（午後五時―七時）にいたる頃、その全部がようやく行き尽くしたのであつて、その長さ実に幾里であるか判らない。その隊列が終らんとするところに、一人の小児こどもが紅い旗を持ち、蛇の尾の上に立って踊りつ舞いつ行き過ぎた。この年、山南の節度使せつどしの陽守亮やうしゆりやうが敗滅した。

会稽山かいけいざんの下に雞冠蛇けいかんだというものが棲すんでいる。かしらには雄雞おんどりのような雞冠とさかがあつて、長さ一尺あまり、胴たうまわり五、六寸。これに撃たれた者はかならず死ぬのである。

爆身蛇ぼくしんだというのがある。灰色で、長さ一、二尺、人の路ゆく声を聞けば、林の中から飛び出して来て、あたかも枯枝が横に飛ぶように人を撃つ。撃たれた者はみな助からない。

黄願蛇おうがんだは長さ一、二尺、黄金のような色で、石のひだのうちにひそんでいる。雨が降る前には牛のように吼ほえる。これも人を撃つて殺すもので、四明山しめいざんに棲すんでいる。

異材

唐の大尉たいじゆう、李徳裕りとくゆうの邸うちへ一人の老人がたずねて来た。老人は五、六人に大木を昇かかせていて、御主人にお目通りを願うという。門番もこぼみかねて主人に取次ぐと、李公も不思議に思つて彼に面会を許した。

「わたくしの家では三代前からこの桑の木を家宝として伝えて居ります」と、老人は言った。「しかしわたくしももう老年になりました。うけたまわれれば、あなたはいろいろの珍しい物をお蒐あつめになつてゐるそうでございますから、これを献上したい

と存じて持参いたしました。この木のうちには珍しい宝がございまして、上手な職人に伐らせれば、必ずその宝が見いだされます。洛邑らくいふにその職人が居りますが、その年頃を測ると余ほどの老人になつて居りまして、あるいはもうこの世にいないかも知れません。それでも子孫のうちには、その道を伝えられている者があるうと思ひます。いずれにしても、洛に住む職人でなければ、これを伐ることは出来ません」

李公は受取つて、その老人を歸した。それから洛中をたずねさせると、かの職人は果たして死んだあとであつた。その子が召されて来て、暫くその木材を睨にらんでいたが、やがてよろしゆうございまして引き受けた。

「これはしづかに伐らなければなりません」

その言う通りに切り開いて、二面めんの琵琶の胴を作らせたが、その面おもてには自然に白いはと鴿があらわれていて、羽から足の爪に至るまで、巨細こさいことごとく備わっているのも不思議であつた。ただ、職人が少しの手あやまちで、厚さ幾分のむらが出来たために、一羽の鴿はその翼つばさを欠いたので、李公はその完全なものを宮中に献じ、他の一面を自分の手もとにとどめて置いた。それは今も伝わつて民間にある。

洪州こうしゅうの北くわいぎかいの大たい王おう埠ぶに胡こという家けがあつた。家けはもと貧ひんしかつたが、五人の子のうちで末ぼつし子は姿すがたも心こころもすぐれていて、この子が生まれてからは、その家けがだんだんに都合ごうごがよくなくて、百姓ひやくしやう仕事しごとも繁さか栄えいにむかい、家計けけいもいよいよ豊ゆたかかになつたので、近所きんじよの者ものも不思議ふしぎがあつていた。

ある時とき、その家けでは末ぼつし子こに言いいつけて、舟ふねにたくさんの麦あへを積たみ込こみ、流ながれにさかのぼつて州しゅうの市いちへ送おくらせると、その途中ちゆうちゆうの河岸けがしに険けわしい所ところがあつて、牽ひき舟ふねは容易やすに通とほじない。よんどころなく江えを突つつ切きつて進すすんでゆくと、やがて岸きに着ついた時ときに、船ふねの勢いきほいを止とめるにも止とめられず、あわやという間まに突つき当あつて、洲しゅうはくだけ、岸きはくずれた。

その崩くずれれた穴あなから数かず百万ひゃくまんの錢ぜにが発は見みされたので、麦あへなどはもうどうでもいい。麦あへはみな投なげ捨すてて、その錢ぜにを積たんで帰かへつた。

それによつて、その家けはますます富とみみ、奉公人ほうこうにんや馬うまなどを持もつて、衣服いふくも着飾ちやくしやくるようになつた。

「この子こには福ふくがある。長ながく村落ちゆうらくに蟄ひそんでいるよりも、城中じゆうちゆうの町まちに往復わうふくさせて、世間よこしまのことを見習みならわせるがよからう」

そこで、その末ぼつし子こがで出でてゆくと、途みち中ちゆうちゆうで乗のつている馬うまが進すすまなくなつた。馬うまは地面ぢめんを踏ふんだままで動うごかないのである。彼かれは僕しもべを見みかえつて言いつた。

「いつかは船の行き着いた所で銭を得たから、今度も馬の踏みとどまった所に、なにか掘出し物があるかも知れない」

地を掘ると、果たして金五百両を得たので、自分の家へ持って帰った。

その後には彼は城中の町へゆくと、胡人の商人に逢った。商人はその頭に珠のあることを知って、人をもって彼を誘い出させた。そうして、たがいに打ち解けた隙をみて、彼は酒をすすめ、その酔っている間に珠を奪い去った。その末子のひたいには、生まれた時から一つの毬を割ったような肉が突起していたのであるが、珠を失うと共に、その肉は落ちてしまった。

家へ帰ると、その変った顔を見て、家族や友達も皆おどろいた。その以来、彼は精神朦朧のていで、やがて煩い付いて死んだ。その家計もまた次第におとろえた。

これと同様の話がある。

宣州の節使趙鏗もまた額の上に一塊の肉が突起しているので、珠があるのではないかと疑われていた。やがて淮南軍のために郡県を攻略され、趙も乱兵のために殺された。その時、ある兵卒が趙の首をさがし求めて、そのひたいを割いてみると果たして珠を得た。

兵卒はその珠を持ち去って、胡人の商人に売ろうとすると、商人は言った。

「この珠はもう死んでいるから、役に立たない」

そこで、塑像そぞうを作る人に安く売って、仏像のひたいの珠に用いるのほかはなかつた。

異姓

永平えいへい初年のことである。姓は王おう、名は恵進けいしんという僧があつた。

彼は福感寺ふくかんに住んでいたが、ある朝、わが寺を出て資福院しふくいんという寺をたずねると、その門前に一人の大男が突つ立っていた。

男はからだの大きいばかりでなく、その全身の色が藍あゐのようであつたが、恵進を見て突然に追い迫つて来たので、僧は恐れて逃げまわつた。竹箆橋ちくへききょうまで逃げて来て、そこらの民家へ駆け込むと、男もつづいて追い込んで、僧を捉えて無理無体に引き摺ひつて行こうとして、どうしても放さなかつた。

僧は悲鳴をあげて救いを祈ると、その男は訊いた。

「おまえの姓はなんというのだ」

「王といひます」

「王か。名は同じだが、姓が違っている」

言い捨てて男は立ち去つた。しかも僧は顫ふるえがやまらないので、暫くその民家に

休ませてもらつて、ようよう気が鎮まったのちに我が寺へ帰ると、彼と同名異姓の僧がその晩に死んだ。

異亀

唐の玄宗帝の時に、ある方士ほうしが一頭の小さい亀を献上した。亀はさしわたし一寸ぐらいで、金色の可愛らしい物であつた。

「この亀は神のごとくで、物なども食いません。これを枕の筒はしのなかに入れて置けば、うわばみの毒を避けることが出来ます」と、方士は言つた。

それから間もなく、帝の恩寵をこうむっている宦者かんじやが何か親族の罪に連坐れんざして、遠い南の国へ流しやられることになつた。帝は不憫に思つたが、法を枉まげて彼を免すことを好まないで、ひそかにその亀を彼にあたえた。

「南方の僻地へきちには大蛇が多い。常にこの亀をそばに置いて、害を防げ」

宦者がありがたく頂戴して出た。そうして、南へくだる途中、象郡のある村に着いた。町も旅館もひっそりしていて、宿には他の泊まり客もなく、自分の食膳も馬のまぐさも部屋のももしびもみな不自由なしに整えられた。

その夜は昼のような明月であつたが、しかも雨風の声が遠くきこえた。その声が

だんだんに近づいて来るので、宦者はここぞと思つて、かの亀を取り出して階上に置くと、やや暫くして亀は首を伸ばして一道の氣を吐いた。その氣はかんむりの紐ぐらいの太さで、まっすぐに三、四尺ほどあがつて徐々に消え失せた。その後は亀も常のごとくに遊んでいて、先にきこえた風雨の声もやんだ。

夜が明けると、馱の役人らもおいおいに出て来て、庭前に拝礼した。

「昨日あなたがお出でになるのを知つて、打ち揃つてお迎ひに出る途中、あやまつて一匹の蛇を殺しました。それは報冤蛇ほうえんだで、今夜きつとその祟りを受けるに相違ないので、あたりの者はみな三十里五十里の遠方へ立ち退いて、その毒氣を避けましたが、わたくしどもは遠方まで立ち去らず、近所の山の岩窟にかくれて夜の明けるのを待つて居りました。唯今これへ来て見れば、あなたはつつがなく一夜をおすごしなされた御様子、これは神の助けと申すもので、人間の力では及ばない事でございます」

そのうちに往来の人もだんだんに来た。その話によると、これからさきの道にあつて、十数頭のうわばみが総身くずれただれて死んでいたという。その以来、こころに報冤蛇の跡を絶つたが、その子細しさいは誰にも判らなかつた。

一年の後、宦者は赦されて長安の都に歸つた。彼は金の亀を返上して、泣いて感謝した。

「このお蔭に因りまして、わたくし一人の命ばかりでなく、南方ぜんたいの人間が永く毒類の禍いを逃がれることになりましたのは、一に聖徳、二に神亀の力でございます」

異洞

乾符年中の事、天台の僧が台山の東、臨海県のさかいに一つの洞穴を発見したので、同志の僧と二人連れで、その奥を探りにはいった。初めの二十里ほどは路が低く狭く、ぬかるみのような所が多かったが、それからさきは次第に闊く平らかな路になって、さらに山路にさしかかった。

山は十里ほどで、それを越えると町へ出た。町のすがたも住む人びとも、世間普通と変ることはなかった。この僧は気を吸うことを習っていたので、別に飢えも渴きも感じなかったが、連れの僧はひどく飢えて来た。

そこである食い物店へ行つて食を乞うと、そこにいる人が言った。

「飢渴を忍んで行けば、子細なく還られるが、この土地の物をむやみに食うと、還られなくなるかも知れませんが」

それでも余りに飢えているので、その僧は無理に頼んで何か食わせてもらった。

それからまた連れ立って行くこと十数里、路がだんだんに狭くなって、やがて一つの小さい洞穴を見つけたので、それをくぐって出ようとすると、さきに物を食べた僧は立ちながら石に化してしまった。

ひとりの僧は無事に山を出て、ここはどこだと人に訊くと、牟平ぼうへいの海浜であるといわれた。

異石

帝堯ぎやうの時に、五つの星が天から落ちた。その一つは土の精で、穀城山下こくじやうに墜ち、化して匣橋ひびきょうの老人となつて兵書を張良ちやうりやうに授けた。

「この書をよめば帝王の師となる事が出来る。後日にわたしを探し求めるならば、穀城山下の黄いろい石がそれである」

いわゆる黄石公こうせきこうである。張良は漢をたすけて功成るの後、穀城山下に於いて果たして黄石を発見した。彼は商山しやうざんにかくれていた四皓しこうにしたがい、道を学んで世を終つたので、その家では衣冠と黄石とを併せて葬つた。占う者は常にその墓の上に、黄いろい気が数丈の高さにのぼっているのを見た。

漢の末に赤眉せきびの賊が起つた時に、賊兵は張良の墓をあばいたが、その死骸は発見されなかつた。黄いろい石も行くえが知れなかつた。墓の上にあがる黄気もおのずから消え失せた。

異魚

鰈こういぎよ魚は河豚ふぐの一種で、虎斑とらふぐがある。わが鰈とらふぐのたぐいであつて、なま煮えを食えば必ず死ぬと伝えられている。

饒州じょうしゅうに呉ごという男があつた。家は豊かで、その妻の実家も富んでいて、夫婦の仲もむつまじく、なんの欠けたところもなかつた。ところが、ある日のこと、呉が酔つて来て、床の上につぶ倒れてしまった。妻が立ち寄つて、その着物を着換えさせ、履くを脱がせようとして其の足を挙げさせる時、酔っている夫は足をぶらぶらさせて、思わず妻の胸を蹴ると、彼女はそのまま仆たおれて死んだ。夫は酔つていて、なんにも知らないのであつた。

しかし妻の里方さとかたでは承知しない。呉が妻を殴うち殺したといつて告訴に及んだが、この訴訟事件は年を経ても解決せず、州郡の役人らにも処決することが出来ないの
で、遂に上聞じょうもんに達することになって、呉を牢獄につないで朝廷の沙汰を待つていた。

呉の親族らはそれを聞いて懼れた。上聞に達する上は必ず公然の処刑を受けるに相違ない。そうなつては一族全体の恥辱であるといふので、差し入れの食物のうちにかの鰻鱈魚の生き鱈なますを入れて送つた。呉がそれを食つて獄中で自滅するように計つたのである。しかも呉はそれを食つても平氣であつた。親族らはしばしばこの手を用いたが、遂に彼を斃たおすことが出来なかつたのみか、却つてますます元氣を増したように見えた。

そのうちにあたかも大赦たいしやに逢つて、呉は赦されて家に歸つた。その後も子孫繁昌して、彼は八十歳までも長命して天寿をまつとうした。この魚はなま煎なまえを食つてさえも死ぬといふのに、生のままでしばしば食つても遂に害がなかつたのは、やはり一種の天命といふのであろうか。

稽神錄

第七の女は語る。

「五代を過ぎて宋に入りますと、まず第一に『太平広記』五百卷という大物がございます。但しこれは宋の太宗の命によつて、一種の政府事業として李昉らが監修のもとに作られたもので、汎く古今の小説伝奇類を蒐集したのでありますから、これを創作と認めるわけには参りません。そこで、わたくしは自分の担任として『稽神録』について少々お話をいたしたいと存じます。『稽神録』の作者は徐鉉であります。徐鉉は五代の当時、南唐に仕えて金陵に居りましたが、南唐が宋に併合されると共に、彼も宋朝に仕うる人となつて、かの『太平広記』編集者の一人にも加へられて居ります。兄弟ともに有名の学者で、兄の徐鉉を大徐、弟の徐鉉を小徐といひ伝えてゐるそつでございます。女のくせに、知つたか振りをいたすのは恐れ入りですから、前置きはこのくらいにして、すぐに本文に取りかかることに致します」

廬山の廟

庚寅の年、江西の節度使の徐知諫という人が錢百万をもつて廬山使者の廟を修繕することになりました。そこで、潯陽の呉令が一人の役人をつかわして万事を取扱わせると、その役人は城中へはいつて、一人の画工を召出して、自分と一緒に連れ

て行きました。

画工は画の具その他をたずさえて、役人に伴われて行きますと、どういうわけか、城の門を出る頃からその役人はただ昏昏として酔えるが如きありさまで、自分の腰帯をはずして地に投げ付けたりするのです。

「この人は酔っているのだな」と、画工は思いました。

そこで忤さからわずに付いてゆくと、役人はやがてまた、着物をぬぎ、帽子をぬぐという始末で、山へ登る頃にはほとんど赤裸あかはだかになってしまいました。そうして、廟に近い溪川たにがわのほとりまで登って来ますと、一人の卒そくが出て参りました。卒は青い着物をきて、白い皮で膝を蔽っていましたが、つかつかと寄って来て、かの役人を捕えるのです。

「この人は酔っているのですから、どうぞ御勘弁を……」

こう言つて、画工が取りなすと、卒は怒つて叱り付けました。

「おまえ達に何がわかるか。黙っている」

卒は遂に彼を捕虜とりこにして、川のなかに坐らせました。その様子が唯ただの人らしくないと思つたので、画工は走つて廟中の人びとに訴えたと、大勢が出て来ました。見ると、卒の姿はいつか消え失せて、役人だけが水のなかに坐っているのです。声をかけても返事がないので、更によく見ると、彼はもう死んでいるのでした。あとに

なつて帳簿を調べてみると、彼は修繕の錢百万の半分以上を着服ちやくくしていることが判りました。

夢に火を吹く

張易ちやうえきという人が洛陽にいた時に、劉りゆうにながしと懇意になりました。劉は仕官もせず暮らしている男でしたが、すこぶる奇術を善くするのです。

ある時、劉が町の人に銀を売ると、その人は満足みたに値あいを支払わないのです。そこで、劉は張と連れ立ってその催促にゆくと、彼はそれを素直すたに支払わないばかりか、種々の難癖なんへきをつけて逆捻さかぬじに劉を罵りました。劉は黙つてそのまま帰つて来ましたが、あとで張に話しました。

「彼は愚人で道理を識らないから、私がすこしく懲らしてやります。さもないと、土地の神靈のために重い罰を受けるようになりますから、彼を懲らすのは彼を救うがためです」

どんな事をするのかと見ていると、劉はその晩、燈火あかりを消した後、自分の寢床の前に炭火をさかんにおこして、なにか一種の薬を焼きました。張は寝た振りをして窺しのっていると、暗いなかに一人の男があらわれて、頻しきりにその火を吹いています。

よく見ると、それはかの町の人でありました。彼は夜の明けるまで火を吹きつづけて、その姿はいつか消え失せてしまいました。

その後、張が町の人の家をたずねると、彼はひどく弱っていました。

「どうも不思議な目に逢いました。このあいだの晩、夢のうちに誰かが来てわたくしを何処へか連れて行って、夜通し火を吹かせられました。しいには息が続かなくなつて、実に弱り果てました。その夢が醒めると、火を吹いていた口唇がひどく腫れあがつて、なんだか息が切れて、十日ばかりは苦しみました」

それを聞いて、張はいよいよ不思議に思いました。

劉はこういう奇術を知っているために、河南の尹を勤めている張全義ちようぜんぎという人に尊敬されていましたが、あるとき張全義が梁の太祖りようそと一緒に食事をしている際に、太祖は魚の鱠なますが食いたいと言ひ出しました。

「よろしゅうございます」と、張全義は答えました。「わたくしの所へまいる者に申し付けば、すぐに御前へ供えられます」

すぐに劉を呼び寄せると、劉は小さい穴を掘らせ、それにいっばいの水を湛たえさせて、しばらく釣竿を垂れているうちに、五、六尾の魚をそれからそれへと釣りあげました。その不思議に驚くよりも、太祖は大いに怒りました。

「こいつ、妖術をもつて人を惑わす奴だ」

背を打たせること二十杖の後、首枷手枷をかけて獄屋につながせ、明日かれを殺すことにしていると、その夜のうちに劉は消えるように逃げ去つて、誰もそのゆえを知ることが出来ませんでした。

桃林の地妖

閩の王審知はかつて泉州の刺史（州の長官）でありましたが、州の北にある桃林という村に、唐末の光啓年中、一種の不思議が起りました。

ある夜、一村の土地が激しく震動して、地下で数百の太鼓を鳴らすような響きがかこえましたが、明くる朝になってみると、田の稲は一本もないのです。試みに土をほり返すと、その稲はみな地中に逆さまに生えていました。

その年、審知は兄の王潮と共に乱を起して晋安に勝ち、ことごとく歐閩の地を占有して、みずから閩王と称することになりました。それから伝うること六十年、延義という人の代に至つて、かの桃林の村にむかしの地妖が再び繰り返されました。やはり一村の地下に怪しい太鼓の音がきこえたのです。但しその時はもう刈り入れが終つたのちで、稲の根だけが残っていたのですが、土を掘ってみると、それが前と同じように、みな地中に逆さまに立っていました。

その年、延義は家来のために殺されて、王氏は滅亡しました。

怪青年

軍吏ぐんりの徐彦成じよげんせいは材木を買うのを一つの商売にしていまして、丁亥ていがいの年、信州しんしゆの
 汭口場せいかうじやうへ材木を買いに行きましたが、思うような買物が見当たらないので、暫くそこ
 に舟ふながかりをしていると、ある日の夕暮れ、ひとりの青年が二人の僕しもべをつれて、岸
 のあたりを人待ち顔に徘徊しているのを見ましたので、徐は声をかけてその三人を
 舟へ呼び込み、有り合わせの酒や肴を馳走すると、青年はひどく気の毒がっている
 ようでしたが、帰るときに徐に言いました。

「わたしはここから五、六里のところにある別荘に住んでいる者です。明日一度お
 遊びにお出で下さいませんか」

「ありがとうございます」

あくる日、約束の通りにたずねて行くと、一里ばかりのところの者に迎いの者が来て
 いました。馬に乗せられ、案内されると、やがて大きい邸宅の前に着きました。か
 の青年も出で迎えて、いろいろの馳走をしてくれた末に、徐が材木を仕入れに来て
 いることを聞いて、青年は言いました。

「それならば私の持っている山に材木がたくさんありますから、早速に伐り出させましょう」

舟へ帰って待っていると、果たして一兩日の後にたくさんの方木を運ばせて来ました。しかも木地が良くて、値が安いので、徐は大喜びで取引をしました。

それでもこの土地にいる必要もないので、徐はさらに暇乞いに行きますと、青年はまた四枚の大きい杉の板を出しました。

「これは売り買いではなく、わたしからお餞別に差し上げるのです。呉の地方へお持ちになると、きっと良い御商法になりますよ」

そこで、呉の地方へ舟を廻しますと、あたかも呉の帥が死んで、その棺にする杉の板が入用だということになったのですが、その土地にはよい板がない。そこへかの杉を売り込みに行ったので、たちまち買い上げられることになって、一度に数十万銭を儲けました。

徐もその謝礼として、種々の珍しい物を買って込んで、再びかの青年のところへ持参すると、青年もよろこんで再び材木を売ってくれました。

その後にもまた二、三度往復して、徐は大金儲けをしましたが、それから一年ほども間を置いて訪ねてゆくと、もう其の家は見えませんでした。

あんな大きい邸宅がどこへ移転したのかと、近所の里の人びとに聞き合わせると、

初めからそんな家のあつたことさえも知らないというのでした。

鬼国

梁りやうの時、青州せいしゅうの商人が海上で暴風に出逢つて、どことも知れない国へ漂着しました。遠方からみると、それは普通の嶋などではなく、山や川や城もあるらしいのです。

「どこだろう」

「そうですねえ」と、船頭も考えていました。「わたし達も多年の商売で、方々へ吹き流されたこともありませんが、こんな処へは一度も流れ着いたことがありません。なんでもここらの方角きかくに鬼国きこくというのがあると聞いていますから、あるいはそれかも知れません」

なにしろ訪ねてみようというので、人びとが上陸すると、家の作りや田畑のさまは中国とちつとも変わりません。ただ変つていゝのは、途中で逢う人びとに会釈えしやくしても、相手はみな知らない顔をして行き過ぎてしまうのです。むこうの姿はこちらに見えても、こちらの姿はむこうに見えないらしいのです。

やがて城門の前に行き着くと、そこには門を守る人が立っているので、こちらで

は試みに会釈すると、かれらはやはり知らない顔をしているのです。そこで、構わずに城内へはいり込んでゆくと、建物もなかなか宏壯で、そこらを往来している人物もみな立派にみえますが、どの人もやはりこちらを見向きもしないので、ますます奥深く進んでゆくと、その王宮では今や饗宴の最中らしく、大勢の家来らしい者が列坐している。その服装も器具も音楽もみな中国と大差がないのでした。

咎める者がないのを幸いに、人びとは王座のそばまで進み寄つてうかがうと、王は俄かに病いにかかったという騒ぎです。そこで巫女みこらしい者を呼び出して占わせると、かれはこう言いました。

「これは陽地の人が来たので、その陽気に触れて、王は俄かに発病されたのでござります。しかしその人びとも偶然にここへ来合あわせたので、別に祟たりをなすというわけでもござりませんから、食い物や乗り物をあたえて還かえしてやつたらよろしゅうござりましょう」

すぐに酒や料理を別室に用意させたので、人びとはそこへ行つて飲んだり食ったりしていると、巫女をはじめ他の家来らも来て何か祈つているようでした。そのうち馬の用意も出来たので、人びとはその馬に乗つて元の岸へ戻つて来ましたが、初めから終りまで向うの人たちにはこちらの姿が見えなかつたらしいということでした。

これは作り話でなく、青州の節度使賀德儉がとくけん、魏博の節度使楊厚ようこうなどという偉い人びとが、その商人あきさんの口から直接に聴いたのだと申します。

蛇喰い

安陸あんりくの毛もうという男は毒蛇を食いました。食うといつても、酒と一緒に呑むのだからですが、なにしろ変った人間で、蛇喰い又は蛇使いの大道芸人だいでうとなつて諸国を渡りあるいた末に、予章よしょうという所に足をとどめて、やはり蛇を使いながら十年あまりも暮らしていました。

すると、ここに薪たきぎを売る者がありまして、鄱陽はんようから薪を船に積んで来て、黄培山こうはいさんの下に泊まりますと、その夜の夢にひとりの老人があらわれて、わたしが頼むから、一匹の蛇を江西きしの毛もうという蛇使いの男のところへ届けてくれと言いました。そこで、その人は予章へ行つて、毛のありかを探しているうちに、持つて来た薪も大抵は売り尽くしてしまいました。

そのときに一匹の蒼白い蛇が船舷ふなぞこにわだかまつているのを初めて発見しましたが、蛇は人を見てもおとなしくとぐろを巻いたままで逃げようとしません。さてはこの蛇だなど気がついて、それを持つて岸へあがりますと、ようように毛という男の

居どころが判りました。

毛はその蛇を受取つて引き伸ばそうとすると、蛇はたちまちに彼の指を強く噛みましたので、毛はあつと叫んで倒れましたが、それぎりで遂に死んでしまいました。そうして、その死骸は間もなく腐つて頽くずれました。

蛇はどこへ行つたか、そのゆくえは知れなかつたそうです。

地下の亀

李宗リそうが楚州ししの刺史しし（州の長官）となつてゐる時、その郡ちゆうにひとりの尼があらりまして、ある日、町なかをあるいてゐると、たちまち大地に坐つたままで動かなくなりました。おまけに幾日も飲まず食わずにゐるのです。

その訴えを聞いて、李は武士らに言い付けて無理にその尼のからだを引き起して、試みにその坐つてゐた地の下をほり返してみると、長さ五、六尺の大きい亀があらわれました。亀は生きてゐるので、川へ放してやりました。

尼はその後、別条もありませんでした。

建州けんしゅうの梨山りざん廟びやうというのは、もとの宰相りかい李廻りかいを祀まつつたのだと伝えられています。李は左遷させんされて建州の刺史しとなつて、臨川りんせんに終しまりましたが、その死しんだ夜よに、建安けんあんの人たちは彼が白馬に乗つて梨山に入つたという夢をみたので、そこに廟を建てることになつたのだそうです。

呉ごという大将が兵を率しんあんいて晋安しんあんに攻め向うことになりました。呉は新しく鑄いらせ
た劍けんを持もつていまして、それが甚しだよく切れるのです。彼は出陣しゅじんの節ふしに、その劍けんを
たずさえて梨山の廟びやうに参詣さんぎしました。

「どうぞこの劍けんで、手てずから十人の敵てきを斬きり殺ころさせていただきとうございます」と、
彼は神前かみまへに祈いのりました。

その夜の夢に、神のお告つげがありました。

「人は悪い願ねがいをかけられるものではない。しかし私はおまえを祐たすけて、お前が人手に
かからないように救すくつてやるぞ」

いよいよ合戦くわせんになると、呉の軍は大いに敗れて、左右さゆうにいる者もみな散ちりぢりに
なりました。敵てきは隙間ひまなく追おいつめて来きます。

とても逃にげおおせることは出来ないはと覺悟かくごして、呉はかの劍けんをもつてみずから首
を刎はねて死しにました。

金児と銀女

建安の村に住んでいる者が、常に一人の小さい奴を城中の市へ使いに出してしました。

家の南に大きい古塚がありまして、城へ行くにはここを通らなければなりません。奴がそこを通るたびに、黄いろい着物をきた少年が出て来て、相撲を一番取ろうというのです。こつちも年が若いものですから、喜んでその相手になって、毎日のように相撲を取っていました。それがために往復の時間が毎日おくれるので、主人が怪しんで叱りますと、奴も正直にその次第を白状しました。

「よし。それではおれが一緒にゆく」

主人は槌を持って草のなかに忍んでいると、果たしてかの少年が出て来て、奴に相撲をいどむのです。主人が不意に飛び出して打ち据えると、少年のすがたは忽ちに金で作った小児に変わりました。それを持って帰ったので、主人の家は金持になりました。

又一つ、それに似た話があります。

廬州の軍吏蔡彦卿という人が拓阜というところの鎮将となっていました。ある夏

の夜、鎮門の外に出て涼んでいると、路の南の桑林のなかに、白い着物をきた一人の女が舞っているのを見ました。不思議に思つて近寄ると、女のすがたは消えてしまいました。

あくる夜、蔡は杖を持ち出して、その桑林の草むらに潜んでいると、やがてかの女があらわれて、ゆうべと同じように舞い始めたので、彼は飛びかかつて打ち伏すと、女は一枚の白金に変わりました。さらにその辺の土を掘り返すと、数千両の銀が発見されました。

海神

江南の朱廷禹しゆていうという人の親戚なにかしが海を渡るときに難風に逢いまして、舟がもうくつがえりそうになりました。

「それは海の神が何か欲しがっているのですから、ためしに荷物を捨ててごらんなさい」と、船頭が言いました。

そこで、舟に積んでいる荷物を片端から海へ投げ込みましたが、波風はなかなか鎮まりそうもありません。そのうちに一人の女が舟に乗つて来ました。女は絶世の美人で、黄いろい衣きものを着て、四人の従卒に舟を漕がせていましたが、その卒はみな

青い服を着て、朱い髪を散らして、豕のような牙をむき出して、はなはだ怖ろしい形相の者どもばかりでした。

女はこちらの舟へはいつて来て言いました。

「この舟にはいい髻がある筈だから、見せてもらいたい」

こちらは慌てているので、髻などはどうしたか忘れてしまって、舟にあるだけの物はみな捨てましたと答えると、女は頭をふりました。

「いや、舟のうしろの壁ぎわに掛けてある箱のなかに入れてある筈だ」

探してみると、果たしてその通りでした。舟には食料の乾肉が貯えてありましたが、女はそれを取って従卒らに食わせましたが、かれらの手はみな鳥の爪のように見えました。

女は髻を取って元の舟へ乗り移ると、人も舟もやがて波間に隠れてしまいました。波も風もいつか鎮まって、舟は安らかに目的地の岸へ着きました。

海人

東州、静海軍の姚氏がその部下と共に、海の魚を捕って年々の貢物にしています。

ある時、日もやがて暮れかかるのに、一向に魚が捕れないので、困ったものだと思っていると、たちまち網にかかった物がありました。それは一個の真つ黒な人間で、からだじゆうに長い毛が生えていまして、手をこまぬいて突つ立っているのです。おまえは何者だと訊いても、返事をしません。

「これは海人かいじんというものです」と、漁師は言いました。「これが出ると必ず災いがあります。何かの事のないように、いっそ殺してしましましょう」

「いや、これは神霊の物だ。みだりに殺すのは不吉である」

姚は彼をゆるして、祈りました。

「お前がわたしのためにたくさんの魚をあたえて、職務を怠るの罪を免かれるようにしてくれば、まことに神といふべきである」

毛だらけの黒い人間は、退いて水の上をゆくこと数十歩で沈んでしまいました。その明るる日からは例年に倍ばいする大漁でした。

怪獣

李遇りくうが宣武せんぶの節度使となつてある時、その軍政は大将しゅじゆうほんの朱従本にまかせて置きました。朱の家には猴さるを飼つてありましたが、厩うまやの者が夜なかに起きて馬まに秣まぐさをやり

に行くくと、そこに異物を見ました。

それは驢馬ろばのような物で、黒い毛が生えていました。しかも手足は人間のようで、大地に坐つてかの猴を食つていたのでした。人の来たのを見て、かれは猴を捨てましたが、もう半分ほどは食われていました。

その明くる年、李遇の一族は誅せられました。故老の話によると、郡中にはこの怪物が居りまして、軍部に何か異変のあるたびに、かれは姿をあらわします。それが出ると、城中いっばいに忌いひな臭いがするそうです。反乱を起した田でん頼いんが敗れようとする時にも、かの怪物が街なかにあらわれて、夜警の者はそれを見つけましたが、恐れて近寄りませんでした。果たして一年を過ぎないうちに、田は敗れました。

四足の蛇

舒州じょしゅうの人が山にはいつて大蛇を見たので、直ぐにそれを撃ち殺しました。よく見ると、その蛇には足があるので、不思議に思つて背負つて帰ると、途中で県の役人五、六人に逢いました。

「わたしは今この蛇を殺しましたが、蛇には四つの足があるので」
 そう言われても、役人たちには蛇の形が見えないのです。

「その蛇はどこにいるのだ」

「いるではありませんか。これが見えないのですか」

その人は蛇を地面に投げ出すと、役人たちは初めて蛇の形を見ました。その代りに、今度は蛇を見るばかりで、その人の形が見えなくなりました。なにかの怪物に相違ないというので、蛇はそのまま捨てて帰ったそうです。この蛇は生きています。いだに自分の形を隠すことが出来ず、死んでから人の形を隠すというのは、その理屈が判らないと著者も言っています。

小奴

天祐丙子の年、浙西の軍士周交が乱をおこして、大将の秦進忠をはじめ、張胤ら十数人を殺しました。

秦進忠は若い時、なにかの事で立腹して、小さい奴を殺しました。刃をその心に突き透したのです。その死骸は埋めてしまつて年を経たのですが、末年になつてかの小奴がむねを抱えて立つている姿を見るようになりました。初めは百歩を隔てていましたが、後にはだんだんに近寄つて来ました。

乱のおこる日も、いま家を出ようとする時、馬の前に小奴が立っているのを、左

右の人びともみな見ました。役所へ出ると右の騒動で、彼は乱兵のために胸を刺されて死にました。

同時に殺された張胤は、ひと月ほど前から自分の姓名を呼ぶ者があります。勿論その姿は見えませんが、声は透き通ったような強いひびきで、これも初めは遠く、後にはだんだんに近く、当日はわが面前にあるようにきこえました。役所へ出ると直ぐに討たれました。

楽人

建康けんこうに二人の楽人がくじんがありまして、日が暮れてから町へ出ますと、二人の僕しもべらしい男に逢いました。

「陸判官りくはんがんがお招きです」

招かれるままに付いてゆくと、大きい邸宅へ連れ込まれました。座敷の裝飾や料理の献立こんだてなども大そう整って、来客は十人あまり、みな善く酒を飲みました。楽人らは一生懸命に楽を奏していると、もう酒には飽きたから食うことにすると、言い出しました。しかも自分たちが飲んだり食ったりするばかりで、楽人らにはなんにも宛あてがわらないのです。

夜がしらじらと明ける頃に、この宴会は果てましたが、楽人らはもう疲れ切つて、門外の床の上にごろがつて正体なしに眠りました。眼が醒めると、二人は草のなかに寝ているのでした。そばには大きい塚がありました。

土地の人に訊くと、これは昔から陸判官の塚と言ひ伝えられているが、いつの時代の人だかわからないということでした。

餅二枚

霍丘かくきゅうの令を勤めていた周潔しゅうけつは、甲辰こうしんの年に役を罷めて淮上わいじょうを旅行していました。

その頃、ここの地方は大饑饉ききんで、往來の旅人もなく、宿を仮かるような家もありませんでした。高いところへ昇つて見渡すと、遠い村落に烟りのあがるのが見えたので、急いでそこへたずねて行くと、一軒の田舎家いなかやが見いだされました。

門を叩くと、やや暫くして一人の娘が出て来ました。周は泊めてもらいたいと頼むと、娘は言いました。

「家うちじゅうの者は饑餓に迫り、老人も子供もみな煩らつていますので、お気の毒ですがお客人をお通し申すことが出来ません。ただ中堂に一つの櫺とうがありますから、それでよろしければお寝やすみください」

周はそこへ入れてもらいますと、娘はその前に立っていました。やがて妹娘も出て来ましたが、姉のうしろに隠れていてその顔を見せませんでした。周は自分が携帯の食事をすませて、女たちにも餅二つをやりました。

二人の女はその餅を貰つて、自分たちの室へ帰りましたが、その後は人声もきこえず、物音もせず、家内が余りに森閑しんかんとしていたので、周はなんだかぞつとしたような心持になりました。夜があけて、暇乞いをして出ようと思いましたが、いくら呼んでも返事をする者がありません。

いよいよ不思議に思つて、戸を壊くずしてはいつてみると、家内にはたくさん死体が重なつていて、大抵はもう骸骨になりかかっています。そのなかで、女の死体は死んでから十日とおかを越えまいと思われました。妹の顔はもう骨になっていました。ゆうべの二枚の餅はめいめいの胸の上に乗せてありました。

周は後に、かれらの死体をみな埋葬してやったそうです。

鬼兄弟

軍將ちんしゆきの陳守規ちんしゆきは何かの連坐れんざで信州へ流されて、その官舎に寓居することになりました。この官舎は昔から凶宅と呼ばれていましたが、陳が来ると直ぐに鬼物きぶつがあら

われました。

鬼は昏間でも種々の奇怪な形を見せて変幻出没するのでした。しかも陳は元來剛猛な人間であるのでちつとも驚かず、みずから弓矢や刀を執って鬼と闘いました。それが暫く続いているうちに、鬼は空ちゆうで語りました。

「わたしは鬼神であるから、人間と雑居するのを好まないのである。しかし君は堅固な人物であるから、兄分として交際したいと思うが、どうだな」

「よろしい」と、陳も承知しました。

その以来、陳と鬼とは兄弟分の交際を結ぶことになりました。何か吉凶のことがあれば、鬼がまず知らせてくれる。鬼が何か飲み食いの物を求めれば、陳があたえる。鬼の方からも銭や品物をくれる。しかし長い間には、陳もその交際が面倒になって来ました。そこで、ある道士にたのんで、訴状をかいて上帝に捧げました。鬼の退去を出願したのです。

すると、その翌日、鬼は大きい声で呶鳴りました。

「おれはお前と兄弟分になったのではないか。そのおれを何で上帝に訴えたのだ。男同士の義理仁義はそんなものではあるまい」

「そんな覚えはない」と、陳は言いました。

嘘をつけとばかりに、空中から陳の訴状を投げ付けて、鬼はまた罵りました。

「お前はおれの居どころがないと思つているのだろうが、おれは今から蜀川しよくせんへ行く。二度とこんな所へ来るものか」

鬼はそれぎりで跡を絶ったそうです。

夷堅志

第八の男は語る。

「わたくしは宋で『夷堅志』をえらみました。これは有名の大物でありますから、とても全部のお話は出来ません。そのなかで自分が面白く読んだものの幾分を御紹介するにとどめて置きます。この作者は宋の洪邁であります。この家は、父の洪皓をはじめとして、せがれの洪适、洪遵、洪邁の一家兄弟、揃いも揃って名臣であり、忠臣であり、学者であること、実に一種の異彩を放っていると申してもよろしいくらいであります。宋朝が金に圧迫せられて南渡の悲運におちいるという国家多難の際にあつて、皆それぞれに忠奮の意気をあらわしているのは、まったく尊敬に値いするのであります。

しかしここでは『夷堅志』の作者たる洪邁一人について少々申し上げますと、彼は字を景盧といい、もちろん幼にして学を好み、紹興の中年に詞科に挙げられて、左司員外郎に累進しました。彼が金に使用した時に、敵国に対するの礼を用いたので、大いに金人のために苦しめられました。彼は死を決して遂に屈しなかつた事などは、有名の実事でありますから詳しく申すまでもありますまい。

後にゆるされて帰りました。所々の知州などを勤めた末に、端明殿学士となつて退隠しました。死して文敏と諡されて居ります。その著書や随筆は頗る多いのですが、一般的に最もよく知られているのは、この『夷堅志』であります。原本は四百

二十巻の大作だそうですが、その大部分は散佚して、今伝わるものは五十巻、それでもなかなかの大著述というべきでしょう。

そうして、その敵国たる金の元遺山げんいざんが更に『続夷堅志』を書いているのは、頗るおもしろい対照といふべきであります。どちらも学者で忠臣でありますから、元遺山もひそかに彼を敬慕していたのかも知れませんが、あまりに前置きが長くなりましては御退屈でございましょうから、ここらで本文に取りかかります」

妖鬼を祭る

祁州きしゅうの汪氏わかうの息子が番陽はんやうから池州ちしゅうへ行つて、建徳けんとく県に宿ろうとした。その途中、親しい友をたずねて酒の馳走になつていゝうちに、行李こうりはすでに先発したので、汪はひとりで馬に乗つて出ると、路を迷つたものとみえて、行けども行けども先発の従者に逢わないので、草深い森の奥へ踏み込んでしまつた。

そのうちに日が暮れかかると、草むらから幾人の男があらわれて、有無うむをいわさずに彼を捕虜とりこにして牽ひき去つた。行くこと何百里、深山の古い廟のなかへ連れ込まれて、汪はその柱へうしろ手に縛り付けられた。何を祭つてあるのか知らないが、かれらは香を焚たき、酒を酌んで、神像の前まへにうやうやしく礼拝して言つた。

「どうぞ御自由にねがいます」

かれらは廟門をとぎして立ち去った。かれらは人を供えて妖鬼を祭るのである。汪は初めてそれをさとったが、今更どうすることも出来ないのので、日ごろ習いおぼえた大悲の呪じゆを唱えて、ただ一心にその救いを祈っていると、その夜半に大風雨がおこって、森の立ち木も震動した。

廟門は忽ちにおのずから開かれて、何物かがはいって来た。その眼のひかりは松明たいまつのようで、あたりも輝くばかりに見えるので、汪は恐るおそる窺うと、それは大きい蟒蛇うわばみであった。蛇は首をもたげて生贄いけにえに進み寄つて来るので、汪は眼をとじて、いよいよ一心に念誦ねんじゆしていると、蛇は一丈ほどの前まで進んで来ながら、何物にかさえぎられるように逡巡しりこしました。一進一退、おなじようなことを三度も繰り返した後、蛇は遂に首を伏せて立ち去ってしまった。

汪もこれでひと息ついて、ひたすらに夜の明けるのを待っていると、表がようやく白しろんで来た時、太鼓をたたき、笙しょうを吹いて、大勢の人がここへ近づいた。そのなかには昨夜の男もまじっていた。

かれらは汪が無事で見ているのを見て大いにおどろいた。汪からその子細を聞かされて、かれらは更に驚嘆した。

「あなたは福のあるお人で、われわれの神にささげることが出来ないのです」

かれらは汪のいましめを解いて、昨夜来の無礼をあつく詫びた上に、官道までつがなく送り出して、この事はかならず他言して下さるなど、堅く頼んで別れた。

床下の女

宋の紹興三十二年、劉子昂は和州の太守に任ぜられた。やがて淮上の乱も鎮定したので、独身で任地にむかい、官舎に生活しているうちに、そこに出入りする美婦人と親しくなつて、女は毎夜忍んで来た。

それが五、六カ月もつづいた後、劉は天慶觀へ参詣すると、そこにいる老道士が彼に訊いた。

「あなたの顔はひどく瘦せ衰えて、一種の妖氣を帯びている。何か心あたりがありますか」

劉も最初は隠していたが、再三問われて遂に白状した。

「実は妾を置いています」

「それで判りました」と、道士はうなずいた。「その婦人はまことの人ではありません。このままにして置くと、あなたは助からない。二枚の神符をあげるから、夜になつたら戸外に貼りつけて置きなさい」

劉もおどろいて二枚の御符を貰つて歸つて、早速それを戸の外に貼つて置くと、その夜半に女が来て、それを見て怨み罵つた。

「今まで夫婦のように暮らしていながら、これは何のことです。わたしに来るなど言うならば、もう参りません。決して再びわたしのことを憶おもつてくださるな」

言い捨てて立ち去ろうとするらしいので、劉はまた俄かに未練が出て、急にその符を引っぱがして、いつもの通りに女を呼び入れた。

それから数日の後、かの道士は役所へたずねて来た。かれは劉をひと目見て眉をひそめた。

「あなたはいよいよ危うい。実に困つたものです。しかし、ともかくも一応はその正体をごらんに入れなければならぬ」

道士は人をあつめて数十荷かの水を運ばせ、それを堂上にぶちまけさせると、一方の隅の五、六尺ばかりの所は、水が流れてゆくと直ぐに乾いてしまうのである。その床下を掘らせると、女の死骸があらわれた。よく見ると、それはかの女をそのままであるので、劉は大いに驚かされた。彼はそれから十日を過ぎずして死んだ。

餅を買う女

宣城は兵乱の後、人民は四方へ離散して、郊外の所々に蕭条たる草原が多かつた。その当時のことである。民家の妻が妊娠中に死亡したので、その亡骸を村内の古廟のうしろに葬った。その後、廟に近い民家の者が草むらのあいだに灯の影を見る夜があつた。あるときは何処かで赤児の啼く声を聞くこともあつた。

街に近い餅屋へ毎日餅を買いに来る女があつて、彼女は赤児をかかえていた。それが毎日かならず来るので、餅屋の者もすこしく疑つて、あるときそつとその跡をつけて行くと、女の姿は廟のあたりで消え失せた。いよいよ不審に思つて、その次の日に来た時、なにげなく世間話などをしていゝうちに、隙をみて彼女の裾に紅い糸を縫いつけて置いて、帰る時に再びそのあとを付けてゆくと、女は追つて来る者のあるのを覺つたらしく、いつの間にか姿を消して、糸は草むらの塚の上にかかつていた。

近所で聞きあわせて、塚のぬしの夫へ知らせてやると、夫をはじめ、一家の者が駆け付けて、試みに塚をほり返すと、赤児は棺のなかに生きていた。女の顔色もお生けるが如くで、妊娠中の胎児が死後に生み出されたものと判つた。

夫の家では妻の亡骸を灰にして、その赤児を養育した。

丞相（大臣）の趙鼎が遠く流されて朱崖にあるとき、桂林の帥が使いをつかわして酒や米を贈らせた。雷州から船路をゆくこと三日、風力がすこぶる強いので、帆を十分に張つて走らせると、洪濤のあいだに紅い旗のようなものが続いてみえた。距離が遠いのでよく判らないが、あるいは海賊か、あるいは異国の兵かと、舟びとを呼んでたずねると、かれらは手をふつて、なんにも言うなど制した。見れば、その顔色が甚だおだやかでない。

どうした事かと疑い惑つてしていると、舟びとの一人はやがて髪をふり乱して刀を持つて、篷のうしろに出たかと思うと、自分の舌を傷つけてその血を海のなかへしたたらした。

「口を利いてはいけません。眼を瞑じておいでなさい」と、舟びとは注意した。

その通りにしていると、ふた時ほど過ぎた後に、舟びとらはたちまち喜びの声をあげた。

「御安心なさい。みんな助かりました」

なにが何だかちつとも判らないので、使いは舟びとにその子細をただすと、かれらは初めて説明した。

「けさから見たのは鱈魚の大きいので、紅い旗のように見えたのは、その鱗や脊鰭

でございます。あの魚とこの舟とは十五里も距はなれているのですが、もしあの魚がからだを一度ゆすぶったら、こんな舟は木の葉のようにくつがえされてしまいます。あの魚は北へのぼり、この舟は南へくだり、たがいに行き違いになりながら、この強い風に幾時間を費したのですから、おそらくかの魚の長さは幾百里というのでございましょう。考えても怖ろしいことでございます」

莊そうじ子のいわゆる鯤鵬こんぼうの説も、必ずしも寓言ぐうげんではないと、使いはさとつた。

厲鬼れいきの訴訟

秦しん棟たけが宣州の知事となつている時である。某村の民家で酒を密造しているのを知つて、巡検をつかわして召捕まわらせられた。

巡検は数十人の兵を率いて、夜半にその家を取り囲むと、それは村内に知られた富豪であるので、夜なかに多勢たぜいが押し寄せて来たのを見て、賊徒の夜襲と早合点して、太鼓を鳴らして村内の者どもを呼びあつめた。その家にも大勢おほぜいの奉公人があるので、かれこれ一緒に協力して、巡検その他をことごとく捕縛してしまつた。おれは役人であるといつても、激昂げきげうしているかれらは承知しないのである。

それが県署にもきこえたので、県の尉じやうが早馬で駈かけ付けると右の始末である。何

分にも夜中といい相手は多勢であるので、尉はまずいい加減にかれらをなだめた。

「よし、よし。お前の家で強盗どもを捕えたのは結構なことだ。ともかくもわたしの方へ引き渡してくれないか。おまえ達にも褒美をやるよ」

だまされるところは知らないで、かれらは縄付きの巡検らをひき渡した。その家の主人と倅せがれと孫との三人も、その事情を訴えるために付いて行つた。さて行き着くと相手の態度は俄かに變つて、知事の秦しんてい棟は巡検らの縄を解いて、あべこべにかの親子ら三人を引つくくつた。

「役人を縛つて、強盗呼ばわりをするとは不届きな奴らだ」

かれらはからだ全体を麻縄で嚴重にくくり上げられて、いずれも一百ずつ打たれた。縄を解くと、三人はみな息が絶えていた。それはあまりに苛酷の仕置きであるという批難もあつたが、秦棟の兄は宰相さいしやうであるので、誰も表向きに咎める者はなかつた。但し秦棟はその明くる年に突然病死した。

そのあとへ楊厚ようこうという人が赴任した。ある日、楊が役所に出ていると、数人の者が手枷てかせや首枷めしゆうどをかけた一人の囚人をつれて来て、なにがし村の一件の御吟味をおねがい申すといつて消え失せた。

白昼にこの不思議を見せられて、楊もおどろいた。殊ことに新任早々で、在来のこと
をなんにも知らないで、下役人を呼んで取調べると、それはかの村民らを杖殺し

た一件であることが判った。首枷の囚人は秦棣であるらしい。
 楊は書き役の者に命じて、かの一件の記録を訂正させ、さらに紙銭しせん十万を焚やいて、
 かれらの冥福を祈った。

鉄塔神の靈異

蔚州うつしゅうの城内に寺があつて、その寺内に鉄塔神てつとうじんというのが祭られているが、その神
 靈か赫く灼しゃくたるものとして土地の人びとも甚だ尊崇きんじゆんされていた。契丹きつたんのまさに亡びん
 とする時、或る者はその神体が城外へ走るのを見て、おどろき怪しんで早速に参詣
 すると、神像の全身に汗が流れていたので、いよいよそれを怪しんだが、さてその
 子細はわからなかつた。

その夜の夢に、神は寺の講師こうしに告げた。

「われは天符を受取つて、それに因るとこの城中の者はみな死すべきである。それ
 は余りにいたましいので、われは毎日奔走尽力して、出来得るだけの人命を救うこ
 とにした。明日の午ひるどきに女真じしんの兵が突然に襲つて来て、この城は落ちる。そうし
 て、逃がるまじき命数の者一千三百余人だけは命を失わなければならない。そのう
 ちにはこの寺の僧四十余人も数えられている。あなたもその一人であるが、われは

久しくこの地にあつて、ふだんから師の高徳に感じているのであるから、死者の名簿を改訂して他人の名に換えて置いた。就いては、明日早朝にここを立ち退くがよろしい」

講師は夢が醒めて奇異に感じた。それを他の僧らに話したが、誰も信じる者がないので、講師も一時はやや躊躇したが、鉄塔神の霊あることはかねて知っているので、とうとう思い切つて自分だけの荷物を取りまとめ、寺のうしろの山へ逃げ登つた。行くこと五里ばかりにして、講師は白金の食器を置き忘れたことを思い出したので、ふたたび下山して寺へ引返すと、あたかも檀家で供養をたのみに来ている者があつた。他の僧らは講師の顔をみて喜んだ。

「あなたのような偉いかたが軽々しく夢を信ずるといふことがありませんか。こうして檀家の方々も見えているのに、和尚のあなたが、子細もなしに寺を捨てて立ち去つたなどあつては、世間の信仰をうしなつてしまいます。今は国ざかいも平穩で、女真じょしんのえびすなどが押し寄せて来るという警報もないのに、一刻を争つて立ち退くには及びますまい」

かれらの言うことに道理もあるので、講師はこころならずもひき留められて、かれらと共に供養の式を営み、あわせて法談を試むることになった。法談が終つて、衆僧がみな午飯ひるめしを食いはじめると、たちまちに女真の兵がにわか押し寄せて来た

という警報を受取った。もちろん不意のことであるから、城はいつ時の後に攻め破られた。

僧らもあわてて逃げ惑ったが、もう遅かった。城中の人と寺中の僧と、死んだ者の数はかの神の告げに符合していた。講師も身を全うすることが出来なかった。

乞食の茶

都の石氏せきしという家では茶肆ちやみせを開いて、幼い娘に店番をさせていた。

ある時、その店へ気ちがいのような乞食が来た。垢だらけの顔をして、身には襤褸ぼろをまといつていたのである。彼は茶を飲ませてくれと言うと、娘はこころよく茶をすすめた。しかもその貧しいのを憫れんで銭ぜにを取らなかつた。その以来、かの乞食は毎日ここへ茶を飲みに来ると、娘は特に佳い茶をこしらえてやつた。

それがひと月もつづいたので、父もそれを知つて娘を叱つた。

「あんな奴が毎日来ると、ほかの客の邪魔になる。今度来たら追い出してしまえ」
それでも娘はやはり今までの通りに行っているので、父はいよいよ怒つて彼女を打つこともあつた。そのうちに、かの乞食が来て、いつものように茶を飲みながら娘に言つた。

「お前はわたしの飲みかけの茶を飲むか」

これには娘もすこし困って、その茶碗の茶を土にこぼすと、たちまち一種不思議のよい匂いがしたので、彼女は怪しんでその残りを飲みほした。

「わたしは呂翁りよおうという者だ」と、乞食は言った。「おまえは縁がなくて、わたしの茶をみんな飲まなかったが、少し飲んでも福はある。富貴か、長寿か、おまえの望むところを言ってみろ」

娘は小商人こあきんどの子に生まれ、しかもまだ小娘であるので、富貴などということとはよく知らなかった。そこで、彼女は長寿を望むと答えると、乞食はうなずいて立ち去った。親たちもそれを聞いて今更のように驚いたが、乞食はもう再び姿をみせなかった。

娘は生長して管宮指揮使の妻となり、のちに呉ごの燕王えんおうの孫娘の乳母となつて、百二十歳の寿を保った。

小龍

宗立本そうりゆうほんは登州とうしゅう黄巢こうしやうの人で、父祖の代から行商を営いとなんでいたが、年の長たけるまで子こがなかつた。宋の紹興二十八年の夏、帛きぬのたぐいを売りながら、妻と共に濰州まいしゅうを廻まわつ

て、これから昌樂しやうらくへ行こうとする途中、日が暮れて路はたの古い廟に宿った。数人の従者は柝きを撃つて、夜もすがらその荷物を守っていた。

夜が明けて出発すると、六、七歳の男の児が来てその前にひざまずいた。見るから利口そうな小児である。宗は立ちどまって、お前はどこの子かとたずねると、彼ははきはきと答えた。

「わたくしは武昌ふしやうの公吏の子で、父は王忠彦おうちゆうげんと申しました。運悪く両親に死に別れて、他人の手に育てられていましたが、ここへ来る途中で捨てられました」

宗は憐れんで彼を養うことにして、その名を神授しんじゆと呼べた。神授は見た通りの賢い生まれつきで、書物を読めばすぐに記憶するばかりか、大きい筆を握つてよく大字をかいた。篆書てんしよでも隸書れいしよでも草書そうしよでも、学ばずして見事に書くので、見る人みな驚嘆せざるはなかつた。宗はもとより大資本の商人でもないので、しまいには自分の商売をやめて、神授を連れて諸方を遊歴し、その字を売り物にして生活するようになった。

それからのち二年の春、宗は小児を連れて済南さいなんの章丘しやうきゆうへゆくと、路で胡服こふくをきた一人の僧に逢った。僧は容貌魁偉ようぼうかいいともいふべき人で、宗にむかつて突然に訊いた。

「おまえはこの子をどこから拾つて来た」

「これはわたしの実の子です」と、宗は答えた。「飛んでもないことをお言いなさる

な

「いや、おまえの子ではない筈だ」と、僧は笑いながら言った。「これは私の住んでいる五台山の龍だ。五百の小龍のうちで其の一つが行くえ不明になったので、三年前から探していたのだ。お前の手もとに長くどどめて置くと、きつと大いなる禍いを受けることになる。わたしが法を施したから、かれももうどうすることも出来まい」

僧は水を索めて噴きかけると、神授はたちまち小さい朱い蛇に変わった。僧は瓶をとって神授の名を呼ぶと、蛇は躍つてその瓶のうちにはいった。呆れている宗の夫婦をあとに見て、僧は笠を深くして立ち去つた。

蛇薬

徽州懷金郷の程彬という農民は、一種の毒薬を作つて暴利をむさぼつていた。

それはたくさんの蛇を殺して土中にうずめ、それに苦をかけて、常に水をそいでいると、毒気が蒸れてそこに怪しい蕈が生える。それを乾かして、さらに他の薬をませ合わせるのである。しかし最初に生えた蕈は、その毒があまりに猛烈で、食べばすぐに死んでしまうので、後日の面倒を恐れて用いず、多くは二度目に生えた

のをを用いて、徐々に斃たふれさせるのであった。

その毒をためすには、蛙かわずに食わせてみるのである。蛙が多く躍り狂えば、その毒の効き目が多いということになっている。その薬の名は万歳丹まんざいたんと称していたが、万歳どころか、実は人の命をちぢめる大毒薬で、何かの復讐などを企てるものは、大金を与えてその秘薬を買った。現に或る家では来客にその薬をすすめようとして、誤まって嫁の舅しゅうとに食させたので、驚いていろいろに介抱したが、どうしても救うことが出来なかつたという話も伝わっている。

程ていの弟せいでうに正道せいどうという者があつた。その名のごとく彼は正しい人間であつたので、兄の非行を見るに見かねて、数十里の遠いところへ立ち退いてしまった。程もだんだん老ゆるにしたがつて、自分の非を悔むようになったので、本当の薬を作ることをやめて、その偽物売りはじめたが、偽物では効き目がないので、自然に買う者もなくなつた。彼は貧窮のうちに晩年を送つて、ひとり息子は乞食になつた。

彼がほん物の万歳丹を作っている時のことである。村役人が租税そぜいを催促に行つて、なにか彼の感情を害すようなことを言つたので、程はあざむいてかの薬を飲ませると、役人は帰る途中から俄かに頭が痛んで血を嘔はいた。さてはと気がついて引つ返して、程の門前に仆たおれて救いを呼ぶと、彼は水を汲んで来て飲ませてくれた。それで苦痛も薄らいで、役人は無事に助かつたということであるから、彼は毒を作ると

共に、その毒を消す法をも知っていたらしいが、その法は伝わっていない。

重要書類紛失

宋の紹興の初年、甫田ほでんの林迪功りんちゆうこうという人は江西じしやうの尉ゆうを勤めていたが、盜賊を捉えた功によつて、満期の後は更に都の官吏にのほせられることになつてた。

そのころ臨安府には火災が多かつたので、官舎きかくに寄寓きやくしている人びとは、外出するごとに勅諭ちよくゆその他の重要書類を携帯してゆくのを例としていた。林りんも御用大事と心得ている人物であるので、外出する時には必ず重要書類を懐中して出て、途中でも二、三度ぐらいは検あつためることにしていた。

それで最初は無事であつたが、ある時それが紛失したので、彼は三万錢の賞を賭けてその捜査を命じると、たちまちにそれを届けて来るものがあつた。それで安心すると、又もや紛失した。又もや賞をかけると、又もや直ぐに届けて来た。こういうことが三度も四度も繰り返されたので、本人も怪しみ、他の者も不審をいだくようになつた。これが果てしもなく続くときは、彼の私財しさいが尽きてしまふか、あるいは重要書類をうしなつた罪に服するか、二つに一つは免まふかれぬであろうと危あやまれた。

林は独身者であるが、近来その部屋のなかで頻りに人声を聞くことがあった。殊に或る夜は何か声高に論じ合っているようであったが、暫くしてひっそりと鎮まつた。あくる朝になつても戸もあけないので、出入りの婆さんが不思議に思つて、近所の人びとを呼びあつめ、壁をぶちこわしてはいつてみると、林は腰掛けの上におれていた。かれは剪刀で喉を突いて自殺したのである。

さてその死因はわからなかつた。伝うるところに拠れば、彼がさきに盜賊二人を捕えた時、いづれもその証拠不十分であるにも拘らず、彼は自己の功をなすに急なる余りに、鍛錬羅織して無理にかれらを罪人におとし入れた。その恨みが重要書類の紛失となり、さらに彼の死となつたのであろうといふのである。但しそれが死んだ人の仕業か、生きている人の仕業か、本人に聞いてみなければ判らないのである。

股を焼く

宋の宣和年中に、明州昌国の人が海あきないに出た。海上何百里、名の知れない大きい島に舟を寄せて、そのうちの数人が薪を採りに上陸すると、島びとに見つけられて早々に逃げ帰つたが、その一人は便所へ行つていたために逃げおくれ、遂にかれらの捕虜となつた。

島びとは鉄の綱で彼をつないで、田を耕させた。一、二年の後には互いに馴れて、縛って置くことを免されたが、初めのうちは島びとがあつまつて酒を飲むたびに、彼をその席へひき出して、焼けた鉄火箸を彼の股へあてるのである。かれらはその苦しみもがくのを見て、面白そうに大いに笑った。要するに、彼に残酷な刑を加えて、酒宴の余興とするのである。

彼ものちにはそれを覚つたので、いかに熱い火箸をあてられても、騒がず、叫ばず、歯を食いしばってじっと我慢していたので、かれらは興を失つたらしく、ついにその拷問をやめてしまった。

三年後、かれは幸いに、便船を得て逃げ帰つたが、その両股は一面に黒く焼かれていた。

三重齒

右相丞鄭雍の甥の鄭某は拱州に住んでいた。その頃、京東は大饑饉で、四方へ流浪して行く窮民が毎日つづいてその門前を通つた。

そのなかに一人の女があつた。泥まぶれの穢い姿をしていたが、その容貌は目立つて美しいので、主人の鄭は自分の家へ引き取つて妾にしようと思つた。女にも異存

はなく、やがては餓死するかも知れない者を、お召仕つかいくださいれば望外の仕合わせでございませと答えた。そこで請人うけいんを立てて相当の金をわたして、女はこの家の人となつて、髪を結わせ、新しい着物に着かえさせると、彼女の容貌はいよいよ揚がつてみえた。

女は美しいが上に、なかなか利口な質たちであるので、主人にも寵愛されて、無事に五、六カ月をすごしたが、ある夜、大雷雨の最中に、寝間の外から声をかける者があつた。

「先日の婦人を返してください。あの女は餓死すべき命数になつているので、生かして置くことは出来ないのです」

鄭は内からそれに応対していたが、外にいるのは何者であるか判らない。おそらく何かの妖物ようぶつであろうと思われるので、堅く拒こほんで入れなかつた。外の声もいつかやんだ。

しかし夜が明けてから考えると、こういう女をいつまでもとどめて置くのは、自分の家のためにもよろしくないらしい。いつそ思い切つて暇ひまを出そうかとも思つたが、やはり未練があるのでそのままにして置くと、次の夜にも又もや門を叩いて彼女を渡せという者があつた。鄭も意地になつてそれを拒こほんだ。

「畜生。なんともいへ。女を連れて行きたければ、勝手に連れて行つてみる。お

れは決して渡さないぞ」

相手は毎夜のように門を叩きに来るのを、鄭はいつも強情に罵って追い返した。たがいに根くらべを幾日もつづけているうちに、ある夜かの女は俄かに齒が痛むと言い出して、夜通し唸って苦しんでいたが、朝になってみると、その齒が三重に生えて、さながら鬼のような形相になったので、主人は勿論、一家内の者がみな怖れた。こうなると、もう仕様がな。彼女は即日暇を出された。

何分にもこんな形になってしまつては、誰も引き取る者もないので、彼女は遂に乞食の群れに落ちて死んだ。

鬼に追わる

宋の紹興二十四年六月、江州彭沢の丞を勤める沈持要という人が、官命で臨江へゆく途中、湖口県を去る六十里の化成寺という寺に泊まつた。

その夜、住職をたずねると、僧は彼にむかつて客室の怪を語つた。

「昨年のごとでございます。ひとりのお客人が客室にお泊まりになりました。その部屋のうちには旅櫛がござりました。申すまでもなく、旅で死んだお人の櫛をお預かり申していたのでござります。すると、夜なかにお客人はその櫛のうちから光り

を発したのを見て、不思議に思つてじつと見つめてみると、その光りのなかに人の影が動いているらしいので、お客人も驚きました。となりは仏殿であるので、さあといったらそこへ逃げ込むつもりで、寢床の帳とほりをかかけて窺つてみると、棺のなかの鬼も蓋ふたをあげてこちらを窺つていたのでござります。いよいよ堪たまらなくなつて、お客人は寢床からそつとひと足降りかかると、鬼もまた、棺の中からひと足踏み出す。ぎよつとして足を引つ込ませると、鬼もまた足を引つ込ませる。こつちが足をおろすと、鬼もまた足をふみ出すというわけで、同じようなことを幾たびも繰り返しているうちに、お客人ももうどうにもならないので、思い切つて寢床から飛び降りて逃げ出すと、鬼も棺から飛び出して追つて来る。お客人は仏殿へ逃げ込みながら、大きい声で救いを呼んでいると、鬼はもう近いところまで追い迫つて来ました。お客人は気も魂も身に添わずというわけで、ころげ廻つて逃げるうちに、力が尽きて地にたおれると、鬼はここぞと飛びかかつて来るとき、たちまち柱に突き当つて、がちりという音がしたかと思うと、それぎりひつそりと鎮まつてしまいました。そこへ大勢の僧が駈けつけて、半死半生でたおれているお客人を介抱して、さそこらあたらを調べてみると、骸骨が柱にあたつてばらばらくずに頽くずれていました。

その後、その死人の家から棺をうけ取りに来ましたが、死骸が砕けているのを見て承知しません。なんでも寺じちゅうの者が棺をあばいたに相違ないといつて、と

うとう訴訟沙汰にまでなりましたが、当夜の事情が判明して無事に済みました」

土偶

鄭安恭が肇慶の太守となっていた時のことである。

夜番の卒が夜なかに城中を見まわると、城中の一つの亭に火のひかりの洩れているのを発見したので、怪しんでその火をたずねてゆくと、そこには十余人の男と五人の小児とが集まって博奕をしているのであった。卒は大胆な男であるので、進み寄って冗談半分に声をかけた。

「おい。おれにも錢をくれ」

彼が手を出すと、諸人は黙って錢をくれた。その額は三千錢ほどであった。夜が明けてからあらためると、それは本当の銅錢であったので、彼は大いに喜んだ。明くる晩もやはりその通りで、彼は又もや三千あまりの錢を貰って来た。それに味を占めて、彼は上役に巧く頼み込んで、以来は夜更けの見まわりを、自分ひとり毎晩受持つことにした。そうして、相変らず賭博者の群れからテラ錢のようなものを受取っていたので、彼の懐中にはいよいよ膨らんだ。

そのうちに、城中の軍資を入れてある庫のなかから銀数百両と錢数千緡が紛失し

たことが発見されて、その賊の詮議が嚴重になった。かの卒は近來俄かに錢使いがあらいに、新しい着物などを拵こしらえたというのが目について、真まつ先に捕えられて吟味を受けることになったので、彼も包み切れないで正直に白状した。太守の鄭はその賭博者の風俗や人相をくわしく取調べた後に、こう言つた。

「それはまことの人ではあるまい。おそらく土偶どくわうのたぐいであろう」

そこで、かの卒を見知り人にして、他の役人らが付き添つて、近所の廟をたずね廻まわせると、城隍廟じやうかうびやうのうちに大小の土人形がならんでいる。その顔や形がそれらしいといふので、試みに一つの人形の腹を毀こわしてみると、果たして銀があらわれた。つづいて他の人形を打ち砕くと、皆その腹に銀をたくわえていた。さらに足の下の土をほり返すと、土の中からもたくさんぜにの錢ぜにが出た。

卒が貰もらつた錢と、掘り出した銀と錢とを合算すると、あたかも紛失の金高に符合しているのもう疑うところはなかつた。

土人形は片々端から打ち毀こわされた。その以来、怪しい賭博者は影をかくした。

野象の群れ

宋の乾道七年、縉雲しんうんの陳由義ちんゆうぎが父をたずねるために閩みんより広こうへ行つた。その途中、

潮州^{ちやう}を過ぎた時に、土人からこんな話を聞かされた。

近年のことである。惠州^{けい}の太守が一家を連れて、福州^{ふく}から任地^{おもむ}へ赴く途中、やはりこの潮州を通りかかると、元来このあたりには野生の象が多くて、数百頭が群れをなしている。時あたかも秋の刈り入れ時であるので、土地の農民らは象の群れに食いあらされるのを恐れて、その警戒を嚴重にし、田と田のあいだに陥奔^{おとしあな}を設けて、かれらの進入を防ぐことにしたので、象の群れは遠く眺めているばかりで、近寄ることが出来なかった。

かれらは腹立たしそうに唸っていたが、やがて群れをなして太守の一行を取り囲んだ。一行には二百人の兵が付き添っていたが、幾百という野象に囲まれては身動きも出来ない。なんとか賺^{すか}して逐^おいやろうとしても、かれらはなかなか立ち去らないで、一行を包围すること半日以上にも及んだので、一行ちゆうの女子供は途方にくれた。そのなかには恐怖のあまりに気を失う者もできた。

こうなると、土地の者も見捨てては置かれないので、大勢が稲をになつて来てその四方に積んだ。最初のうちは象も知らぬ顔をしていたが、だんだんにたくさん運ばれて、自分たちの食うには十分であることを見きわめた時に、かれらは初めて囲みを解いて、その稲を盛んに食いはじめた。かれらは太守の一行を人質^{ひとじち}にして、自分たちの食料を強要したのである。

野獸の智、まことに及ぶべからずと、人びとは舌をまいた。

碧瀾堂

南康なんこうの建昌けんしょう県の某家では紫姑しこじん神を祭っていたが、その神には甚だ靈異があつて、何かにつけて伺いを立てると、直ちに有難いお告げをあたえられた。たとえば長江の下流地方では茶の価が高くなっているから、早く持ち出して売れといい、どこでは米の相場が騰あがっているから、早く積み出してゆけというたぐいで、それが一々適中するために、その家は大いに工面くめんがよくなった。

ある日、又もや神のお告げがあつた。

「あしたは貴い客人が来る。かならず鄭重に取扱わなければならぬぞ」

そこで、家の息子たちや奉公人どもは早朝から門に立つて待ち受けていたが、日の暮れる頃まで誰も来なかつた。

神様のお告げにいつわりがあるうとは思われないが、是非なく門を閉じようとする時、ひとりの乞食が物を貰いに来た。

「さあ、これだ」

無理に内へ連れ込んで、湯に入れるやら、着物を着せ換えるやら、家内が総がか

りで下へも置かない歓待に、乞食は面食らった。嬉しいのを通り越して、かれは怖ろしくなった。もしや自分を生贄にして何かの神を祭るのではないかと疑った。

「どうぞお助けください。わたくしのような者でも命は惜しゅうございます」と、かれは泣いて訴えた。

主人から神のお告げを言い聞かされて、乞食も不思議そうに言った。

「それではお禱りをして、わたくしからその子細を伺ってみましょう」
香を焚いて禱ると、やがて神はくだった。

神は捧げられた紙の上に、左の文字を大きく書いた。

「あなたは碧瀾堂の昔を忘れましたか」

それを見ると、乞食はあつと氣を失ってしまった。家内の人びともおどろいて介抱して、さてその子細を詮議すると、かれは泣いて答えた。

「わたくしも元は相当の金持の家のせがれで、ある娼妓と深く言いかわしましたが、両親がとも添わせてくれる筈はないので、女をつれて駈落ちをしました。そのうちに貯えの金はなくなる、女はいつまでも付きまとっている。どうにも仕様がなないので、呉興へ行つたときに、碧瀾堂へ遊びに行こうといつて連れ出して、酒に酔つた勢いで女を水へ突き落して逃げましたが、その後にもやはりよいこともなくて、とうとう乞食の群れに落ちてしまいました。今日わたくしがここへ呼び込まれまし

たのは、死んだ女がむかしの恨みを言おうがためでございましたらう」
言い終つて、彼はまた泣いた。

その家では数百金をあたえて彼を帰してやった。そうして、その以後は神を祭らなくなつたそうである。

雨夜の怪

後に尚書しやうしょに立身した呂安老りよあんろうという人は、若いときに蔡州さいしゅうの学堂にはいつていた。ある日同じ寄宿舎にいる学生七、八人と夕方から宿舎をぬけ出して、そこらを遊びまわつて、夜なかに帰つて来ると、にわかしゅううに驟雨がざつと降り出した。

かれらは雨具を持つていなかった。しかもこの当時は学堂の制度がはなはだ嚴重で、無断外泊などは決して許されないので、かれらは引つ返して酒屋へ行つて、単衣ひとえの衾とびを借りた。その衾の四隅を竹でささえて、大勢がその下へはいつて駆けて来ると、学堂の牆かきに近づいた頃に、夜廻りの者が松明たいまつを持つて、火の用心を呼びながら来たので、これに見付けられては大変だと思つて、かれらは俄かに立ちすくんだ。双方相距さかること二十余歩、夜廻りの者は俄かに引つ返して、あとをも見ずに走り去つたので、かれらはその間に牆を乗り越えてはいつたが、内心びくびくしていた。お

そらく無断外出を夜廻りに見付けられて、譴責けんせきを受けるか、退学を命ぜられるかと、その夜は碌々眠られなかった。

その明くる日である。夜廻りの邏卒らそつが府庁に出て申し立てた。

「昨夜の三更にこう、大雨の最中に、しかじかの処を廻つて居りますと、忽ちに一つの怪物が北の方角から参りました。上は四角で平らで、蓆むしろのようで、糢糊もことして判りません。その下にはおよそ二、三十の足のような物がありまして、人のようにぞろぞろと歩いて参りまして、学校の墻のあたりへ来て消え失せました」

その報告におどろいた郡守以下の役人らは、それがいかなる怪物であるか、ほとんど想像が付かなかった。その噂がそれからそれへと拡まつて、何か巨大な怪物がここらに出現するという風説が騒がしくなった。

町々では厄払いの道場を設けて、三昼夜の祈祷をおこない、その怪物の絵姿をかいて神社の前で磔刑はりつけにした。

世の怪談にはこの類が少なくない。

術くらべ

鼎州ていしゅうの開元寺かいげんじには寓居の客が多かった。ある夏の日に、その客の五、六人が寺の

門前に出ていると、ひとりの女が水を汲みに来た。

客の一人は幻術をよくするので、たわむれに彼女を悩まそうとして、なにかの術をおこなうと、女の提げている水桶が動かなくなつた。

「みなさん、御冗談をなすつてはいけません」と、女は見かへつた。

客は黙つていて術を解かなかつた。暫くして女は言つた。

「それでは術くらべだ」

彼女は荷にんいの棒を投げ出すと、それがたちまちに小さい蛇となつた。客はふところから粉こなの固まりのような物を取り出して、地面に二十あまりの輪を描いて、自分はそのまん中に立つた。蛇は進んで来たが、その輪にささえられて入ることが出来ない。それを見て、女は水をふくんで吹きかけると、蛇は以前よりも大きくなつた。

「旦那、もう冗談はおやめなさい」と、彼女はまた言つた。

客は自若じじやくとして答えなかつた。蛇はたちまち突入して、第十五の輪まで進んで来た。女は再び水をふくんで吹きかけると、蛇は椽たるきのような大蛇となつて、まん中の輪にはいつた。ここで女は再びやめろと言つたが、客は背きかなかつた。蛇はどうとう客の足から身体にまき付いて、頭の上に乗って登つて行つた。

往来の人も大勢立ちどまつて見物する。寺の者もおどろいた。ある者は役所へ訴え出ようとすると女は笑つた。

「心配することはありません」

その蛇を掴んで地に投げつけると、忽ち元の棒となった。彼女はまた笑った。

「おまえの術はまだ未熟なのに、なぜそんな事をするのだ。わたしだからいいが、他人に逢えばきつと殺される」

客は後悔してあやまった。彼は女の家へ付いて行って、その弟子になったという。

渡頭の妖

邵武しょうぶの溪河たにがわの北に怪しい男が棲んでいて、夜になると河ばたに出て来た。そうして徒渉からわたりの者を見ると、必ずそれを背負って南へ渡した。ある人がその子細を訊くと、彼は答えた。

「これは私の発願ほつがんで、別に子細はありません」

ここに黄敦立こうとんりゆうという胆勇の男があつて、彼は何かの害をなす者であろうと疑った。そこで、試みに毎晩出てゆくと、かの男はいつものように彼を背負って渡った。三日の後、黄は彼に言った。

「人間の礼儀はお互いという。わたしはいつもお前に渡してもらうから、今夜は私がおまえを渡してあげよう」

男は辞退したが、黄は肯きなかつた。

無理に彼をいだいて河を渡ると、むこう岸には大きい石があつた。黄はあらかじめ家しもべ僕に言い付けて、その石の上に草をたばねて置いたのである。黄は抱かかいている男を大石に叩たたきつけると、男は悲鳴をあげて助けを求めた。灯ひに照らして見ると、彼は青面せいめんの大きいか猿えんにか変じていた。打ち殺してそれを火に燻やくと、その臭気が数里にきこえた。

その後、ここに怪しいことはなかつた。

異聞総録・其他

第九の男は語る。

「わたくしは宋代の怪談総まくりというような役割でございしますが、これも唐に劣らない大役でございます。就いてはまず『異聞総録』を土台にいたしまして、それから他の小説のお話を少々ばかり紹介いたしたいと存じます。この『異聞総録』はまったく異聞に富んだ面白いものでありますが、作者の名が伝わって居りません。専門の研究家のあいだにはすでにお判りになっているのかも知れませんが、浅学寡聞せんがくかぶんのわれわれはやはり作者不詳と申すのほかほございせんから、左様御承知をねがいます」

竹人、木馬

宋の紹興十年しやうしやうじゆん、両淮地方りやうわいの兵乱がようやく鎮定したので、兵を避けて江南に渡っていた人びともだんだんに故郷へ立ち戻ることになった。そのなかで山陽地方さんやうの土人しじんふたりも帰郷の途中、淮揚わいやうを通過して北門外に宿ろうとすると、宿の主人が丁寧に答えた。

「わたくしもこの宿舎を持っているのですから、お客人を長くお泊め申して置きたいのはやまやまですが、あなた方に対しては正直に申し上げなければなりません。

何分にも軍のあとで、ここらも荒れ切っているので、家はきたなくなっているばかりか、盗賊どもがしきりに徘徊するので困ります。ここから十里ばかり先に呂という家がありまして、そこは閑静で綺麗な上に、賊をふせぐ用心も出来ていますから、そこへ行つてお泊まりなさるがよろしゅうございます。わたくしの家から僕や馬を添えてお送り申させますから」

ふたりは素直にその忠告を肯いた。殊に呂氏の家というのめかねて知っているの
で、それではすぐに行こうと出かけると、主人は慇懃に別れを告げた。

「どうぞお帰りにもお立ち寄りください。もう日が暮れましたから、馬にお召しなさい」

主人は達者そうな僕二人に二匹の馬をひかせて送らせた。途中も無事で、まだ夜半にならないうちにかの呂氏の家に着くと、家の者は出で迎えて不思議そうに言った。

「近頃この辺にはいろいろの化け物が出るというのに、どうして夜歩きをなすつたのです」

二人はここへ来たわけを説明して、鞍から降り立とうとすると、馬も僕も突つ立つたままに動かかない。

すぐに飛び降りて燈火に照らしてみると、人も馬も姿は消えて、そこに立っ

るのは、二本の枯れた太い竹と、二脚の木の腰掛けと唯それだけであつた。竹も木も打ち碎いて焚かれてしまつたが、別に怪しいこともなかつた。

それから五、六カ月の後、ふたたび先度の北門外へ行くと、そこは空き家で、主人らしい者は住んでいなかった。

(異聞総録)

疫鬼

紹興三十一年、湖州の漁師の呉ご一因いちいんという男が魚を捕りに出て、新城柵界の河岸に舟をつないでいた。

岸の上には民家がある。夜ふけて、その岸の上で話し声がきこえた。暗いので、人の形はみえないが、その声だけは舟にいる呉の耳にも洩れた。

「おれ達も随分この家うちに長くいたから、そろそろ立ち去ろうではないか。いつそこの舟に乗つて行つてはどうだな」

「これは漁師の舟だ。おまけにほか土地の人間だからいけない。あしたになると、東南の方角から大きい船が来る。その船には二つの紅い食器と、五つ六つの酒瓶さかがめを

乗せているはずだから、それに乗り込んで行くとしよう。その家はここの親類で、なかなか金持らしいから、あすこへ転げ込めば間違いないだ」

「そうだ、そうだ」

それぎりで声はやんだ。

呉はあくる日、上陸してその民家をたずねると、家には疫病にかかっている者があつて、この頃だんだんに快方に向かっているという話を聞かされたので、ゆうべ語っていた者どもは疫鬼えききの群れであつたことを初めて覺さとつた。そこで、舟を東南五、六里の岸に移して、果たしてかれらの言うような船が来るかどうかと窺うかがつて、やがて一艘の小舟がくだつて来た。舟に積んでいる物も鬼の話と符合しているの、呉は急に呼びとめて注意すると、舟の人びともおどろいた。

「おまえさんはいいいことを教えて下すつた。それはわたしの婿の家で、これから見舞いながら食たい物を持って行つてやろうと思つていたところでした。なんにも知らずに行つたが最後、疫病神やくびようがみがこつちへ乗り込んで来て、どんな目に逢うか判らなかつたのです」

積んで来た酒や肉を彼に馳走して、舟は早々に漕こぎ戻した。

亡妻

宋の大観年中、都の医官の耿愚がひとりの妾を買った。女は容貌も好く、人間もなかなか利口であるので、主人の耿にも眼をかけられて、無事に一年余を送った。ある日のこと、その女が門前に立っていると、一人の小児が通りかかって、阿母さんと声をかけて取りすがると、女もその頭を撫でて可愛がつてやった。小児は家へ帰つて、その父に訴えた。

「阿母さんはこういう所にいるよ」

しかしその母というのは一年前余に死んでいるので、父はわが子の報告をうたがった。しかしその話を聞くと、まんざら嘘でもないらしいので、ともかくも念のためにその埋葬地を調べると、盗賊のために発かれたと見えて、その死骸が紛失しているのを発見した。そこで、その児を案内者にして、耿の家の近所へ行つて聞きあわせる、その女は亡き妻と同名であることが判つた。

もう疑うところはないと、父は行商に姿をかえ、その近所の往來を徘徊して、女の出入りを窺っているうちに、ある時あたかも彼女に出逢つた。それはまさしく自分の妻であつた。女も自分の夫を見識つていた。不思議の対面に、その場はたがい

に泣いて別れたが、それが早くも主人の耳に入つて、耿は女を詮議すると、彼女は明らかに答えた。

「あの人はわたくしの夫で、あの児はわたくしの子でございませ²す」

「嘘をつけ」と、耿は怒つた。「去年おまえを買つたときには、ちゃんと桂庵けいあんの手を

経ているのだ。おまえに夫のないということは、証文面にも書いてあるではないか」

女は密夫を作つて、それを先夫と詐いつわるのであらうと、耿は一途いちずに信じているので、彼女をその夫に引き渡すことを堅く拒こほんだ。こうなると、訴訟沙汰になるのほかはない。役人はまず女を取調べると、彼女はこう言うのである。

「わたくしも確かなことは覚えません。ただ、ぼんやりと歩きつづけて、一つの橋のあるところまで行きましたが、路に迷つて方角が判らなくなつてしまいました。そこへ桂庵のお婆さんが来て、わたくしを連れて行つてくれましたが、ただ遊んでいては食べるものが出来ませんから、お婆さんと相談してここの家うちへ売られて来ることになつたのでございます」

さらに桂庵婆をよび出して取調べると、その申し立てもほぼ同じようなもので、広備橋くわいびきょうのほとりに迷っている女をみて、自分の家へ連れて来たのであると言つた。なにしろ死んだ女が生き返つてこういうことになつたのであるから、役人もその裁

判に困つて、先夫から現在の主人に相当の値あだいを支払つた上で、自分の妻を引き取るがよからうと言ひ聞かせたが、耿の方が承知しない。いつたん買ひ取つた以上は、その女を他人に譲ることは出来ないといふので、さらに御史台ぎよしだいに訴え出たが、ここでも容易に判決をくだしかねて、かれこれ暇取ひまどつているうちに、問題の女は又もや姿を消してしまつた。

相手が失せたので、この訴訟も自然に沙汰やみとなつたが、女のゆくえは遂に判らなかつた。それから一年を過ぎずして、主人の耿も死んだ。

(同上)

孟蘭盆

撫州ぶの南門、黄柏路こうはくろといふところに詹六たん、詹七といふ兄弟があつて、帛きぬを売るのを渡世としていた。又その季すえの弟があつて、家内では彼を小哥しょうかと呼んでいたが、小哥は若い者の習なひ、賭博とばくにふけて家の錢ぜにを使い込んだので、兄たちにひどい目に逢あはされるのを畏おそれて、どこへか姿をくらました。

彼はそれぎり音信不通であるので、母はしきりに案じていたが、占うらない者しやなどに見

てもらつても、いつも凶と判断されるので、もうこの世にはいないものと諦めるよりほかはなかった。そのうちに七月が来て、盂蘭盆会の前夜となつたので、詹の家では燈籠をかけて紙銭しせんを供えた。紙銭は紙をきつて銭の形を作つたもので、亡者の冥福を祈るがために焚やいて祭るのである。

日が暮れて、あたりが暗くなると、表で幽かすかに溜め息をするような声がきこえた。「ああ、小哥はほんとうに死んだのだ」と、母は声をうるませた。盂蘭盆で、その幽霊が戻つて来たのだ。

母はそこにある一枚の紙銭を取りながら、闇にむかつて言い聞かせた。

「もし本当に小哥が戻つて来たのなら、わたしの手からこの銭ぜにをとつてごらん。きつとおまえの追善供養ついでんをしてあげるよ」

やがて陰風がそよそよと吹いて来て、その紙銭をとつてみせたので、母も兄弟も今更のように声をあげて泣いた。早速に僧を呼んで、読経どきょうその他の供養を営んでもらつて、いよいよ死んだものと思ひ切つていると、それから五、六カ月の後に、かの小哥のすがたが家の前に飄然と現われたので、家内の者は又おどろいた。

「この幽霊め、迷つて来たか」

総領の兄は刀をふりまわして逐おい出そうとするのを、次の兄がさえぎつた。「まあ、待ちなさい。よく正体を見とどけてからのことだ」

だんだんに詮議すると、小哥は死んだのではなかった。彼は実家を出奔して、宜黄ぎこうというところへ行つて或る家に雇われていたが、やはり実家が恋しいので、もう余焰ほとほりの冷めた頃だろうと、のそのそ帰つて来たのであることが判つた。して見ると、前の夜の出来事は、無縁の鬼がこの一家をあざむいて、自分の供養を求めたのであつたらしい。

(同上)

義犬

青州せいしゅうに朱老人しゆじんというのがあつて、菓を売るのを家業とし、常に妻と妾と犬とを連れて、南康県付近を往来していた。

紹興二十七年四月、黄岡こうこうの旅館にある時、近所の村民が迎いに来て、母が病中であるからその脈を見た上で相当の菓をあたえてくれと頼んだ。ここから五、六里の所だというので、朱老人は今夜そこへ一泊するつもりで、妻妾と犬とを伴つて出てゆくと、途中の森のなかには村民の徒党が待ち伏せをしていて、老人は勿論、あわせて妻妾をも惨殺して、その金囊かねぶくろや荷物を奪い取つた。

そのなかで、犬は無事に逃げた。彼はその場から主人の実家へ一散に駆け戻って、しきりに悲しげに吠え立てるのみか、何事をか訴えるように爪で地を搔きむしった。家の者もそれを怪しんで、県の役所へ牽ひいてゆくと、犬はその庭に伏して又しきりに吠えつづけた。その様子をみて、役人もさとつた。

「もしやお前の主人が何者にか殺されたのではないか。それならば案内しろ」
 言い聞かされて、犬はすぐに先に立つて出た。役人らもそのあとに付いてゆくと、犬はかの森のなかへ案内して、三人の死骸の埋めてある場所を教えた。

「死骸はこれで判つたが、賊のありかはどこだ」

犬は又かれらを村民の住み家に案内したので、賊の一党はみな召捕られた。

(同上)

窓から手

少保しやうほの馬亮公ばりやうこうがまだ若いときに、燈下で書を読んでいると、突然に扇のような大きい手が窓からぬつと出た。公は自若じやくくとして書を読みつづけていると、その手はいつか去つた。

その次の夜にも、又もや同じような手が出たので、公は雌黄しおうの水を筆にひたして、その手に大きく自分の書き判を書くと、外では手を引つ込めることが出来なくなつたらしく、俄かに大きい声で呼んだ。

「早く洗つてくれ、洗つてくれ、さもないと、おまえの為にならないぞ」

公はかまわずに寢床にのぼると、外では焦しれて怒つて、しきりに洗つてくれ、洗つてくれと叫んでいたが、公はやはりそのままに打ち捨てて置くと、明け方になるにしたがつて、外の声は次第に弱つて来た。

「あなたは今に偉くなる人ですから、ちよつと試ためしてみただけの事です。わたしをこんな目に逢わせるのは、あんまりひどい。晋しんの温嶠おんきやうが牛渚ぎゆうしよをうかがつて禍いを招いたためもあります。もういい加減にして免ゆるしてください」

化け物のいうにも一応の理屈はあるとさとして、公は水をもつて洗つてやると、その手はだんだんに縮んで消え失せた。

公は果たして後に少保の高官に立身したのであった。

(同上)

洪州の州学正しゅうがくせいを勤めてゐる張ちやうという男は、元來刻薄こくはくの生まれ付きである上に、年を取るに連れてそれがいよいよ激しくなつて、生徒が休暇をくれろと願つても容易に許さない。学官が五日の休暇をあたえると、張はそれを三日に改め、三日の休暇をあたえると二日に改めるといふうで、万事が皆その流儀であるから、諸生徒から常に怨まれていた。

その土地に張鬼子ちやうきしという男があつた。彼はその風貌ふうぼうが鬼によく似ているので、鬼子あだなという渾名を取つたのである。

そこで、諸生徒は彼を鬼に仕立てて、意地の悪い張学正をおどしてやろうと思ひ立つて、その相談を持ち込むと、彼は慨然がいぜんとして引き受けた。

「よろしい。承知しました。しかし無暗に鬼の真似をして見せたところで、先生は驚きますまい。冥府の役人からかういふ差紙さしがみを貰つて来たのだぞといつて、眼のさきへ突き付けたら、先生もおそらく真物ほんものだと思つて驚くでしょう。それを付け込んで、今後は生徒を可愛がつてやれと言ひ聞かせます」

しかし冥府から渡される差紙などというものの書式しょしきを誰も知らなかつた。

「いや、それはわたしが曾かて見たことがあります」

張は紙を貰つて、それに白礬はくはんで何か細かい字を書いた。用意はすべて整つて、日

の暮れるのを待っていると、一方の張先生は例のごとく生徒をあつめて、夜学の勉強を監督していた。

州の学舎は日が暮れると必ず門を閉じるので、生徒は隙をみてそつと門をあけて、かの張鬼子を誘い込む約束になっていた。その門をまだ明けないうちに、張鬼子はどこかの隙間から入り込んで来て、教室の前にぬつと突つ立つたので、人びとはすこしく驚いた。

「畜生、貴様はなんだ」と、張先生は怒つて罵つた。「きつと生徒らにたのまれて、おれをおどしに來たのだろう。その手を食うものか」

「いや、おどしでない」と、張鬼子は笑つた。「おれは閻羅王えんらおうの差紙を持つて來たのだ。嘘だと思ふなら、これを見ろ」

かねて打ち合わせてある筋書の通りに、かれはかの差紙を突き出したので、先生はそれを受取つて、まだしまいまで読み切らないうちに、かれはたちまちその被り物を取り除けると、そのひたいには大きい二本の角があらわれた。先生はおどろき叫んで仆れた。

張は庭に出て、人びとに言つた。

「みなさんは冗談にわたしを張鬼子と呼んでいられたが、実は私はほんとうの鬼です。牛頭の獄卒ゴブです。先年、閻羅王の命を受けて、張先生を捕えに來たのですが、

その途中で水を渡るときに、誤まって差紙を落してしまったので役目を果たすことも出来ず、むなしく帰ればどんな罰を蒙るかも知れないので、あしかけ二十年の間、ここにさまよっていたのですが、今度みなさん方のお蔭で飯を弄して真となし、無事に使命を勤め負せることが出来ました。ありがとうございます」

かれは丁寧にあやまって、どこへか消えてしまったので、人びとはただ驚き呆れるばかりであった。張先生は仆れたままで再び生きなかつた。

(同上)

両面銭

南方では神鬼をたつとぶ習慣がある。狄青が儂智高を征伐する時、大兵が桂林の南に出ると、路ばたに大きい廟があつて、すこぶる靈異ありと伝えられていた。

將軍の狄青は軍をとどめて、この廟に祈つた。

「軍の勝負はあらかじめ判りません。就いてはここに百文の銭をとつて神に誓います。もしこの軍が大勝利であるならば、銭の面がみな出るように願います」

左右の者がさえぎつて諫めた。

「もし思い通りに銭の面が出ない時には、士気を沮める虞れがあります」

狄青は肯かないで神前に進んだ。万人が眼をあつめて眺めていると、やがて狄青は手に百銭をつかんで投げた。どの銭もみな紅い面が出たのを見るや、全軍はどつと歓び叫んで、その声はあたりの林野を震わした。狄青もまた大いに喜んだ。

彼は左右の者に命じて、百本の釘を取り来たらせ、一々その銭を地面に打付けさせた。そうして、青い紗の籠をもつてそれを掩い、かれ自身で封印した。

「凱旋の節、神にお礼を申してこの銭を取ることにする」

それから兵を進めてまず崑崙関を破り、さらに智高を破り、邕管を平らげ、凱旋の時にかの廟に参拝して、曩に投げた銭を取って見せると、その銭はみな両面であった。

(鉄圍山叢談)

古御所

洛陽の御所は隋唐五代の故宮である。その後にもここに都するの議がおこつて、宋の太祖の開宝末年に一度行幸の事があつたが、何分にも古御所に怪異が多く、又

その上に霖雨なごめに逢い、早ひでりを袴ひつてむなしく帰った。

それから宣和年間せんなんに至るまで年を重ねること百五十、故宮はいよいよ荒れに荒れて、金鑾殿きんらんてんのうしろから奥へは白昼も立ち入る者がないようになった。立ち入れればとかくに怪異を見るのである。大きな熊蜂や蟒蛇うわばみも棲すんでいる。さらに怪しいのは、夜も昼も音楽の声、歌う声、哭なく声などの絶えないことである。

宣和の末に、呉本ごほんという監官があつた。彼は武人の勇氣にまかせて、何事をも畏おそれ憚はばらず、夏の日に宮前の廊下に涼んでいて、申まをの刻（午後三時―五時）を過ぐるに至つた。まだ暗くはならないが、場所が場所であるので、従者は恐れて早く帰ろうと催促したが、呉は平気で動かなかつた。

たちまち警蹕けいひつの声が内からきこえて、衛従の者が紅い絹をかけた金籠かごの燭ろうを執ること数十対ついで、そのなかに黄いろい衣服を着けて、帝王の如くに見ゆる男一人、その胸のあたりにはなまましい血を流していた。そのほかにも随従の者大勢、列を正しく廊下づたいに奥殿へ徐々しゆしゆと練れんつて行つた。

呉と従者は急いで戸の内に避けたが、最後の衛士は呉がここに涼んでいて行列の妨げをなしたのを怒つたらしく、その臥榻がとうの足をとつて倒すと、榻いしがわらは石塼いしがわらをうがつて地中にめり込んだ。衛士らはそれから他の宮殿へむかつたかと思うと、その姿は消えた。

呉もこれを見て大いにおどろいた。その以来、彼は決してこの古御所に寝泊まりなどをしなかった。彼は自分の目撃したところを絵にかいて、大勢の人に示すと、洛陽の識者は評して「これは必ず唐の昭宗であろう」と言った。

唐の昭宗皇帝は英主であつたが、晩唐の国勢振わず、この洛陽で叛臣朱全忠のために弑せられたのである。

(同上)

我来也

京城の繁華の地区には窃盜が極めて多く、その出没すこぶる巧妙で、なかなか根絶することは出来ないのである。

趙尚書が臨安の尹であつた時、奇怪の賊があらわれた。彼は人家に入つて賊を働ちようしようしよき、必ず白粉をもつてその門や壁に「我来也」の三字を題して去るのであつた。その速捕甚だ嚴重であつたが、久しいあいだ捕獲することが出来ない。

我来也の名は都鄙に喧伝して、賊を捉えるとはいわず、我来也を捉えるというようになつた。

ある日、逮捕の役人が一人の賊を牽ひいて来て、これがすなわち我来也であると申し立てた。すぐに獄屋へ送こつて鞫問きくもんしたが、彼は我来也でないと言い張るのである。なにぶんにも証拠とすべき贓品ざうひんがないので、容易に判決をくだすことが出来なかつた。そのあいだに、彼は獄卒にささやいた。

「わたしは盗賊には相違ないが、決して我来也ではありません。しかし斯こうなつたら逃がれる道はないと覚悟していますから、まあ勉いたつておくんなさい。そこで、わたしは白金そくほうしゆくとうばくを宝叔塔ほうしゆくとうの何階目に隠してありますから、お前さん、取つてお出でなさい」

しかし塔の上には昇り降りの人が多い。そこに金を隠してあるなどは疑わしい。こいつ、おれを担かぐのではないかと思つていると、彼はまた言った。

「疑わずに行つてごらんなさい。こちらに何かの仏事があるとかいつて、お燈籠に灯を入れて、ひと晩廻り廻つているうちに、うまく取り出して来ればいいのです」
獄卒はその通りにやってみると、果たして金を見いだしたので、大喜びで帰つて来て、あくる朝はひそかに酒と肉とを獄内へ差し入れてやった。それから数日の後、彼はまた言った。

「わたしはいろいろの道具を瓶かに入れて、侍郎橋じろうきょうの水のなかに隠してあります」
「だが、あすこは人足ひとあしの絶えないところだ。どうも取り出すに困る」と、獄卒は言つ

た。

「それはこうするのです。お前さんの家の人が竹籃たけかごに着物をたくさん詰め込んで行って、橋の下で洗濯をするのです。そうして往来のすきをみて、その瓶を籃に入れて、上から洗濯物をかぶせて帰るのです」

獄卒は又その通りにすると、果たして種々の高価の品を見つけ出した。彼はいよいよ喜んで獄内へ酒を贈った。すると、ある夜の二更にこう（午後九時—十一時）に達する頃、賊は又もや獄卒にささやいた。

「わたしは表へちよつと出たいのですが……。四更（午前一時—三時）までには必ず帰ります」

「いけない」と、獄卒もさすがに拒絶した。

「いえ、決してお前さんに迷惑はかけません。万一わたしが帰つて来なければ、お前さんは囚人めしゆうどを取り逃がしたというので流罪るどいになるかも知れませんが、これまで私のあげた物で不自由なしに暮らして行かれる筈です。もし私の頼みを肯きいてくれなければ、その以上に後悔することが出来るかも知れませんか」

このあいだからの一件を、こいつの口からべらべら喋しゃべられては大変である。獄卒も今さら途方にくれて、よんどころなく彼を出してやったが、どうなることかと案じていると、やがて檐のきの瓦を踏む音がして、彼は家根やねから飛び下りて来たので、

獄卒は先ずほつとして、ふたたび彼に手枷足枷をかけて獄屋のなかに押し込んで置いた。

夜が明けると、昨夜三更、張府に盜賊が忍び入って財物をぬすみ、府門に「我来也」と書いて行つたという報告があつた。

「あぶなくこの裁判を誤まるところであつた。彼が白状しないのも無理はない。我来也はほかにあるのだ」と、役人は言つた。

我来也の疑いを受けた賊は、叩きの刑を受けて境外へ追放された。獄卒は我が家へ帰ると、妻が言つた。

「ゆうべ夜なかに門を叩く者があるので、あなたが歸つたのかと思つて門をあけると、一人の男が、二つの布囊ぬのぶくろをほうり込んで行きました」

そのふくろをあけて見ると、みな金銀の器うつわで、賊は張府で盗んだ品を獄卒に贈つたものと知られた。趙尚書は明察の人物であつたが、遂に我来也の奸計さどを覺らなかつたのである。

獄卒はやがて役を罷やめて、ふところ手で一生を安樂に暮らした。その後、せがれは家産を守ることが出来ないで全部蕩尽とうじん、そのときに初めてこの秘密を他人に洩らした。

海井

華亭かていの市中に小道具屋があつた。その店に一つの物、それは小桶に似て底がなく、竹でもなく、木でもなく、金でもなく、石でもなく、名も知れなければ使い途も知れなかつた。店に置くこと数年、誰も見かえる者もなかつた。

ある日、商船の老人がそれを見て大いにおどろき、また喜んだ気色けしきで、しきりにそれを撫でまわしていたが、やがてその値いを訊いた。道具屋の亭主もぬかりなく、これは何かの用に立つものと看み取つて、出たらめに五百緡ひんと吹つかけると、老人は笑つて三百緡に負けさせた。その取引きが済んだ後に、亭主は言つた。

「実はこれは何という物か、わたしも知らないのです。こうして取引きが済んだ以上、決してかれこれは申しませんから、どうぞ教えてください」

「これは世にめずらしい宝だ」と、老人は言つた。「その名を海井かぜいという。普通の航海には飲料として淡水を積んで行くのが習い、しかもこれがあれば心配はない。海の水を汲んで大きいうつわに満々とたたえ、そのなかに海井を置けば、潮水は変じ

て清い水となる。異国の商人からかねてその話を聞いていたが、わたしも見るのは今が始めて、これが手に入れば、もう占めたものだ」

(癸辛雜識続集)

報冤蛇

南粵なんえつの習いとして蠱毒呪詛こどくじゆそをたつとび、それに因つて人を殺し、又それによつて人を救うこともある。もし人を殺そうとして仕損ずる時は、かえつておのれを斃たおすことがある。

かつて南中に遊ぶ人があつて、日盛りを歩いて林の下に休んでいる時、二尺ばかりの青い蛇を見たので、たわむれに杖をもつて撃つと、蛇はそのまま立ち去つた。旅びとはそれから何だか体の工合くわいあひがよくないように感じられた。

その晩の宿に着くと、旅舎の主人が怪しんで訊いた。

「あなたの面かほには毒気があらわれているようですが、どうかなさいましたか」

旅人はぼんやりして、なんだか判わからなかつた。

「きようの道中にどんな事がありましたか」と、主人はまた訊いた。

旅人はありのままに答えると、主人はうなずいた。

「それはいわゆる『報冤蛇』です。人がそれに手出しをすれば、百里の遠くまでも追つて来て、かならず其の人の心を噬みます。その蛇は今夜きつと来るでしょう」
 旅人は懼れて救いを求めると、主人は承知して、龕のなかに供えてある竹筒を取り出し、押し頂いて彼に授けた。

「構わないから唯これを枕もとにお置きなさい。夜通し燈火をつけて、寝た振りをして待つていて、物音がきこえたらこの筒をお明けなさい」

その通りにして待つていると、果たして夜半に家根瓦のあいだで物音がきこえて、やがて何物か几の上に堕ちて来た。竹筒のなかでもそれに応えるように、がさがさという音がきこえた。そこで、筒をひらくと、一尺ばかりの蜈蚣が這い出して、旅人のからだを三度廻つて、また直ぐに几の上に復つて、暫くして筒のなかに戻つた。それと同時に、旅人は俄かに体力のすこやかに変わったのを覺えた。

夜が明けて見ると、きのうの昼間に見た青い蛇がそこに斃れていた。旅人は主人の話の嘘でないことを初めてさとつて、あつく礼を述べて立ち去つた。

又こんな話もある。旅人が日暮れて宿に行き着くと、旅舎の主人と息子が客の荷物をじろじろと眺めている。その様子が怪しいので、ひそかに主人らの挙動をうかがっていると、父子は一幅の猴の絵像を取り出して、うやうやしく袴つていた。

旅人は僕しもに注意して夜もすがら眠らず、劍をひきつけて窺うかがっていると、やがて戸を推してはいつて来た物がある。それは一匹の猴さるで、体は人のように大きかった。劍をぬいて追おい払はうと、猴はしりごみして立ち去いった。

暫しばくして母屋おもやで、主人の哭なく声がきこえた。息子は死んだというのである。

(独醒雜志)

紅衣の尼僧

唐とうの宰相かたんの賈耽ちようたんが朝あよりしりぞいて自邸ぢよに帰ると、急に上東門の番卒を召して、嚴重に言い渡した。

「あしたの午ひるごろ、変ひつた色の人間が門に入ろうとしたら、容赦なく打ち叩け。打ち殺しても差し支えない」

門卒らはかしまつて待つていると、翌日の巳みの刻を過ぎて午うまの刻になった頃、二人の尼僧が東の方角の百歩ほどの所から歩いて来た。別べに變ひつたこともなく、かれらは相前後して門前に近づいた。見ればかれらは紅べ白粉おしろいをつけて、その艷容は娼婦の如くであるのみか、その内服は真まつ紅で、下飾りもまた紅べかった。

「こんな尼があるものか」と、卒は思った。かれらは棒をもって滅多打ちに打ち据えると、二人の尼僧は脳を傷つけ、血をながして、しきりに無罪を泣き叫びながら、引返して逃げてゆく。その疾きこと奔馬の如くであるのを、また追いかけて打ち据えると、かれらは足を傷つけられてさんさんの体になった。それでも百歩以上に及ぶと、その行くえが忽ち知れなくなつた。

門卒はそれを賈耽に報告して、他に異色の者を認めず、唯かの尼僧の衣服容色が異つてゐるのみであつたと陳述すると、賈は訊いた。

「その二人を打ち殺したか」

脳を傷つけ、足を折り、さんさんの痛い目に逢わせたが、打ち殺すことを得ないでその行くえを見失つたと答えると、賈は嘆息した。

「それでは小さい災いを免かれまい」

その翌日、東市から火事がおこつて百千家を焼いたが、まずそれだけで消し止めた。

(芝田録)

靈池れいいち、洛帶らくたい村に郭二かくじという村民がある。彼が曾かつてこんな話をした。

自分の祖父は医師と卜者ぼくしやを業とし、四方の村々から療治りょうぢや占うらないに招かれて、ほとんど寸暇すんかもないくらいであった。彼は孫真人そんしんじんが赤い虎を従したがえている図をかかせて、それを町の店なかに懸けて置くこと数年、だんだん老境に入るにしたがつて、毎日唯ぼんやりと坐つたままで、画えがける虎をじつと見つめていた。

彼は一日でも画ける虎を見なければ楽しまないものであった。倅や孫たちが城中へ豆や麦を売りに行つて、その帰りに塩や醤油を買つて来る。それについて何か気に入らない事があると、すぐに怒つて罵つて、時には杖をもつて打ち叩くこともある。そんな時でも画ける虎を見れば、たちまちに機嫌が直つて、なにもかも忘れてしまふのである。

療治に招かれて病家へ行つても、そこに画虎がこの軸でもあれば、いい心持になつて熱心に療治するのであった。したがつて、親戚などの付き合いかからも、画虎の軸や屏風を贈つて来るのを例とするようになった。こうして、幾年を経ふるあいだに、自宅の座敷も台所も寝間も一面に画虎を懸けることになつて、近所の人たちもおどろき怪しみ、あの老人は虎に魅ままれたのだらうなどと言つた。あまりの事に、その老兄も彼を責めた。

「お前はこんなものを好んでどうするのだ」

「いつもむしゃくしゃしてなりません。これを見ると、胸が少し落ちつくのです」

「それならば城内の薬屋に活きた虎が飼つてあるのを知っているのか」

「まだ知りません。どうぞ連れて行つて一度見せてください」

兄に頼んで一緒に連れて行つてもらつたが、一度見たが最後、ほとんど寝食を忘れて十日あまりも眺め暮らしていた。その以来、毎月二、三回は城内に入つて、活きた虎を眺めているうちに、食い物も肉ばかりを好むようになった。肉も煮焼きをしたものは気に入らず、もっぱら生の肉を啖つて、一食ごとに猪の頭や猪の股を梨や棗なつめのように平らげるので、子や孫らはみな彼をおそれた。城内に入つて活きた虎を見て帰ると、彼はいいよいよ気があらくなつて、子や孫らの顔を見ると、杖をもつて叩き立てた。

五代の蜀しよくが国号を建てた翌年、彼は或る夜ひそかに村舎の門をぬけ出して、行くえ不明になつた。そのうちに、往来の人がこんなことを伝えた。

「ゆうべ一頭の虎が城内に跳り込んだので、半日のあいだ城門を開かなかつた。軍人らが城内に駆け付けて虎を射殺し、その肉を分配して食つてしまった」

彼はいつまでも帰らず、又そのたよりも聞えなかつた。彼は虎に化けたのである。遺族は虎の肉を食つた人びとをたずねて、幾塊かの骨片を貰つて来て、それを葬る

ことにした。

(茅亭客話)

靈鐘

陳述古ちんじゆつこが建州浦城けんしゅうほじやう県の知事を勤めていた時、物を盗まれた者があつたが、さてその犯人がわからなかつた。そこで、陳は欺いて言つた。

「かしこの廟には一つの鐘があつて、その靈験れいげんあらたかである」

その鐘を役所のうしろの建物に迎え移して、仮りにそれを祀まつつた。彼は大勢の囚人を牽ひき出して言い聞かせた。

「みんな暗い所でこの鐘を撫でてみる。盗みをしない者が撫でて音を立てない。盗みをした者が手を触るればたちまちに音を立てる」

陳は下役の者どもを率ひきいて莊重な祭事をおこなつた。それが済んで、鐘のまわりとほりに帷を垂れさせた。彼はひそかに命じて、鐘に墨を塗らせたのである。そこで、疑わしい囚人を一人ずつ呼び入れて鐘を撫でさせた。

出て来た者の手をあらためると、みな墨が付いていた。ただひとり黒くない手を

持っている者があつたので、それを詰問きつもんすると果たして白状した。彼は鐘に声あるを恐れて、手を触れなかつたのである。

これは昔からの法で、小説にも出ている。

(夢溪筆談)

統夷堅志・其他

第十の男は語る。

「わたくしは金・元を割り当てられました。御承知の通り、金は朔北さくほくの女真族じょしんぞくから起つて中国に侵入し、江北に帝と称すること百余年に及んだのですから、その文学にも見るべきものがある筈ですが、小説方面はあまり振わなかつたようです。そのなかで、学者として、詩人として、最も有名であるのは元好問げんこうもんであります。彼は本名よりも、その雅号の元遺山げんいざんをもつて知られて居ります。前に『夷堅志』が紹介された関係上、ここでは元遺山の『続夷堅志』を紹介することに致しました。

元は小説戯曲勃興の時代と称せられ、例の水滸伝すいこでんのごとき大作も現われて居りますが、今晚のお催しの御趣意から観みますと、戯曲は勿論例外であり、小説の方面にも多く採るべきものを見いだし得ないのは残念でございます。就いてはまず『続夷堅志』を主として、それに元代諸家の作を付け加えることにとどめて置きました」

梁氏の復讐

戴十たいじゅうといふのはどこの人であるか知らないが、兵乱の後は洛陽の東南にある左家莊さかそうに住んで、人に傭やとわれて働いていた。いわゆる日傭取りひようとりのたぐいで、甚だ貧しい者であつた。

金の^{きん}大定^{たいてい}二十三年の秋八月、ひとりの通事（通訳）が畑の中に馬を放して豆を食わせていた。それは通事が所有の畑ではなく、戴が傭われて耕作している土地であるので、戴はその狼藉^{ろうぜき}を見逃がすわけには行かなかつた。彼はその馬を叱^おつて逐^お出した。

それをみて通事は大いに怒つた。彼は策^{むち}をもつて戴をさんざんに打ち据えて、遂に無残に打ち殺してしまつたので、戴の妻の梁氏^{りやうし}は夫の死骸を當中へ昇^かき込んで訴えた。通事は人殺しの罪をもつて捕えられた。

この通事は身分の高い家に仕えている者であつたので、その主人が牛三頭と白金一筋^{こし}をつくなうことにして、梁氏に示談を申し込んだ。

「夫の代りにあの男の命を取つたところで、今更どうなるものではあるまい。夫の死んだのは天命とあきらめてはくれまいか。おまえの家は貧しい上に、二人の幼い子供が残っている。この金と牛とで自活の道を立てた方が将来のためであろう」

他の人たちも成程そうだと思つたが、梁氏は決して承知しなかつた。

「わたしの夫が罪なくして殺された以上、どうしても相手を安穩^{あんのん}に捨てて置くことは出来ません。この場合、損得などはどうでもいいのです。たとい親子が乞食になつても構いませんから、あの男を殺させてください」

こうなると、手が着けられないので、他の人たちも持てあました。

「おまえは自分であの男を殺すつもりか」と、一人が訊いた。
 「勿論です。なに、殺せないことがあるものか」

彼女は袖をまくって、用意の刃物を突き出した。その権幕が怖ろしいので、人びとも思わずしりごみすると、梁氏は進み寄って縄付きの通事を切った。しかもひと思いには殺さないで、幾度も切って、切って、切り殺した。そうして、いよいよ息の絶えたのを見すまして、彼女はその血をすくって飲んだ。あまりの怖ろしさに、人びとはただ呼吸をのんでいると、彼女は二人の子を連れて、そのままどこへか立ち去った。

(続夷堅志)

樹を伐る狐

鄭村の鉄李という男は狐を捕るのを商売にしていた。大定の末年のある夜、かれは一羽の鴿を餌として、古い墓の下に網を張り、自分がかたわらの大樹の上に攀じ登ってうかがっていると、夜の二更(午後九時―十一時)とおぼしき頃に、狐の群れがここへ集まって来た。かれらは人のような声をなして、樹の上の鉄を罵った。

「鉄の野郎め、貴様は鴿一羽を餌にして、おれたちを釣り寄せるつもりか。貴様の親子はなんと奴らだ。まじめな百姓わざも出来ないで、明けても暮れても殺生せつしようばかりしていやあがる。おれたちの六親眷族ろくしけんぞくはみんな貴様たちの手にかかつて死んだのだ。しかし今夜こそは貴様の天命も尽きたぞ。さあ、その樹の上から降りて来い。降りて来ないと、その樹を挽ひき倒すぞ」

なにを言やあがると、鉄も最初は多寡たかをくくつていたが、狐らはほんとうに樹を伐るつもりであるらしく、のこぎりで幹を伐るような音がきこえはじめた。そうして、釜の火を焚たけ、油を沸かせと罵り合う声もきこえた。かれらは鉄をひきおとして油煎いりにする計画であることが判ったので、彼も俄かに怖ろしくなったが、今更いどうすることも出来ない。

「ともかくも樹にしっかりとかじり付いているよりほかはない。万一この樹が倒されたら、腰につけている斧おので手当り次第に叩たたつ斬きつてやろう」と、彼は度胸を据えていた。

幸いに何事もないうちに夜が明けかかったので、狐らはみな立ち去った。鉄もほつとして樹を降りると、幹にはのこぎりの痕あとらしいものも見えなかった。ただそこらに牛の肋骨あはらほねが五、六枚落ちて見ると、かれらはこの骨をもつてのこぎりの音を聞かせたらしい。

「畜生め。おれを化かして嚇かしやあがつたな。今にみる」

かれは爆発薬を竹に巻き、別に火を入れた罐を用意して、今夜も同じところへ行くと、やはり二更に近づいた頃に、狐の群れが又あつまつて来て樹の上にいる彼を罵つた。それを黙つて聴きながら、鉄は爆薬に火を移して投げ付けると、凄まじい爆音と共に火薬が破裂したので、狐らはおどろいて逃げ散るはずみに、我から網にかかると多かつた。鉄は斧をもつて片端から撲り殺した。

(同上)

兄の折檻

王おきという役人は大定年中に死んだ。その末の弟の王確かたというのは大酒飲みの乱暴で、亡き兄の妻や幼な児をさんざんに苦しめるのであるが、どうにも抑え付けようがないので、一家は我慢に我慢して日を送っていた。

そういう苦勞がつづいたために、妻はどうとう病いの床に就くようになった。あの夜のことである。夜も更けて、ともしびも消えたとき、暗いなかで何やら衣摺きぬずれのような音が低くきこえた。やがてまた、そこらの双陸すいろくや棋石ごいしに触れるような響き

がして、誰か幽かな溜め息をついているようにも聞かれた。

それが亡き夫の霊で、乱暴者の弟が勝負事にふけるのを嘆息しているのではないかとも思われたので、彼女は泣いて訴えた。

「末の叔父さんには困り切ります。さりとてお上で罰して下さいというわけにも行かず、このままにしていたら私たち母子はどうなるか判りません」

それから五、六日を過ぎないうちに、王確は酔って襄という所へ出かけた。帰りに日は暮れて、趙という村まで来かかると、路のまんなかで兄の王に出逢った。とうに死んでいる筈の兄は、地に筋を引いて一々に弟の罪状をかぞえ立てた上に、馬の策をふるって続け打ちに打ち据えたので、さすがの乱暴者も頭を抱えて逃げ廻つて、僅かに自分の家へ帰ることが出来た。

燈火の下でよく視ると、彼の着物はさんさんに破れているばかりか、背中一面が青く腫れあがっていたので、彼はいよいよおびやかされた。翌朝かれは兄の画像の前に百拝して、以来は決して酒を飲まなくなった。

(同上)

広寧こうねいの閻山公えんざんこうの廟は靈驗いやちこなるをもつて聞えていた。殊にその木像が甚だ
 瘴惡ぢやうあくである上に、周圍には古木うっそうとして昼なお暗いほどであるので、夜は勿
 論、白昼でもここに入るものは毛髪おのずから立つという物凄場所であつた。夜
 が更けると、神か鬼か知らず、廟内で罪人を拷問ごうもんするような声がかきこえるとい
 う噂も伝えられた。

参知政事りやうしゆくの梁肅は、若い時にこの郷さとの擗馬嶺けんばれいというところに住んでいた。彼は拳子きよし
 となつて他の諸生と夏期講習の勉強をしている間に、あるとき鬼神に関する噂が出
 て、誰が強かつたとか、誰が偉かつたとか言っていると、梁は傲然ごうぜんとして言つた。

「わたしはどの人も強いとは思わない。そんなことは誰にでも出来るのだ。論より
 証拠で、わたしは日が暮れてから閻山の廟へ行つて、廟のなかを一周してみせる」

「ほんとうに行くか」

「おお、いつでも行く」

「行つたという証拠をみせるか」

「わたしが通つたところには、壁や板に何かのしるしを付けて置く」と、梁は答え
 た。

若い者にはよくある習いで、その明るる晚いよいよ一緒にゆくことになつた。但

し他の諸生は門外に待っていて、梁ひとりが廟内の奥深く進み入るのである。彼は恐るる色なく、木立ちのあいだをくぐりぬけて、古廟のうちへ踏み込むと、灯ひひとつの光りもないので、あたりは真の闇であつた。手探りでしを付けながら、だんだんに廟の東の隅まで廻つてゆくと、何者かが壁に倚りかかつているのを探り当たつた。それが人であるか鬼であるか判らないので、梁は門外へ引返して、燈火を取つて来て更によく照らしてみると、それは一人の若い女であつた。

女は容貌きりようがすぐれて美しい上に、その服装もここらには見馴れないほどに美麗なものであつた。こんな女がどうしてここにいたのか、その子細をたずねようとしても、彼女は氣息奄々きせくえんえんとしてあたかも昏睡せる人の如くである。そこへ他の諸生らも集まつて来て、これはおそらく本当の人間ではあるまい、鬼がこんな姿に変じて我々をあざむくのであらうなどと言いながら、しばらく遠巻きにして窺つてみると、女はやがて眼をあいて、あたりを見まわして驚き怖れるような様子であつた。

「おまえは人か鬼か。一体どこから来た」と、梁は訊いた。

「わたくしは楊州ようしゅうの或る家の娘でございます。きよう他へ輿こし入れをする筈で、昼間から家を出ますと、その途中で俄かに大風が吹いて来まして、どこへか吹き飛ばされたように思つていますが、それから先は夢うつつでなんにも覚えて居りません」それを聞いて諸生らは喜んだ。梁にはまだ定まつた妻がないので、神が楊州から

彼に美人を送つて来たのであろうと言つた。梁もそうであろうかと思つて、結局連れて歸つて自分の妻としたが、あとで聞くと彼女は楊州でも人に知られた大家たいけの娘であつた。

梁はそれから十数年の後、大いに立身して高官にのぼつた。妻は数人の子女を儲けて夫婦むつまじく暮らした。

(同上)

捕鶉ほじゆんの児

平輿へいよの南、函頭村かんとうぞんの張老ちやうろうといふのは鶉うずらを捕るのを業としていたので、世間から鶉と呼ばれてゐた。

張はすでに老いて、ただ一人の男の児を持つてゐるだけであつたが、その児が十四、五歳になつた時に病死したので、張夫婦は老後の頼りを失つた悲しみに泣き叫んで、わが子と共に死に死にたいと嘆いた。その翌日になつても死体を埋葬するに忍びないので、瓦を積んで邱おかを作つて、地下一、二尺のところに入れて置いた。

「わたしの児はまた生きて来る」と、彼は言つた。

それを愚痴と笑う者もあれば、憫れむ者もあつた。死後三日目に、張夫婦は墓前に伏して、例のごとくに慟哭をつづけていると、たちまち墓のなかで呻るような声がきこえたので、夫婦はおどろいて叫んだ。

「わたしの児は果たして生き返つたぞ」

瓦を壊して、棺をかつぎ出して、わが家へ連れ帰ると、その児は湯をくれ、粥をくれと言つた。暫くして、彼は正氣にかえつて話した。

「はじめ冥府へ行つた時に、わたしは冥府の王に訴えました。なにぶんにも父母が老年で、わたしがいなくなると困ります。その余命をつつがなく送つて、葬式万端の済むまでは、どうぞ私をお助けくださいと願いました。王も可哀そうに思つてくれたと見えて、それではお前を歸してやる。歸つたらば親父に話して、今後は鶉捕りの商売をやめろと言え。そうすれば、おまえの寿命も延びることになる」

張はそれを聞いて、即刻に殺生のわざをやめることにした。彼は綱や罫のたぐいを焚いてしまつて、その児を連れて仏寺に参詣した。寺に呂という僧があつた。年は四十ばかりで、人柄も行儀も正しそうに見えた。彼は都に近い寺で綱主となつた事もあるという。その僧の前に出て、張の児は訊いた。

「あなたも生き返つておいでになつたのですか」

「わたしは死んだ覚えはない」と、僧は怪しんで答えた。

「わたくしは冥府へ行つた時に、あなたを見ました」と、張の児は言った。「あなたは宮殿の角の銅あかがねの柱につながれて、鉄の縄で足をくくられていました。獄卒が往つたり来たりして、棒であなたの腋わきの下を撞くと、血がだらだらと流れました。わたくしは帰る時に、あの和尚さまはなんの罪で呵責かじやくを受けているのですかと訊きましたら、あれは齋事にあたって経文きやうもんをぬかして読むからだと言いました」

僧は大いにおどろいた。彼は腋の下に腫物を生じて、三年も癒えないのであつた。そんなことを知ろう筈のない張の児に言い当てられて、彼は怖ろしくなつた。彼はそれから一室に閉じ籠つて毎日怠らずに経を呼んでみると、三年の後に腫物はおのずから癒えた。

(同上)

馬絆

吏部尚書りふしやうしょの憑夢弼ひやうむびつ、この人は八蕃はちばんの雲南宣慰司せんいしの役人からしだいに立身したのである。この憑氏の話に、かつて八蕃に在任の当時、官用で某所へ出向いた。途中のある駅に着いた時に、駅の役人が注意した。

「きょうももう暮れました。江のほとりには馬絆ばはんが出ます。この先へはおいでにならないがよろしゅうございましょう」

憑はその注意を肯きかなかつた。彼は良い馬を選んで、土地の者を供に連れて出発した。行くこと三、四十里、たちまちに供の者は馬から下りて地にひざまずき、しきりに何か念じているようであった。

その言葉は詭なまつていたので、何をいうのか能く判らないが、ひどく哀しんで憫れみを乞うように見受けられたので、憑はどうしたのかと訊ねると、彼は手をうごかして小声で説明した。われわれは死ぬというのである。

そこで、憑も馬をくだつて禱いのつた。

「わたしは万里の遠方から来て、ここに仕官の身の上である。もし私に天禄があるならば、死ぬことはあるまい。天禄がなければ、あえて死を恐るるものではない」
時に月のひかり薄明るく、小さい家のような巨大な物がころげるように河のなかにはいった。風なまぐさく、浪もまたなまぐさく、腥せい気は人をおそうばかりであった。更に行くこと数里の後、憑は土地の者に訊いた。

「あれはなんだ」

「馬絆です」

「馬絆とはなんだ」

土地の者は手をふつて答えない。三更の後に次の駅にゆき着くと、駅の役人が迎いに出来て来て、ひどく驚いたように言った。

「なんとという大胆なことを……。夜中に馬絆の虞れあるところを越えておいでになるとは……」

「馬絆とはなんだ」と、憑はまた訊いた。

「馬黄精のことでございます。これに逢う者はみな啖われてしまいます」
馬絆といい、馬黄精といい、いずれも蚊の種類であるらしい。

(遂昌雜録)

廬山の蟒蛇

廬山のみなみ、懸崖千尺の下は大江に臨んでいる。その崖の半途に藤蔓のまどつた古木があつて、その上に四つの蜂の巣がある。その大きさは五石を盛る瓶の如くで、これに蔵する蜂蜜はさぞやと察せられたが、何分にも嶮峻の所にあるので、往來の者はむなしく睨んで行き過ぎるばかりであつた。

そのうちに二人の樵夫が相談して、儲けは山分けという約束で、この蜂の巣を取

ることになった。一人は腰に縄をつけて、大木にすがつて下ること二、三十丈、ようやく巣のある所まで行き着いて、さかんに蜜を取った。他の一人は上から縄をとって、あるいは引き上げ、あるいは引き下げていたが、やがて蜜も大方とり尽くしたと思うころに、上の一人は縄を切つて去つた。自分ひとりで利益を占めようと考へたのである。

取り残された樵夫は声を限りに叫んだが、どうすることも出来なかつた。巢に余つてゐる蜜をすすつてわずかに飢えを凌いでいながら、どこにか昇る路はないかと、石の裂け目を攀よじてゆくと、そこに一つの穴があつた。

穴は深く暗く、その奥に蛟みずちか蟒蛇うわばみのようなものがわだかまつていて、寄り付かれなほほどになまぐさかつた。やがて蟒蛇は鉦かねのような両眼をひらくと、その光りはさながら人をとろかすように輝いた。しかも彼は別に動こうともしなかつた。樵夫は非常に恐れたが、どこへ逃げるといふ路もない。殊に穴のなかには暖かい気が満ちていて、寒さを凌ぐには都合がいいので、そこに出たり這入つたりして日を送つた。ある日、雷鳴がきこえると、穴のなかの物は俄かにのたくり出した。雷鳴が再びきこえると、物は穴から抜け出して行こうとするのである。

「どうで死ぬのは同じことだ」

樵夫は覚悟して、その鱗うろこの上に攀よじ登ると、物は空中をゆくこと一、二里で、彼

を振り落した。しかも池に落ちたために彼は死ななかつた。後に官に訴えて出たので、彼を捨てて行つた者は杖殺の刑におこなわれた。

(湛園静語)

答刺罕

至順年間しじゆんに、わたしは友人と葬式を送つた。その葬式の銘旗に「答刺罕夫人某氏」としてあるのが眼についた。答刺罕は蒙古語で、訳して自在王というのである。わたしはその家の人に訊いてみた。

「答刺罕と書いてあるのは、朝廷から封ぜられたのですか。それとも本人の字あざなですか」

「夫人の先祖かみが上から賜たまつたのです」と、家人が答えた。「世祖皇帝せいそが江南をお手に入れる時、大軍を率ひきいて黄河かうがまでお出でになりましたが、渡るべき舟がありません。よんどころなく其処そこに軍をとどめる事になりました。その夜の夢に一人の老人があらわれて、渡るべき舟がなければ私に付いて来いと言って、世祖を岸の辺まで案内して、ここから渡ることが出来ると指さして教えました。世祖はそこに何かの

目標めじるしをつけて帰ったかと思うと夢が醒めました。そこで翌日、ゆうべの夢の場所へ行つて、そこか此処こゝかと尋ねていると、一人の男が来て、ここから渡られますという。それでもまだ何だか不安心であるので、世祖はその男にむかつて、それではお前がまず渡つてみる、おれ達はその後とに付いてゆこうと言いますと、男は直ぐに先に立つて行きました。大軍は続いて行きますと、果たしてそのひと筋の水路は特別に浅いので、無事に渡り越すことが出来ました。軍が終つた後、世祖はかの案内者に恩賞をあたえようとしますと、その男は答えて、わたくしは富貴を願いません。ただ、わが身の自在を得れば満足でありますと申し立てたので、答刺罕しかかと書いて賜わつたのでございます。云々」

(山居新話)

道士、潮を退く

宋そうの理宗皇帝りそうのとき、浙江せうしやうの潮うしおがあふれて杭州こうしやうの都をおかし、水はひさしく退ひかないので、朝野の人びとも不安を感じた。そこで朝命として天師を召され、潮をしりぞける禱いのりをおこなうことになった。時の天師は三十五代の觀妙真人かんみょうしんじんである。天

師が至ると、潮はたちまち退いたので、理宗帝は大いに喜び、多大の下され物があつた。真人が法を修したのは四月十三日であつた。

然るに、元の大徳二年の春、潮が塩官州えんかんをおかして、氾濫すること百余里、その損害は実におびただしく、潮は城市にせまって久しく退かないので、土地の有力者は前にいった宋代の例を引いて、江浙行省こうせつこうしやうに出願し、天師をむかえて潮を退けることになつた。時の天師は三十八代の凝神広教真人ぎやまうしんこうきやうしんじんである。

やがて使者が迎いに行つたが、真人はその聘礼へいらいの方法が正しくないというので動かず、遂に行くことを謝絶した。そこで宮中の道士をくだして、鉄符をもつて加持させることになつた。道士は塩官州に到着したが、その行李こうりがまだ混雑しているのので、取りあえず持参の鉄符を水のほとりに立てると、俄かに浪は立ち騒いで、神の加護があるように見えたので、道士は喜んだ。

彼は法服に着かえ、鉄符をたずさえて舟に登つた。大勢の人びとは岸にあつまつて眺めていると、金の甲よろいを着た神者が彷彿ほうふつとして遠い空中に立っているのを見た。道士は法を修して、やがてその鉄符をなげうつと、鉄符は浪の上に躍ること幾回の後のちに沈んだ。暫くして一天俄かに晦くろく、霹靂へきれき一声、これで法を終つた。

それから数日の後、別のところに沙の盛りあがること十数里、その上に一物いちものつを発見した。それは海亀に似たもので、大きさは車輪のごとく、身には甲こうをつけて三つ

足であった。これぞ世にいう「能^{のう}」である。道士はその半分を割^きいて、持ち帰って朝廷に献じた。

道士が塩官州へくだったのち、朝廷からさらに天師に命令があつたので、天師も辞^{いな}むことを得ずして起^たつた。天師が到着したのは四月十三日で、あたかも宋代の時と同日であるので、人びとも不思議に思った。但し道士の修法が成就して、潮はようやく退いた後であるので、攘^{はら}いの祈祷をおこなつた上に、堤を築き、宮を建てることにして帰つた。

輟耕錄

第十一の男は語る。

「明代も元の後を亨けて、小説戯曲類は盛んに出て居ります。小説では西遊記、金瓶梅のたぐいは、どなたもよく御承知でございます。ほかにもそういう種類のものはたくさんありますが、わたくしは今晚の御趣意によりまして、陶宗儀の『輟耕録』を採ることにいたしました。陶宗儀は天台の人で、元の末期に乱を避けて華亭にかくれ、明朝になつてから徴されても出でず、あるいは諸生に教授し、あるいは自ら耕して世を送りました。元来著述を好む人で、田畑へ耕作に出るときにも必ず筆や硯をたずさえて行つて、暇があれば樹の下へ行つて記録していたそうです。この書に輟耕の名があるのはそれがためでしょう。原名は『南村輟耕録』というのだそうですが、普通には単に『輟耕録』として伝わつて居ります。この書は日本にも早く渡来したと見えまして、かの、『飛雲渡』や、『陰徳延寿』の話などは落語の材料にもなり、その他の話も江戸時代の小説類に雛案されているのがありまして、搜神記や酉陽雜俎に次いで、われわれ日本人にはお馴染みの深い作物でございます」

飛雲渡

飛雲渡は浪や風がおだやかでなくて、ややもすれば渡船の顛覆するところである。

ここに一人の青年があつて、いわゆる放縱不羈ほうじゆうふきの生活を送っていたが、ある時その生年月日をもつて易者に占つてもらうと、あなたの寿命は三十を越えないと教えられた。

彼もさすがにそれを気に病んで、その後幾人の易者に見てもらつたが、その占いはほとんど皆一様であつたので、彼もしよせん短い命とあきらめて、妻を娶めとらず、商売をも努めず、家財をなげうつて専ら義侠的の仕事に没頭していると、ある日のことである。彼がかの飛雲渡の渡し場付近を通りかかると、ひとりの若い女が泣きながらそこらをさまよつていて、やがて水に飛び込もうとしたのを見たので、彼はすぐに抱きとめた。

「お前さんはなぜ命を粗末にするのだ」

「わたくしは或る家に女中奉公をしている者でございます」と、女は答えた。「主人の家に婚礼がありまして、親類から珠たまの耳環みみわを借りました。この耳環は銀三十錠の値いのある品だそうでございます。今日それを返して来るように言い付けられました。わたくしがその使いにまいる途中で、どこへか落してしまいましたので……。今さら主人の家へも帰られず、いつそ死のうと覚悟をきめました」

青年はここへ来る途中で、それと同じような品を拾つたのであつた。そこでだんだんに訊いてみると確かにそれに相違ないと判つたが、先刻から余ほどの時間が過

ぎているので、その帰りの遅いのを怪しまれては悪いと思つて、彼はその女を主人の家へ連れて行つて、委細のわけを話して引き渡した。主人は謝礼をするといったが、彼は断わつて歸つた。

それから一年ほどの後、彼は二十八人の道連れと一緒に再びこの渡し場へ来かかると、途中で一人の女に出逢つた。女はかの耳環を落した奉公人で、その失策から主人の機嫌を損じて、とうとう暇を出されて、ある髪結床へ嫁にやられた。その店は渡し場のすぐ近所にあるので、女は先年のお礼を申し上げたいから、ともかくも自分の家へちよつと立ち寄つてくれと、無理にすすめて彼を連れて行つた。夫もかねてその話を聞いているので、女房の命の親であると尊敬して、是非とも午飯ひるめしを食つて行つてくれと頼むので、彼はよんどころなくそこに居残ることになつて、他の一行は舟に乗り込んだ。

残された彼は幸いであつた。他の二十七人を乗せた舟がこの渡し場を出ると間もなく、俄かに波風があらくなつたので、舟はたちまち顛覆して、一人も余さずに魚腹に葬られてしまつた。

青年は不思議に命を全うしたばかりでなく、三十を越えても死なないうで、無事に天寿を保つた。この渡しは今でも温州うんの瑞安ずいあんにある。

女の知恵

姚忠肅は元の至元二十年に遼東の按察使となつた。

その当時、武平県の農民劉義という者が官に訴え出た。自分の嫂が奸夫と共謀して、兄の劉成を殺したといふのである。県の尹を勤める丁欽がそれを吟味すると、前後の事情から判断して、劉の訴えは本当であるらしい。しかも死人のからだにはなんの疵のあとも残っていないのである。さりとて、毒殺したような形跡も見られないので、丁もその処分に困つて頻りに苦勞しているのを、妻の韓氏が見かねて訊いた。

「あなたは一体どんな事件で、そんなに心配しておいでなさるのです」

丁がその一件を詳しく説明すると、韓氏は考えながら言った。

「もしその嫂が夫を殺したものとすれば、念のために死骸の脳天をあらためて御覧なさい。釘が打ち込んであるかも知れません」

成程と気がついて、丁はその死骸をふたたび檢視すると、果たして髪の毛のあいだに太い釘を打ち込んで、その跡を塗り消してあるのを発見した。それで犯人は二も二もなく恐れ入つて、裁判はすぐに落着いたので、丁はそれを上官の姚忠肅に報告すると、姚も亦すこし考えていた。

「お前の妻はなかなか偉いな。初婚でお前のところへ縁付いて来たのか」

「いえ、再婚でございます」と、丁は答えた。

「それでは先夫の墓を発あはいて調べさせるから、そう思え」

姚は役人に命じて、韓氏が先夫の棺を開いてあらためさせると、その死骸の頭にも釘が打ち込んであった。かれもかつて夫を殺した経験をもっていたのである。丁は恐懼きまづくのあまりに病いを獲えて死んだ。

時の人は姚の明察めいさつに服して、包孝肅ほうこうしゆくの再来と称した。

(包孝肅は宋時代の明判官めいはんがんで、わが国の大岡越前守ともいべき人である)。

鬼の贓品

陝西せんせいのある村に老女が住んでいた。そこへ道士どうしのような人が来て、毎日かならず食を乞うと、老女もかならず快くあたえていた。すると、ある日のこと、かの道士が突然にたずねた。

「この家に妖怪の祟りはないか」

老女はあると答えると、それではおれが攘はらってやろうといって、道士は囊ふくろのなかから一枚のお符ふだを取り出して火に焚くと、やがてどこかで落雷らくらいでもしたような響き

がきこえた。

「これで妖怪は退治した」と、彼は言った。「しかしその一つを逃がしてしまった。これから二十年の後に、お前の家にもう一度禍いがおこる筈だから、そのときにはこれを焚け」

かれは一つの鉄の簡ふたをわたして立ち去った。それから歳月が過ぎるうちに、老女の娘はだんだん生長して、こちらでは珍しいほどの美人となった。ある日、大王と称する者が大勢の供を連れて来て、老女の家に宿った。

「おまえの家には曾かつて異人から授かった鉄簡があるそうだが、見せてくれ」と、大王は言った。

これまでも老女の話聞いて、その鉄簡をみせてくれという者がしばしばあるので、彼女はその贖物にせものを人に貸すことにして、本物は常に自分の腰に着けていた。きょうもその贖物の方を差し出すと、大王はそれを取り上げたままで返さないばかりか、こここの家には娘がある筈だから、ここへ呼び出して酒の酌をさせろと言った。娘はあいにくに病気で臥ふせて居りますと断わっても、王は肯きかない。どうでもおれの前へ連れて来いとおどしつけて、果ては手籠てごめの乱暴にも及びそうな権幕になって来た。

老女はふと考え付いた。この大王などというのはどこの人間だか判らない。かの

道士は二十年後に禍いがあるといったが、その年数もちょうど符合するから、大事の鉄簡を用いるのは今この時であろうと思つたので、腰につけている本物の鉄簡をそつと取つて、竈かまどの下の火に投げ込むと、たちまちに雷らいはとどろき、電光はほとばしつて、火と烟りが部屋じゆうにみなぎつた。

しばらくして、火も消え、烟りも鎮まると、そこには数十匹の猿が撃ち殺されていた。そのなかで最も大きいのがかの大王で、先年逃げ去つたものであるらしい。かれらのたずさえて来た諸道具はみなほんとうの金銀宝玉を用いたものであるので、老女はそれを官に訴え出ると、それらは一種の贓品ぞうひんと見なして官庫に没収された。泰不華元帥たいふけんすいはその当時西台せいだいの御史ぎよしであつたので、その事件の記録に朱書きをして、「鬼賊」としるした。鬼の贓品という意である。

一寸法師

元の至元年間の或る夜である。一人の盜賊が浙省じょうしやうの丞相府しやうしやうふに忍び込んだ。

月のうす明るい夜で、丞相が紗しゃの帷とほりのうちから透かしてみると、賊は身のたけ七尺余りの大男で、鬩羽かんうのような美しい長い髻ひげを生はやしていた。侍姫じきのひとりもそれを見て、思わず声を立てると、丞相は制した。

「ここは丞相の府だ。賊などが無暗にはいつて来る筈がない」

みだりに騒ぎ立てて怪我人でもこしらえてはならないという遠慮から、丞相は彼女を制したのである。賊はそのひまに、そこらにある金銀珠玉の諸道具を片端から盗んで逃げ去った。前にいう通り、その賊の人相風俗は大抵判っているので、丞相は官兵に命じてすぐにその捜査に取りかからせ、省城の諸門を閉じて詮議したが、遂にそのゆくえが知れずに終った。

その翌年になって、賊は紹興地方しょうこうで捕われて、逐一ちくいちその罪状を自白したが、かれは案外の小男であった。彼は当夜の顛末についてこう語った。

「最初に城内に入り込みまして、丞相府の東の方に宿を仮りていました。その晩は非常に酔って帰って来て、前後不覚のいで門の外に倒れているのを、宿の主人が見つけて介抱して、ともかくも二階へ連れ込まれましたが、寢床へはいると無暗に嘔はきました。それから夜の更けるのを待って、二階の窓からそと抜け出して、檐のきづたいに丞相の府内へ忍び込みましたが、その時には俳優が舞台で用いる付け髻を顔いっぱいにつけて、二尺あまりの高い木履ぼくりを穿はいていました。そうして、品物をぬすみ出すと、それを近所の塔の上に隠して置いて、ふたたび自分の宿へ戻って寝ていると、夜の明けた頃に官兵が捜査に来ました。しかし、わたくしが昨夜泥酔して帰ったことは宿の主人も知っていますし、第一わたくしは一寸法師といつても好

いほどに背が低い上に、髯などはちつとも生やしていないで、人相書とは全く違っているものですから、官兵は碌々に取調べもしないで立ち去ってしまったのです。それから五、六日経って、詮議もよほどゆるんだ頃に、塔の上からかの品々を持ち出しました」

蛮語を解する猴

これは杜彦明とげんめいという俳優の話である。

杜が江西地方からかえつて韶州しやうしゅうに来て、旅宿りゆうしゆくに行李をおろすと、その宿には先客として貴公子然たる青年が泊とまっていた。かれは刺繡ぬいのある美しい衣服を着て、玉を飾りにした帽をかぶっていたが、ただその穿き物だけが卑ひしい皮履かわくつであるので、杜もすこしく不審に思ったが、一夕自分の室へやへ招待して酒をすすめると、貴公子の方でもその返礼として杜を招いて饗応した。

招かれて、その室へ行つてみると、柱に一匹の小さい猴さるがつながれていて、見るから小ざかしげに立ち廻まわっていた。貴公子はやがてその綱を解いて放すと、猴はよく人に馴なれていて、巧みに酒席のあいだを周旋し、主人が蛮語で何か命令すると、一々聞き分けて働くのである。杜もおどろいてその子細を訊くと、貴公子は笑いな

がら説明した。

「実はわたしの家の侍女こしもとが子を生ままして、その子はひと月ばかりで死にました。そのときにこの小猴も丁度生まれましたが、親猴をかりいぬ獵犬に噛み殺されてしまったので、夜も昼も母を慕って啼き叫んでいるのが何分にも可哀そうでしたから、侍女に言いつけて育て上げさせました。人間の乳を飲んで育ったせいかな、人にもよく馴れ、また自然に蛮語をおぼえて、こうしてわたしの用を達してくれるのです」

成程そうかと、杜も思った。彼は間もなくかの貴公子に別れ、清州せいしゅうへ行つて呉ごという役人の家に足をとどめていると、ある日、ひとりの旅人が一匹の猴を連れて城内に入り込んだという報告があつた。

「それは世間に名の高い大泥坊だ」と、呉は言った。「まず何げなく、人の家を訪問して、家内の勝手を見さだめて置いて、夜になつてから其の猴を放して盗みを働かせるのだ。大方おれの所へも来るだろうから、その猴めを奪い取つて、世間のために害を除かなければならない」

翌日になると、果たして呉に面会を求めに来た者がある。杜がそつと隙き見をすると、彼はまさしく先日さきの貴公子で、きようも猴を連れていた。呉は面会して、かれと一緒に飯を食つて、その席上でかの猴を貰くいたいと言ひ出すと、彼も初めは堅こほく拒んだ。

「呉れるのが嫌ならば、ここでその猴の首を斬ってみせろ」と、呉は言った。
呉は同知どうちという官職を帯びて、大いに勢力を有しているので、彼も強しいて争うわけにも行かなくなつたと見えて、結局渋々ながらその猴を呉に譲ることになつた。呉は謝礼として白金十兩を贈つた。

貴公子は帰るときに猴にむかつて、なにか蜜語で言い聞かせて立ち去つた。彼はそこに蜜語の通訳が聞いていることを知らなかつたのである。通訳は呉に訴えた。
「あいつは猴にむかつて斯こゝう言い聞かせたのです。お前は当分飲まず食わずにいろ。そうすればきつと繩を解いて放すに相違ない。おれは十里さきの小さい寺にかくれて待つているから、すぐにそこへ逃げて来いと……」

そこで念のために果物や水をあたえようと、猴は決して口にしないのである。さらに人をつかわして窺うかがわせると、果たしてその主人もまだ立ち去らないで、そこらに徘徊していることが判つたので、呉はすぐにその猴を撃ち殺させた。

陰徳延寿

むかし真州しんしゅうの大商人おほあきんどが商売物を船に積んで、杭州へ行つた。時に鬼眼きがんという術士があつて、その店を州の役所の前に開いていたが、その占いがみな適中するという

ので、その店の前には大勢の人があつまっていた。商人もその店先に坐を占めると、鬼眼はすぐに言った。

「あなたは大金持だが、惜しいことにはこの中秋の前後三日のうちに寿命が終る」それを聞いて、商人はひどくおそれた。その以来、なるべく船路を警戒して進んでゆくと、八月のはじめに船は揚子江にかかった。見ると、ひとりの女が岸に立って泣いているのである。呼びとめて子細を訊くと、女は涙ながらに答えた。

「わたくしの夫は小商いこあきなをしている者で、錢五十緡ぜにびんを元手にして鴨や鷺鳥を買ひ込み、それを舟に積んで売りあるいて、帰つて来るとその元手だけをわたくしに渡して、残りの儲けで米を買つたり酒を買つたりすることになって居ります。きょうもその錢を渡されましたのを、わたくしが粗相で落してしまひまして、どうすることも出来ません。夫は氣の短い人間ですから、腹立ちまぎれに撲ぶち殺されるかも知れません。それを思うと、いっそ身を投げて死んだ方が優ましでございます」

「人間はいろいろだ」と、商人は嘆息した。「わたしも実は寿命が尽きかかっているので、もし金で助かるものならば、金銀を山に積んでも厭いとわないと思つているのに、ここには又わずかの金にかえて寿命を縮めようとして居る人もある。決して心配しなざるな。そのくらの錢はわたしがどうにもして上げる」

彼は百緡の錢をあたえると、女は幾たびか拝謝して立ち去つた。商人はそれから

家へ帰つて、両親や親戚友人にも鬼眼が予言のことを打ち明け、万事を処理しておもむろに死期を待つていたが、その期日を過ぎて、彼の身になんの異状もなかった。その翌年、ふたたび杭州へ行つて、去年の岸に船を泊めると、かの女が赤児を抱いて礼を言いに来た。彼女はそれから五日の後に赤児を生み落して、母も子もつづがなく暮らしているというのであつた。それからまた、かの鬼眼のところへゆくと、彼は商人の顔をみて不思議そうに言った。

「あなたはまだ生きているのか」

彼は更にその顔をながめて笑い出した。

「これは陰徳の致すところで、あなたは人間ふたりの命を助けたことがあるでしよう」

金の篋

木八刺ぼくはつらは西域の人で、字あざなは西瑛せいえい、その軀幹からだが大きいので、長西瑛と綽名あだなされてた。

彼はある日、その妻と共に食事をしていて、あたかも来客があると報じて来たので、小さい金の篋へらを肉へ突き刺したままで客間へ出て行つた。妻も続いてそこを

起つた。

客が帰つたあとで、さて引つ返してみると、かの金の籠が見えないのである。ほかに誰もいなかったのであるから、その疑いは給仕の若い下女にかかった。下女はあくまでも知らないと言ひ張るので、彼は腹立ちまぎれに折檻して、遂に彼女を責め殺してしまつた。

それから一年あまりの後、職人を呼んで家根のつくろいをさせると、瓦のあいだから何か堅い物が地に落ちた。よく見ると、それは曩さきに紛失したかの籠であつた。つづいて枯ひからびた骨があらわれた。それに因つて察すると、猫が人のいない隙をみて、籠と共にその肉をくわえて行つたものらしい。下女も不幸にしてそれを知らなかつたのである。世にはこういう案外の出来事もしばしばあるから、誰もみな注意しなければならぬ。

生き物使い

わたしが杭州にある時、いろいろの生き物を使うのを見た。

七匹の亀を飼っている者がある。その大小は一等より七等に至る。かれらを凡つくえの上に置いて、合図の太鼓を打つと、第一の大きい亀が這い出して来て、まんやかに

身を伏せる。次に第二の亀が這い出して、その背に登る。それから順々に這い登つて、第七の最も小さい亀は第六の甲の上に逆立ちをする。全体の形はさながら小さい塔の如く、これを烏亀疊塔うきじょうとうと名づける。

また、蝦蟇がま九匹を養っている者がある。席ちゆうに土をうずたかく盛りあげて、最も大きい蝦蟇がその上に坐っていると、他の小さい蝦蟇が左右に四匹ずつ向い合つて列ぶ。やがて大きいのがひと声鳴くと、他の八匹もひと声鳴く。大きいのが幾たびか鳴けば、他も幾たびか鳴く。最後に八匹が順々に進み出て、大きいのにむかつて頭を下げてひと声、さながら礼をなすが如くにして退く。これを名づけて蝦蟇説法がませつぽうという。

松江しようこうへ行つて、道士の太古庵たいこあんに仮寓かぐうしていた。その時に見たのは、鰈かじかを切るの術である。一尾は黒く、一尾は黄いろい鰈を取つて、磨ぎすましたる刃物に何かの薬を塗つて、胴切りにして互い違いに継ぎ合わせると、いづれも半身は黒く、半身は黄いろく、首尾その色を異ことにした二匹の魚は、もとの如くに水中を泳ぎ廻つていた。土地の人、衛立中えいりつちゆうというのがその魚を鉢に飼つて置くと、半月の後にみな死んだ。

剪燈新話

第十二の夫人は語る。

「今晚は主人が生まれてお話をいたす筈でございりましたが、よんどころない用事が出来まして、残念ながら俄かに欠席いたすことになりました。就きましては、お前が名代みよだいに出て何かのお話を申し上げるということとでございりましたが、無学のわたくしが皆さま方の前へ出て何も申し上げるようなことはございけません。唯ほんの申し訳ばかりに、どなたも御存じの『剪燈新話』のお話を少々申し上げて御免を蒙ります。わたくしどもにはよく判りわかりませんが、支那の小説は大体に於いて、唐とうと清しんとが一番よろしく、次が宋そうで、明朝みんの作は余り面白くないのだとか申すこととでございませぬ。殊に今晚の御趣意うけたまを承うけたまわりまして、主人もお話の選択によほど苦しんでいたようございまして。しかし支那の本国ではともかくも、日本では昔から『剪燈新話』がよく知られて居りまして、これは御承知の通り、明みんの瞿宗吉くそうきつの作ということになつて居ります。その作者に就いては多少の異論もあるようでございませぬが、ここでは普通一般の説にしたがつて、やはり瞿宗吉の作といたして置きましょう。

今まで皆さんがお話しになつたものとは違ひまして、この『剪燈新話』は一つのお話わがが比較的に長うございませぬから、今晚はそのうちの『申陽洞記』と『牡丹燈記』の二種を選んで申し上げることにいたします。馬琴ばきんの『八犬伝』のうちに、犬飼現八いぬかいげんぼちが庚申山こうしんざんで山猫の妖怪を射る件くだりがありますが、それはこの『申陽洞記』をそっくり

書き直したものでございます。一方の『牡丹燈記』が浅井了意の『お伽ぼうち』や、えんちよう円朝の『牡丹燈籠』に取り入れられているのは、どなたも能く御存じのことでございます。ましよう。前置きは先ずこのくらいにいたしまして、すぐに本文ほんもんに取りかかります」

申陽洞記

ろうせい隴西の李徳逢りとくほうという男は当年二十五歳の青年で、馬に騎り、弓をひくことが上手で、大胆な勇者として知られていましたが、こういう人物の癖として家業にはちつとも頓着せず、常に弓矢を取つて乗りまわつていたので、土地の者には爪弾きつまはじされていきました。

そういうわけで、身代しんだいもだんだんに衰えて来ましたので、元げんの天曆年間、李は自分の郷里を立ち退いて、桂州へ行きました。そこには自分の父の旧い友達が監郡の役を勤めているので、李はそれを頼つて行つたのですが、さて行き着いてみると、その人はもう死んでしまったというので、李も途方に暮れました。さりとて再び郷里へも帰られず、そこらをさまよい歩いた末に、この国には名ある山々が多いのを幸いに、その山々のあいだを往来して、自分が得意の弓矢をもつて鳥や獸けものを射るのを商売にしていきました。

「自分の好きなことをして世を送っていれば、それで結構だ」

こう思つて、彼は平気で毎日かけ廻つていました。すると、ここに銭せんという大家たいけがありまして、その主人は銭翁と呼ばれ、この郡内では有名な資産家として知られていました。銭の家には今年十七のひとり娘がありまして、父の寵愛はひと通りでなく、子供るときから屋敷の奥ふかく住まわせて、親戚や近所の者にも滅多めったにその姿を窺わせたことがないくらいでした。その最愛の娘が雨風の暗い夜に突然ゆくえ不明になつたので、さあ大変な騒ぎになりました。

よく調べてみると、門も扉も窓も元のままになつていて、外から何者かが忍び込んだらしい形跡もなく、娘だけがどこへか消えてしまつたのですから、実に不思議です。勿論、早速にその筋へ訴え出るやら、神に禱いのるやら、四方八方をたずね廻らせるやら、手に手を尽くして詮議したのですが、遂にそのゆくえが判らないので、父の銭翁は昼夜悲嘆にくれた末に、こういうことを触れ出しました。

「もし娘のありかを尋ね出してくれた者には、わたしの身代の半分を割さいてやる。又その上に娘の婿にする」

それを聞いて、誰も彼も色と慾とのふた筋から、一生懸命に心あたりを探し廻つたのですが、娘のゆくえは容易にわからず、むなしく三年の月日を送つてしまいました。すると、ある日のことです。かの李徳逢が例のごとくに弓矢をたずさえて山

狩りに出ると、一匹の麋くじかを見つけたので、すぐに追って行きました。

麋はよく走るので、なかなか追い付きません。鹿を追う獵師は山を見ずの譬たとえの通りに、李は夢中になって追って行くうちに、岡を越え、峰を越えて、深い谷間へ入り込みましたが、遂に獲物えもののすがたを見失いました。がっかりして見まわすと、いつの間にか日が暮れています。おどろいて引返そうとすると、もと来た道がもう判りません。そこらを無暗に迷いあるいているうちに、夜はだんだんに暗くなつて、やがて初更しよこう（午後七時―九時）に近い頃になつたらしいのです。むこうの山の頂きに何かの建物があるのを見つけて、ともかくもそこまで辿り着くと、そこらは人跡じんせきの絶えたところで、いつの代に建てたか判らないような、顔れくすかかった一字いちじゆの古い廟がありました。

「なんだか物凄い所だ」

大胆の青年もさすがに一種の恐れを感じましたが、今更どうすることも出来ないで、しばらく軒下に休息して夜のあけるのを待つことにしていると、たちまちに道を払う警蹕けいひつの音が遠くきこえました。

「こんな山奥へ今ごろ威めいかしい行列を作つて何者が来るのか。鬼神か、盜賊か」

忍んで様子を窺しかうに如しかずと思つて、かれは廟らんまの欄間らんまへ攀よじのぼり、梁はりのあいだに身をひそめていると、やがてその一行は門内へ進んで来ました。二つの紅い燈籠を

さきに立てて、その頭分かしらぶんとみえる者は紅あかい冠かんむりをいただけ、うす黄色の袍ほうを着て、神坐の前つぐえにある案つくえに拠よつて着坐すると、その従者とおぼしきもの十余人はおのおの武器を執とつて、階段きざはしの下に居列ぎりびました。その行粧ぎようそうはすこぶる嚴肅でありましたが、よく見ると、かれらの顔かたちはみな蒼黒く、猿のたぐいのか□かというものでありました。さては妖怪変化へんげかと、李は腰に挟はんでいる箭やを取とつて、まずその頭分とみえる者に射あてると、彼はその臂ひじを傷やつけられて、おどろき叫んで逃げ出しました。他の眷族けんぞくどもも狼狽うして、皆ばらばらと逃げ去さつてしまったので、あとは元のようにひっそりと鎮しずまりました。夜が明けてから神坐のあたりを調べると、なま血のあとが点々として正門の外までしたたっているのです、李はその跡をたずねて、山を南に五里ほども分け入ると、そこに一つの大きい穴があつて、血のあとはその穴の入口まで続いていました。

「化け物の巢窟すうくつはここだな。どうしてくりよう」

李は穴のあたりを見まわつて、かれらを退治する工夫を講じているうちに、やわらかい草に足をすべらせて、あつ、という間に穴の底へころげ落ちました。穴の深さは何十丈だか判りません。仰いでも空は見えないくらいです。所詮しよせんふたたびこの世へは出られないものと覚悟しながら、李は暗いなかを探りつつ進んでゆくと、やがて明るいところへ出ました。そこには石室いしむろがあつて、申陽之洞しんやうのどうという榜ふだが立たつてい

ます。その門を守るもの数人、いずれも昨夜の妖怪どもで、李のすがたを見てみな驚いたように訊きました。

「あなたは一体何者で、どうしてここへ来たのです」

李は腰をかがめて丁寧な敬礼しました。

「わたくしは城中に住んで、医者業としてゐる者でございますが、今日この山へ薬草を採りにまいりまして、思わず足をすべらせてこの穴へ転げ落ちたのでございます」

それを聞いて、かれらは俄かに喜びの色をみせました。

「おまえは医者というからは、人の療治が出来るのだろうか」

「勿論、それがわたくしの商売でございます」

「いや、有難い」と、かれらはいよいよ喜びました。「実はおれたちの主君の申陽侯が昨夜遊びに出て、ながれ矢のために負傷なされた。そこへ丁度、お前のような医者が迷つて来るといふのは、天の助けだ」

かれらは奥へかけ込んで報告すると、李はやがて奥へ案内されました。奥の寢室は帷も衾も華麗をきわめたもので、一匹の年ふる大猿が石の榻の上に横たわりながら唸っている、そのそばには国色ともいふべき美女三人が控えています。李はその猿の脈を取り、傷をあらためて、まことしやかにこう言いました。

「御心配なさるな。すぐに療治をしてあげます。わたくしは一種の仙薬をたくわえて居りますから、それをお飲みになれば、こんな傷はたちまちに癒るばかりでなく、幾千万年でも長生きが出来るのです」

腰に着けている囊ふくろから一薬をとり出して勿体もったいらしく与えると、他の妖怪どもも皆その前にひざまずいて頼みました。

「あなたは実に神のようなお人です。その長生きの仙薬というのをどうぞ我々にもお恵みください」

「よろしい。おまえらにも分けてあげよう」

李は囊にあらん限りの薬をかれらにも施すと、いずれも奪い合つて飲みましたが、それは怖ろしい毒薬で、怪鳥や猛獸たふを仆たおすために矢鏃やじりに塗るものでありました。その毒薬を飲んだのですから堪まりません。かの大猿をはじめとして、他の妖怪どもも片端から枕をならべてばたばたと倒れてしまいました。仕済ましたりとあざわらいながら、李は壁にかけてある宝剣をとつて、大猿小猿あわせて三十六匹の首をこごとく斬り落しました。

残る三人の美女も妖怪のたぐいであろうと疑つて、李はそれをも殺そうとすると、みな泣いて訴えました。

「わたくしどもは決して怪しい者ではございません。不幸にして妖怪に奪い去られ、

悲しい怖ろしい地獄の底に沈んでいたのでございます。その妖怪を残らず亡ぼして下さいましたのですから、わたくしどもに取りましてあなたは命の親の大恩人でございます」

そこで、だんだん聞いてみると、その一人はかの錢翁の娘で、他のふたりもやはり近所の良家の娘たちと判りました。李はこうして妖怪を退治して、不幸の娘たちを救ったのですが、何分にも深い穴の底に落ちているのですから、三人を連れて出る術すべがありません。これには李も思案にくれているところへ、いずこよりも知らず、幾人の老人があらわれて来ました。いずれも鬢びんの毛を長く垂れて、尖った口を持った人びとで、ひとりの白衣の老人を先に立てて、李の前にうやうやく礼拝しました。

「われわれは虚星きよせいの精で、久しくここに住んで居りましたが、近ごろかの妖怪らのために多年の住み家を占領されてしまいました。しかも我々はそれに敵対するほどの力がないので、しばらくここを立ち退いて時節の来るのを待つていたのでございますが、今日あなたのお力によって、かれらがことごとく亡びましたので、こんな悦ばしいことはございません」

老人らはその謝礼として、めいめいの袖の下から、金や珠たまのたぐいを取り出して獻ささげました。

「おまえらもすでに神通力じんつうりきを具そなえているらしいのに、なぜかの妖怪どもに今まで屈伏くつぷくしていたのだ」と、李は訊ききました。

「わたくしはまだ五百年にしかありません」と、白衣の老人は答えました。「かの大猿はすでに八百年の劫こうを経て居ります。それで、残念ながら彼に敵することが出来なかつたのでございます。しかし我々は人間に対して決して禍わざはひいをなすものではないと申しません。かの兇悪な猿どもがたちまち滅亡したのは、あなたのお力とは申しながら、畢竟ひつぎょうは天罰てんばつでございます」

「ここを申陽洞と名づけたのは、どういうわけだ」と、李はまた訊ききました。

「猿は申しんに属しゆします。それで、かれらが勝手にそんな名を付けたので、もとの地名ではございません」

「おまえらがここへ帰り住むようになったらば、おれに出口を教えてください、礼物れいもつなどは貰もらうに及およばない。ただこの娘たちを救すくつて出でられればいいのだ」

「それはたやすいことでございます。半時のあいだ眼を閉じておいでなされば、自然にお望ねがみが遂つげられます」

李はその通りにしていると、耳のはたには激しい雨風の音がしばらく聞えるようでしたが、やがてその声やんだので眼を開くと、一匹の大きい白鼠しろねずみがさきに立つて、豚いのこのような五、六匹の鼠ねずみがそのあとに従したがっていました。そこには一つの穴が掘

られていて、それから明るい路へ出られるようになっていたので、李は三人の娘と共に再びこの世の風に吹かれることになりました。

それからすぐに銭翁の家をたずねて、かのむすめを引き渡すと、翁はおどろき喜んで、かねて触れ出した通りに李を婿にしました。他の二人の娘の家でも、おなじくその娘を贈ることにしたので、李は一度に三人の美女を娶った上に、あっぱれの大福長者になりました。その後ふたびかの場所へ行ってみると、そこらには草木が一面におい茂っているばかりで、むかしの跡をたずねる便宜もありませんでした。

牡丹燈記

元の末には天下大いに乱れて、一時は群雄割拠の時代を現じましたが、そのうち地方谷孫ほうくそんというのは浙東せつとうの地方を占領していました。そうして、毎年正月十五日から五日のあいだは、明州府の城内に元宵の燈籠をかけつらねて、諸人に見物を許すことにしていたので、その宵々の賑わいはひと通りであります。鎮明嶺ちんめいれいの下に住んでいる喬生きやうせいという

元の至正二十年の正月のごときです。鎮明嶺の下に住んでいる喬生という男は、年がまだ若いのに先頃その妻をうしなつて、男やもめの心さびしく、この元宵の夜にも燈籠見物に出る気もなく、わが家の門にたたずんで、むなしく往來の人

びとを見送っているばかりでした。十五日の夜も三更さんじょう（午後十一時―午前一時）を過ぎて、往来の人影も次第に稀になった頃、髪を両輪りょうわに結んだ召仕い風の小女が双頭の牡丹燈をかかげて先に立ち、ひとりの女を案内して来ました。女は年のころ十七、八で、翠あおい袖、紅あかい裙もすその衣きものを着て、いかにもしなやかな姿で西をさして徐しずかに行き過ぎました。

喬生は月のひかりで窺うと、女はまことに国色こくしきともいふべき美人であるので、我にもあらず浮かれ出して、そのあとを追ってゆくと、女もやがてそれを覺さとつたらしく、振り返ってほほえみました。

「別にお約束をしたわけでもないのに、ここでお目にかかるとは……。何かのご縁でございましょうね」

それをしおに、喬生は走り寄って丁寧に敬礼しました。

「わたくしの住居はすぐそこです。ちよっとお立ち寄り下さいますまいか」

女は別に拒こほむ色もなく、かの小女をよび返して、喬生の家うちへ戻って来ました。初対面ながら甚だ打ち解けて、女は自分の身の上を明かしました。

「わたくしの姓ふは符あざな、字れいけいは麗卿、名しゆくほうは淑芳と申しました。かつて奉化州ほうかの判はんを勤めて居りました者の娘でございしますが、父は先年この世を去りまして、家も次第に衰え、ほかに兄弟もなく、親戚みよりもすくないので、この金蓮きんれんとただふたりで月湖げつこの西に

仮住居をいたして居ります」

今夜は泊まつてゆけと勧めると、女はそれをも拒まないで、遂にその一夜を喬生の家に明かすことになりました。それらの事は委しく申し上げません。原文には「甚だ歡愛を極む」と書いてございます。夜のあける頃、女はいったん別れて去りましたが、日が暮れるとまた来ました。金蓮という召仕いの小女がいつも牡丹燈をかかげて案内して来るのでございます。

こういうことが半月ほども続くうちに、喬生のとなりに住む老人が少しく疑いを起しまして、境いの壁に小さい穴をあけてそつと覗いてみると、紅や白粉を塗つた一つの骸骨が喬生と並んで、ともしびの下に睦まじそうにささやいているのです。それをみて老人はびっくりして、翌朝すぐに喬生を詮議すると、喬生も最初は堅く秘して言わなかつたのですが、老人に嚇されてさすがに薄気味悪くなつたと見えて、いっさいの秘密を残らず白状に及びました。

「それでは念のために調べて見なさい」と、老人は注意しました。「あの女たちが月湖の西に住んでいるというならば、そこへ行ってみれば正体がわかるだろう」

なるほどそうだと思つて、喬生は早速に月湖の西へたずねて行つて、長い堤の上、高い橋のあたりを隈なく探し歩きましたが、それらしい住み家は見当りません。土地の者にも訊き、往来の人にも尋ねましたが、誰も知らないという。そのうちに日

も暮れかかつて来たので、そこにある湖心寺こしんじという古寺にはいつて暫く休むことにしました。そうして、東の廊下ろうげがあるき、さらに西の廊下ろうげをさまよっている、その西廊のはずれに薄暗い室へやがあつて、そこに一つの旅櫬りょしんが置いてありました。旅櫬りょしんというのは、旅先で死んだ人を棺わだかまに蔵たくわめたままで、どこかの寺中じちゆうにあずけて置いて、ある時機を待つて故郷へ持ち帰つて、初めて本当の葬式をするのでございます。したがつて、この旅櫬りょしんに就いては昔からいろいろの怪談かいだんが伝えられています。

喬生は何なにどころなくその旅櫬りょしんをみると、その上に白い紙が貼つてあつて「故奉化符州判女もとのほうかふしゅうはんのじよ麗卿之柩れいけいのひつぎ」としるし、その柩ひつぎの前には見おぼえのある双頭の牡丹燈ふたごうのぼたんとうをかけ、又その燈下には人形の侍女こしもとが立つていて、人形の背中には金蓮の二字ごんにが書いてありました。それを見ると、喬生は俄かにぞつととして、あわててそこを逃げ出して、あとを見ずに我が家へ帰つて来ましたが、今夜もまた来るかと思うと、とても落ちついてはいられないので、その夜は隣りの老人の家へ泊めてもらつて、顫ふるえながらに一夜をあかしました。

「ただ怖おそれていても仕方がない」と、老人はまた教えました。「玄妙觀げんみょうかんの魏法師ぎほうしは故の開府かいふの王真人おうしんじんのお弟子で、おまじないでは当今第一けんごうということであるから、お前も早く行つて頼むがよからう」

その明くる朝、喬生はすぐに玄妙觀へたずねてゆくと、法師はその顔をひと目み

て驚いた様子でした。

「おまえの顔には妖気が満ちている。一体ここへ何しに來たのだ」

喬生はその坐下に拝して、かの牡丹燈の一条を訴えると、法師は二枚の朱いお符あかをくれて、その一枚は門かどに貼れ、他の一枚は寢台に貼れ。そうして、今後ふたたび湖心寺のあたりへ近寄るなど言い聞かせました。

家へ帰つて、その通りにお符を貼つて置くと、果たしてその後は牡丹燈のかげも見えなくなりました。それからひと月あまりの後、喬生は袁繡橋こんしゅうきょうのほとりに住む友達の家をたずねて、そこで酒を飲んで帰る途中、酔つたまぎれに魏法師の戒めを忘れて、湖心寺のまえを通りかかると、寺の門前にはかの金蓮が立っていました。

「お嬢さまが久しく待つておいでになります。あなたもずいぶん薄情なかたでございますね」

否いや応おういわさずに彼を寺中へ引き入れて、西廊の薄暗い一室へ連れ込むと、そこには麗卿が待ち受けていて、これも男の無情を責めました。

「あなたとわたくしは素もとからの知合いというのではなく、途中でふと行き逢つたばかりですが、あなたの厚い心を感じて、遂にわたくしの身を許して、每晚かかさずに通いつめ、出来るかぎりの真実を竭つくして居りましたのに、あなたは怪しい偽道士えせどうしのいうことを真まに受けて、にわかになわたくしを疑つて、これぎり縁を切ろうとな

さるとは、余りに薄情ななされかたで、わたくしは深くあなたを怨んで居ります。こうして再びお目にかかったからは、あなたをこのままに帰すことはなりません」女は男の手を握って、柩ひつぎの前へゆくかと思うと、柩ひつぎの蓋ふたはおのずと開いて、二人のすがたはたちまち隠れました。蓋は元のとおりに閉じられて、喬生は柩のなかで死んでしまったのです。

となりの老人は喬生の帰らないのを怪しんで、遠近おちぢちをたずね廻った末に、もしやと思つて湖心寺へ来てみると、見おぼえのある喬生の着物の裾がかの柩の外に少しくあらわれているので、いよいよ驚いてその次第を寺の僧に訴え、早速にかの柩をあけてあらためると、喬生は女の亡骸なきがらと折り重なつて死んでいました。女の顔はさながら生けるが如くに見えるのです。寺の僧は嘆息して言いました。

「これは奉化州判の符という人の娘です。十七歳のときに死んだので、仮りにその遺骸をここに預けたままで、一家は北の方へ赴きました。その後なんのたよりもありません。それが十二年後のこんにちに至つて、そんな不思議を見せようとは、まことに思いも寄らないことでした」

なにしろそのままにしては置かれないというので、男と女の死骸おびを蔵めたままで、その柩を寺の西門の外に埋めました。ところが、その後にもまた一つの怪異が生じたのでございます。

陰くもった日や暗い夜に、かの喬生と麗卿とが手をひかれ、一人の小女が牡丹燈をか
かけて先に立ってゆくのをしばしば見ることがありまして、それに出逢ったものは
重い病氣にかかつて、悪寒さむけがする、熱が出るという始末。かれらの墓にむかつて法
事を営み、肉と酒とを供えて祭ればよし、さもなければ命を亡うしなうことにもなるので、
土地の人びとは大いに懼おそれ、争つてかの玄妙觀へかけつけて、なんとかそれを取り
鎮めてくれるように嘆願すると、魏法師は言いました。

「わたしのまじないは未然に防ぐにとどまる。もうこうなつては、わたしの力の及ぶ
限りでない。聞くとところによると、四明山しめいざんの頂上に鉄冠道人てつかんどうじんという人があつて、鬼
神を鎮める術よを能くするといふから、それを尋ねて頼んでみるがよからうと思ふ」
そこで、大勢は誘いあわせて四明山へ登ることになりました。藤葛ふじかずらを攀よじ、溪たにを
越えて、ようやく絶頂まで辿りつくと、果たしてそこに一つの草庵があつて、道人
は几つくえに倚り、童子は鶴にたわむれていました。大勢は庵の前に拝して、その願意を
申し述べると、道人はかしらをふつて、わたしは山林の隠士で、翌あすをも知れない老
人である。そんな怪異を鎮めるような奇術を知ろう筈はない。おまえ方は何かの聞
き違えて、わたしを買いかぶっているのであらうと言つて、堅く断りました。い
や、聞き違へではない、玄妙觀の魏法師の指図であると答えると、道人はさてはと
うなずきました。

「わたしはもう六十年も山を下ったことがないのに、あいつが飛んだおしやべりをしたので、又うき世へ引き出されるのか」

彼は童子を連れて下山して来ましたが、老人に似合わぬ足の軽さで、直ちに湖心寺の西門外にゆき着いて、そこに方丈の壇をむすび、何かのお符を書いてそれを焚くと、たちまちに符の使い五、六人、いずれも身のたけ一丈余にして、黄巾をいただき、金甲を着け、彫り物のある戈をたずさえ、壇の下に突つ立って師の命令を待っている、道人はおごそかに言い渡しました。

「この頃ここに妖邪の祟りがあるのを、おまえ達も知らぬことはあるまい。早くここへ駆り出して来い」

かれらは承わって立ち去りましたが、やがて喬生と麗卿と金蓮の三人に手枷首枷をかけて引つ立てて来て、さらに道人の指図にしたがい、鞭や笞でさんざんに打ちつづけたので、三人は惣身に血をながして苦しみ叫びました。

その呵責が終つた後に、道人は三人に筆と紙とをあたえて、服罪の口供を書かせ、さらに大きな筆をとってみずからその判決文を書きました。

その文章は長いので、ここに略しますが、要するにかれら三人は世を惑わし、民を誣い、条にたがい、法を犯した罪によつて、かの牡丹燈を焚き捨てて、かれらを九泉の獄屋へ送るといふのであります。

きゆうきゆうじよしりまう

急々如律令（悪魔払いの呪文）、もう寸刻の容赦はありません。この判決をうけた三人は、今さら嘆き悲しみながら、進まぬ足を追い立てられて、泣く泣くも地獄へ送られて行きました。それを見送つて、道人はすぐに山へ帰つてしまいました。

あくる日、大勢がその礼を述べるために再び登山すると、ただ草庵が残っているばかりで、道人の姿はもう見えませんでした。さらに玄妙観をたずねて、そのゆくえを問いただそうとすると、魏法師はいつか唾になつて、口をきくことが出来なくなっていました。

池北偶談

第十三の男は語る。

「清朝もその国初の康熙こうき、雍正ようせい、乾隆けんりゅうの百三十余年間はめざましい文運隆昌の時代で、嘉慶かけいに至つて漸く衰えはじめました。小説筆記のたぐいも、この隆昌時代に出たものは皆よろしいようでございます。わたくしはこれから王士禎おうしていの『池北偶談』について少しくお話をいたそうと存じます。王士禎といつてはお判りにならないかも知れませんが、王漁洋おうぎやうといえは御存じの筈、清朝第一の詩人と推される人物で、無論に学者でございます。

この『池北偶談』はいわゆる小説でもなく、志怪の書でもありません。全部二十六巻を談故、談猷、談芸、談異の四項に分けてありまして、談異はその七巻を占めて居ります。右の七巻のうちから今夜の話題に適したようなものを選びまして、大詩人の怪談をお聴きに入れる次第でございます。」

名画の鷹

武昌ぶしやうの張氏ちやうしの嫁が狐みこに魅みまれた。

狐は毎夜その女のところへ忍んで来るので、張の家では大いに患うれいて、なんとかして追い攘はらおうと試みたが、遂に成功しなかつた。

そのうちに、張の家で客をまねくことがあつて、座敷には秘蔵の掛物をかけた。それは宋の徽宗皇帝の御筆という鷹の一軸である。酒宴が果てて客がみな帰り去つた後、夜が更けてからかの狐が忍んで来た。

「今夜は危なかつた。もう少しでひどい目に逢うところであつた」と、狐はささやいた。

「どうしたのです」と、女は訊いた。

「おまえの家の堂上に神鷹がかけてある。あの鷹がおれの姿をみると急に羽ばたきをして、今にも飛びかかつて来そうな勢いであつたが、幸いに鷹の頸には鉄の綱が付いているので、飛ぶことが出来なかつたのだ」

女は夜があけてからその話をする、家内の者どもも不思議に思った。

「世には名画の奇特といふことがないとは言えない。それでは、試しにその鷹の頸に付いている綱を焼き切つてみようではないか」

評議一決して、その通りに綱を切つて置くと、その夜は狐が姿をみせなかつた。翌る朝になつて、その死骸が座敷の前に発見された。かれは霊ある鷹の爪に撃ち殺されたのであつた。

その後、張の家は火災に逢つて全焼したが、その燃え盛る火焰のなかから、一羽の鷹の飛び去るのを見た者があるという。

無頭鬼

張猷忠ちようけんちゆうはかの李自成りじせいと相列ならんで、明朝みんの末期における有名の叛賊である。

彼が蜀しよくの成都せいとに拠つて叛乱を起したときに、蜀王の府をもつてわが居城としていたが、それは数百年来の古い建物であつて、人と鬼とが雑居のすがたであつた。ある日、後殿のかたにあたつて、笙歌の聲が俄かにきこえたので、彼は怪しんでみずから見とどけにゆくと、殿中には数十の人が手に樂器を持っていた。しかも、かれらにはみな首がなかつた。

さすがの張猷忠もこれには驚いて地に仆たおれた。その以来、かれは其の居を北の城楼へ移して、ふたたび殿中には立ち入らなかつた。

張巡の妾

唐とうの安祿山あんろくざんが乱をおこした時、張巡ちようじゆんは睢陽すいようを守つて屈せず、城中の食尽きたので、彼はわが愛妾を殺して將士に食はましめ、城遂におちいつて捕われたが、なお屈せず敵を罵つて死んだのは有名の史実で、彼は世に忠臣の龜鑑きかんとして伝えられている。

それから九百余年の後、清の康熙年間のことである。会稽の徐藹という諸生が年二十五で瘵かという病にかかった。腹中に凝り固まった物があつて、甚だ痛むのである。その物は腹中に在つて人のごとくに語ることもあつた。勿論、こういう奇病であるから、療治の効もなく、病いがいよいよ重くなつたときに、一人の白衣を着た若い女がその枕元に立つて、こんなことを言つて聞かせた。

「あなたは張巡が妾を殺したことを御存じですか。あなたの前の世は張巡で、わたしはその妾であつたのです。あなたが忠臣であるのは誰も知つていますが、その忠臣となるがために、なんの罪もないわたしを殺して、その肉を士卒に食わせるような無残な事をなぜなされた。その恨みを報いるために、わたしは十三代もあなたを付け狙つていましたが、何分にもあなたは代々偉い人にばかり生まれ變つていたので、遂にその機会を得ませんでした。しかも今のあなたはさのみ偉い人でもない、単に一個の白面はくめん（若く未熟なこと）書生に過ぎませんから、今こそ初めて多年の恨みを報いることが出来たのです」

言い終つて、女のすがたは消えてしまった。病人もそれから間もなく世を去つた。

武進ぶしんの諸生しよせいで楊某ようたけいという青年が、某家ししゆくに止宿しゆくしていたことがある。その家は富んでいるので、主人は毎晩おそくまで飲みあるいていたが、ある夜その主人が例に依つて夜ふけに酔つて帰ると、楊の部屋には燈火あかりが煌々こうこうと輝こいでいた。

「まだ起きているのか」

主人は窓の隙からそつと覗いてみると、几つくえのそばには二本の大きい蠟燭ろうそくを立てて、緋ひの着物の人が几に倚りかかつて書物を読んでいた。

「楊さんもなかなか勉強だな」

その晩はそのまま帰つて、主人は翌日それを楊に話すと、かれは不思議そうな顔をしていた。

「いえ、ゆうべは早く寝てしまいました」

「いや、わたしが確かに見た。あなたは夜の更けるまで几つくえにむかつていましたよ」と、主人は笑つていた。

しかし楊は笑つていられなかつた。

これには何か子細さんじゆうがあるに相違ないと思つたので、その晩は寝た振りをして窺つていると、夜も三更さんじゆう（午後十一時—午前一時）とおぼしき頃に、たちまち大きい声で呼ぶ者がある。それと同時に二本の大きい蠟燭ろうそくが地上にあらわれて、くれないの火焰ほのおが昼のようにあたりを照らすかと思つて見ると、大勢の家来らしい者どもが緋の着

物をきた人を警固して来た。人はこの家の主人がゆうべ見た通りに、几にむかつて書物を読みはじめた。

楊はおどろいて、大きい声で人を呼んだが、誰も来る者はなかった。緋衣の人も聞かないようなふうでしずかに書物を読みつづけていた。やがて五更ごこう（午前三時—五時）の頃になると、彼は又しずかに起たちあがって楊の寢床へ近寄つて来た。他の者どももみな従つて来て、楊の寢床の四脚をもたげて部屋じゆうをぐるぐる引きまわした末に、空くうにむかつて幾たびか投げあげた。楊はもう氣絶してしまつて、その後のことは知らなかったが、夜が明けて正氣かえに復つた頃には、そこらに何者の姿もみえなかった。部屋の入口をあらためると、扉かぎの鑰は元のままで、誰も出入りをしたらしい形跡もなかった。

「もしや夢か」

自分が見ただけならば夢かとも思えるが、現に昨夜もこの主人が同じような思議を見せられたのであるから、どうも夢とは思われない。こんなところに長居をするのは良くないと覺さつて、楊は翌日早々にこの家を立ち去つた。

それから四、五日の後、突然この家に火を発して、楊の部屋は丸焼けになつた。

濟南府さいなんの学堂ぶんしょうかく、文昌閣ぶんしょうかくの家の棟に二羽の鶴かん（雁鴻がんこうの一種である）が巢を作っていた。ある日、それが西の郊外を高く飛んでいると、軍士の一人が矢を射かけて、その一羽の脛はざにあたった。しかも鳥は落ちないで飛び去った。

その以来、かの鳥はその脛に矢を負ったままで、家の棟の巢を出入りしているのを、大勢の人が常に見ていた。軍士も一時のいたずらであるから、再びそれを射ようともしなかった。

ある日、中丞ちゆうじやうが来て軍隊を檢閲するといふので、一軍の將士はみな軍門にあつまり、牆壁しようへきをうしろにして整列していると、かの鳥がその空の上に舞って来て、脛に負っている矢を地に落した。それがあたかもかの軍士の前に落ちて来たので、何ごころなく拾い取って眺めていると、俄かに耳が激しく痒かゆくなったので、彼はその矢鏃やじりで耳を搔いていると、突然にうしろの壁の一部が頽くずれて来て、その右の臂ひじの上に落ちかかったので、矢鏃は耳の奥へ深く突き透った。

「これは鳥の恨みだ。わたしは助からない」と、軍士は言った。
果たして数日の後に、彼は死んだ。

某中丞が上江の巡撫であつた時、部下の役人に命じて三千金を都へ送らせた。

その途中、役人は古い廟に一宿すると、その夜のあいだにかの三千金を何者にか奪われた。しかも扉の鑰は元のままになつていたので、すこぶる不思議に思つたが、ともかくも引つ返してその事を報告すると、中丞は大いに立腹して彼にその償いをしろと責めた。

「勿論のことでございます」と、役人は答えた。「しかし、あまり奇怪の出来事でございますから、一カ月間の御猶予をねがひまして、そのあいだにその秘密を探り出したいと思ひます。わたくしが逃げ隠れをしない証拠には、妻や子を人質に残してまいります」

中丞もそれを許したので、役人は再びかの古廟の付近へ行きむかつて、種々に手を尽くして穿索したが、遂にその端緒を探り出し得ないので、もう思い切つて帰るかと思案しながら、付近の町をぼんやりと歩いてみると、町のまんなかで盲目の老人に逢つた。

なんでも判らないことがあらば御相談なさい。——こういう牌がその老人の胸にかけてあつた。物は試しであると思つたので、役人は彼をよび止めて相談すると、老人は訊いた。

「あなたの失った金は幾らです」

「三千金です」

「それならば大抵こころ当りがあります。わたしと一緒においでなさい」

老人は先に立つて案内した。最初の一日は人家のある村つづきであったが、それから先は深山へはいつて、どこをどう辿ったのか判らなかつたが、ともかくも三日の午頃ひるに大きい賑やかな町へ行き着いた。と思うと、たちまち一人の男が来て役人に声をかけた。

「あなたはここの人と見えないが、なにしに來たのです」

老人が代つて説明すると、その男はうなずいて役人を案内して行つた。そのうちに老人のすがたは見えなくなつてしまつたので、どうなることかと不安ながら付いてゆくと、大路小路を幾たびか折れ曲がつて、堂々たる大邸宅の門内へ連れ込まれた。さらに奥の間へ案内されると、広い座敷のなかにはただひとつの榻とを据えて、ひとりの偉丈夫いしやうぶが帽もかぶらず、靴も穿かずに、長い髪を垂れて休息していた。そのかたわらには五、六人の童子が扇を持って煽あおいでいた。役人は謹つつしんで自分の来意を訴えると、男は童子に頤あごで指図して金を運ばせて來た。見ると、それはさきに盗難に逢つた金で、その封も元のままになつていた。

「この金が欲しいのか」と、男は訊いた。

「頂戴が出来れば結構でございますが……」と、役人は恐る恐る答えた。

「なにしろ疲れたろう。すこし休息するがよい」

ひとりの男が彼をまた案内して、奥まったひと間へ連れ込み、一旦は扉をしめて立ち去ったが、やがて食事の時刻になると、立派な膳部を運んで来てくれた。それでも役人の不安はまだ去らないので、日の暮れ果てるのを待つて、そつとうしろの戸をあけてあたりを窺うと、今夜は月の明るい宵で、そこらの壁のきわに何物かが累々と積み重ねてあるのが見える。よくよく透かして視ると、それはみな人間の鼻や耳であつたので、役人は気が遠くなるほどに驚かされた。しかし容易に逃げ去るすべはあるまいと思われるので、ただおめおめと夜のあけるのを待つてしていると、彼は再び主人の男の前によび出された。男はやはりきのうの通りの姿で、彼にむかつて言い渡した。

「あの金をおまえにやることは出来ない。しかしお前の迷惑にならないように、これをやる。持つて帰つて上官にみせろ」

何か一枚の紙にかいた物をくれたので、役人は夢中でそれを受取ると、ひとりの男がまた彼を案内して、三日の後に元の場所まで送り帰してくれた。何がなんだか更にわからないので、役人はまだ夢をみているような心持で帰つて来て、中丞にその次第を報告し、あわせてかの一紙をみせると、中丞は不思議そうに読んでいたが、

たちまちにその顔色が変わった。

役人の妻子はすぐに人質をゆるされた。紛失の三千金もつぐなうには及ばぬと言
い渡された。それで役人は大いに喜んだが、さてその一紙には何事がしるしてあつ
たのか、その秘密はわからなかった。しかも後日になって、その書中には大略左の
ごときことが認めしたたてあるのを洩れ聞いた。

——おまえは平生から官吏として賄賂をむさぼり、横領をほしいままにしている。
その罪まことに重々である。就いては小役人などを責めて、償いの金を徴収するな。
さもなければ、何月何日の夜半に、おまえの妻の髪の毛が何寸切られていたか、よ
く検あらためてみる——

中丞が顔の色を変えて恐れたのも無理はなかった。彼の妻は、その通りに髪を切
られていたのである。かの無名の偉丈夫は、いわゆる劍侠のたぐいであることを、
役人は初めてさとった。

鏡の恨み

荊州けいの某家の悴けいは元来が放埒無頼ほうらつぷらいの人間であつた。ある時、裏畑どべいに土塀どべいを築こう
とすると、その前の夜の夢に一人の美人が枕もとに現われた。

「わたくしは地下にあることすでに数百年に及びまして、神仙となるべき修煉しゅうれんがもう少して成就するのでございます。ところが、明日おそろしい禍わざいが迫つて参りまして、どうにも逃のがれることが出来なくなりました。それを救つて下さるのは、あなたのほかにはありません。明日わたくしの胸の上に古い鏡を見付けたらば、どうぞお取りなさないように願います。そうして元のように土をかけて置いて下されば、きつとお礼をいたします」

くれぐれも頼んで、彼女の姿は消えた。あくる日、人をあつめて工事に取りかかると、果たして土の下から一つの古い棺を掘り出して、その棺をひらいてみると、内には遠いむかしの粧よそおいをした美人の死骸が横たわっていて、その顔色は生けるがごとく、昨夜の夢にあらわれた者とちつとも変らなかつた。更にあらためると、女の胸には直径五、六寸の鏡が載せてあつて、その光りは人の毛髪を射るようにも見えた。悴は夢のことを思い出して、そのままに埋めて置こうとすると、家僕しもべの一人がささやいた。

「その鏡は何か由緒のある品に相違ありません。いわゆる掘出し物だから取つてお置きなさい」

好奇心と慾心とが手伝つて、悴は遂にその鏡を取り上げると、女の死骸はたちまち灰となつてしまった。これには彼もおどろいて、慌ててその棺に土をかけたが、

鏡はやはり自分の物にしていると、女の姿が又も彼の夢にあらわれた。

「あれほど頼んで置いたのに、折角の修煉も仇あだになつてしまいました。しかしそれも自然の命数で、あなたを恨んでも仕方がありません。ただその鏡は大切にしまつて置いて下さい。かならずあなたの幸いになることがあります」

彼はそれを信じて、その鏡を大切に保存していると、鏡はときどきに声を発することがあつた。ある夜、かの女が又あらわれて彼に教えた。

「宰相の楊公が江陵に府を開いて、才能のある者を徴あしたいといつています。今が出世の時節です。早くおいでなさい」

その当時、楊公が荊州に軍をとどめているのは事実であるので、悴は夢の教えにしたがつて軍門に馳せ参じた。楊公が面会して兵事を談じると、彼は議論縦横、ほとんど常人の及ぶところでないので、楊公は大いにこれを奇として、わが帷幕いぼくのうちにとどめて置くことにした。悴は一人の家僕を連れていた。それは女の死骸から鏡を奪うことを勧めた男である。

こうして、その出世は眼前にある時、彼は瑣細ささいのことから激しく立腹して、かの家僕を撲ぶち殺した。自宅ならば格別、それが幕営のうちであるので、彼もその始末に窮きつしていると、女がどこからか現われた。

「御心配なさることはありません。あなたは休養のために二、三日の暇を貰うこと

にして、あなたの輿こしのなかへ家僕の死骸をのせて持ち出せば、誰も気がつく者はありませんまい」

言われた通りにして、彼は家僕の死骸をひそかに運び出すと、あたかも軍門を通過する時に、その輿のなかからおびただしい血がどつと流れ出したので、番兵らに怪しまれた。彼はひき戻されて取調べを受けると、その言うことも四度路しどろで何が何やらちつとも判らない。楊公も怪しんで、試みに兵事を談じてみると、ただ茫然として答うるところを知らないという始末である。いよいよ怪しんで嚴重に詮議すると、彼も遂に鏡の一条を打ちあげた。そうして先日来の議論はみな彼女が傍から教えてくれたのであることを白状した。

そこで、念のためにその鏡を取ろうとすると、鏡は大きいひびきを発してどこへか飛び去った。彼は獄につながれて死んだ。

韓氏の女

明みんの末こつしゆうのことである。

広州かうしゆうに兵乱きんらんがあつた後、周生しゆうせいという男が町へ行って一つの袴こ（腰から下へ着ける衣きぬである）を買つて来た。その丹あかい色が美しいので衣桁いこうの上にかけて置くと、夜ふ

けて彼が眠ろうとするときに、ひとりの美しい女が幃をかかけて内を窺っているらしいので、周はおどろいて咎めると、女は低い声で答えた。

「わたくしはこの世の人ではありません」

周はいよいよ驚いて表へ逃げ出した。夜があけてから、近所の人びともその話を聞いて集まって来ると、女の声は袴のなかから洩れて出るのである。声は近いかと思えば遠く、遠いかと思えば近く、暫くして一個の美人のすがたが烟りのようあらわれた。

「わたくしは博羅に住んでいた韓氏の娘でございます。城が落ちたときに、賊のために囚われて辱かじめを受けようとしたが、わたくしは死を決して争い、さんざんに賊を罵って殺されました。この袴は平生わたくしの身に着けていたものですから、たましいはこれに宿つてまいったのでございます。どうぞ不憫とおぼしめして、浄土へ往生の出来ますように仏事をお営みください」

女は言いさして泣き入った。人びとは哀れにも思い、また不思議にも思つて、早速に衆僧をまねいて仏事を営み、かの丹袴を火に焚いてしまうと、その後はなんの怪しいこともなかった。

張允恭ちやういんきやうは明みんの天啓年間てんけいの進士しんし（官吏登用試験の及第者）で、南陽なんようの太守となつていた。

その頃、河を浚さらう人夫らが岸に近いところに寝宿ねとまりしていると、橋の下で哭なくよな声が毎晩きこえるので、不審に思つて大勢おほむいがうかがうと、それは大きい泥鼈すつぽんであつた。こいつ怪物に相違ないというので、取り押えて鉄の釜で煮殺そうとすると、たちまちに釜のなかで人の声がきこえた。

「おれを殺すな。きつとお前たちに福を授けてやる」

人夫らは怖ろしくなつて、ますますその火を強く焚たいたので、やがて泥鼈は死んでしまった。試みにその腹を剖さいてみると、ひとりの小さい人の形があらわれた。長さ僅かに五、六寸であるが、その顔には眉も眼も口もみな明らかにそなわつていたので、彼らはますます怪しんで、それを太守の張に献上することになつた。張もめずらしがつて某学者に見せると、それは管子かんしのいわゆる涸沢こたくの精で、慶忌けいきという物であると教えられた。

（谷の移らず水の絶えざるところには、数百歳にして涸沢の精を生ずと、搜神記にも見えている）。

洞庭の神

梁遂りょうすいという人が官命を帯びて西粵せいゑつに使いするとき、洞庭とうていを過ぎた。天気晴朗の日で、舟を呼んで渡ると、たちまちに空も水も一面くわに晦くらくなつた。

舟中の人もおどろき怪しんで見まわすと、舟を距きる五、六町の水上に、一個の神人しんじんの姿があぎやかに浮かび出た。立派な髻ひげを生やして、黒い紗巾しゃきんをかぶつて、一種異様けものの獣にまたがっているのである。獣は半身を波にかくして、わずかにその頭角をあらわしているばかりであつた。また一人、その状貌じやうぼうすこぶる怪偉なるものが、かの獣の尾を口にくわえて、あとに続いてゆくのである。

やがて雲低く、雨降り来たると、人も獣もみな雲雨のうちに包まれて、天へ登るかのように消えてしまつた。

これは折りおりに見ること、すなわち洞庭の神であると舟びとが説明した。

☒ 蛇

広西くわいせい地方には☒蛇きやうだというものがある。この蛇は不思議に人の姓名を識しつていて、それを呼ぶのである。呼ばれて応こたえると、その人は直ちに死ぬと伝えられている。

そこで、ここらの地方の宿屋では小箱のうちに蜈蚣むかでをたくわえて置いて、泊まり客に注意するのである。

「夜なかにあなたの名を呼ぶ者があつても、かならず返事をしてはなりません。ただ、この箱をあけて蜈蚣を放しておやりなさい」

その通りにすると、蜈蚣はすぐに出て行って、戸外にひそんでいるかの蛇の脳を刺し、安々と食いころして、ふたたび元の箱へ戻つて来るといふ。

(宋人の小説にある報冤蛇ほうえんだの話に似ている)。

范祠の鳥

長白山ちやうはくざんの醴泉寺れいせんじは宋の名臣范文正公はんぶんせいが読書の地として知られ、公の祠ほこらは今も仏殿の東にある。

康熙年間こうきのある秋なごあめに霖雨が降りつづいて、公の祠の家根やねからおびただしい雨漏りがしたので、そこら一面ぬに湿れてしまったが、不思議に公の像はちつとも湿れていない。

寺の僧らが怪しんでうかがうと、一羽の大きい鳥が両の翼つばさを張つてその上を掩おほつていた。翼には火のような光りが見えた。

雨が晴れると共に、鳥はどこへか姿を隠した。

追写真

宋荔裳そうらいしようも国初有名の詩人である。彼は幼いときに母をうしなつたので、母のおもかげを偲しのぶごとに涙が流れた。

呉門ごもんのなにかしという男がみずから言うには、それには術があつて、死んだ人の肖像を写生することが出来る。それを追写真ついでしんといい、人の歿後数十年を経ても、ありのままの形容を写すのは容易であると説いたので、荔裳は彼に依頼することになつた。

彼は淨きよい室内に壇をしつらえさせ、何かの符を自分で書いて供えた。それから三日の後、いよいよ絵具や紙や筆を取り揃え、荔裳に礼拝させて立ち去らせた。

一室の戸は堅く閉じて決して騒がしくしてはならないと注意した。夜になると、たちまち家根瓦に物音がきこえた。

夜半に至つて、彼が絵筆を地になげうつ音がかちりときこえた。家根瓦にも再び物音がきこえた。彼は戸をあけて荔裳を呼び入れた。

室内には燈火が明るく、そこらには絵具が散らかつて、筆は地上に落ちていた。

しかも紙は封じてあつて、まだ啓かれていない。早速に啓いてみると、画像はもう成就していて、その風貌はさながら生けるが如くであつた。蒞裳はそれを捧げてまた泣いて、その男に厚い謝礼を贈つた。

「死後六十年を過ぎては、追写真も及びません」と、彼は言つたそうである。

蘇毅言そくげんの随筆にも、宋僉憲そうけんけんは幼にして父をうししない、その形容を識らないので、方海山人ほうかいさんじんに肖像をかいて貰つて持ち帰ると、母はそれを見て、まことに生けるが如くであると、今更に嘆き悲しんだということが書いてある。してみると、世にはこういう理ことわりがあると思われる。

断腸草

康熙庚申こうきこうしんの春、徽州きしゅうの人で姓を方ほうという者が、郡へ商売に出た。八人の仲間が合資で、千金の代物しろものを持つて行つたのである。江南へ行つて、河間の南にある腰ようてんの駅に宿つた。

仲間の八人と、騾馬らばをひく馬夫とがまず飯を食つた。方は少しおくと、その一人が食いながら独り言をいふのである。

「断腸草……」

それを三度も繰り返すので、方は怪しんだ。

「君は食い物のなかに断腸草があるのを知っているのか。それなら食ってはならないぜ」

「そうだ」と、その男は言った。

見ると、馬夫はすでに中毒状態で仆れた。急に一同に注意して食事を中止させ、方は往来へ駆け出してそこらの人たちを呼びあつめた。医師を招いて診察を求めると、それは食い物の中毒であるといった。解毒剤をあたらえられて、一同幸いに回復したが、馬夫だけは多く食つたために生きなかつた。

方は一人の男にむかつて、どうして断腸草の名を口にしたかと訊くと、彼は答えた。

「食っている時に、誰かうしろから断腸草と三度繰り返して言った者があるので、わたしもそれに連れて言っただけのこと、最初から知っていたわけではないのだ」断腸草を食べば、はらわたが断れて死ぬということになっている。それを食い物にまぜて食わせたのは、われわれを毒殺して荷物を奪う手段に相違ないと、一行はそれを訴え出ようといきまいたのを、土地の人びとがいろいろに仲裁し、馬夫の死に対して百金を差し出すことで落着、宿の主人は罪を免かれた。

道中では心得て置くべき事である。

関帝現身

順治丙申じゆんじへいしんの年、五月二十二日、広東韶州府カントンしやうしゆうふの西城の上に、関羽かんうがたちまち姿をあらわした。彼は城上の垣によりかかつて、右の手に長い髯ひげをひねっていたが、時はあたかも正午であるので、その顔かたちはありありと見られた。

越えて二十三日と二十八日に又あらわれた。

城中の官民はみな駈け集まつて礼拝し、総督李棲鳳りせいほうはみずから関帝廟に参詣した。

短人

徳州とくの兵器庫は明代みんの末から久しく鎖とぎされていたが、順治の初年、役人らが戸を明けると、奥の壁の下に小さい人間を見いだした。

人は身のたけ僅かに一尺余、形は老翁の如くで、全身に毛が生えていた。彼は左の膝を長くひざまずいて、左の手を垂れたままで握っていた。右の足は地をふんで、右の肘を膝に付け、その手さきは頤を支えていた。髪ひげも鬚ひげも真つ白で、悲しむが如くに眉をひそめ、眼を閉じていた。

やがて家のまわりに電光雷鳴、その人のゆくえは知れなくなった。

化鳥

郝某はかつて湖広の某郡の推官となっていた。ある日、捕盜の役人を送って行って、駅舎に一宿した。

夜半に燈下に坐して、倦んで仮寝をしていると、恍惚のうちに白衣の女があらわれて、鍼でそのひたいを刺すと見て、おどろき醒めた。やがてほんとうに寢床にはいると、又もやその股を刺す者があつた。痛みが激しいので、急に童子を呼び、燭をともしてあらためると、果たして左の股に鍼が刺してあつた。

おそらく刺客の仕業であろうと、燭をとって室内を見廻つたが、別に何事もなかつた。家の隅の暗いところに障子代りの衣が垂れているので、その隙間から窺うと、そこには大きい鳥のような物が人の如くに立っていた。その全身は水晶に似て、臍がみな透いて見えた。

化鳥は人を見て直ぐにつかみかかつて来たので、郝も手に持っている棒をふるつてかれに逼つた。化鳥はとうとう壁ぎわに押し詰められて動くことが出来なくなつたので、郝は大きい声で呼び立てると、従者は窓を破つて飛び込んで来た。棒と刃

に攻められて、化鳥は死んだ。

しかも、それが何の怪であるかは誰にも判らなかつた。

子不語

第十四の男は語る。

「わたくしは随園戯編と題する『子不語』についてお話し申します。

この作者は清の袁枚で、字を子才といい、号を簡齋といいまして、錢塘の人、乾隆年間の進士で、各地方の知県をつとめて評判のよかつた人ですが、年四十にして官途を辞し、江寧の小倉山下に山莊を作つて小倉山房といひ、その庭園を随園と名づけましたので、世の人は随園先生と呼んで居りました。彼は詩文の大家で、種々の著作もあり、詩人としては乾隆四家の一人に数えられて居ります。

子不語の名は『子は怪力乱神を語らず』から出ていること勿論であります。後にそれと同名の書のあることを発見したというので、さらに『新齋諧』と改題しましたが、やはり普通には『子不語』の名をもつて知られて居ります。なにしろ正編続編をあわせて三十四巻、一千十六種の説話を蒐集してあるという大作ですから、これから申し上げるのは、単にその片鱗に過ぎないものと御承知ください」

老嫗の妖

清の乾隆二十年、都で小児が生まれると、驚風（脳膜炎）にかかつてたちまち死亡するのが多かつた。伝えるところによると、小児が病にかかると、一羽の鶴

——一種の怪鳥けらうで、形は鷹のごとく、よく人語をなすということである。——のよ
うな黒い鳥影がともしびの下を飛びめぐる。その飛ぶこといよいよ疾はやければ、小児
の苦しみあえぐ声がいよいよ急になる。小児の息が絶えれば、黒い鳥影も消えてし
まうというのであった。

そのうちに或る家の小児もまた同じ驚風にかかつて苦しみ始めたが、その父の知
人に鄂某がくというのがあった。かれは宮中の侍衛を勤める武人で、ふだんから勇気が
あるので、それを聞いて大いに怒った。

「怪しからぬ化け物め。おれが退治してくれる」

鄂は弓矢をとって待ちかまえていて、黒い鳥がともしびに近く舞つて来るところ
を礎はたと射ると、鳥は怪しい声を立てて飛び去つたが、そのあとには血のしずくが流
れていた。それをどこまでも追つてゆくと、大司馬たいしはの役を勤める李氏りの邸に入り、
台所の竈かまどの下へ行つて消えたように思われたので、鄂はふたたび矢をつがえようと
するところへ、邸内の者もおどろいて駆付け付けた。主人の李公は鄂と姻戚の關係が
あるので、これも驚いて奥から出て来た。鄂が怪鳥を射たという話を聞いて、李公
も不思議に思った。

「では、すぐに竈の下をあらためてみる」

人びとが打ち寄つて竈のあたりを検査すると、そのそばの小屋に緑の眼をひから

せた老女が仆たぶれていた。

老女は猿のような形で、その腰には矢が立っていた。しかし彼女は未見の人ではなく、李公が曾かつて雲南うんなんに在ったときに雇い入れた奉公人であった。雲南地方の山地には苗びょうまたは峒とうという一種の蛮族が棲んでいるが、老女もその一人で、老年でありながら能く働き、且かつは正直律義りちぎの人間であるので、李公が都へ帰るときに家族と共に伴い来たったものである。それが今やこの怪異をみせたので、李氏の一家は又おどろかされた。老女は矢傷に苦しみながらも、まだ生きていた。

だんだん考えてみると、彼女に怪しい点がないでもない。よほどの老年とみえながら、からだは甚だすこやかである。蛮地の生まれとはいいながら、自分の歳を知らないという。殊ことに今夜のような事件が出来しゅつしたので、主人も今更のようにそれを怪しんだ。あるいは妖怪が姿を変じているのではないかと疑つて、嚴重にかの女を拷問ごうもんすると、老女は苦しい息のもとで答えた。

「わたくしは一種の咒文じゆもんを知っています、それを念じると能く異鳥に化けることが出来ますので、夜のふけるのを待つて飛び出して、すでに数百人の子供の脳を食いました」

李公は大いに怒つて、すぐにかの女をくくりあげ、薪を積んで生きながら焚やいてしまった。その以来、都に驚風を病む小児が絶えた。

これも鳥の妖である。清の雍正年間、内城の某家で息子のために媳を娶ることに
なつた。新婦の里方も大家で、沙河門外に住んでいた。

新婦は轎に乗せられ、供の者大勢は馬上でその前後を囲んで練り出して来る途中、
一つの古い墓の前を通ると、俄かに旋風のような風が墓のあいだから吹き出して、
新婦の轎のまわりを幾たびかめぐつたので、おびたしい沙は眼口を打つて大勢も
すこぶる辟易したが、やがてその風も鎮まつて、無事に婿の家へ行き着いた。

轎はおろされて、介添えの女がすだれをかかけてかの新婦を連れ出すと、思いき
や轎の内には又ひとりの女が坐っていた。それは年頃も顔かたちも風俗も、新婦と
寸分ちがわなない女で、みずから轎を出て来て、新婦と肩をならべて立つた。それに
は人びとも驚かされたが、女は二人ながら口をそろえて、自分が今夜の花嫁である
という。その声音までが同じであるので、婿の家も供の者も、どちらが真者である
か偽者であるかを鑑別することが出来なくなつた。さりとて今夜の婚儀を中止する
わけにも行かなかつたと見えて、ともかくも婿ひとりに媳ふたりという不思議な婚
礼を済ませて、奉公人どもはめいめいの寢床へ退がつた。

舅も自分の室へはいつて枕に就いた。

それから間もなく、新夫婦の寝間からけたたましい叫び声が洩れきこえたので、舅は勿論、家内一同がおどろいて駈け付けると、婿は寢床の外に倒れ、ひとりの媳は床の上に倒れ、あたりにはなま血が淋漓としてたたっているの、人びとは又もや驚かされた。

それにしても他のひとりの媳はどうしたかと思まわすと、梁の上に一羽の大きい怪鳥が止まっていた。鳥は灰黒色の羽を持っていて、口喙は鈎のように曲がっていた。殊に目立つのはその大きい爪で、さながら雪のように白く光っていた。ひとりの女の正体がこれであるのは誰にも想像されることであるから、大勢は騒ぎ立てて捕えようとしたが、短い武器では高い梁の上までとどかないので、さらに弓矢や長い矛を持ち出して追い立てると、怪鳥は青い燐のような眼をひからせ、大きい翅をはたはたと鳴らして飛びめぐった末に、門を破って逃げ去った。

そこで、倒れている婿と媳とを介抱して、事の子細を問いただすと、婿は血の流れる眼をおさえながら言った。

「寝間へはいったものの、媳ふたりではどうすることも出来ないの、しばらく黙つてむかい合っているうちに、左側にいた女がたちまちに袖をあげてわたしの顔を払ったかと思うと、両の眼玉は抉り取られてしまった。その痛みの劇しさに悶絶して、

その後のことはなんにも知らない」

媳はまた言った。

「わたしは婿殿の悲鳴におどろいて、どうしたのかと思つて覗こうとすると、その顔を不意に払われて倒れてしまいました」

彼女も両眼を抉り取られているのであつた。それでも二人とも命に別条がなかつたのが嘆きのうちの喜びで、婿も媳も厚い手当てを加えられて数月の後に健康の人となつた。そうして、盲目同士の夫婦はむつまじく暮らした。

怪鳥の正体はわからない。伝うるところによると、墓場などのあいだに太陰積尸たいいんせきしの気が久しく凝るときは化して羅刹鳥らせつちやうとなり、好んで人の眼を食らうというのである。

平陽の令

平陽へいようの令れいを勤めていた朱鑠しゆれきという人は、その性質甚だ残忍で、罪人を苦しめるために特に厚い首枷くびかせや太い棒を作らせたという位である。殊に婦女の罪案については厳酷をきわめ、そのうちでも妓女ぎじよに対しては一糸を着けざる赤裸あかはだかにして、その身体からだじゆうを容赦なく打ち据えるばかりか、顔の美しい者ほどその刑罰を重くして、そ

の髪の毛をくりくり坊主に剃り落すこともあり、甚だしきは小刀をもつて鼻の孔をえぐったりすることもあった。

「こうして世の道楽者を戒めるのである。美人の美を失わしむれば、自然に妓女などというものは亡びてしまうことになる。しかも色を見て動かざる鉄石心を有した者でなければ、容易にそれを実行することは出来ない」と、彼は常に人に誇っていた。そのうちに任期が満ちて、彼は山東の別駕に移されたので、家族を連れて新任地へ赴く途中、荏平という所の旅館に行き着いた。その旅館には一つの楼があつて、嚴重に扉を封鎖してあるので、彼は宿の主人に子細をたずねると、楼中にはしばしば怪しいことがあるので、多年開かないのであると答えた。それを聞いて、彼はあざ笑つた。

「それではおれをあゝの楼に泊めてくれ」

「お泊まりになりますか」

「なんの怖いことがあるものか。おれの威名を聞けば、大抵の化け物は向うから退却してしまふに決まつているのだ」

それでも主人は万一を気づかつてさえぎつた。彼の妻子らしきりに諫めた。しかも強情我慢の彼はどうしても肯かないのである。

「おまえ達はほかの部屋に寝ろ。おれはどうしてもあゝの楼に一夜を明かすのだ」

あくまでも強情を張り通して、彼は妻子眷族を別室に宿らせ、自分ひとりには劍を握り、燭をたずさえ、楼に登つて妖怪のあらわれるのを待つていると、宵のうちに別は何事もなかったが、夜も三更（午後十一時―午前一時）に至る時、扉をたたいて進み入つたのは、白い鬚を垂れて紅い冠をかぶつた老人で、朱鑲を仰いでうやうやしく一揖した。

「貴様はなんの化け物だ」と、朱は叱り付けた。

「それがしは妖怪ではござらぬ。このあたりの土地の神でござる。あなたのような貴人がここへお出でになつたのは、まさに妖怪どもが殲滅の時節到来いたしましたものと思われます。それゆえ喜んでお出迎いに罷り出でました」

老人はまず自分の身の上を明かした後、朱にむかつて斯ういうことを頼んだ。

「もう暫くお待ちになると、やがて妖怪があらわれて参ります。その姿が見えましたならば、その劍をぬいて片端からお斬り捨ててください。及ばずながらそれがしも御助力いたします」

「よし、よし、承知した」と、朱は喜んで引き受けた。

「なにぶんお願い申します」

約束を固めて老人は立ち去つた。朱は劍を按じて、さあ来いと待ちかまえていると、果たして青い面の者、白い面の者、種々の怪しい者がつづいてこの室内に入り

込んで来たので、彼は手あたり次第にばたばたと斬り倒した。最後に牙きばの長いくちばしの黒い者があらわれたので、彼はそれをも斬り伏せた。もうあとに続く者はない。これで妖怪を残らず退治したかと思うと、彼は大いなる満足と愉快を感じて、すぐに旅館の主人を呼んだ。

その頃にはもう早い雞とろが啼いていた。主人をはじめ家内の者どもが燭を照らして駈けつけて見ると、床には幾個の死骸が横たわっていた。それをひと目見て、人々はおどろいて叫んだ。

「あなたは大変なことをなされました」

倒れている死骸は、朱の妻や妾や、悴や娘であった。最後に斬られたのは従僕であつたらしい。かれらは主人の安否を気づかつて、ひそかに様子をうかがいに来たところを、片端から斬り倒されたのであろう。そう判ると、朱は声をあげて嘆いた。

「化け物め。すっかりおれを玩具おもちゃにしやあがつた」

言うかと思うと、彼もそこに倒れたままで息が絶えた。

水鬼の筈

張鴻業ちやうこうぎやうという人が秦淮しんわいへ行つて、潘はんなにがしの家に寄寓きよしていた。その房へやは河に

面したところにあつた。ある夏の夜に、張が起きて廁へゆくと、夜は三更を過ぎて、世間に人の声は絶えていたが、月は大きく明るいので、張は欄干によつて暫くその月光を仰いでいると、たちまち水中に声あつて、ひとりの人間のあたまが水の上に浮かみ出た。

「この夜ふけに泳ぐ奴があるのかしら」

不審に思いながら、月あかりに透かしみると、黒いからだの者が水中に立っていた。顔は眼も鼻も無いの、つべらぼうで、頸も動かない。さながら木偶の坊のようなものである。張はその怪物にむかつて石を投げ付けると、彼はふたたび水の底に沈んでしまった。

事件は単にそれだけのことであつたが、明くる日の午後、ひとりの男がその河のなかで溺死したという話を聞いて、さては昨夜の怪物は世にいう水鬼であつたことを張は初めて覺つた。

水鬼は命を索めるといふ諺があつて、水に死んだ者のたましいは、その身代りを求めない以上は、いつまでも成仏できないのである。したがつて、水鬼は誰かを水中に引き込んで、その命を取ろうとすると言い伝えられているが、眼のあたりに、その水鬼の姿を見たのは今が初めてであるので、張も今更のように怖ろしくなつて、それを同宿の人びとに物語ると、そのなかに米あきんがあつて、自分もかつて水

鬼の難に出逢ったことがあると言った。その話はこうである。

「わたしはまだ若い時のことでした。嘉興かこうの地方へ米を売りに行って、薄暗いときこうついでいこうに黄泥溝を通ると、なにしろそこは泥ぶかいので、わたしは水牛を雇って、それに乗って行くことにしました。そうして、溝の中ほどまで来かかると、泥のなかから一つの黒い手が出て来て、不意にわたしの足を掴んで引き落そうとしました。こんな所では何事が起るかも知れないと思つて、わたしもかねて用心していたので、すぐに足を縮めてしまうと、その黒い手はさらに水牛の足をつかんだので、牛はもう動くことが出来ない。わたしもおどろいて救いを呼ぶと、往來の人びとも加勢に駆けつけて、力をあわせて牛を牽ひいたが、牛の四足は泥のなかへ吸い込まれたようになって、曳ひけども押せども動かない。百計尽きて思いついたのが火牛かきゆうのはかりごとで、試みに牛の尾に火をつけると、牛も熱いのに堪えられなくなつたと見えて、必死の力をふるつて起たちあがると、ようように泥の中から足を抜くことが出来ました。それから検あらためてみると、牛の腹の下には古い箒ほうきのようなものがしつかりと搦からみついていて、なかなか取れませんでした。それがまた、非常になまぐさいような臭においがして寄り付かれません。大勢が杖をもつて撃ち叩くと、幽鬼のむせび泣くような声がして、したたる水はみな黒い血のしずくでした。大勢はさらに刃物でそれをはずすに切つて、柴の火へ投げ込んで焚やいてしまいましたが、その忌いやな臭いはひと月

ほども消えなかったそうです。しかしそれから後は、黄泥溝で溺れ死ぬ者はなくなりました」

僵尸（屍体）を画く

杭州の劉以賢は肖像画を善くするを以つて有名の画工であつた。その隣りに親ひとり子ひとりの家があつて、その父が今度病死したので、せがれは棺を買いに出る時、又その隣りの家に声をかけて行つた。

「となりの劉先生は肖像画の名人ですから、今のうちに私の父の顔を写して置いてもらいたいと思います。あなたから頼んでくれませんか」

隣りの人はそれを劉に取次いだので、劉は早速に道具をたずさえて行くと、悴はまだ帰つて来ないらしく、家のなかには人の影もみえなかつた。しかし近所に住んでいて、その家の勝手もよく知つていたので、劉は構わずに二階へあがると、寝床の上には父の死骸が横たわつていた。劉はそこにある腰掛けに腰をおろして、すぐに画筆を執りはじめると、その死骸は忽ち起きあがつた。劉ははつと思つと同時に、それが走屍そうしというものであることを直ぐに覺さとつた。

走屍は人を追うと伝えられている。自分が逃げれば、死骸もまた追つて来るに相

違ない。いつそじつとしていて、早く画をかいてしまふ方がいいと覚悟をきめて、劉は身動きもしないで相手の顔を見つめてみると、死骸も動かずに劉を見つめている。その人相をよく見とどけて、劉は紙をひろげて筆を動かし始めると、死骸もおなじように臂を動かし、指を働かせている。劉は一生懸命に筆を動かしながら、時どきに大きい声で人を呼んだが、誰も返事をする者がない。鬼気はいよいよ人に逼つて、劉の筆のさきも顫えて来た。

そのうちに悴の帰つて来たらしい足音がきこえたので、やれ嬉しやと思つていと、果たして悴は二階へあがつて来たが、父の死骸がこの体であるのを見て、あつと叫んで仆れてしまった。その声を聞きつけて、隣りの人は二階からのぞいたが、これも驚いて梯子からころげ落ちた。

こういう始末であるから、劉はますます窮した。それでも逃げることは出来ない。逃げれば追いかけて来て掴み付かれる虞れがあるので、我慢に我慢して描きつづけていると、そこへ棺桶屋が棺を運び込んで来たので、劉はすぐに声をかけた。

「早く箒を持って来てくれ。箒草の箒を……」

棺桶屋はさすがに商売で、走屍などにはさのみ驚かない。走屍を撃ち倒すには箒草の箒を用いることをかねて心得ているので、劉のいうがままに箒を持って来て、かの死骸を撃ち払うと、死骸は元のごとく倒れた。気絶した者には生姜湯を飲ませ

て介抱し、死骸は早々に棺に納めた。

美少年の死

京城の金魚街に徐四じよしという男があつた。家が甚だ貧しいので、兄夫婦と同居してゐた。ある冬の夜に、兄は所用あつて外出し、今夜は戻らないという。兄嫁は賢さかしい女であるので、夫の出たあとで徐四に言つた。

「今夜は北風が寒いから、煖坑だんこう（床下に火を焚いて、その上に寝るのである）でなければ、とても寝られませんまい。しかしこの家にはたつた一つの煖坑しかないのですから、夫の留守にあなたと一つ床に枕をならべて寝るわけには行きません。わたしは母の家へ帰つて寝かしてもらうことにしますから、あなた一人でお寝やすみなさい」

義弟は承知して出してやつた。表には寒い風が吹きまくつて、月のひかりが薄あかるい。その夜も二更にこうとおぼしき頃に、門をたたいて駈け込んで来た者がある。それは一個の美少年で、手に一つの囊ふくろをさげていた。徐四が怪しんで問うまでもなく、少年は泣いて頼んだ。

「どうぞ救つてください。わたしは実は男ではありません。後生ごしやうですから、なんにも聞かずに今夜だけ泊めてください。そのお礼にはこれを差し上げます」

少年はふくろを解いて、見ごとな毛裘けしえもをとり出した。それは貂てんの皮で作られたもので、金や珠の頸かざりが燦然さんぜんとして輝いているのを見れば、捨て売りにしても価しろものい万金という代物である。徐四もまだ年が若い。相手が美しい女で、しかも高価の宝をいだいているのを見て、こころ頗すしぶる動いたが、かんがえてみるとどうも唯者でない。迂闊うくわんに泊めてやって、どんな禍わざいを招くようなことになるかも知れない。さりとして情すけなく断きわるにも忍しのびないので、かれは咄嗟とつさの思案でこう答えた。

「では、まあともかくも休んでおいでなさい。となりへ行つてちよつと相談して来ますから」

女を煖坑わんけいの上に坐らせて、徐四はすぐに表へ出て行つたが、となりの人に相談したところで仕様がなと思つたので、かれは近所の善覺寺ぜんかくじという寺へかけ付けて、方丈ほうじょうの円智えんちという僧をよび起して相談することにした。円智はこころでも有名の高僧で、徐四も平素から尊敬しているのであつた。

その話を聴いて、円智も眉をひそめた。

「それはおそらく高位頭官の家のみすめか妾で、なにかの子細あつて家出したものであるう。それをみだりに留めて置いては、なにかの連坐れんざを受けないとも限らない。さりとして追い出すのも気の毒であると思うならば、おまえは今夜この寺に泊まって家へ戻らぬ方がよい。万一の場合には、わたしの留守の間に入り込んで来たのだと

いえば、申し訳は立つ。夜が明ければ、女はどこへか立ち去るに相違ないから、その時刻を見計らつて帰ることにしなさい」

なるほど徐四もうなずいて、その夜を善覺寺で明かすことにした。それで済めば無事であつたが、外宿した徐四の兄は夜ふけの寒さに堪えかねて、わが家へ毛皮きものの衣を取りに帰ると、寢床の煖坑の下には男の沓くつがぬいである。見れば、男と女とが一つ衾とぎに眠っている。さてはおれの留守の間に、妻と弟めが不義をはたらいたかと、彼は烈火の怒りに前後をかえりみず、腰に帯びている劍をぬいて、枕をならべている男と女の首をばたばたと斬り落した。

言うまでもなく、それは兄の思いちがい、女はかの美少年であつた。男は善覺寺じやくせうの若僧であつた。

高僧の弟子にも破戒のやからがあつて、かの若僧は徐四の話を洩れ聴いて不埒の料簡を起したらしく、そつと寺ちゆうをぬけ出して徐四の留守宅へ忍び込んだのである。それから先はどうしたのか、勿論わからない。

あやまって二人を殺したことを発見して、兄はすぐに自首して出た。しかし右の事情であるから、誤殺であることは明白である。美少年と若僧とは不義姦通である。殺したものに悪意なくして、殺された者どもは不義のやからであるといふので、兄は無事に釈放された。

ここに判らないのは、美少年に扮していたかの女の身の上である。官でその首を市にかけて、心あたりの者を求めたが、誰も名乗つて出る者はなかった。

「可哀そうに、あの女はこの家へ死にに來たようなものだ」

徐四は形見の毛裘や頸飾りを売つて、その金を善覺寺に納め、永く彼女の菩提を弔つた。

秦の毛人

湖広に房山ぼうざんという高い山がある。山は甚だ嶮峻で、四面にたくさんたの洞窟があつて、それがあたかも房へやのような形をなしているので、房山と呼ばれることになつたのである。

その山には毛人もうじんという者が棲んでゐる。身のたけ一丈余で、全身が毛につつまれているので、人呼んで毛人といふのである。この毛人らは洞窟のうちに棲んでゐるらしいが、時どきに里へ降りて來て、人家の雞や犬などを捕り啖くうことがある。迂闊にそれをさえぎろうとすると、かれらはなかなかの大力で、大抵の人間は投げ出されたり、撲り付けられたりするので、手の着けようがない。弓や鉄砲で撃つても、矢玉はみな跳ねかえされて地に落ちてしまふのである。

しかも昔からの言い伝えて、毛人を追い攘うには一つの方法がある。それは手を拍って、大きな声で囃し立てるのである。

「長城を築く、長城を築く」

その声を聞くと、かれらは狼狽して山奥へ逃げ込むという。

新しく来た役人などは、最初はそれを信じないが、その実際を見るに及んで、初めて成程と合点するそうである。

長城を築く——毛人らが何故それを恐れるかというところ、かれらはその昔、秦始皇帝が万里の長城を築いたときに駆り出された役夫である。かれらはその工事の苦役に堪えかねて、同盟脱走してこの山中に逃げ籠ったが、歳久しゅうして死なず、遂にかかる怪物となつたのであつて、かれらは今に至るも築城工事に駆り出されることを深く恐れているらしく、人に逢えば長城はもう出来あがつてしまったかと訊く。その弱味に付け込んで、さあ長城を築くぞと囃し立てると、かれらはびつくり敗亡して、たちまちに姿を隠すのであると伝えられている。

秦代の法令がいかに厳酷であつたかは、これで想いやられる。

明代のことである。帰安県きあんの知県ちけんにながしが赴任してから半年ほどの後、ある夜その妻と同寝していると、夜ふけてその門を叩く者があつた。知県はみずから起きて出たが、暫くして帰つて来た。

「いや、人が来たのではない。風が門を揺すつたのであつた」

そう言つて彼は再び寢床に就いた。妻も別に疑わなかつた。その後、帰安の一県は大いに治まつて、獄を断じ、訴えを捌くこと、あたかも神のごとくであるといつて、県民はしきりに知県の功績を賞讃した。

それからまた数年の後である。有名の道士張天師ちやうてんしが帰安県を通過したが、知県はあえて出迎えをしなかつた。

「この県には妖氣がある」と、張天師は眉をひそめた。そうして、知県の妻を呼んで聞きただした。

「お前は今から数年前の何月何日の夜に、門を叩かれたことを覚えてゐるか」

「おぼえて居ります」

「現在の夫はまことの夫ではない。年を経たる黒魚こくぎょ（鱧はもの種類）の精である。おまえの夫はかの夜すでに黒魚のために食われてしまつたのであるぞ」

妻は大いにおどろいて、なにとぞ夫のために仇を報いてくだされと、天師にすがつて嘆いた。張天師は壇に登つて法をおこなうと、果たして長さ数丈ともいふべき大

きい黒魚が、正体をあらわして壇の前にひれ伏した。

「なんじの罪は斬に当る」と、天師はおごそかに言い渡した。「しかし知県に化けて
いるあいだにすこぶる善政をおこなっているから、特になんじの死をゆるしてやる
ぞ」

天師は大きい甕かめのなかにかの魚を押し籠めて、神符をもってその口を封じ、
の土中に埋めてしまった。 県衙けんが

そのときに、魚は甕のなかからしきりに哀れみを乞うと、天師はまた言い渡した。

「今は赦されぬ。おれが再びここを通るときに放してやる」

張天師はその後ふたたび帰安県を通らなかつた。

狗熊

清の乾隆二十六年のことである。虎邱こきゆうに乞食があつて一頭の狗熊くゆうを養っていた。
熊の大きさは川馬せんばのごとくで、箭やのような毛が森立している。

この熊の不思議は、物をいうことこそ出来ないが、筆を執つて能く字をかき、よ
く詩を作るのである。往来の人が一銭をあたえれば、飼いぬしの乞食がその熊を見
せてくれる。さらに百銭をあたえて白紙をわたせば、飼い主は彼に命じて唐詩一首

を書かせてくれる。まことに不思議の芸であつた。

ある日、飼い主が外出して、獣けものだけ独り残つてるところへ、ある人が行つて例のごとくに一枚の紙をあたえると、熊は詩を書かないで、思いも寄らないことを書いた。

自分は長沙ちやうさの人で、姓は金きん、名は汝利じよりというものである。若いときにこの乞食に拐引かどわかされて、まず唾になる薬を飲まされたので、物をいうことが出来なくなつた。その家には一頭の狗熊が飼つてあつて、自分を赤裸にしてそれと一緒に生活させ、それから細い針を用いて自分の全身を隙間なく突き刺して、熱血淋漓たる時、一方の狗熊を殺してその生皮なまかわを剥ぎ、すぐに自分の肌の上を包んだので、人の生き血と熊の生き血とが一つに粘り着いて、皮は再び剥がれることなく、自分はそのまゝの狗熊になつてしまつた。それを鉄の鎖につないで、こうして芸を売らせているので、今日こんにちまでにすでに幾万貫の銭を儲けたであろう。何をいうにも口を利くことが出来ないで、おめおめと彼に引き廻されているのである。

これを書き終つて、熊はわが口を指さして、血の涙を雨のごとくに流した。

観るひと大いにおどろいて、その書いたものを証拠に訴え出ると、飼い主の乞食はすぐに捕われて、すべてその通りであると白状したので、かれは立ちどころに杖殺され、狗熊の金汝利は長沙の故郷へ送り還された。

著者の甥の致華ちかという者が淮南わいなんの分司となつて、四川しせんの夔州城きじゅうを過ぎると、往来の人びとが何か気ちがいのように騒ぎ立っている。その子細しさいをきくと、或る村民の妻徐氏じょしというのは平生から非常に夫婦仲がよかつたが、昨夜も夫とおなじ床に眠つて、けさ早く起きると、彼女のすがたは著るしく變つていた。

徐氏の顔や髪や肌の色はすべて元のごとくであるが、その下半身がいつか魚に變つてしまつたのである。乳から下には鱗うろこが生えてなめらかなになまぐさく、普通の魚と同様であるので、夫もただ驚くばかりで、どうする術すくも知らなかつた。妻は泣いて語つた。

「ゆうべ寝る時分には別に何事もなく、ただ下半身がむず痒かゆいので、それを搔くとからだの皮が次第に逆立つて来たようですから、おそらく痺癬ひぜんでも出来たのだらうかと思つていました。すると、五更ごこうののちから両脚が自然に食つ付いてしまつて、もう伸ばすことも縮めることも出来なくなりました。撫でてみると、いつの間にか魚の尾になつて居るのです。まあ、どうしたらいいでしょう」

夫婦はただ抱き合つて泣くばかりであるという。

致華はその話を聞いて、試みに供の者を走らせて実否を見とどけさせると、果たしてそれは事実であると判った。但し致華は官用の旅程を急ぐ身の上で、そのまま出発してしまったために、人魚ともいふべき徐氏をどう処分したか、彼女を魚として河へ放すことにしたか、あるいは人として家に養つて置くことにしたか、それらの結末を知ることが出来なかつたそうである。

金鉞の妖霊

乾かん子しというの、人ではない。人の死骸の化けしたるもの、すなわち前に書いた僵尸きやうしのたぐいである。雲南地方には金鉞が多い。その鉞穴に入つた坑夫のうちには、土に圧されて生き埋めになつて、あるいは数十年、あるいは百年、土氣と金氣に養われて、形骸はそのままになつてゐる者がある。それを乾かん子と呼んで、普通にはそれを死なない者にしてゐるが、実は死んでゐるのである。

死んでゐるのか、生きてゐるのか、甚だあいまいな乾かん子なるものは、時どきに土のなかから出てあるくと言ひ伝えられてゐる。鉞内は夜のごとくに暗いので、穴に入る坑夫は額ひたいの上にもしびをつけて行くと、その光りを見てかの乾かん子の寄つて来ることがある。かれらは人を見ると非常に喜んで、烟草たばこをくれという。烟草を

あたえると、立ちどころに喫つてしまつて、さらに人にむかつて一緒に連れ出してくれと頼むのである。その時に坑夫はこう答える。

「われわれがここへ来たのは金銀を求めるためであるから、このまま手をむなしゅうして帰るわけにはゆかない。おまえは金の蔓つるのある所を知っているか」

かれらは承知して坑夫を案内すると、果たしてそこには大いなる金銀を見いだすことが出来るのである。そこで帰るときには、こう言つてかれらを瞞だますのを例としている。

「われわれが先ず上がつて、それからお前をかかるにのせて吊りあげてやる」

竹籃にかれらを入れて、繩をつけて中途まで吊りあげ、不意にその繩を切り放すと、かれらは土の底に墜ちて死ぬのである。ある情けぶかい男があつて、瞞だますのも不憫だと思つて、その七、八人を穴の上まで正直に吊りあげてやると、かれらは外の風にあたるや否や、そのからだも着物も見る見る融とけて水となつた。その臭いは鼻を衝くばかりで、それを嗅いだ者はみな疫病にかかつて死んだ。

それに懲りて、かれらを入れた籃は必ず途中で繩を切つて落すことになつている。最初から連れて行かないといえ、いつまでも付きまとつて離れないので、いつもこうして瞞すのである。但しこちらが大勢で、相手が少ないときには、押えつけ縛りあげて土壁に倚よりかからせ、四方から土をかけて塗り固めて、その上に燈台を置

けば、ふたたび崇りをなさないと言い伝えられている。

それと反対に、こちらが小人数で、相手が多数のときは、死ぬまでも絡み付いていられるので、よんどころなく前にいったような方法を取るのである。

海和尚、山和尚

潘はんなにがしは漁業に老熟しているので、常にその獲物えものが多かった。ある日、同業者と共に海浜へ出て網を入れると、その重いこと平常に倍し、数人の力をあわせて纒わすかに引き上げることが出来た。見ると、網のなかに一尾の魚もない。ただ六、七人の小さい人間が坐っていて、漁師らをみて合掌頂礼ちやうらいのさまをなした。かれらの全身は毛に蔽おほわれてさながら猿のごとく、その頭の天辺てんぺんだけは禿はげたようになって一本の毛も見えなかった。何か言うようでもあるが、その語音ごいんはもとより判らない。とにかくに異形いぎぎようの物であるので、漁師らも網を開いて放してやると、かれらは海の上をゆくこと数十歩にして、やがて浪の底に沈んでしまった。土人の或る者の説によると、それは海和尚かいわしやうと呼ぶもので、その肉を乾して食らえば一年間は飢えないそうである。

また、別に山和尚さんわしやうというものがある。

李^リ姓^{せい}のなにがしという男が中州に旅行している時、その土地に大水が出たので、近所の山へ登つて避難することになったが、水はいよいよ漲^{みなぎ}つて来たので、その人はよんどころなく更に高い山頂に逃げのぼると、そこに小さい草の家が見いだされた。それは山に住む農民が耕地を見まわりの時に寝泊まりするところで、家の内には草を敷いてある。やがて日も暮れかかるので、彼はそのあき家にはいつて一夜を明かすことにした。

その夜半である。

大水をわたつて来る者があるらしいので、李はそつと表をうかがうと、ひとりの真つ黒な、脚のみじかい和尚が水面を浮かんで近寄つて来る。それが怪物らしいので、彼は大きい声をあげて人を呼ぶと、黒い和尚も一旦はやや退いたが、やがてまた進んで来るので、彼も今は途方にくれて、一方には人の救いを呼びつづけながら、一方にはそこにある竹杖をとつて無暗に叩き立てているところへ、他の人びともあつまつて来た。

大勢の人かけを見て、怪物はどこへか立ち去つてしまつて、夜のあるまで再び襲つて来なかつた。水が引いてから土地の人の話を聞くと、それは山和尚というもので、人が孤独でいるのを襲つて、その脳を食らうのであると。

火箭

乾隆六年、嘉興かこうの知府を勤める楊景震ようけいしんが罪をえて軍台てきじゆに謫戍てきじゆの身となつた。彼は古北の城楼に登ると、楼上に一つのあかがねの匣はこがあつて、嚴重に封鎖してある。伝うるところによれば、明代みんの総兵せきけい戚繼光せきけいこうの残して置いたもので、ここへ来た者がみだりに開いて看みてはならないというのである。

楊はしばらくその匣を撫でまわしていたが、やがて匣の上に震しんの卦けが金字で彫つてあるのを見いだして、彼は笑つた。

「卦は震で、おれの名の震に応じている。これはおれが開くべきものだ」

遂にその匣の蓋をひらくと、たちまちにひと筋の火箭ひやが飛び出して、むこう側の景德廟の正殿の柱に立つた。それから火を発して、殿宇も僧房もほとんど焼け尽くした。

九尾蛇

茅八ぼうはちという者が若いときに紙を売つて江西に入った。その土地の深山に紙廠ししやうが多かつた。廠にいる人たちは、日が落ちかかると戸を閉じて外へ出ない。

「山の中には怖ろしい物が棲んでいる。虎や狼ばかりでない」

茅もそこに泊まっているうちに、ある夜の月がひどく冴え渡った。茅は眠ることが出来ないで、戸をあけて月を眺めたいと思つたが、おどされているので、再三躊躇した。しかも武勇をたのんで、思い切つて出た。

行くこと数十歩ならず、たちまち数十の猴さるの群れが悲鳴をあげながら逃げて来て、大樹をえらんで攀よじのぼつたので、茅もほかの樹にのぼつて遠くうかがっていると、一匹の蛇が林の中から出て来た。蛇は太い柱のごとく、両眼は灼しやく々とかがやいている。からだの甲こうは魚鱗の如くにして硬く、腰から下に九つの尾が生えていて、それを曳いてゆく音は鉄の甲よろいのように響いた。

蛇は大樹の下に来ると、九つの尾を逆さかしまにしてくるくと舞った。尾の端はしには小さい穴がある。その穴から涎よだれがはじくようにほとぼしつて、樹の上の猴を撃つた。撃たれた猴は叫んで地に落ちると、その腹は裂けていた。蛇はしずかにその三匹を食らつて、尾を曳いて去つた。

茅は懼おそれて帰つた。その以来、彼も暗くなると表へ出なかつた。

閱微草堂筆記（清）

第十五の男は語る。

「わたくしは最後に『関微草堂筆記』を受持つことになりましたが、これは前の『子不語』にまさる大物で、作者は観奕道人と署名してありますが、実は清の紀昀であります。紀昀は号を暁嵐といい、乾隆時代の進士で、協弁大学士に進み、官選の四庫全書を作る時には編集総裁に挙げられ、学者として、詩人として知られて居ります。死して文達公と諡おくりなされましたので、普通に紀文達とも申します。

この著作は一度に脱稿したのではなく、最初に『灤陽鎖夏録』六巻を編み、次に『如是我聞』四巻、次に『槐西雜誌』四巻、次に『姑妄聽之』四巻、次に『灤陽統録』六巻を編み、あわせて二十四巻に及んだものを集成して、『関微草堂筆記』の名を冠かぶらせたのでありまして、実に一千二百八十二種の奇事異聞を蒐録してあるのですから、とても一朝一夕に説き尽くされるわけのものではありません。もしその全貌を知ろうとおぼしめす方は、どうぞ原本に就いてゆるゆる御閲読をねがいます」

落雷裁判

清の雍正十年六月の夜に大雷雨がおこって、猷けん県の皇城の西にある某村では、村民にながしが落雷に撃たれて死んだ。

明あけという県令が出張して、その死体を検視したが、それから半月の後、突然ある者を捕えて訊問した。

「おまえは何のために火薬を買ったのだ」

「鳥を捕るためでございます」

「雀ぐらいを撃つ弾薬たまぐすりならば幾らもいる筈はない。おまえは何で二、三十斤きんの火薬を買ったのだ」

「一度に買い込んで、貯えて置こうと思ったのでございます」

「おまえは火薬を買ってから、まだひと月にもならない。多く費したとしても、一斤か二斤に過ぎない筈だが、残りの薬はどこに貯えてある」

これには彼も行き詰まって、とうとう白状した。彼はかの村民の妻と姦通していた、妻と共謀の末にその夫を爆殺し、あたかも落雷で震死したようによそおったのであった。その裁判落着の後、ある人が県令に訊いた。

「あなたは どうしてあの男に眼を着けられたのですか」

「火薬を爆発させて雷らいと見せるには、どうしても数十斤を要する。殊じゅうやくに合薬として硫黄いおうを用いなければならぬ。今は暑中で爆竹などを放つ時節でないから、硫黄のたぐいを買う人間は極めてすくない。わたしはひそかに人をやって、この町でたくさんさんの硫黄を買った者を調べさせると、その買い手はすぐに判った。更にその買い

手を調べさせると、村民のなにがしに売ったという。それで彼が犯人であると判つたのだ」

「それにしても、当夜の雷がこしらえ物であるということがどうして判りました」

「雷が人を撃つ場合は、言うまでもなく上から下へ落ちる。家屋を撃ちこわす場合は、家根やねを打ち破るばかりで、地を傷めないのが普通である。然るに今度の落雷の現場を取調べると、草葺き家根が上にむかつて飛んでいるばかりか、土間の地面が引きめくつたように剥はがれている。それが不審の第一である。又その現場は城を距ること僅か五、六里で、雷電もほほ同じかるべき筈であるが、当夜の雷はかなり迅烈であつたとはいへ、みな空中をとどろき渡っているばかりで、落雷した様子はなかつた。それらを綜合して、わたしはそれを地上の偽雷と認めたのである」

人は県令の明察に服した。

鄭成功と異僧

鄭成功ていせいこうが台湾に拠よるとき、粵東えうとうの地方から一人の異僧が海を渡つて来た。かれは劍術と拳法に精達しているばかりか、肌をぬいで端坐していると、刃で撃つても切ることが出来ず、堅きこと鉄石の如くであつた。彼はまた軍法にも通じていて、兵

を談ずることすこぶるその要を得ていた。

鄭成功は努めて四方の豪傑を招いている際であつたので、礼を厚うして彼を歎待したが、日を経るにしたがつて彼はだんだんに増長して、傲慢無礼の振舞いがたびかさなるので、鄭成功もしまいには堪えられなくなつて来た。且かれは清国の間牒であるという疑いも生じて来たので、いつそ彼を殺してしまおうと思つたが、前にもいう通り、彼は武芸に達している上に、一種の不死身のような妖僧であるので、迂闊に手を出すことを躊躇していると、その大将の劉国軒が言つた。

「よろしい。その役目はわたくしが勤めましょう」

劉はかの僧をたずねて、冗談のように話しかけた。

「あなたのような生き仏は、色情のことはなんにもお考えになりますまいな」

「久しく修業を積んでいますから、心は地に落ちたる絮の如くでござる」と、僧は答えた。

劉はいよいよ戯れるように言つた。

「それでは、ここであなたの道心を試みて、いよいよ諸人の信仰を高めさせて見たいものです」

そこで美しい遊女や、男色を売る少年や、十人あまりを折りあつめて、僧のまわりに茵をしき、枕をならべさせて、その淫薬をほしいままにさせると、僧は眉をも

動かさず、かたわらに人なきがごとくに談笑自若としていたが、時を経るにつれて眼をそむけて、遂にその眼をまったく瞑じた。

その隙をみて、劉は劍をぬいたかと思うと、僧の首はころりと床に落ちた。

鬼影

泉州の人が或る夜、ともしびの前で自分の影をみかえると、壁に映っているのは自分の形でなかった。

不思議に思つてよく視ると、大きい首に長い髪が乱れかかつて、手足は鳥の爪のように曲がつて尖っている。その影はたしかに一種の鬼であつた。しかも、その怪しい影は自分の形に伴つていて、自分の動く通りに動いているのである。大いにおどろいて家内の者を呼びあつめると、その影は誰の眼にも怪しく見えるのであつた。それが毎晩つづくので、その人も怖ろしくなつた。家内の者もみな懼れた。しかしその子細は判らないので、唯いたずらに憂い懼れていると、となりに住んでゐる塾の先生が言つた。

「すべての妖はみずから興るのでなく、人に因つて興るのである。あなたは人に知られない悪念を懐いているので、その心の影が羅刹となつて現われるのではあるま

いか」

その人は慄然りつぜんとして、先生の前に懺悔ざんげした。

「実はわたくしは或る人に恨みを含んでるので、近いうちにその一家をみな殺しにして、ここを逃げ去って、賊徒の群れに投じようかと考えていたところでした。今のお話でわたくしも怖ろしくなりました。そんな企ては断然やめます」

その晩から彼の影は元の形に復かえつた。

茉莉花

閩中みんちゆうの或る人の娘はまだ嫁入りをしないうちに死んだ。それを葬かたること式のごとくであつた。

それから一年ほど過ぎた後、その親戚の者がとなりの県で、彼女とおなじ女を見た。その顔かたちから声音こわねまでが余りによく肖にているので、不意にその幼な名を呼びかけると、彼女は思わず振り返つたが、又もや足を早めて立ち去つた。

親戚は郷里へ帰つてそれを報告したので、両親も怪しんで娘の塚をあけてみると、果たして棺のなかは空からになつていた。そこで、そのありかを尋たずねてゆくと、女は両親を識しらないと言ひ張つていたが、その腋わきの下に大きい痣あざがあるのが証拠となつて、

彼女はとうとう恐れ入った。その相手の男をたずねると、もうどこへか姿をかくしていた。

だんだんその事情を取調べると、閩中には茉莉花まつりかを飲めば仮死するという伝説がある。茉莉花の根を磨すつて、酒にまぜ合わせて飲むのである。根の長さ一寸を用ゆれば、仮死すること一日にして蘇生する。六、七寸を用ゆれば、仮死すること数日にしてなお蘇生することが出来る。七寸以上を用ゆれば、本当に死んでしまうのである。かの娘はすでに約束の婿がありながら、他の男と情を通じたので、男と相談の上で茉莉花を用い、そら死にをして一旦葬いったんられた後に、男が棺をあばいて連れ出したものであることが判った。男もやがて捕われたが、その申し立ては娘と同様であつた。

閩の県官呉林塘ごりんとうという人がそれを裁判したが、棺をあばいた罪に照らそうとすれば、その人は死んでいないのである。薬剤をもって子女を惑わしたという罪に問おうとすれば、娘も最初から共謀である。さりとて、財物を奪かどわかしたとか、拐引かどわかを働いたとかいうのでもない。結局、その娘も男も姦通かんつうの罪に処せられることになった。

仏陀の示現

景城けいじょうの南に古寺があつた。あたりに人家もなく、その寺に住職と二人の徒弟とていが住んでいたが、いずれもぼんやりした者どもで、わずかに仏前に香火を供うるのほかには能がないように見られた。

しかも彼等はなかなかの曲者くせもので、ひそかに松脂まうやじを買つて来て、それを粉にして練りあわせ、紙にまいて火をつけて、夜ちゆうに高く飛ばせると、その火のひかりは四方を照らした。それを望んで村民が駈けつけると、住職も徒弟も戸を閉じて熟睡していて、なんにも知らないというのである。

又あるときは、戯場しばいで用いる仏衣を買つて来て、菩薩や羅漢の形をよそおい、月の明るい夜に家根の上に立ったり、樹の蔭にたたずんだりする事もある。それを望んで駈け付けると、やはりなんにも知らないというのである。或る者がその話をすると、住職らは合掌して答えた。

「飛んでもないことを仰しやるな。み仏は遠い西の空にござる。なんでこんな田舎やれでらの破寺しげんに示現しげんなされましようぞ。お上かみではただいま白蓮教びやくれんきょうをきびしく禁じていられます。そんな噂とががきこえると、われわれもその邪教をおこなう者と見なされて、どんなお咎とがめを蒙こうむるかも知れません。お前方もわれわれに恨みがある訳でもござるまいに、そんなことを無暗に言い触らして、われわれに迷惑をかけて下さるな」

いかにも殊勝な申し分であるので、諸人はいよいよ仏陀の示現と信じるようになつ

て、檀家の布施や寄進が日ましに多くなつた。それに付けても、寺があまりに荒れ朽ちているので、その修繕を勧める者があると、僧らは、一本の柱、一枚の瓦を換えることをも承知しなかつた。

「ここらの人はとかくにあらぬことを言い触らす癖があつて、後光がさしたの、菩薩があらわれたのと言う。その矢さきに堂塔などを莊嚴にいたしたら、それに就いて又もや何を言い出すか判らない。どなたが寄進して下さるといつても、寺の修繕などはお断わり申します」

こういうふうであるから、諸人の信仰はいや増すばかりで、僧らは十余年のあいだに大いなる富を作つたが、又それを知っている賊徒があつて、ある夜この寺を襲つて師弟三人を殺し、貯蓄の財貨をことごとく掠めて去つた。役人が来て検視の際に、古い箱のなかから戯場の衣裳や松脂の粉を発見して、ここに初めてかれらの巧みが露顯したのであつた。

これは明の崇禎の末年のことである。

強盗

齊大は献県の地方を横行する強盗であつた。

あるとき味方の者を大勢連れて或る家へ押し込むと、その家の娘が美婦であるので、賊徒は逼つてこれを汚そうとしたが、女がなかなか応じないので、かれらは女をうしろ手にくくりあげた。そのとき斉大は家根に登つて、近所の者や捕手の来るのを見張つていたが、女の泣き叫ぶ声を聞きつけて、降りて来てみるとこの体たらくである。彼は刃をぬいてその場に跳り込んだ。

「貴様らは何でそんなことをする。こうなれば、おれが相手だぞ」
餓えたる虎のごとき眼を晃らせて、彼はあたりを睨みまわしたので、賊徒は恐れて手を引いて、女の節操は幸いに救われた。

その後、この賊徒の一群はみな捕えられたが、ただその頭領の斉大だけは不思議に逃がれた。賊徒の申し立てによれば、逮捕の当時、斉大はまぐさ桶の下に隠れていたというのであるが、捕手らの眼にはそれが見えなかった。まぐさ桶の下には古い竹束が転がっていただけであつた。

張福の遺書

張福は杜林鎮の人で、荷物の運搬を業としていた。ある日、途中で村の豪家の主人に出逢つたが、たがいに路を譲らないために喧嘩をはじめ、豪家の主人は従僕

に指図して張を石橋の下へ突き落した。あたかも川の氷が固くなつて、その稜は刃のように尖つていたので、張はあたまを撃ち割られて半死半生になつた。

村役人は平生からその豪家を憎んでいたので、すぐに官に訴えた。官の役人も相手が豪家であるから、この際いじめつけてやろうというので、その詮議が甚だ嚴重になつた。そのときに重態の張はひそかに母を豪家へつかわして、こう言わせた。

「わたしの代りにあなたの命を取つても仕方がありません。わたしの亡い後に、老母や幼な児の世話をして下さいというならば、わたしは自分の粗相で滑り落ちたと申し立てます」

豪家では無論に承知した。張はどうか文字の書ける男であるので、その通りに書き残して死んだ。何分にも本人自身の書置きがあつて、豪家の無罪は証明されているのであるから、役人たちもどうすることも出来ないで、この一件は無事に落着した。

張の死んだ後、豪家も最初は約束を守つていたが、だんだんにそれを怠るようになったので、張の老母は怨み憤つて官に訴えたが、張が自筆の生き証拠がある以上、今更この事件の審議をくつがえす事は出来なかつた。

しかもその豪家の主人は、ある夜、酒に酔つてかの川べりを通ると、馬がにわかにおどろかしたために川のなかへ転げ落ちて、あたかも張とおなじ場所で死んだ。

知る者はみな張に背いた報いであると言った。世の訴訟事件には往々こうした秘密がある。獄を断ずる者は深く考えなければならぬ。

飛天夜叉

ウロボクセイは新疆の一地方で、甚だ未開辺僻の地である（筆者、紀曉嵐は曾てこの地にあつたので、烏魯木齊地方の出来事をたくさんに書いてある）。その把総（軍官で、陸軍少尉の如きものである）を勤めている蔡良棟が話した。

この地方が初めて平定した時、四方を巡回して南山の深いところへ分け入ると、日もようやく暮れかかつて来た。見ると、溪を隔てた向う岸に人の影がある。もしや瑪哈沁（この地方でいう追剥ぎである）ではないかと疑つて、草むらに身をひそめて窺うと、一人の軍装をした男が磐石の上に坐つて、そのそばには相貌猙獰の従卒が数人控えている。なにか言つていらしいが、遠いのでよく聴き取れない。

やがて一人の従卒に指図して、石の洞から六人の女をひき出して来た。女はみな色の白い、美しい者ばかりで、身にはいろいろの色彩のある美服を着けていたが、いずれも後ろ手にくくり上げられて恐るおそるに頭を垂れてひざまずくと、石上の男はかれらを一人ずつ自分の前に召し出して、下衣を剥がせて地にひき伏せ、鞭を

あげて打ち据えるのである。打てば血が流れ、その哀号あいごうの声はあたりの森に木屑こだまして、凄惨た実に譬えようもなかった。

その折檻が終ると、男は従卒と共にどこへか立ち去った。女どもはそれを見送り果てて、いずれも泣く泣く元の洞へ帰って行つた。男は何者であるか、女は何者であるか、もとより判らない。一行のうちに弓をよく引く者があつたので、向う岸の立ち木にむかつて二本の矢を射込んで歸つた。

あくる日、廻り路をして向う岸へ行き着いて、きのうの矢を目じるしに搜索すると、石の洞門は塵ちりに封じられていた。松明たきまをとつて進み入ると、深さ四丈ばかりで行き止まりになつてしまつて、他には抜け路もないらしく、結局なんの獲うるところもなしに引き揚げて来た。

蔡はこの話をして、自分が烏魯木齊にあるあいだに目撃した奇怪の事件は、これをもつて第一とすると言つた。わたしにも判らないが、太平広記に、天人が飛天夜叉ひてんやしやを捕えて成敗する話が載せてある。飛天夜叉は美女である。蔡の見たのも或いはこの夜叉のたぐいであるかも知れない。

喇嘛教

喇嘛教には二種あつて、一を黄教といい、他を紅教といい、その衣服をもつて區別するのである。黄教は道德を講じ、因果を明らかにし、かの禪家と派を異にして源を同じゆうするものである。

但し紅教は幻術を巧みにするものである。理藩院の尚書を勤める留という人が會て西藏に駐在しているときに、何かの事で一人の紅教喇嘛に恨まれた。そこで、或る人が注意した。

「彼は復讐をするかも知れません。山登りのときには御用心なさい」

留は山へ登るとき、輿や行列をさきにして、自分は馬に乗って後から行くと、果たして山の半腹に至った頃に、前列の馬が俄かに狂い立って、輿をめちやめちやに踏みこわした。輿は無論に空であつた。

また、烏魯木齊に従軍の当時、軍士のうちで馬を失つた者があつた。一人の紅教喇嘛が小さい木の腰掛けをとつて、なにか暫く呪文を唱えていると、腰掛けは自然にころころと転がり始めたので、その行くさきを追つてゆくと、ある谷間へ行き着いて、果たしてそこにかの馬を発見した。これは著者が親しく目撃したことである。

案ずるに、西域に刀を呑み、火を呑むたぐいの幻術を善くする者あることは、前漢時代の記録にも見えている。これも恐らくそれらの遺術を相伝したもので、仏氏の正法ではない。それであるから、黄教の者は紅教徒を称して、あるいは魔といい、

あるいは波羅門ばらもんという。すなわち仏經にいわゆる邪魔外道じやまげどうである。けだし、そのたぐいであろう。

滴血

晋しんの人でその資産を弟たぐに托して、久しく他郷たきょうに出商いをしてゐる者があつた。旅さきで妻を娶めとつて一人の子を儲けたが、十年あまりの後に妻が病死したので、その子こを連れて故郷へ歸つて来た。

兄あにが子こを連れて歸つた以上、弟たぐはその資産をその子こに譲り渡さなければならぬので、その子こは兄あにの実子じしでなく、旅さきの妻つまが他人たにんの種こゝろを宿やして生なんだものであるから、異姓いせいの子こに資産しさんを譲ゆづることは出来ないと主張しやうした。それが一種いっしゆの口実こうじつであることは大抵たいてい想像さうざうされてゐるものの、何分なんぶんにも旅さきの事ことといい、その妻つまももう此こゝの世よにはいないので、事実じじつの真偽まゐを確かめるのがむずかしく、たがいにもんぢやく摺すり着ぢやくをかさねた末すえに、官くわんへ訴うえて出ることになつた。

官くわんの力で調査てきさつしたらば、弟たぐの申し立てていが嘘うそか本当ほんたうかを知ることが出来たかも知れないが、役人やくにんらはいたずらいたずらに古法こぽうを守つて、滴血てきけつをおこなうことにした。兄あにの血ちと、その子この血ちとを一つ器うつわにそそぎ入れて、それが一つに融とけ合うかどうかを試あしたの

である。幸いにその血が一つに合ったので、裁判は直ちに兄側の勝訴となつて、弟は咎^{むちう}つて放逐するといふ宣告を受けた。

しかし弟は、滴血などという古風の裁判を信じないと言つた。彼は自分にも一人の子があるので、試みにその血をそそいでみると、かれらの血は一つに合わなかつた。彼はそれを証拠にして、現在、父子^{おやこ}すらもその血が一つに合わないのであるから、滴血などをもつて裁判をくだされては甚だ迷惑であると、逆^{さか}捻^{かね}じに上訴した。彼としては相当の理屈もあつたのであろうが、不幸にして彼は周囲の人びとから憎まれていた。

「あの父子の血が一つに寄らないのは当たり前だ。あの男の女房は、ほかの男と姦通しているのだ」

この噂が官にきこえて、その妻を拘引して吟味すると、果たしてそれが事実であつたので、弟は面目を失つて、妻を捨て、子を捨てて、どこへか夜逃げをしてしまつた。その資産はどこおりなく兄に引き渡された。

由来、滴血のことは遠い漢代から伝えられているが、経験ある老吏について著者の聞いたところに拠ると、親身の者の血が一つに合うのは事実である。しかし冬の寒い時に、その器^{うつわ}を冷やして血をそそぐか、あるいは夏の暑いときに、塩と酢をもつてその器を拭いた上で血をそそぐと、いずれもその血が別々に凝結して一つに寄り

合わない。そういう特殊の場合がいろいろあるから、迂闊に滴血などを信ずるのは危険であると、彼は説明した。

成程そうであろうと思われる。しかしこの場合、もし滴血をおこなわなければ、弟はおそらく上訴しなかつたであろう。弟が上訴しなければ、その妻の陰事は摘発されなかつたであろう。妻の陰事が露顕しなければ、この裁判はいつまでも落着しなかつたであろう。こうなると、あながちに役人の不用意を咎めるわけにも行かない。そのあいだには何か自然の約束があるようにも思われるではないか。

不思議な顔

蒙陰もういんの劉生りゅうせいがある時その従弟いとこの家に泊まつた。いろいろの話の末に、この頃この家には一種の怪物があらわれる。出没常ならず、どこに潜んでいるか判らないが、暗闇で出逢うと人を突き仆たおすのである。そのからだの堅きこと鉄石のごとくであると、家内の者が語つた。

劉は猫かりを好んで、常に鉄砲を持ちあるいてるので、それを聞いて笑つた。

「よろしい。その怪物が出て来たらば、この鉄砲で防ぎます」

書齋は三間になつていたので、彼はその東の室へやで寝ることにした。燈火ともしびにむかつ

て独りで坐っていると、西の室から何者か現われて立った。その五体は人の如くであるが、その顔が頗る不思議で、眼と眉とのあいだは二寸ぐらいも距れてはないるにも拘らず、鼻と口とはほとんど一つに付いているばかりか、その位置も妙に曲がつていた。顔の輪郭もまたゆがんでいる。よく見ると、不思議というよりも頗る滑稽な顔ではあるが、なにしろ一種の怪物には相違ないと見て、劉はすぐに鉄砲をとって窺うと、かれは慌てて室内へ退いて、扉のあいだから半面を出して窺っているのである。

劉が鉄砲をおろすと、彼はそろそろ出かかると、劉がふたたび鉄砲をむけると、彼はまた隠れる。そんなことを幾たびも繰り返しているうちに、彼はたちまち顔の全面をあらわして、舌を吐き、手を振って、劉を嘲あざわらるかのようにも見えたので、急に一発を射撃すると、弾たまは扉にあたって怪物の姿は隠れた。

劉は窓格子のあいだに鉄砲を伏せて、再びその現われるのを待っていると、彼はふたたび出て来て弾にあたった。その仆たおる時、あたかも家根瓦の落ちて碎けるような響きを発したのである。近寄ってみると、それは毀こわれた甕かめの破片であった。

更にあらためると、怪物の正体はこの家にある古い甕であることが判った。

それが不思議な顔をしていたのは、小児こどもがその甕のおもてへいたずら書きをしたのである。小児が手あたり次第に書いたのであるから、人間の顔がおかしくゆがん

で、眼も鼻も勿論ととのつていない。それでも人間の顔を具えたために、こんな怪をなすようになったのかも知れないというのであった。

顔良の祠

呂城は呉の呂蒙りよもうの築いたものである。河をはさんで、兩岸に二つの祠やしろがある。

その一つは唐の名将郭子儀かくしぎの祠である。郭子儀がどうしてこんな所に祀られているのか判らない。他の一つは三国時代の袁紹えんしやうの部将の顔良がんりやうを祀ったもので、これもその由来は想像しかねるが、土地の者が禱いのるとすこぶる靈驗があるというので、甚だ信仰されている。

それがために、その周囲十五里のあいだには関帝廟かんでいびやう（関羽を祀る廟）を置くことを許さない。顔良は関羽かんうに殺されたからである。もし関帝廟を置けば必ず禍いがあると伝えられている。ある時、その土地の県令がそれを信じないで、顔良の祠の祭りのときに自分も参詣し、わざと俳優に三国志の演劇しほいを演じさせると、たちまちに狂風どつと吹きよせて、演劇の仮小屋の家根も舞台も宙にまき上げて投げ落したので、俳優のうちには死人も出来た。

そればかりでなく、十五里の区域内には疫病が大いに流行して、人畜の死する者

おびただしく、かの県令も病いにかかつて危うく死にかかったというのである。

およそ戦いに負けたといつて、一々その敵を怨むことになつては、古来の名将勇士は何千人に崇たられるか判らない。顔良の輩が千年の後までも関羽に崇るなど、決して有り得べきことではない。これは祠に仕える巫女みこのやからが何かのことを言い触らし、愚民がそれを信ずる虚に乗じて、他の山妖水怪のたぐいが入り込んで、みだりに禍福をほしいままにするのであらう。

繡鸞

父の先妻の張夫人に繡鸞しゅうらんという侍女こしもとがあつた。

ある月夜に、夫人が堂の階段きんざはしに立つて繡鸞を呼ぶと、東西の廊下から同じ女が出て来た。顔かたちから着物は勿論、右の襟の角の反れているのから、左の袖を半分捲いているのまで、すべて寸分も違わないので、夫人はおどろいて殆んど仆れそうになつた。やがて気を鎮めてよく視ると、繡鸞の姿はいつか一人になつていた。

「お前はどつちから来ました」

「西のお廊下から参りました」

「東の廊下から来た人を見ましたか」

「いいえ」

これは七月のことで、その十一月に夫人は世を去った。彼女の寿命がまさに尽きんとするので、妖怪が姿を現わすようになったのかとも思われる。

牛冤ぎゆうえん

姚安公ちようあんこうが刑部に勤めている時、徳勝門外に七人組の強盗があつて、その五人は逮捕されたが、王五おうごと金大牙きんたいがの二人はまだ縛ばくに就かなかつた。

王五は逃れて激嶽かくにゆくと、路は狭く、溝は深く、わずかに一人が通られるだけの小さい橋が架けられていた。その橋のまんなかに逞ましい牛が眼を怒らせて伏していて、近づけば角つのを振り立てる。王はよんどころなく引返して、路をかえて行こうとする時、あたかも邏卒らそつが来合わせて捕えられた。

一方の金大牙は清河橋せいがきやうの北へ落ちてゆくと、牧童が二頭の牛を追つて来て、金に突き当って泥のなかへ転がしたので、彼は怒つてその牧童と喧嘩をはじめた。ここは都に近い所で、金を見識みししている者が土地の役人に訴えた為に、彼もまた縛られた。王も金も回部の民で、みな屠牛とぎゆうを業としている者である。それが牛のために失敗したのも因縁いんねんであろう。

鳥を投げる男

雍正とうせいの末年である。東光城とうこう内で或る夜、家々の犬が一斉に吠えはじめた。その声は潮うしおの湧わくが如くである。

人びとはみな驚いて出て見ると、月光のもとに怪しい男がある。彼は髪を乱して腰に垂れ、麻の帯をしめて蓑みのを着て、手に大きい袋を持っていた。袋のなかにはたくさんの鵝がらう鳥や鴨の鳴き声なきこえがきこえた。彼は人家の家根の上に暫く突つ立たつていて、やがて又、別の家の屋根へ移うつつて行いつた。

明くる朝になつて見ると、彼が立たつていた所には、二、三羽の鵝がらう鳥や鴨が檐のきした下に投げ落おされていた。それを煮て食たつた者もあつたが、その味は普通の鳥と変かつたこともなかつた。その当座はいかなる不思議か判わらなかつた。

然るにその鳥を得た家には、みな葬式おくりあひだが出るこゝになつた。いわゆる凶煞きようさつが出現したのである。わたしの親戚の馬ばという家でも、その夜二羽の鴨を得たが、その歳に弟が死んだ。思うに、昔から喪に逢うものは無数である。しかもその夜にかぎつて、特に凶兆を示したのはなんの訳か。そうして、その兆を示すために、鵝がらう鴨がらうのたぐいを投げたのはなんの訳か。

鬼神の所為しよゐは凡人の知り得る事あり、知り得ざる事あり、ただその事実を録するのみで、議論の限りでない。

節婦

任士田にんしでんという人が話した。その郷里で、ある人が月夜に路を行くと、墓道の松や柏のあいだに二人が並び坐しているのを見た。

ひとりには十六、七歳の可愛らしい男であつた。他の女は白い髪を長く垂れ、腰かがめて杖を持って、もう七、八十歳以上かとも思われた。

この二人は肩を摺り寄せて何か笑いながら語らつてゐる体てい、どうしても互いに惚れ合つてゐるらしく見えたので、その人はひそかに訝いぶかつて、あんな婆さんが美少年と媾あひびき曳ひをしているのかと思ひながら、だんだんにその傍へ近寄つてゆくと、かれらのすがたは消えてしまった。

次の日に、これは何人なんびとの墓であるかと訊きいてみると、某家の男が早死にをして、その妻は節を守ること五十余年、老死した後ここに合葬したのであることが判つた。

木偶の演戯

わたしの先祖の光祿公は康熙年間、崔莊で質庫を開いていた。沈伯玉という男が番頭役の司事を勤めていた。

あるとき傀儡師が二箱に入れた木彫りの人形を質入れに来た。人形の高さは一尺あまりで、すこぶる精巧に作られていたが、期限を越えてもつくなわず、とうとう質流れになってしまった。ほかに売る先もないので、廃り物として空き屋のなかに久しく押し込んで置くと、月の明るい夜にその人形が幾つも現われて、あるいは踊り、あるいは舞い、さながら演劇のような姿を見せた。耳を傾けると、何かの曲を唱えているようでもあった。

沈は氣丈の男であるので、声をはげしゅうして叱り付けると、人形の群れは一度に散って消え失せた。翌日その人形をことごとく焚いてしまったが、その後は別に変わったこともなかった。

物が久しくなると妖をなす。それを焚けば精気が溶けて散じ、再び聚まることが出来なくなる。また何か憑る所があれば妖をなす。それを焚けば憑る所をうしなう。それが物理の自然である。

奇門遁甲の書というものが多く世に伝えられている。しかも皆まことの伝授でない。まことの伝授は口伝の数語に過ぎないもので、筆や紙で書き伝えるのではない。徳州の宋清遠先生は語る。あるとき友達をたずねると、その友達は宋をとどめて一泊させた。

「今夜はいい月夜だから、芝居を一つお目にかけてようか」

そこで、橙の実十余個を取って堂下にころがして置いて、二人は堂にのぼって酒を飲んでいると、夜も二更に及ぶころ、ひとりの男が垣を踰えて忍び込んで来たが、彼は堂下をぐるぐる廻りして、一つの橙に出逢うごとに、よろけて躓いて、ようように跨いで通るのであった。

それが初めは順に進み、さらに曲がって行き、逆に行き、百回も二百回も繰り返しているうちに、彼は疲れ切つて倒れ伏してしまった。やがて夜が明けたので、友達はその男を堂の上に連れて来て、おまえは何しに来たのかと詰問すると、彼はあやまり入つて答えた。

「わたくしは泥坊でございます。お宅へ忍び込みますと、低い垣が幾重にも作られて居ります。それを幾たび越えても、越えても、果てしがないので、閉口して引つ返そうとしますと、帰る路にもたくさんの垣があつて、幾たび越えても行き尽くせ

ません。結局、疲れ果てて捕われることになりました。どうぞ御存分に願います」
友達は笑って彼を放してやった。そうして、宋にむかつて言った。

「きのうあの泥坊が来ることを占い知ったので、たわむれに小術を用いたのです」
「その術はなんですか」

「奇門の法です。他人が迂闊におぼえると、かえって禍いを招きます。あなたは謹直な人物である。もしお望みならば御伝授しましょうか」

折角であるが、自分はそれを望まないと宋は断わった。友達は嘆息して言った。
「学ぶを願う者には伝うべからず、伝うべき者は学ぶを願わず。この術も終つひに絶えるであらう」

彼は悵然ちやうぜんとして宋を送って別れた。

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。